茨城県教育財団文化財調査報告第72集

研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(三)

柴崎遺跡Ⅲ区

平成 4 年 3 月

住宅・都市整備公団つくば開発局 財団法人 茨 城 県 教 育 財 団

茨城県教育財団文化財調査報告第72集

研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(三)

柴崎遺跡Ⅲ区

平成4年3月

住宅・都市整備公団つくば開発局 財団法人 茨 城 県 教 育 財 団



175号住居跡出土遺物



奈良時代前半の住居跡出土遺物



155号住居跡出土金銅製鈴

つくば市は、昭和38年に筑波研究学園都市計画地域の指定を受けて以来、我国最大のサイエンスシティとして、国や民間の研究機関をここに集中的に誘致し、日本の科学技術の研究開発の核として整備拡充が日々進められております。近年、茨城県では、ここに集積された発展エネルギーを、広域つくば圏に拡大して、県勢の発展を図ることを目的にする『グレーターつくば構想』が進められております。

その一環として、住宅・都市整備公団は柴崎地区に職、住が近接する『テクノパーク桜』の建設を進めており、その予定地内に、埋蔵文化財包蔵地である柴崎遺跡が所在しております。

本書は、平成元年度に調査を行った柴崎遺跡のⅢ区に関する報告書であります。本書が、研究の資料としてはもとより、郷土の歴史への理解を深め、ひいては、教育、文化の向上の一助として、広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である住宅・ 都市整備公団、茨城県教育委員会、つくば市教育委員会をはじめ、関 係機関及び関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、衷 心より感謝の意を表します。

平成4年3月

財団法人 茨城県教育財団 理事長 礒田 勇

例 言

- 1 本書は、平成元年度に住宅・都市整備公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が発掘調査を実施した、茨城県つくば市(旧桜村)大字柴崎字小田海道114-1番地ほかに所在する柴崎遺跡Ⅲ区の発掘調査報告書である。
- 2 柴崎遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

平成2年度初めの組織改正により、従来の調査課(企画管理班、調査第一・二・三班、整理 班)は埋蔵文化財部となり、その下に企画管理課、調査課、整理課をおき、調査課には、調査 第一・二・三の三つの班をおくこととなった。

理	1	i	長	礒	田	Book knows conse	勇	昭和63年6月~
副	理	事	E	小	林.		元	昭和63年4月~平成3年7月
囲	理	尹	長	角	田	芳	夫	平成3年7月~
常	3hr	3393	串	小	林		洋	平成元年4月~平成3年3月
吊	務	理	事	本	\boxplus	\equiv	郎	平成3年4月~
事	務	局	長	_	木	邦	彦	平成元年4月~
埋	蔵文化	財部	長	石	井		毅	平成2年4月~
	課		長	北	沢	勝	行	平成2年4月~
 企	課長	代	理	水	餇	敏	夫	平成2年4月~(昭和62年4月~平成2年3月 企画管理班長)
	主任	調査	員	小	河	邦	男	(平成元年4月~平成2年3月 企画管理班)
画	主任	調査	. 員	根	本	康	弘	平成3年4月~
管	係		長	園	部	昌	俊	昭和63年4月~平成3年3月
理	主		事	飯	島	康	司	平成3年4月~
	主		事	大	部		章	(昭和61年4月~平成2年3月 企画管理班)
課	主		事	吉	井	Œ	明	平成元年 4 月~
	主		事	大	貫	吉	成	平成2年4月~
	課長(音	8長兼	務)	石	井		毅	平成元年 4 月~
調	調査第	与一现	E長	沼	田	文	夫	平成元年4月~平成2年3月
査	主任	調査	員	佐	藤	正	好	平成元年4月~平成2年3月調查
l [±]	主任	調査	員	鯉	淵	和	彦	平成元年10月~平成2年3月調查
課	調	查	員	松	浦		敏	平成元年10月~平成2年3月調査
	調	查	員	土.	生	朗	治	平成元年4月~平成2年3月調查
整理課	課		長	沼	田	文	夫	平成2年4月~
課	調	查	員	土	生	朗	治	平成3年度 整理・執筆・編集

- 3 本書に使用した記号については、第4章第1節の遺構、遺物の記載方法の項を参照されたい。
- 4 発掘調査に際し、神奈川県鎌倉市鎌倉考古学研究所の斉木秀雄氏に御指導をいただいた。
- 5 金銅製品の保存処理については、東京国立文化財研究所修復技術部第三修復技術研究室室長 青木繁夫氏・技術補佐員犬竹和氏に依頼し、保存処理結果の報告をいただいた。
- 6 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係機関、並びに関係各位に対し、深 く感謝の意を表します。

目 次

序		
例言		
第1章 調査経緯	• • • • •	1
第1節 調査に至る経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		1
第 2 節 調査経過		2
第2章 位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• • • • •	5
第1節 地理的環境	• • • • •	5
第2節 歷史的環境 ······		6
第 3 章 調査方法 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		11
第1節 地区設定		11
第2節 基本層序の検討 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• • • • •	11
第3節 遺構確認 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	• • • • •	12
第4節 遺構調査		12
第4章 遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		13
第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		13
第 2 節 竪穴住居跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		18
第 3 節 土坑		191
第 4 節 掘立柱建物跡 ·····		196
第5節 地下式擴		202
第 6 節 井戸 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		203
第 7 節 溝	· • • • •	209
第 8 節 遺構外 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		241
第5章 考察	· • • • •	243
第1節 出土遺物と時期区分・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		243
第 2 節 竪穴住居跡について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		251
第3節 柴崎遺跡の集落の変遷 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		256
終章 結語 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		267

挿 図 目 次

第	1 図	桜地区遺跡分布図 ・・・・・・・・・	8	第	23図	第190号住居跡出土遺物	
第	2 図	柴崎遺跡調査区 · · · · · · · · · · ·	9			実測図(2)	42
第	3 図	小調查区呼称方向概念図 ····	11	第	24図	第194号住居跡実測図 · · · · · ·	44
第	4 図	基本土層図	11	第	25図	第194号住居跡竈実測図 ・・・・・	45
第	5 図	第127号住居跡実測図 · · · · · ·	19	第	26図	第194号住居跡出土遺物実測図	46
第	6 図	第127号住居跡竈実測図 ·····	20	第	27図	第196号住居跡実測図 · · · · · · ·	48
第	7 図	第127号住居跡出土遺物実測図	20	第	28図	第196号住居跡出土遺物実測図	49
第	8 図	第168号住居跡実測図 ・・・・・・・	22	第	29図	第198号住居跡・竈実測図・・・	50
第	9 図	第168号住居跡竈実測図 ・・・・・	23	第	30図	第198号住居跡出土遺物実測図	51
第	10図	第168号住居跡出土遺物実測図	24	第	31図	第199号住居跡・竈実測図・・・	52
第	11図	第175号住居跡実測図・・・・・・	25	第	32図	第199号住居跡出土遺物実測図	53
第	12図	第175号住居跡竈実測図 · · · ·	26	第	33図	第200号住居跡実測図 · · · · · ·	54
第	13図	第175号住居跡出土遺物位置図	27	第	34図	第200号住居跡竈実測図・・・・・	55
第	14図	第175号住居跡出土遺物		第	35図	第212 A 号住居跡実測図 ·····	56
		実測図(1) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	29	第	36図	第212 A 号住居跡竈実測図 · · ·	57
第	15図	第175号住居跡出土遺物		第	37図	第212 A 号住居跡出土遺物	
		実測図(2) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	30			実測図 ・・・・・・・	57
第	16図	第175号住居跡出土遺物		第	38図	第222号住居跡実測図 · · · · · ·	59
		実測図(3) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	31	第	39図	第222号住居跡竈実測図 · · · · ·	60
第	17図	第175号住居跡出土遺物		第	40図	第222号住居跡出土遺物実測図	61
		実測図(4) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	32	第	41図	第231号住居跡実測図 ・・・・・・・	62
第	18図	第175号住居跡出土遺物		第	42図	第231号住居跡竈実測図 ·····	63
		実測図(5) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	33	第	43図	第231号住居跡出土遺物実測図	64
第	19図	第175号住居跡出土遺物		第	44図	第128号住居跡実測図 ・・・・・・	66
		実測図(6) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	34	第	45図	第153号住居跡実測図 · · · · · ·	67
第	20図	第190号住居跡実測図 · · · · · · ·	38	第	46図	第153号住居跡竈実測図 ・・・・・	68
第	21図	第190号住居跡竈実測図 · · · · ·	39	第	47図	第153号住居跡出土遺物	
第	22図	第190号住居跡出土遺物				実測図(1) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	69
		実測図(1) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	41	第	48図	第153号住居跡出土遺物	
						実測図(2) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	70

第	49図	第154号住居跡実測図 · · · · · ·	72	第 79図	第170号住居跡実測図 · · · · · 105
第	50図	第154号住居跡竈実測図 ·····	73	第 80図	第170号住居跡竈実測図 · · · · 106
第	51図	第154号住居跡出土遺物		第 81図	第170号住居跡出土遺物実測図 107
		実測図(1) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	74	第 82図	第171号住居跡実測図 · · · · · 109
第	52図	第154号住居跡出土遺物		第 83図	第171号住居跡竈実測図 · · · · 110
		実測図(2) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	75	第 84図	第171号住居跡出土遺物
第	53図	第155号住居跡実測図 · · · · · ·	77		実測図(1) 111
第	54図	第155号住居跡竈実測図 ·····	78	第 85図	第171号住居跡出土遺物
第	55図	第155号住居跡出土遺物実測図	79		実測図(2) 112
第	56図	第156号住居跡実測図 · · · · · ·	81	第 86図	第172号住居跡実測図 · · · · · 113
第	57図	第157号住居跡実測図 · · · · · · ·	82	第 87図	第172号住居跡竈実測図 · · · · · 114
第	58図	第158号住居跡実測図 · · · · · · ·	83	第 88図	第172号住居跡出土遺物実測図 116
第	59図	第159号住居跡実測図 · · · · · ·	84	第 89図	第174号住居跡実測図 · · · · · 118
第	60図	第160号住居跡実測図 · · · · · ·	85	第 90図	第174号住居跡竈実測図 · · · · · 119
第	61図	第160号住居跡竈実測図 ·····	86	第 91図	第174号住居跡出土遺物実測図 120
第	62図	第160号住居跡出土遺物実測図	87	第 92図	第176号住居跡実測図 · · · · · · 122
第	63図	第161号住居跡・竈実測図・・・	89	第 93図	第176号住居跡出土遺物実測図 122
第	64図	第161号住居跡出土遺物実測図	90	第 94図	第177号住居跡実測図 · · · · · 123
第	65図	第162号住居跡実測図 · · · · · ·	91	第 95図	第178号住居跡実測図 · · · · · 124
第	66図	第163号住居跡実測図 · · · · · ·	92	第 96図	第179号住居跡実測図 · · · · 125
第	67図	第164号住居跡実測図 · · · · · ·	93	第 97図	第180号住居跡実測図 · · · · · 126
第	68図	第165号住居跡実測図 · · · · · ·	94	第 98図	第180号住居跡出土遺物実測図 126
第	69図	第165号住居跡竈実測図 ·····	95	第 99図	第181号住居跡実測図 · · · · · 127
第	70図	第165号住居跡出土遺物実測図	96	第100図	第182号住居跡実測図 ・・・・・・ 128
第	71図	第166・229号住居跡実測図・・・	97	第101図	第183号住居跡実測図 ・・・・・・ 129
第	72図	第166号住居跡出土遺物実測図	98	第102図	第184号住居跡実測図 · · · · · 130
第	73図	第167号住居跡実測図 · · · · · ·	99	第103図	第185号住居跡実測図 ・・・・・・ 131
第	74図	第167号住居跡竈実測図 · · · · ·	100	第104図	第186号住居跡実測図 · · · · · 132
第	75図	第167号住居跡出土遺物実測図	101	第105図	第187号住居跡実測図 ・・・・・・ 133
第	76図	第169・228号住居跡実測図・・・	103	第106図	第188号住居跡実測図 ・・・・・・ 134
第	77図	第169号住居跡竈実測図 · · · · ·	104	第107図	第189 A · B 号住居跡実測図 · 135
第	78図	第169号住居跡出土遺物実測図	104	第108図	第191号住居跡実測図 · · · · · 136

第109図	第191号住居跡出土遺物実測図	137	第138図	第214A・B号住居跡実測図 ・ 167
第110図	第192号住居跡実測図 · · · · · ·	138	第139図	第215号住居跡実測図 · · · · · 168
第111図	第192号住居跡出土遺物実測図	139	第140図	第215号住居跡出土遺物実測図 169
第112図	第193号住居跡実測図 · · · · · · ·	140	第141図	第216号住居跡実測図 · · · · · · 170
第113図	第193号住居跡竈実測図 ·····	141	第142図	第217 A · B 号住居跡実測図 · 171
第114図	第193号住居跡出土遺物実測図	142	第143図	第217 A 号住居跡出土遺物
第115図	第195号住居跡実測図 ・・・・・・・	143		実測図 172
第116図	第195号住居跡出土遺物実測図	144	第144図	第218号住居跡実測図 · · · · · · 173
第117図	第197号住居跡実測図 · · · · · · ·	145	第145図	第218号住居跡出土遺物実測図 173
第118図	第197号住居跡出土遺物実測図	145	第146図	第219号住居跡実測図 · · · · · · 174
第119図	第201号住居跡実測図 · · · · · ·	146	第147図	第220号住居跡実測図 · · · · · · 175
第120図	第202号住居跡実測図 · · · · · ·	147	第148図	第221号住居跡実測図 · · · · · · 176
第121図	第203号住居跡実測図 · · · · · ·	148	第149図	第223号住居跡実測図 · · · · · 177
第122図	第204号住居跡実測図 · · · · · ·	148	第150図	第223号住居跡出土遺物実測図 177
第123図	第204号住居跡出土遺物実測図	149	第151図	第224号住居跡実測図 · · · · · 178
第124図	第205号住居跡・竈実測図・・・	150	第152図	第225号住居跡実測図 · · · · · 179
第125図	第205号住居跡出土遺物		第153図	第226号住居跡実測図 · · · · · 181
	実測図(1) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	152	第154図	第226号住居跡竈実測図 · · · · 182
第126図	第205号住居跡出土遺物		第155図	第226号住居跡出土遺物位置図 183
	実測図(2) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・」	153	第156図	第226号住居跡出土遺物実測図 184
第127図	第206号住居跡実測図 · · · · · · ·	154	第157図	第227号住居跡実測図 · · · · · 185
第128図	第206号住居跡竈実測図 ·····	155	第158図	第228号住居跡出土遺物実測図 186
第129図	第206号住居跡出土遺物実測図	156	第159図	第230号住居跡実測図 · · · · · 187
第130図	第207・208号住居跡実測図・・	158	第160図	第232号住居跡実測図 · · · · · 188
第131図	第209号住居跡実測図 · · · · · ·	160	第161図	第232号住居跡竈実測図 ・・・・・ 189
第132図	第210号住居跡実測図 · · · · · ·	161	第162図	第232号住居跡出土遺物実測図 190
第133図	第211号住居跡実測図 · · · · · ·	162	第163図	土坑実測図(1) ・・・・・・・・・・・ 192
第134図	第212 B 号住居跡実測図 ·····	163	第164図	土坑実測図(2) · · · · · 193
第135図	第212 B 号住居跡竈実測図 · · ·	164	第165図	第15号土坑出土遺物実測図・・ 194
第136図	第212 B 号住居跡出土遺物		第166図	第23号土坑出土遺物実測図 · · 195
	実測図 ・・・・・・・・・・・ 1	64	第167図	第 1 号掘立柱建物跡実測図 · · 197
第137図	第213号住居跡実測図 · · · · · ·]	.65	第168図	第2号掘立柱建物跡実測図 ・・ 199

第169図	第 3 号掘立柱建物跡実測図 · · 200	第187図	第12(2)・15号溝出土遺物
第170図	第1・3号掘立柱建物跡出土		実測図 237
	遺物実測図 · · · · · 202	第188図	第18・19・37号溝出土遺物
第171図	第1・2号地下式壙実測図 ・・ 203		実測図 ・・・・・・ 238
第172図	井戸実測図(1) 205	第189図	第38号溝出土遺物実測図 ・・・・ 239
第173図	井戸実測図(2) · · · · · 206	第190図	遺構外出土遺物実測図 · · · · · 242
第174図	井戸出土遺物実測図 · · · · · · 208	第191図	第175号住居跡甕類の個体ごと
第175図	第1・2・3・4号溝実測図・211		の出土範囲 ・・・・・・ 244
第176図	第 5 号溝実測図 ・・・・・・・・・・ 213	第192図	第175号住居跡坏類の分類・・・ 245
第177図	第6・7・8・13・22号溝	第193図	第175号住居跡甕類の分類・・・ 246
	実測図 215	第194図	7世紀末から8世紀前半代の
第178図	第10号溝実測図 · · · · · · · · 219		住居跡出土坏類 · · · · · 248
第179図	第11・12・14・15号溝実測図・221	第195図	竪穴住居跡と竈の形態変遷図・252
第180図	第16・17号溝実測図 ・・・・・・・ 224	第196図	Ⅲ区北部の9世紀代の遺構配
第181図	第18・19・32・33号溝実測図・227		置図 254
第182図	第21・34・35号溝実測図・・・・ 229	第197図	Ⅳ期の竪穴住居跡の形態分類・255
第183図	第24・28・29号溝実測図 ・・・・ 231	第198図	各段階ごとの集落の変遷図(1)・257
第184図	第37・38号溝実測図 ・・・・・・・ 233	第199図	各段階ごとの集落の変遷図(2)・258
第185図	第5・6号溝出土遺物実測図・235	第200図	各段階ごとの集落の変遷図(3)・259
第186図	第12号溝出土遺物実測図(1) · · 236		

付 図 目 次

付図1 柴崎遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区遺構配置図

表 目 次

表 1	柴崎遺跡周辺遺跡地名 · · · · · 7	表 3	各期各段階の住居跡 ・・・・・・・・ 2	50
表 2	土坑一覧表 ・・・・・・・・・・・・ 191	表 4	竪穴住居跡一覧表 ・・・・・・・ 260 ~2	262

写真図版目次

- P L 1 遺跡全景
- P L 2 遺跡全景, 第127号住居跡, 第168号 住居跡
- PL3 第167・168号住居跡遺物出土状況 第168号住居跡竈、第175号住居跡
- P L 4 第175号住居跡遺物出土状況
- PL5 第175号住居跡遺物出土状況, 第175 号住居跡竈、第190号住居跡
- PL6 第190号住居跡遺物出土状況, 第194 号住居跡
- PL7 第194号住居跡遺物出土状況, 第194 PL20 第165号住居跡竈, 第166号住居跡遺 号住居跡竈。第196号住居跡
- PL8 第198号住居跡, 第198号住居跡竈 第199号住居跡
- PL9 第199号住居跡遺物出土状況, 第200 号住居跡
- 遺物出土状況, 第212 A 号住居跡竈
- P L 11 第212 A 号住居跡遺物出土状況, 第 222号住居跡遺物出土状況, 第231号 PL23 第171号住居跡竈遺物出土状況, 住居跡
- PL12 第231号住居跡竈, 第231号住居跡遺 物出土状況
- P L 13 第128号住居跡, 第153号住居跡, 第 153号住居跡遺物出土状況
- P L 14 第153号住居跡遺物出土状況, 第153 号住居跡竈、第154号住居跡遺物出 土状況
- P L 15 第154号住居跡竈, 第155号住居跡遺 物出土状况, 第155号住居跡竈

- P L 16 第156号住居跡, 第157号住居跡遺物 出土状况、第158号住居跡遺物出土 状況
- P L 17 第159号住居跡遺物出土状況,第160 号住居跡, 第160号住居跡遺物出土 状況
- P L 18 第160号住居跡竈, 第161号住居跡, 第161号住居跡籠
- P L 19 第162号住居跡遺物出土状況, 第163 号住居跡、第164号住居跡
 - 物出土状況、第167・168号住居跡遺 物出土状況
- P L 21 第167号住居跡遺物出土状況, 第169 ・228号住居跡遺物出土状況,第170 号住居跡遺物出土状況
- PL10 第200号住居跡竈, 第212A号住居跡 PL22 第170号住居跡竈遺物出土状況, 第171号住居跡、第171号住居跡籠遺 物出土状況
 - 第172号住居跡, 第172号住居跡竈遺 物出土状況
 - P L 24 第174号住居跡遺物出土状況, 第174 号住居跡竈
 - P L 25 第176号住居跡, 第177号住居跡, 第178号住居跡
 - P L 26 第179号住居跡, 第180号住居跡, 第182号住居跡
 - P L 27 第183号住居跡, 第184号住居跡, 第186号住居跡

- P L 28 第187号住居跡, 第188号住居跡, 第 189 A · B 号住居跡
- PL29 第189A·B号住居跡遺物出土状況, 第191号住居跡、第191号住居跡遺物 出土状況
- P L 30 第192号住居跡, 第193号住居跡, 第 193号住居跡竈
- P L 31 第197号住居跡, 第201号住居跡, 第 202号住居跡
- PL32 第203号住居跡, 第204号住居跡遺物 出土状況
- PL33 第205号住居跡, 第205号住居跡遺物 PL48 第2号地下式擴, 第2号井戸, 第3 出土状況, 第206号住居跡
- PL34 第206号住居跡遺物出土状況, 第206 号住居跡籠、第206号住居跡籠遺物 出土状況
- P L 35 第207·208号住居跡, 第209号住居 跡、第210号住居跡
- P L 36 第212~221・223~225・227号住居跡
- PL37 第211号住居跡遺物出土状況, 第212 B号住居跡遺物出土状況
- PL38 第213号住居跡遺物出土状況, 第214 A · B 号住居跡, 第215号住居跡遺 物出土状况
- PL39 第217A・B号住居跡、第218号住居 跡、第219号住居跡
- PL40 第220号住居跡遺物出土状況, 第221 号住居跡、第223号住居跡
- PL41 第226号住居跡, 第226号住居跡遺物 出土状況, 第226号住居跡竈
- PL42 第230号住居跡, 第232号住居跡遺物 出土状況

- PL43 第3号土坑, 第6号土坑, 第7号土 坑
 - P L 44 第 8 号土坑, 第11 号土坑, 第12 · 13 号十坑
 - P L 45 第14号十坑, 第15号十坑溃物出十状 況、第17号十坑
 - P L 46 第23号土坑遺物出土状况, 第1号掘 立柱建物跡
 - PL47 第2号掘立柱建物跡, 第3号掘立柱 建物跡、第3号掘立柱建物跡遺物出 土状況
 - 号井戸
 - PL49 第4号井戸, 第5号井戸, 第6号井 戸
 - PL50 第7号井戸、第8号井戸、第6·8 ・12号溝
 - P L 51 第1・2・3・4号溝
 - P L 52 第6・8・10・12号溝
 - P L 53 第 5 · 11~15 · 18 · 19 · 32 · 33号溝
 - P L 54 第 6 号溝遺物出土状況, 第11·12· 14号溝、第18・19・32・33号溝
 - P L 55 第10号溝, 第28·29号溝, 第38号溝
 - P L 56 第127·168·175(1)号住居跡出土遺物
 - P L 57 第175号住居跡出土遺物(2)
 - P L 58 第175号住居跡出土遺物(3)
 - P L 59 第175号住居跡出土遺物(4)
 - P L 60 第175号住居跡出土遺物(5)
 - P L 61 第175号住居跡出土遺物(6)
 - P L 62 第175号住居跡出土遺物(7)
 - P L 63 第190号住居跡出土遺物(1)
 - P L 64 第190(2)·194(1)号住居跡出土遺物

- 出土遺物
- P L 66 第199(2)・212 A ・222・231号住居跡 出土遺物
- P L 67 第231 号住居跡・古墳時代後期の出 十十器群
- P L 68 第153号住居跡出土遺物(1)
- P L 69 第153(2)·154(1)号住居跡出土遺物
- P L 70 第154(2)·155(1)号住居跡出土遺物
- P L 71 第155(2)・160・165・166・167(1)号 住居跡出土遺物
 - P L 72 第167(2)·169号住居跡出土遺物
 - P L 73 第170·171(1)号住居跡出土遺物
 - P L 74 第171(2)·172号住居跡出土遺物
 - P L 75 第174号住居跡出土遺物(1)
 - P L 76 第174(2) · 176 · 180 · 192 · 193(1)号 住居跡出土遺物
 - P L 77 第193(2)・195・197・204号住居跡 出土遺物
 - P L 78 第205号住居跡出土遺物(1)
 - P L 79 第205(2)·206(1)号住居跡出土遺物
 - P L 80 第206号住居跡出土遺物(2)
 - P L 81 第212 B · 217 · 218 · 223 · 226(1)号 住居跡出土遺物

- PL65 第194(2)・196・198・199(1)号住居跡 PL82 第226(2)・228・232(1)号住居跡出土 溃物
 - PL83 第232(2)号住居跡, 第15・23(1)号土 坑出土遺物
 - P L 84 第23号土坑出土遺物(2)
 - PL85 第3号掘立柱建物跡,第3·6·7 号井戸出土遺物
 - P L 86 第 6 · 12(1)号溝出土遺物
 - P L 87 第12(2)・15・18・19号溝出土遺物
 - P L 88 第37·38号溝出土遺物
 - P L 89 第171号住居跡出土遺物
 - PL90 第190・222・231・153・161・166号 住居跡出土遺物
 - P L 91 第204 · 212 A · 153 · 160 · 174 号住 居跡, 第5号井戸, 第6号溝出土遺 物
 - P L 92 遺構外出土遺物
 - PL93 第168・194・212 A・153~155 号住 居跡出土遺物
 - PL94 第155 · 161 · 167 · 169 · 191 · 206 · 215·226号住居跡, 第1号掘立柱建 物跡, 第5・6号溝出土遺物

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

茨城県つくば市付近は、筑波研究学園都市建設以前は水田が散在し、野菜、落花生及び葉たばこなどが栽培されている畑と平地林地帯であった。この緑豊かな田園地帯に「研究学園都市」の建設が昭和40年代初めから進められ、現在は研究、教育機関と関連する高層ビルが林立し、そこで働く人々の住宅団地も造成されて、つくば市は国際的頭脳都市として大きく生まれ変わろうとしている。

つくば市は、昭和62年11月、新治郡桜村、筑波郡谷田部町、豊里町および大穂町の4町村が合併して誕生した市で、昭和63年1月には筑波郡筑波町が合併し、県南最大の都市となっている。

柴崎遺跡は、つくば市の中央部東側に、桜地区が所在し、旧桜村当局は、昭和50年3月柴崎地区における工業団地造成計画をまとめ、昭和56年8月に計画を茨城県に提出した。翌57年、旧桜村教育委員会は将来の開発に備えて、開発予定地内における埋蔵文化財の分布調査を筑波大学に依頼し実施した。同年11月村当局は、住宅・都市整備公団に工業団地造成について協力を依頼した。これを受けて公団は、昭和59年4月茨城県教育委員会に開発予定地内における埋蔵文化財の有無について照会した。これに対して茨城県教育委員会は、同年5月に独自に分布調査を実施し、その結果、埋蔵文化財の存在を確認し、その旨、住宅・都市整備公団に回答した。開発計画が具体化した昭和61年12月、住宅・都市整備公団から茨城県教育委員会に、開発エリア内における埋蔵文化財包蔵地の範囲についての確認があり、茨城県教育委員会は、直ちに試掘調査を実施して遺跡の範囲を確認し、住宅・都市整備公団に回答した。

その結果,茨城県教育委員会,旧桜村教育委員会及び住宅・都市整備公団の三者で埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ね,現状保存が困難なため記録保存の処置をとることで一致した。昭和62年2月,茨城県教育委員会は住宅・都市整備公団に,埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。同年3月,住宅・都市整備公団から茨城県教育財団に,柴崎遺跡の発掘調査の依頼があり,茨城県教育財団は住宅・都市整備公団と柴崎遺跡発掘調査について打ち合わせを行い,昭和62年4月1日柴崎遺跡の埋蔵文化財発掘調査の委託契約を結び,同年4月から柴崎 I 区と II 区の一部の調査を,翌昭和63年4月からは柴崎遺跡 II 区と中塚遺跡の調査を行い,さらに、平成元年度には柴崎遺跡III 区の調査を実施することとなった。

第2節 調查経過

柴崎遺跡は、 $I \sim III 区 に分かれ$ 、昭和62年4月から平成2年3月にまたがって調査を行った。 I 区とIII 区の境界付近には鹿島神社があり、その社域は保存地区となっている。遺跡全体からみると、I 区は神社の西側、III 区は北側、III 区は東側で、既に、I 区(17,441 m²)とIII 区 (33,117 m²) については、昭和62年、63年度に調査を行い、その成果は、平成元年度に「研究学園都市計画柴崎土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(I)柴崎遺跡I ・II I 区」を、平成2年に「同(II) 柴崎遺跡I 区・中塚遺跡」として刊行している。

本記述は、柴崎遺跡Ⅲ区(31,523 m²) について平成元年度に調査を実施した調査経過の概要である。

(平成元年)

- 4月 発掘調査を開始するための諸準備を行い、倉庫及び休憩所を設置し、試掘調査を開始した。
- 5月 前月に引き続き、試掘調査を実施した結果、竪穴住居跡、溝ととらえられる落ち込みや 土師器、須恵器の破片が確認できた。調査の能率をあげるため、重機を導入して表土除去 を進めた。
- 6月 重機による表土除去を続けると同時に、遺構確認作業を実施し、上旬から、竪穴住居跡 の調査を開始した。調査は、調査区のほぼ北西部から始め、下旬までに約10軒の竪穴住居 跡の調査を行った。
- 7月 竪穴住居跡の調査とともに土坑、井戸、溝の調査を進めた。
- 8月 竪穴住居跡の調査は、小竪穴住居が多く、遺物の出土も少ないため、順調で40軒まで進んだ。
- 9月 竪穴住居跡の調査を行うとともに、溝の調査を進め、約20条の調査を終了した。
- 10月 これまで調査してきた竪穴住居跡、土坑、溝、井戸の調査と併せて、50軒までの竪穴住居跡の調査を進めた。
- 11月 竪穴住居跡の調査は、60軒まで進み、遺構の写真撮影を行った。
- 12月 竪穴住居跡と溝の調査を継続して進めた。

(平成2年)

- 1月 5日から、調査を開始し、鹿島神社の北側と東側の一部の地区の表土除去を行い遺構確認を行った。竪穴住居跡の調査は、70軒まで進み、井戸・溝の掘り込みを進めながら、既に掘り込みの終了した遺構の測量、写真撮影を進めた。
- 2月 竪穴住居跡,井戸,溝等の調査を進めた。これまでに調査した柴崎遺跡内の遺構,遺物

- の性格を明確にとらえるために、神奈川県鎌倉市鎌倉考古学研究所の斉木秀雄氏を講師と して招聘し、「小竪穴遺構」についての班内研修会を実施した。
- 3月 検出された遺構の調査もほぼ終了し、3日には現地説明会を行った。調査した遺構の総数は、竪穴住居跡43軒、小竪穴遺構42基、溝38条、掘立柱建物跡3棟、井戸6基、土坑37基である。中旬に遺跡の航空写真撮影を行い、これまでに作成した図面類の点検、修正、遺物の洗浄及び注記等を実施し、24日に一切の調査を終了した。



第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

柴崎遺跡は、つくば市大字柴崎字小田海道114-1ほかに所在し、常磐自動車道・桜土浦インターチェンジの北々西約7kmの地点に位置している。

遺跡の所在するつくば市は、昭和62年11月に、谷田部町、桜村、豊里町及び大穂町の4町村が合併した茨城県で最も新しい市で、63年1月には筑波町も編入された。市域は、東西約14km、南北約25km、面積約259.5km²、人口145,663人(平成3年5月1日現在)を擁している。東は土浦市・新治村、西は下妻市・水海道市・千代川村及び石下町、南は茎崎町・伊奈村及び谷原村、北は八郷町・真壁町及び明野町と境を接している。

柴崎遺跡の調査は、62年4月に開始したが、当初は「桜村」に所在した遺跡であった。こういった事情から、旧桜村を筑波市の「桜地区」と呼称して記述することにする。

つくば市は茨城県の南西部に位置し、東には霞ケ浦、北には紫峰筑波山を仰ぎ見る風光明媚な地域である。この付近は小貝川と桜川の間に展開する平坦な台地で、筑波・稲敷台地と呼ばれ、台地上は畑地や平地林となっている。

また、両河川の流域は水田として利用されており、自然に恵まれた土地で市の産業は、昔から農業が中心であったが、昭和40年代から始まった筑波研究学園都市の建設により、大きな変貌を遂げつつある。現在は学園都市の中心部はほぼ完成し、周辺地域の開発、整備が着々と進みつつある。

つくば市の桜地区は、土浦市・新治村に接し、市の南東部に位置している。桜地区には、霞ケ浦に流入する花室川が学園東大通りに沿うように南東に流下し、桜地区の東部新治村との境には桜川が南東に向かって流下している。両河川の間には、標高20~30mの平坦な台地が北西から南東へ舌状に延びている。

柴崎遺跡は、この舌状の台地南西側が花室川の沖積地に向かってなだらかに傾斜している標高 25 m ほどの台地に所在している。現況は、山林、畑であり、遺跡と花室川との比高は 1 ~ 2 m を 測る。花室川の沖積低地は水田となっている。

第2節 歷史的環境

つくば市桜地区内の遺跡は、桜川右岸台地縁辺部とその流域に開けた畑地に数多く存在しており、これまでの桜地区内での遺跡分布調査の結果、先土器時代の遺跡は確認されず、縄文時代以降の遺跡が比較的多く認められている。

縄文時代の遺跡は、桜地区内で13か所確認されており、これらの中で周知の遺跡として、旭台貝塚<12>、下広岡遺跡<37>がある。旭台貝塚は、桜地区内における唯一の貝塚で、桜村史によると貝層は30~40㎝の厚さに堆積し、アカニシ、ハマグリ及びヤマトシジミ等で構成されている。また、下広岡遺跡は、花室川の右岸にあり、常磐自動車道桜インターチェンジの建設に伴い、茨城県教育財団が昭和53年度から54年度にかけて調査を実施した遺跡である。その結果、中期の竪穴住居跡や、袋状土坑等が検出され、桜地区内での当該期の大集落跡であったことが窺える遺跡である。さらに、下広岡遺跡と同時期に営まれた遺跡では、台坪才十朗遺跡<3>、天神遺跡<8>大角豆遺跡<35>及び下大角豆遺跡<21>などがあり、いずれも、縄文時代中期前葉の阿玉台式期から後葉の加曽利E式期に集落が形成されたものと考えられる。後期から晩期にかけては、前述した旭台貝塚、西坪B遺跡<14>、花室遺跡<26>などが確認されているが、いずれも、遺物の散布がみられる程度である。

弥生時代の遺跡は、古来遺跡<30>、西坪遺跡<23>が低地にみられ、台地上には、縄文時代と複合する花室遺跡、大角豆遺跡等が確認されているが、これらの遺跡はいずれも弥生式土器片が散布しているにすぎない。

古墳時代の遺跡は、桜川流域の水田地帯をみおろす舌状台地端部に確認され、古墳は台地上や低地部にも築造されている。全長80m、後円部径50m、高さ8m、前方部の長さ30m、高さ2mの規模をもつ前方後円墳の天神塚古墳<7>や、さらに、全長75mを測り、直刀が出土した金田古墳<18>、全長45mの鹿島様古墳等3基の前方後円墳が存在し、それぞれの背後に、円墳を有して古墳群が形成されている。また、低地にも全長65mと50mの規模をもつ前方後円墳2基と円墳1基を有する松塚古墳群があり、さらに、とりおい塚古墳、前方後円墳と思われる古塚古墳等がある。その他、上境の滝の台古墳群、西坪台古墳群、稲荷山古墳及び千現塚古墳等多くの古墳や古墳群がみられ、当該期の集落跡や包蔵地も多く、縄文時代と複合する大山遺跡<6>や天神遺跡、弥生時代と複合する倉掛遺跡<35>、その他、土器屋遺跡<17>、調神の門遺跡<31>及び沼荷遺跡<1>等がある。

奈良・平安時代の遺跡は、布目瓦が出土した光重廃寺<16>、河内郡衙の倉庫群とみられる西坪遺跡の建築跡(総柱の掘立柱建物跡)と、それと関連の深いと思われる本田条里跡がある。さらに、本田条里跡の南には、五佐山の下の大池を基点に丘陵沿いに正しく東と北に築堤し、東西

九里,南北四条にくぎった長方形状の36坪に構成された上ノ室条里跡もみられたが,現在は,両条里跡とも湮滅している。

中世以降の遺跡としては、城館跡が確認され、小田氏との関連が深い金田城跡、花室城跡、上 ノ室城跡等がある。

※文中の<>の番号は、表1、第図中の該当番号と同じである。

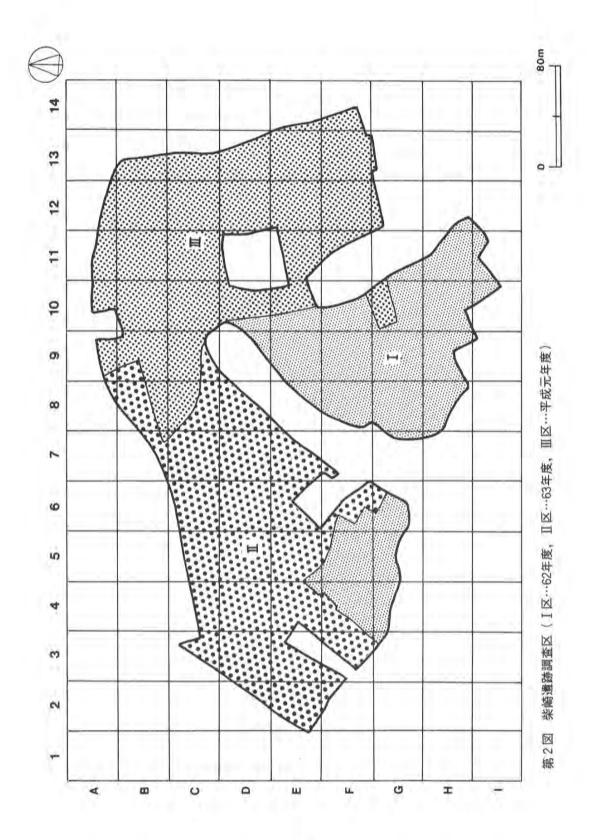
参考文献

- (1) 桜村教育委員会 「桜村史 上巻」 1982年
- (2) 茨城県教育委員会 「茨城県遺跡地図」 1987年
- (3) 茨城県教育財団 「下広岡遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告 ¥ 1981年
- (4) 桜村教育委員会 「柴崎地区埋蔵文化財分布調査報告書」 1987年

表 1 柴崎遺跡周辺遺跡地名

図中	遺構	b		時	代		図中	'鬼 + # - <i>L</i> 7		時	代	
番号	退 啎	名	縄文	弥生	古墳	奈·平以降	番号	遺構名	縄文	弥生	古墳	奈·平以降
1	沼 向 遺	跡			0		22	河内郡衙跡				0
2	古 塚 古	墳			0		23	西 坪 遺 跡		0		
3	台坪才十朗	貴跡	0				24	本 田 遺 跡				0
4	爱岩塚古	墳			0		25	松塚古墳群			0	
5	十日塚古	墳		0			26	花 室 遺 跡	0	0		
6	大 山 遺	跡	0		0		27	花 室 城 跡				0
7	天神塚古	墳			0		28	上ノ室条里跡				0
8	天 神 遺	跡	0		0		29	上ノ室城跡				0
9	柴 崎 遺	跡			0	0	30	古 来 遺 跡		0		
10	滝の台古り	賁群			0		31	明神の門遺跡			0	
11	どんどん塚	古墳		0			32	大日塚古墳			0	
12	旭 台 貝	塚	0				33	東古墳群			0	
13	中根遺	跡			0		34	鹿島様古墳			0	
14	西坪B遺	跡			0		35	倉掛遺跡			0	
15	とりおい塚	古墳			0		36	大角豆遺跡		0		
16	九重廃寺	跡				0	37	千 現 塚 古 墳			0	
17	土器屋遺	跡			0		38	下広岡遺跡	0	,		
18	金 田 古	墳			0		39	中塚遺跡	0		0	0
19	金 田 城	跡				0.	40	古 来 館 跡				0
20	横町古墳	群			0		41	稲荷前古墳群			0	
21	下大角豆道	遺跡	0									



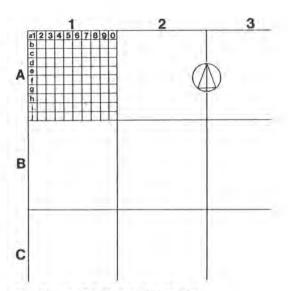


第3章 調 查 方 法

第1節 地区設定

柴崎遺跡の発掘調査を実施するにあたり、 遺跡及び遺構の位置を明確にするために調 査区を設定した。

調査区の設定は、日本平面直角座標第以 系, X 軸(南北)+12,000m, Y 軸(東西) +25,280mの交点を基準点として、40m四 方の大調査区に分割し、さらに、大調査区 内を4m四方の小調査区に細分割した。調 査区の名称は、アルファベットと算用数字 を用い、大調査区において北から南へA. B, C……西から東へ1, 2, 3……とし、 第3図 小調査区呼称方法概念図 「A1区」、「B2区」のように呼称した。



北大調査区内の小調査区は北から南へa, b, c …… j, 西から東へ1, 2, 3…… oとし、小調査 区の名称は、大調査区の名称を冠し、「Alai」「B2ez」のように呼称した。

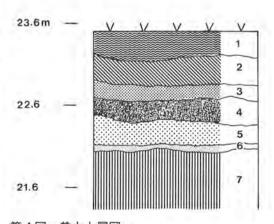
第2節 基本層序の検討

柴崎遺跡Ⅲ区の土層堆積状況は、基本的 に I 区と同じである。遺跡の基本層序は、 右図(第4図)の地層断面図のとおり、7 層に分類できる。

第1層は、30~40cmの厚さを有する耕作 土である。

第2層は、30~40cmの厚さを有する、耕 作土を含む明褐色土である。

第3層は、30cmの厚さを有するソフトロ 第4図 基本上層図 ームの漸移層の明黄褐色土である。



第4層は、30cmの厚さを有し、層中にブラックパンドが認められ、極めて締まりのあるハード

ローム層である。

第5層は、30~35cmの厚さを有し、粘土が混じる明黄褐色土である。

第6層は、6~10cmの厚さを有する黄灰色の粘土層である。

第7層は、青灰色の粘土層である。

遺跡の立地する台地は、小さな支谷が2か所に入り込み、表土から1.5~1.8mで粘土層になる。 土層は比較的薄い地域であり、表土から1.5mで涌き水が確認される。台地上は比較的平坦であ るが、中央部が若干高く、周辺部はなだらかに傾斜している。台地は畑、低地は水田として利用 され、畑地と水田では1~2mの高低差がある。当遺跡の遺構は、第2層の上面で確認されてお り、竪穴式住居跡は、第2層から第3層を掘り込み、井戸は第7層の粘土層まで掘り込まれている。

第3節 遺構確認

遺構の確認は、調査面積の8分の1にあたる小調査区を発掘する方法により実施した。その結果は、土師器や須恵器の破片とともに、住居跡や溝と思われる落ち込みが確認され、表土の厚さは30~60cmであることも判明した。この試掘結果をふまえ、遺跡全面の表土除去をすることにした。表土除去には重機を利用したが、鹿島神社周辺の一部の地区について、地権者による立木の伐採が遅れたために、2回に分けて実施した。重機で除去したあとを追うように、人力による遺構確認を行い、住居跡(84軒)や溝(38条)、井戸(6基)等を確認した。遺跡の中央部はやや高く、周辺部は低くなるが、この低い部分はローム層がほとんどなく、粘土質の褐色土が堆積していた。

第4節 遺構調査

住居跡の調査は、土層観察用ベルトを十文字に設定して掘り込む四分割法を原則とした。分割した地区の表記は、北東部を1区とし、以下時計回りに2、3、4区とした。平面プランが明確でないものや、覆土がほとんどなくベルト設定が困難な住居跡については、南北あるいは東西に二分割した。この場合は、北側あるいは東側を1区とし、他方を2区とした。土坑については、長軸方向に二分割し、地区名は住居跡の表記に準じた。掘立柱建物跡については、柱痕跡あるいは柱掘り方が一直線に連続するようなラインを設定し、このラインに沿って二分割して掘り込んだ。井戸及び地下式壙については、土坑のそれに準じた。溝については掘り込まれている方向が様々であるため、適宜土層観察ベルトを設定して掘り込みを実施した。

土層については、色調、含有物、締まり具合及び粘土等を分類した。色調の決定にあたっては、「新版標準土色帖」(小山正忠、竹原秀雄著 日本色研事業株式会社)を使用した。遺物の取り上げは、出土位置、遺物番号及びレベルを図面あるいは台帳に記録した。遺構の観察は、埋土の堆積状況、床面、壁、柱穴及び竈等について留意した。遺構の実測については、平面図は水糸を1m方眼に地張りして計測し、土層及び遺構断面図は水糸を適度なレベルに水平に張り、計測した。遺構番号は、調査した順に番号を付した。

第4章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と遺構及び遺物の記載方法

1 遺跡の概要

柴崎遺跡は、花室川の小支谷に面した標高24~25mの台地上に立地し、現況は畑地となっている。遺跡を I 区からⅢ区に区画して、昭和62年度から平成元年度にかけて調査を実施した。昭和62年度調査の I 区からは、竪穴住居跡112軒、土坑 5 基、掘立柱建物跡 1 棟、地下式壙 4 基、井戸8 基、溝 8 条が検出されている。昭和63年度調査のⅢ区からは、竪穴住居跡146軒、土坑18基、地下式壙 4 基、井戸 8 基、溝 6 条が検出されている。これらの調査成果については、それぞれ報告書第54集、同第63集に収録してある。本書は平成元年度調査のⅢ区から検出された遺構・遺物について収録した。

平成元年度に調査したⅢ区は、南北に約450m、東西に約570m、面積31,418m²であり、古墳時代後期から、奈良・平安時代にかけての遺跡である。今回の調査によって検出された遺構は、古墳時代後期の竪穴住居跡12軒及び奈良・平安時代の竪穴住居跡72軒、奈良・平安時代の掘立柱建物跡3棟、地下式壙2基、土坑18基、溝29条及び井戸6基である。

古墳時代の竪穴住居跡は、調査区全域から検出されており、すべてに竈が付設されている。

奈良・平安時代の竪穴住居跡は、古墳時代の竪穴住居跡同様調査区の全域から検出されており、 竈は住居の北側に付設されているものがほとんどである。

溝は38条検出され、いずれも奈良時代以降に構築された溝と考えられる。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)で60箱程出土している。古墳時代の遺物は、土師器の坏、鉢、甕、甑、高坏を主に、須恵器の坏、提瓶などが出土している。奈良・平安時代の遺物は、土師器の坏、甕、高台付坏、皿、甑、須恵器の坏、高台付坏、盤、高坏、蓋、甕、甑、壺等が多量に出土している。土製品では、支脚、紡錘車、石製品では、管玉、砥石、紡錘車等、鉄製品では、刀子、鎌等が出土している。その他、金銅製の鈴が出土している。

2 遺構・遺物の記載方法

本書における遺構及び遺物の記載方法は、以下のとおりである。

(1) 使用記号

遺構

名	称	住居跡	掘立柱建物跡	土 坑	溝	ピット
記	号	SI	S B	S K	S D	P 1 · · ·

遺物

土 器	土製品	石 器	金属製品
Р	DΡ	Q	M

(2) 遺構及び遺物の実測図中の表示



(3) 遺構番号

遺構番号については、調査の過程において遺構の種別毎、調査順に付したが、整理の段階 で遺構でないと判断したものは欠番とした。

(4) 土層の分類

土層観察における色相の判定は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著・日本色 研事業株式会社)を使用し、図版実測図中に記載した。攪乱層については「K」と表記した。

- (5) 遺構実測図の作成方法と掲載方法
 - ① 各遺構の実測図は、縮尺20分の1の原図を浄書して版組し、それをさらに3分の1に縮 小して掲載することを基本とした。
 - ② 溝は、縮尺100分の1の原図を浄書して版組し、それをさらに2分の1に縮小して掲載した。
 - ③ 実測図中のレベルは標高であり、m単位で表示した。また同一図中で同一標高の場合に限り、一つの記載で表し、標高が異なる場合は各々表示した。
 - ④ 本文中の記載について
 - ○「位置」は、遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。
 - ○「重複関係」は、他の遺構との切り合い関係を記した。
 - ○「平面形」は、壁の上端部で判断し、方形、長方形の場合は下記の分類基準を設け、その いずれかを明記した。

方形 (短軸:長軸=1:1.1未満のもの)

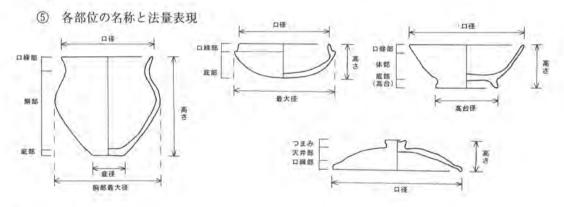
- ○「規模」は、壁の上端部の計測値であり、長軸(径)短軸をm単位で表記した。
- ○「主軸方向」は、炉または竈をとおる線を主軸とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ傾いているかを角度で表示した。
 - ○「壁」は、床面からの立ち上がり角度が81°~ 90°を垂直、65°~ 80°を外傾、65°未満を緩斜、さらに90°以上を内傾とした。壁高は、残存壁高の計測値である。
 - ○「壁溝」は、その形状や規模を記述した。規模は床面からの計測値とした。
 - ○「床」は傾斜や床質等を表記した。
- ○「ピット」は、その住居跡に伴うと考えられるピットをPで表示し、P₁・P₂はピット番

号を表し、さらに、ピットの直径と深さを記述した。

- ○「覆土」は、堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」、人為堆積の場合は「人為」と記した。
- ○「遺物」は、主な遺物の種類や出土位置、出土状態を記述した。
- ○「所見」は、当該住居跡についての時期やその他特記すべき事項を記述した。
- (6) 遺物実測図の作成方法と掲載方法
 - ① 土器の実測は、四分割法を用い、中心線の左側に外面、右側に内面及び断面を表した。
 - ② 実測図中の表示方法



- ③ 土器の拓影図は、右側に断面を表し、表・裏2面を掲載したものは、断面を挟んで左側に外面、右側に内面を掲載した。
- ④ 遺物は原則として実測図を浄書したものを3分の1に縮小して掲載することを基本とした。



(7) 表の見方

<住居跡一覧表>

住居跡	1.4	1961	主	軸	75 95 U.S.	規	模	141	22.7	Ľ	2	30 . Vii	but.		出	\pm	140=	-14
番号	位	置	方	向	平面形	長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)	床	面	۲	数	竈,炉	覆	王	遺	物	備	考

- 住居跡番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま付した。
- 位置は、小調査区(小グリット)名で表示した。他の調査区にまたがる場合は、遺構の 占める割合が最も大きい小調査区をもって表示した。
- 方向は、竈または炉が座標北から見てどの方向にどれだけ傾いているかを、角度で表示

した。

(N-10°-E, N-10°-W) []を付したものは推定である。

○ 平面形は、現存している形状の上端面で判断し、方形、長方形の場合は下記の分類基準 を設け、そのいずれかを明記した。

方形…短軸:長軸=1:1.1未満 長方形…短軸:長軸=1:1.1以上

- 規模の欄の長軸、短軸は、平面形の上端面の計測値であり、壁高は残存壁高の計測値で ある。
- 床面は、凹凸、平坦等の様子を示し、締まり等は解説の項で述べた。
 - ピット数は、住居跡に伴うものと考えられる総数を表示した。
- 竈が、付設されている住居跡は「竈」で、炉が検出されている場合は「炉」と表示した。
 - 覆土は、堆積状態が自然堆積の場合は「自然」、人為堆積の場合は「人為」と記した。
 - 出土遺物は、実測個体数を除いた遺物の種類と出土土器片の数を記した。
 - 備考は、重複関係や特徴等を記した。

<土坑一覧表>

₩-	jn,	24	192	長	径	च्या स्टब्स		芨	1	莫(сп	n)		Hóx	767	ride:	767	7007	1.	出	\pm	ZH:	-64.	図	版
番	号	位	置	方」	向	平田形	長	径	短	径	滐	ž	壁	面	底	面	覆	±	遺	物	備	考	番	号

- 土坑番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。また、整理の過程で土 坑でないと判断したものは欠番とした。
- 平面形は、円形、楕円形の場合に下記の分類基準を設けて表示した。 円形 (短径:長径=1:1.1未満のもの), 楕円形 (短径:長径=1:1.1以上のもの)
- 規模の欄の長径・短径は上端部の計測値(cm)で表した。
- 深さは、遺構確認面から坑底の最も深い部分までの計測値(cm)で表した。
- 壁面は、坑底からの立ち上がりの状態を下記の基準で分類し表示した。

81°~ 90°の傾き 65°~ 80°の傾き

65°未満の傾き

垂直

○ 底面は、下記の基準で分類し表示した。

1 平坦

皿状

四凸

<土器観察表>

図版番号	器	種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土·色調·焼成	備	考

- 図版番号は、実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。
- 法量は、A…口径、B…器高、C…底径、D…高台径、E…高台高、F…つまみ径、G…つまみ高とし、()は現存値、[]は復元推定値を表す。
- 器形の特徴は、底部、体部等の各部位について土器観察の結果を記した。
- 手法の特徴は、土器の成形、整形について記した。
- 胎土,色調,焼成の順で述べ,色調は「新版標準土色帖」を使用した。焼成については,「良好」,「普通」,「不良」に分類し,硬く焼き締まっているものは良好,焼きがあまく器面が剝離しやすいものは不良とし,その中間のものを普通とした。
- 備考は, 完存率実測番号, (P) 等を記した。

<土製品一覧表>

図版番号	器種	種	汨	法 量(cm)		孔 径	重量	現存率	出土地点	<i>μ</i>	考
四版曲分	7107	加工	最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)	山上地点	備	15
									ĺ		

- 図版番号は、実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。
- 重量の欄で、()を付した数値は、一部を欠損しているものの現存値である。

第2節 竪穴住居跡

当調査区からは、調査区の南西から侵入する小支谷を取り囲むように、84軒の竪穴住居跡(古墳時代12軒、奈良・平安時代72軒)が検出されている。これらの竪穴住居跡の中には、規模の小さな竈を持たない住居があり、11世紀頃から12世紀にわたる時期まで集落形成され生活が営まれていたことが窺われる。

以下、検出された住居跡の特徴や主な出土遺物について記載していくことにする。

1 古墳時代の住居跡

第127号住居跡(第5図)

位置 調査区の北西部,B9g2区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.37 m, 短軸5.32 m の方形を呈している。

主軸方向 $N-0^{\circ}$ 。

壁 壁高50~60cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 竈部分を除いた壁直下を全周している。

床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

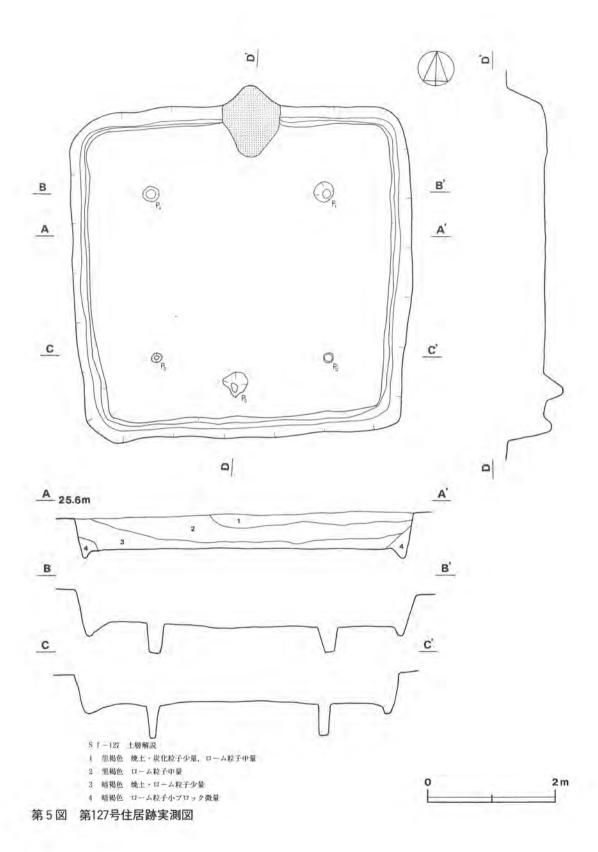
ピット 5 か所 $(P1 \sim P5)$ 検出されている。 $P1 \sim P4$ は,径 $16 \sim 32$ cm,深さ $40 \sim 54$ cm でいずれも主柱穴である。P5 は,径42 cm,深さ28 cm で,出入り口施設に伴うピットと考えられる。

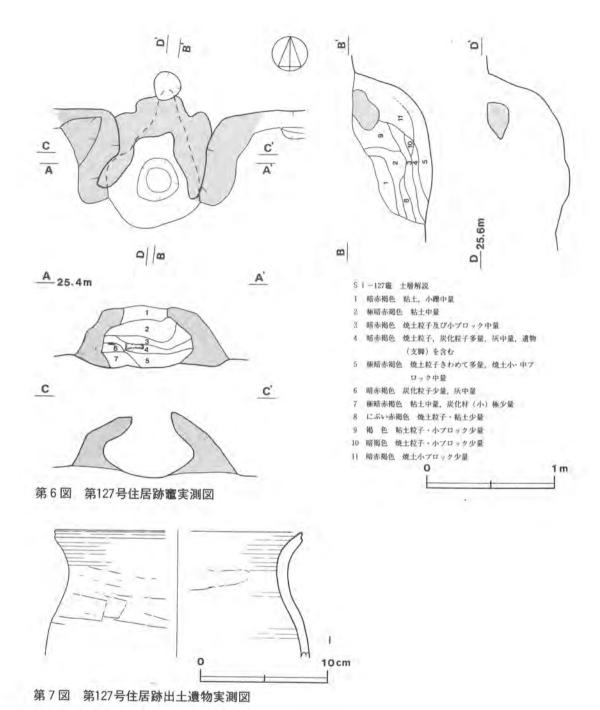
電 北壁中央部のやや東寄りを40cm程壁外へ掘り込み、砂まじりの粘土で構築されている。規模は、長さ160cm、幅155cmを測り、袖部から天井部にかけては比較的良好に遺存している。火床部は、ほぼ平らで焼土化しており、支脚が遺存している。燃焼部からは、灰、焼土粒子、焼土ブロック、炭化物及び粘土ブロックが検出されている。煙道部は、火床部から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 4層からなり,すべて自然堆積土層である。

遺物 床面と覆土中から土師器 (甕, 坏)片 6点, 須恵器 (坏)片 1点出土している。P 3付近の床面からは、1の土師器の甕の破片が出土している。

所見 遺構の形態や出土遺物から、6世紀後半の住居跡と考えられる。





第127号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備考
第7図			口縁部片。頭部から緩やかに外反 しながら立ち上がり, 口唇部をわ ずかにつまみ上げる。	体部外面へラナデ。口縁部内・外 面横ナデ。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P 1 5% 覆土

第168号住居跡(第8図)

位置 調査区の南西部, G10b 2区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北東コーナーは、第167号住居跡の南西コーナーに掘り込まれている。

規模と平面形 長軸6.07 m, 短軸6.06 mの方形を呈している。

主軸方向 N-29°-W。

壁 壁高32cmを測り、垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を浅く掘り窪め、断面形はU字状を呈している。竈部分を除き全周している。 床 平坦で、踏み固められ堅緻である。南部の出入り口施設に伴うピットの上には、撹乱が見られる。

ピット 9 か所 ($P1 \sim P9$) 検出されている。 $P1 \sim P4$ は,径 $32 \sim 50$ cm,深さ $30 \sim 50$ cmを測り,いずれも主柱穴である。P5 は,径24 cm,深さ32 cmで,出入り口施設に伴うピットと考えられる。 $P6 \sim P9$ は,径 $18 \sim 36$ cm,深さ $30 \sim 34$ cmで,性格は不明である。

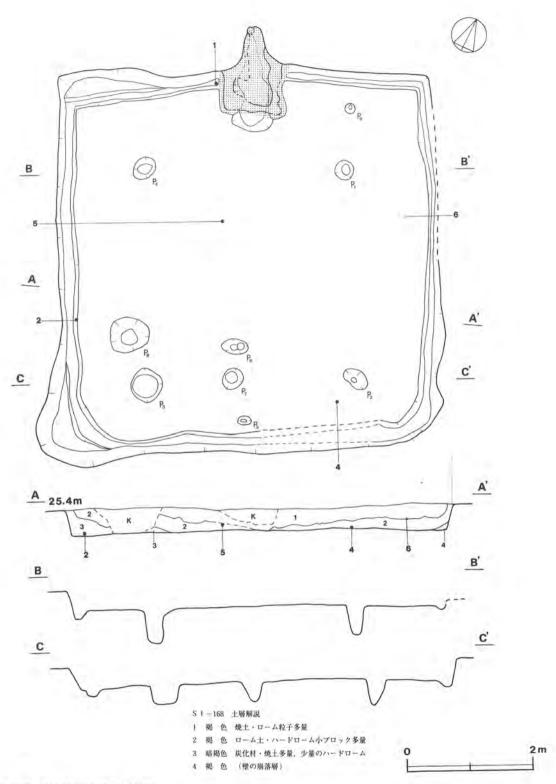
電 北西壁中央部を70cm程壁外へ掘り込み、砂礫を含んだ粘土で構築されている。規模は、全長 170cm、全幅106cmを測り、一部木の根の撹乱が見られるものの竈の遺存状態はよい。竈袖部は、天井部の一部とともによく遺存しており、天井部には、甕の口縁部の一部がはりついている。火床部は、床を32cm程掘り窪めて構築しており、焼土化している。燃焼部からは、焼土粒子、炭化物及び粘土ブロックが検出されている。煙道部は、焚口部から緩やかに外傾して立ち上がっている。 **覆土** 5層からなる。第1層は、人為的埋め戻し土層であり、第2~5層は、自然堆積土層である。第3層中には、多量の炭化材・焼土を含んでいる。

遺物 覆土中や床面から土師器(甕, 坏)片517点, 須恵器(甕, 坏) 片33点が出土している。 1 の土師器の坏は, 北西壁の竈南西側の覆土 (第5層) 中から, 2 の土師器の坏は, 南西壁直下の床面からそれぞれ出土している。 4 の土師器の小形甕破片 2 つは, 南東壁近くの床面からまとまって, 3 の土師器の甕口縁部は, 竈北東側の床面から, 倒立の状態でそれぞれ出土している。 その他に, 竈の天井部の崩落とともに落下したものと思われる土師器の甕口縁部片が, 燃焼室から出土している。

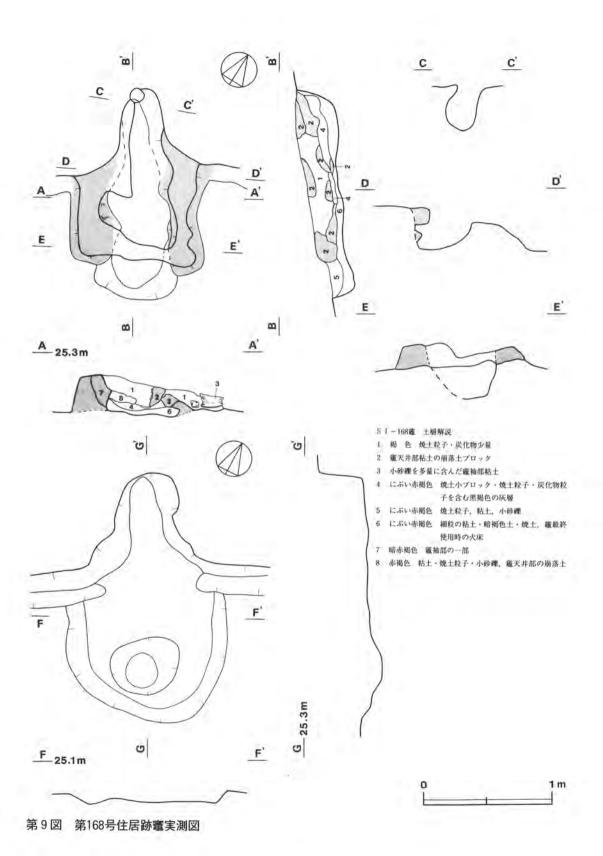
所見 本跡は、焼失家屋である。重複関係からは、第167号住居跡よりも古い時期に構築されている。遺構の形態と出土遺物から、6世紀後半の住居跡と考えられる。

第168号住居跡出土遺物観察表

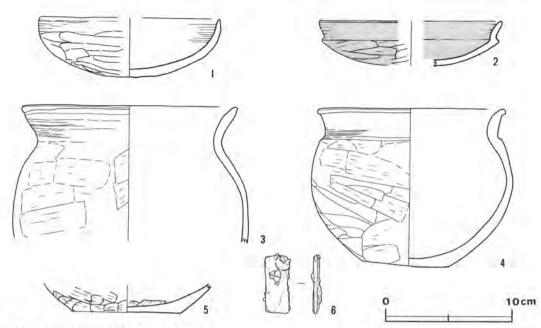
	, <u>, , , , , , , , , , , , , , , , , , </u>		2 1/2 PALAN DC			
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土·色調·焼成	備考
第10図	坏	A 14.2	丸底。体部は内彎気味に立ち上が	底部ヘラ削り。体部横位のヘラ削	砂粒・長石・雲母	P 32 45%
1	土師器	B 4.8	り、口縁部は直立する。	り。口縁部内・外面横ナデ。	黒褐色	覆土(3層)
					普通	
	坏	A(14.4)	丸底。体部と口縁部との境に稜を	底部ヘラ削り。底部内面及び口縁	砂粒・雲母	P 33 20%
2	土師器	B(3.6)	持ち、口縁部は外反する。	部内・外面横ナデ。内・外面黒色	黒褐色	西壁直下床面
				処理。	普通	



第8図 第168号住居跡実測図



-23-



第10図 第168号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·燒成	備考
第10図	光 土師習	A 17.0	胴中央部欠損。平底。頸部は「〈」 の字状に屈曲し、口縁部は外反す る。	底部及び胴部外面へラ削り。口縁 部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P34 30% 確
4	小形勢士師書	A 14.8 B 12.6 C 7.0	平底。胴部中位に最大径を持つ。 胴部と頭部の境に弱い稜を持ち、 口縁部は外反する。	底部及び胴部外面へラ削り。口縁 部内・外面横ナデ。	長石·石英·雲母 褐灰色 不良	P36 90% 床面
5	蹇 土 師 名	B (2.5) C 8.6	底部破片。平底。胴部は緩やかに 外傾する。	底部及び胴部外面へラ削り。	長石,雲母 赤褐色 普通	P35 5% 覆土(1層)

図版番号	40 46		法 量(cm)	重量	現存率		35 35
因吸证与	器種	最大長	最大幅	最大厚	(g)	(%)	出土地点	備考
6	不明鉄製品	4.5	1.8	0.6	13.0	100	覆土(1層)	M Z

第175号住居跡 (第11図)

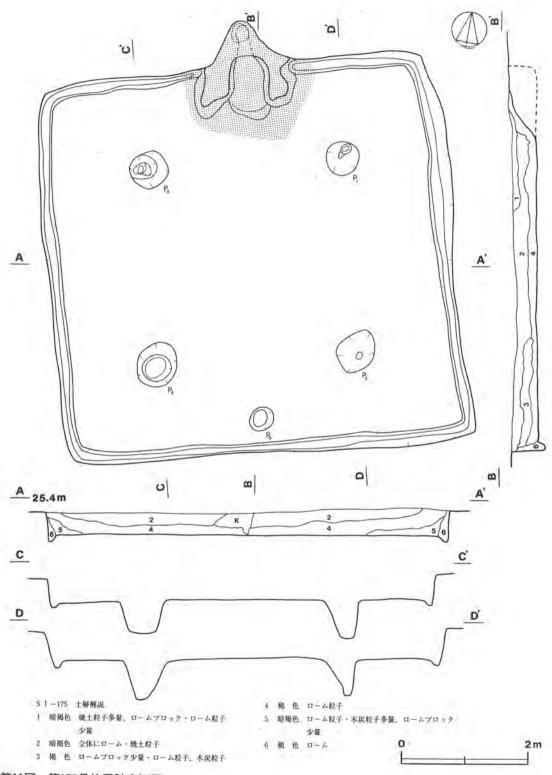
位置 調査区の南部, F12c6区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.40 m, 短軸6.32 m の方形を呈している。

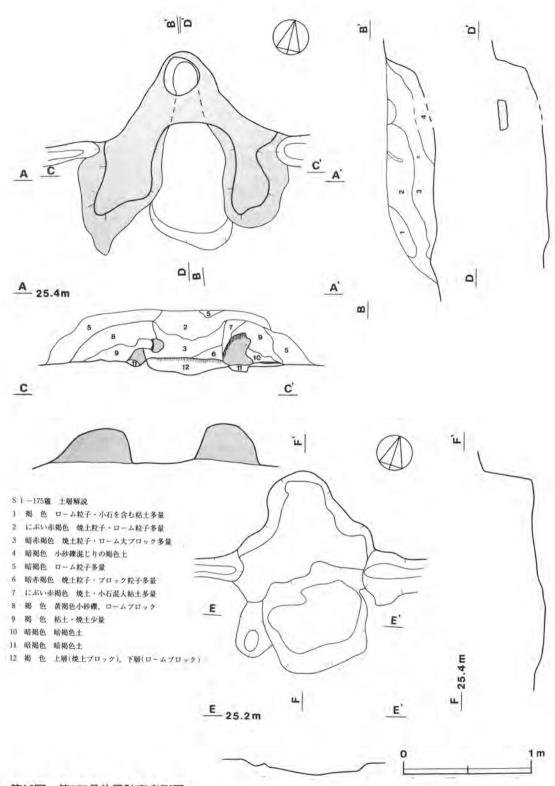
主軸方向 N-19-Wa

壁 壁高36~42cmを測り、垂直に立ち上がっている。

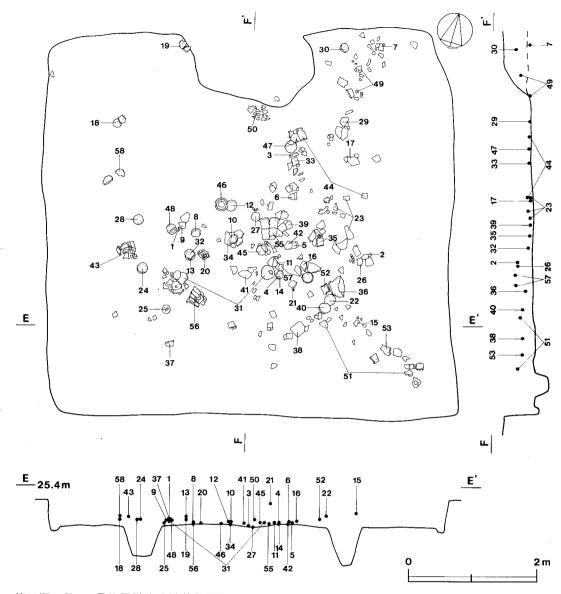
壁溝 壁直下の床面を浅く掘り窪め、断面形はU字状を呈している。竈部分を除き全周している。 床 平坦で、踏み固められ堅緻である。



第11図 第175号住居跡実測図



第12図 第175号住居跡竈実測図



第13図 第175号住居跡出土遺物位置図

ピット 5 か所 $(P1\sim P5)$ 検出されている。 $P1\sim P4$ は,径 $52\sim 62$ cm,深さ $53\sim 62$ cmを測り,いずれも主柱穴である。P5 は,径38cm,深さ25cmで,出入り口施設に伴うピットと考えられる。

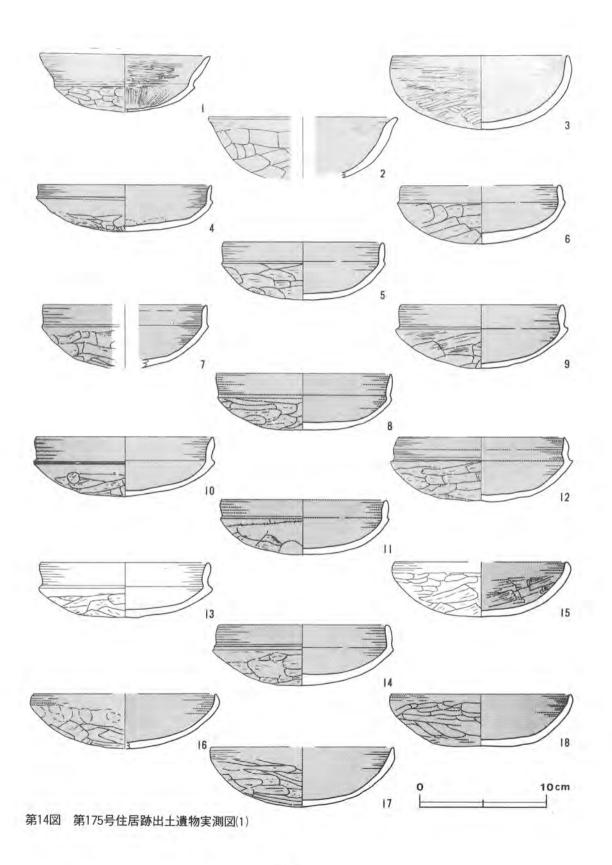
電 北壁中央からやや東寄りの位置を68cm程壁外へ掘り込み、砂まじりの粘土で構築されている。 規模は、長さ160cm、幅166cmを測る。袖部は、良好に遺存しており、両袖とも基底部の幅は45cm を測る。火床は、ほぼ平らで焼土化している。燃焼部からは、焼土粒子が検出されている。煙道 部は、焚口部から緩やかに外傾して立ち上がっている。 **覆土** 6層からなり、すべて自然堆積土層である。第3~5層は、焼土粒子、炭化粒子及び焼土 ブロックを含んでいる。第4層は、多量の遺物を含む土層である。

遺物 覆土中や床面から土師器 (甕, 坏, 甑) 片810点, 須恵器 (提瓶) 片 1 点が出土している。 復元された数は, 坏19個体, 甕 7 個体, 及び甑 2 個体である。ほとんどの遺物は, 覆土中への投棄遺物で, 北東コーナーと南東コーナー付近から住居中央部方向に向けて投げ込まれている。 4 ・5・10の土師器の坏は, 床直上から, 二次焼成をうけて出土している。

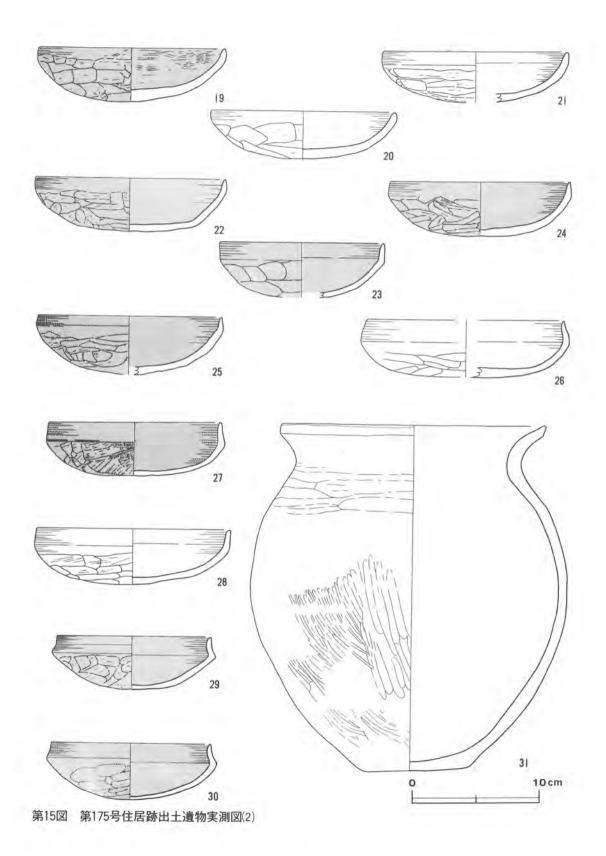
所見 本跡は、遺物の出土状況から、北東側や南東側から遺物の投棄が行われたものと考えられる。遺構の形態と出土遺物から、6世紀後半の住居跡と考えられる。

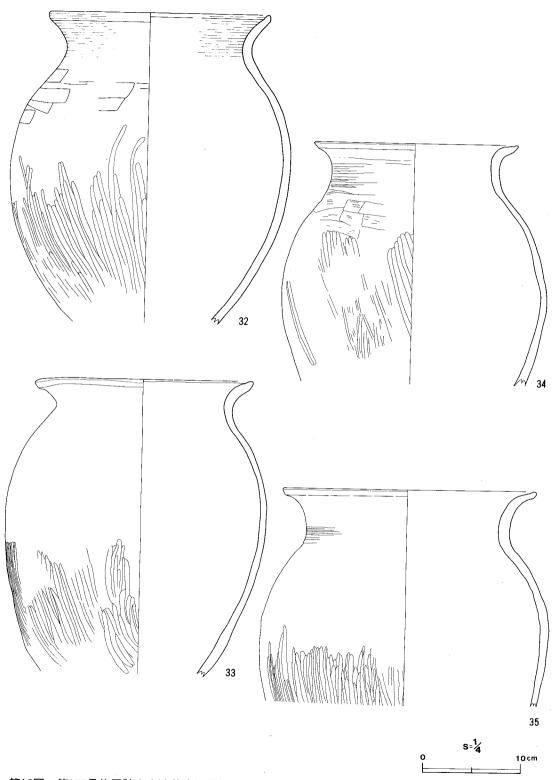
第175号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備考
第14図	坏	A 13.6	丸底。口縁部との境に稜を持ち,	底部ヘラ削り。口縁部外面横ナデ。	砂粒	P 45 90%
1	土師器	B 4.8	口縁部は外傾して立ち上がる。	底部内面中心から放射状の磨き。口	黒褐色	床面(4層)
				縁部横位のヘラ磨き。内・外面黒色処理。	普通	
	埦	A 15.0	丸底。体部は丸みを持って立ち上	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・石英・雲母	P 46 30%
2	土師器	B(4.9)	がる。口唇部は外反する。	ナデ。内・外面黒色処理。	黒褐色	覆土(4層)
					普通	内面荒れ
	埦	A 14.0	丸底。体部は丸みを持って立ち上	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・石英・雲母	P47 95%
3	土師器	B 6.0	がる。口縁部との境に弱い稜を持	ナデ。内・外面黒色処理。	明赤褐色	覆土
			つ。口縁部はほぼ垂直に立ち上が		普通	内面荒れ 二次焼成
			る。			
	坏	A 13.7	丸底。体部と口縁部との境に稜を	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・雲母	P48 70%
4	土師器	В 3.8	持ち、口縁部はほぼ垂直に立ち上	ナデ。内・外面黒色処理。	黒褐色	覆土(4層)
			がる。		普通	二次焼成
	坏	A 12.8	丸底。口縁部との境に稜を持ち,	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・雲母	P 49 80 %
5	土師器	B 4.6	口縁部はわずかに内彎して立ち上	ナデ。内・外面黒色処理。	黒色	覆土(4層)
			がる。		普通	二次燒成
	坏	A 12.6	丸底。口縁部との境に稜を持ち,	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・雲母・長石	P 50 60%
6	土師器	B 4.7	口縁部はわずかに内彎して立ち上	ナデ。内・外面黒色処理。	黒褐色	覆土(4層)
			がる。		普通	
	坏	A 12.8	丸底。口縁部との境に稜を持ち,	底部ヘラ削り。底部内面及び口縁	砂粒·長石·石英	P51 40%
7	土師器	B (5.1)	口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	部内・外面は横ナデ。内・外面黒	黒色	床直上6 cm(5層)
				色処理。	普通	
Į	坏	A 13.8	丸底。口縁部との境に稜を持ち,	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・長石	P 52 90%
8	土師器	B 4.6	口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	ナデ。内・外面黒色処理。	橙色(一部黑色)	覆土(4層)
					普通	底部内面から穿孔
	坏	A 13.0	丸底。口縁部との境に稜を持ち,	底部ヘラ削り。底部内面及び口縁	砂粒・雲母	P 53 90%
9	土師器	B 5.1	口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	部内・外面横ナデ。内・外面黒色	黑色	覆土(4層)
				処理。	普通	
	坏	A 14.0	丸底。口縁部との境に稜を持ち,	底部へラ削り。底部内面及び口縁	砂粒・長石・雲母	P 54 80%
10	土師器	B 4.8	口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	部内・外面は横ナデ。内・外面黒	暗赤褐色	覆土(4層)
				色処理。	普通	二次焼成
	坏	A 13.2	丸底。口縁部との境に稜を持ち,	底部へラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・石英	P 55 80%
11	土師器	B 4.4	口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	ナデ。内・外面黒色処理。	橙色(一部黒色)	覆土(4層)
		-			普通	二次焼成
						底部内面から穿孔

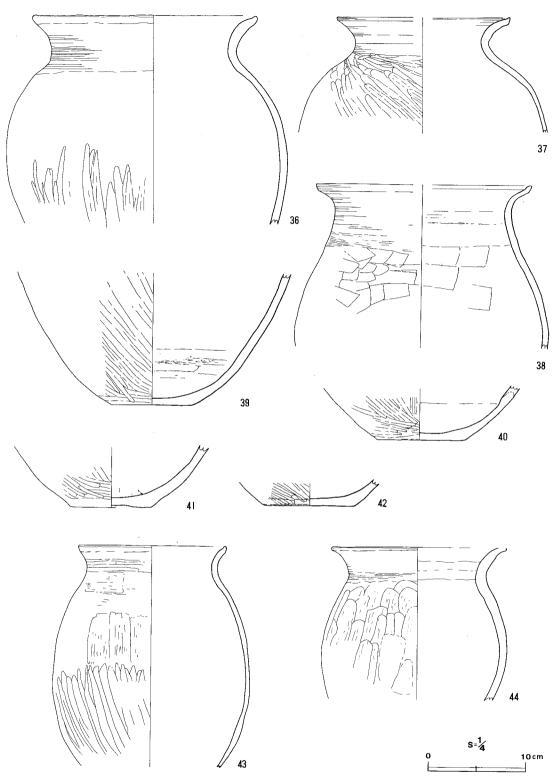


-29-

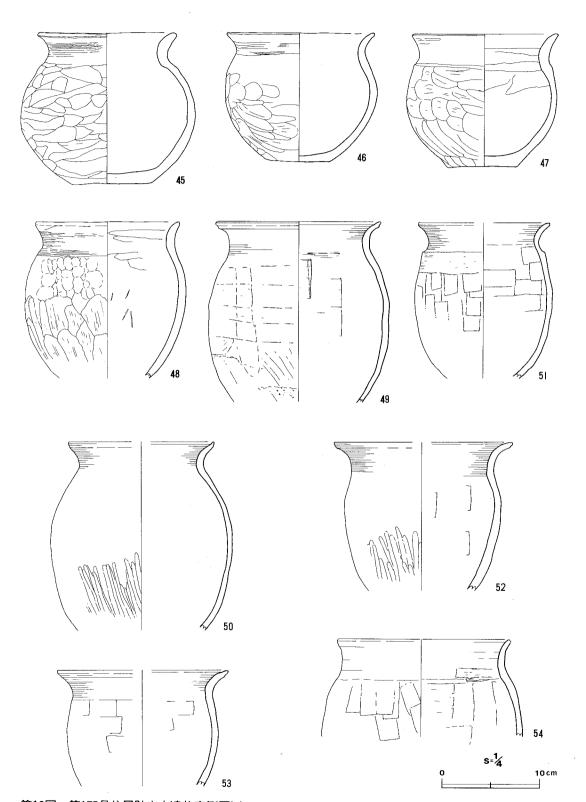




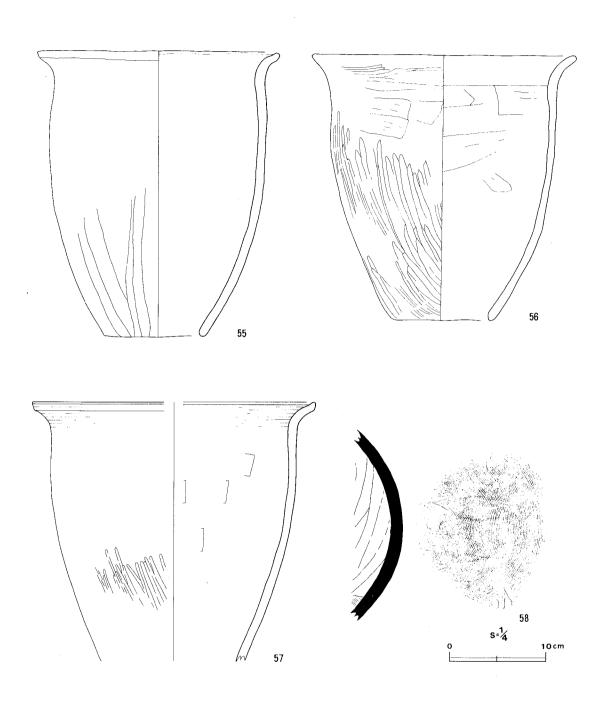
第16図 第175号住居跡出土遺物実測図(3)



第17回 第175号住居跡出土遺物実測図(4)



第18図 第175号住居跡出土遺物実測図(5)



第19図 第175号住居跡出土遺物実測図(6)

図版番号	器	種	iż	t量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備考
第14図		坏	Α	13.2	丸底。口縁部との境に稜を持ち,	底部へラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・長石・石英・雲	P 56 100%
12	± 1	師 器	E	3 5.2	口縁部はわずかに内彎して立ち上	ナデ。内・外面黒色処理。	母 黒褐色	覆土(4層)
					がる。		普通	
		坏	A	13.2	丸底。口縁部との境に稜を持ち,	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横	砂粒·長石·石英	P57 90%
13	±	師器	E	3 4.4	口縁部はわずかに外傾して立ち上	ナデ。	雲母 明赤褐色	覆土(4層)
					がる。		普通	
	-	坏	A	13.5	丸底。口縁部との境に稜を持ち,	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・雲母	P 58 90 %
14	±	師器	Ł	3 4.9	口縁部はわずかに内彎して立ち上	ナデ。内・外面黒色処理。	黒褐色	覆土(4層)
					がる。	, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	普通	IXE (TIE)
		坏	Α	13.6	丸底。体部は内彎気味に立ち上が	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・雲母	P 60 30%
15	土	師器	E	3 4.4	り、口縁部との境に弱い稜を持つ。	デ。内面黒色処理。	黒褐色	覆土(4層)
					口縁部はやや内彎して立ち上がる。	, o , o , o , o , o , o , o , o , o , o	普通	IXXX (1.1g)
		坏	A	14.4	丸底。体部は丸みを持って立ち上	底部ヘラ削り。体部ヘラ削り後指	砂粒・石英	P61 50%
16				3 4.4	がり、口縁部でさらに小さく内彎	押え。口縁部内・外面横ナデ。内	黒褐色	覆土(4層)
					する。	・外面黒色処理。	普通	二次焼成
		坏	A	14.6	丸底。体部は内彎気味に立ち上が	底部へラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・長石	P 63 50%
17			1	3 4.8	り、口縁部との境に弱い稜を持つ。	ナデ。内・外面黒色処理。	黒褐色	覆土(4層)
		те ни	-		口縁部は垂直に立ち上がる。	7 7 8 FT FEMALE REALS	普通	後上(生情)
		坏	A	14.4	平底。体部は丸みを持って立ち上	底部へう削れ 口縁郊内・州面機	砂粒・雲母	P 64 60%
18			1	3 4.2	がり、口縁部でさらに小さく内彎	ナデ。内・外面黒色処理。	黒褐色	(数土(4層)
10		те ни			する。	7.7.6 F1 7F國統巴及統	普通	二次焼成
第15図	-	坏	A	14.8	丸底。体部は内彎気味に立ち上が	底部へラ削り。口縁部内・外面横	世世 砂粒・石英・雲母	
19				3 4.4	り、口縁部との境に弱い稜を持つ。	は記べく削り。口縁部内・外面傾 ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒·石央·芸母 黒褐色	
10		HILL THAT	-	7.4	口縁部は垂直に立ち上がる。	プラッド1・7F画揺巴処廷。		覆土(4層)
-		坏	Δ	14.6	丸底。体部は内彎気味に立ち上が	店到人与别的 D.绿如由,从石楼	普通	器内・外面荒れ
20		•		3 3.9	り、口縁部との境に弱い稜を持つ。	底部へラ削り。口縁部内・外面横	砂粒	P 66 95%
20	_L.	100 百百	-	3.9	口縁部はわずかに垂直に立ち上が	ナデ。	黒褐色	床面
							普通	内面二次焼成
		坏	 	14.6	る。	호현소속병이 다른했다 시구#	7.4. FT #.D	D.07 10.07
21			1	3(4.1)	丸底。体部は内彎気味に立ち上が	底部へラ削り。口縁部内・外面横	砂粒·長石·雲母	P67 40%
21	-l- I	alh Ag	L	, (4.1)	り、口縁部との境に弱い稜を持つ。	ナデ。	橙色	覆土(2層,4層)
		坏	Λ	15.0	口縁部は垂直に立ち上がる。	· 얼마 ~ 박내 >	普通	D.00 050/
99				15.0	丸底。体部は内彎気味に立ち上が		砂粒	P 68 85%
22	II.	해 공포	E	3 4.3	り、口縁部との境に弱い稜を持つ。	ナデ。内・外面黒色処理。	暗赤褐色	覆土(4層)
		L'r'		10.0	口縁部は垂直に立ち上がる。	and the second of the second	普通	
92		坏疵		13.0	丸底。体部は内彎気味に立ち上が	底部へラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・長石	P 69 50%
23	.T.	副 亞	E	3 4.4	り、口縁部との境に弱い稜を持つ。	ナデ。内・外面黒色処理。	黒褐色	覆土(4層)
			-	14.0	口縁部は垂直に立ち上がる。		普通	器内・外面荒れ
0.4		坏	ı	14.2	丸底。体部は内彎気味に立ち上が	底部へラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・長石	P70 95%
24	土口	卯 話	B	4.5	り、口縁部との境に弱い稜を持つ。	ナデ。内・外面黒色処理。	黒褐色	覆土(4層)
					口縁部は垂直に立ち上がる。		普通	底部内面から穿孔
		坏		14.6	丸底。体部は内彎気味に立ち上が	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・長石	P71 95%
25	土	沛 器	B	4.8	り、口縁部との境に弱い稜を持つ。	ナデ。内・外面黒色処理。	黒褐色	床面(4層)
			l.		口縁部は垂直に立ち上がる。		普通	
		坏		15.6	丸底。口縁部との境にかすかに稜	底部へラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・雲母	P72 50%
26	土日	师 器	В	4.6	を持ち、口縁部はわずかに内彎し	ナデ。	灰褐色	覆土(4層)
			L		て立ち上がる。		良好	一部還元炎焼成
		坏		13.6	丸底。口縁部との境にかすかに凹	底部ヘラ削り。底部内面及び口縁	砂粒	P 73 80 %
27	土「	師 器	В	4.4	線を持ち、口縁部はわずかに内彎	部内・外面横ナデ。内・外面黒色	黒褐色	覆土(4層)
					して立ち上がる。	処理。	普通	

図版番号	; 器 ;	重	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備考
第15図	坏		A 15.4	丸底。口縁部との境にわずかに凹	1.5	砂粒・雲母	P74 95%
28	土 師	器	B 4.5	線を持ち、口縁部はわずかに内彎		にぶい赤褐色	覆土(4層)
				して立ち上がる。		普通	1及工(工/百)
	坏		A 12.3	丸底。口縁部との境に稜を持ち,	底部ヘラ削り。口縁部内・外面及		P 75 85%
29	土 師	器	B 4.3	口縁部はわずかに内彎して立ち上	び底部内面は横ナデ。内・外面黒		覆土(4層)
<u>.</u> .				がる。	色処理。	普通	1久工(王/首/
	坏		A 12.6	丸底。口縁部との境に稜を持ち,	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横		P76 80%
30	土 師	器	B 4.5	口縁部はわずかに内彎して立ち上		黒褐色	覆土(4層)
				がる。		普通	内面荒れ
	甕		A 21.1	平底。胴部中位に最大径を持ち、	胴部外面中位以下斜位のヘラ磨き。	砂粒·石英·長石	P77 90%
31	土 師	器	В 27.7	頸部から口縁部にかけて丸みをも	口縁部内・外面横ナデ。	雲母 にぶい黄橙色	 覆土(4層)
			C 8.5	って外反する。		普通	
第16図	甕		A 23.0	底部欠損。胴部中位に最大径を持	胴部外面中位以下斜位のヘラ磨き。	砂粒·石英·長石	P 78 70%
32	土 師	器	B(33.0)	ち,頸部から口縁部にかけて丸み	口縁部内・外面横ナデ。	雲母 にぶい黄橙色	覆土(4層)
				をもって外反する。		普通	
	甕		A 23.0	底部欠損。胴部中位に最大径を持	胴部外面中位以下斜位のヘラ磨き。	砂粒・石英・長石	P79 60%
33	土師	器	B(31.5)	ち, 頸部から口縁部にかけて丸み	口縁部内・外面横ナデ。	雲母 にぶい橙色	床面(4層)
				をもって外反する。		普通	.,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,
	甕		A 21.4	底部欠損。胴部中位に最大径を持	胴部外面斜位のヘラ磨き。口縁部	砂粒·石英·長石	P80 60%
34	土師	器	B(25.7)	つ。頸部が直立し、口縁部は短く	内・外面横ナデ。	橙色	床面(4層)
				水平近くまで外反する。		普通	//-pa(1/E)/
	甕		A 26.7	底部欠損。胴部中位に最大径を持	胴部外面へラ磨き。口縁部内・外	砂粒・石英・長石	P81 40%
35	土師	提]]	B(22.8)	つ。頸部がほぼ直立し、口縁部は	面斜位の横ナデ。	橙色	覆土(4層)
				短く水平近くまで外反する。		普通	10.12.(T.) ₁₁ /
第17図	甕	- 1		底部欠損。胴部中位に最大径を持	胴部外面中位以下斜位のヘラ磨き。	砂粒・石英・長石	P 82 50%
36	土師岩	F 1	3 (21.9)	ち、頸部から口縁部にかけて丸み	口縁部内・外面横ナデ。	雲母 にぶい橙色	覆土(4層)
				をもって外反する。		普通	
	鍪	1	1 (18.2)	底部欠損。頸部から口縁部にかけ	胴部外面斜位のヘラ磨き。口縁部	砂粒・石英・長石	P 83 20%
37	土師	뚬 I	3(12.3)	て丸みをもって外反する。	内・外面横ナデ。	雲母 にぶい黄橙色	覆土(4層)
						普通	, ,,
	甕	F	(22.6)	底部欠損。頸部から口縁部にかけ	胴部内・外面横位のヘラナデ。口	砂粒・石英・長石	P 85 10%
38	土師智	FE	3(17.3)	て丸みをもって外反する。口唇部	縁部内・外面横ナデ。	雲母 灰黄褐色	覆土(4層)
		\perp		を外上方にわずかにつまみ出す。		普通	
j	蓌			胴上半部欠損。平底。胴部は内彎	胴部外面斜位のヘラナデ。内面へ	砂粒・石英・長石	P 87 20%
39	土師署	F E	3 (14.0)	しながら立ち上がる。	ラ削り。	雲母 にぶい橙色	覆土(4層)
		C	8.6		I	普通	
	甕			胴上半部欠損。平底。胴部は内彎	胴部外面斜位のヘラナデ。	砂粒·石英·長石	P88 10%
40	土師者	E B	5(5.3)	しながら立ち上がる。		雲母 にぶい褐色	覆土(4層)
		C	9.2			普通	
	甕			胴上半部欠損。平底。胴部は内彎	胴部外面斜位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石	P 89 10%
41	土師器	₽ B	(6.7)	しながら立ち上がる。		雲母 橙色.	覆土(4層)
		С	8.4			普通	
	甕		J	胴上半部欠損。平底。胴部は内彎	胴部外面斜位のヘラナデ。	砂粒・石英・長石	P90 5%
42	土 師 器	В	(2.9)	しながら立ち上がる。		雲母 にぶい橙色	床面(4層)
		C	9.2			普通	
	甕	A	15.7 J	底部欠損。胴部中位に最大径を持	胴部外面中位以下斜位のヘラ磨き。	砂粒·石英·長石	P 97 65%
43	上師器	В	(23.4)	ち,頸部から口縁部にかけて丸み	口縁部内・外面横ナデ。		覆土(4層)
				をもって外反する。		普通	, -, -, -,
1	小 形 碧	A	18.3 Д	底部欠損。胴部は内彎しながら立	胴部外面縦位ヘラ削り。口縁部内・	砂粒·雲母·長石	P 96 60%
	L nu no	B			外面横ナデ。		l l
44 ∃	上師器	12	(10.2)	フェルる。映明は、ひれ、山林町一	フトi山1男 ノ ノ 。	石英 赤褐色	覆土(4層) 📗

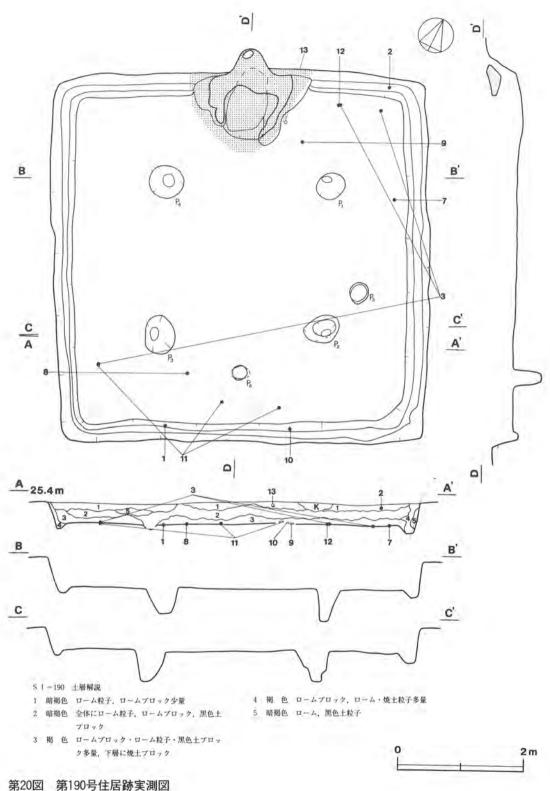
図版番号	器	租	É	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備考
第18図	小	形	甕	A 14.7	平底。胴部は内彎しながら立ち上	胴部外面へラ削り。口縁部内・外	砂粒・石英・長石	P 92 100 %
45	土	飾	器	В 16.0	がる。頸部はくびれ,口縁部は外	面横ナデ。	雲母 明褐色	覆土(4層)
				C 8.1	反する。		普通	
	小	形	甕	A 15.3	平底。胴部は内彎しながら立ち上	胴部外面ヘラ削り。口縁部内・外	砂粒・雲母	P 93 100 %
46	土	師	器	В 13.5	がる。頸部はくびれ、口縁部は外	面横ナデ。	明赤褐色	覆土(4層)
				C 6.5	反する。		良好	
	小	形	甕	A 15.1	平底。胴部は内彎しながら立ち上	胴部外面へラ削り。口縁部内・外	砂粒・雲母	P 94 95%
47	土	師:	器	B 14.1	がる。頸部はくびれ、口縁部は外	 面横ナデ。	にぶい橙色	床面(4層)
				C 7.1	反する。		普通	
	小	形	甕	A 15.2	底部欠損。胴部は内彎しながら立	胴部外面縦位ヘラ削り。口縁部内	砂粒・雲母・長石	P 95 80%
48	土	師	器	B(16.4)	ち上がる。頸部はくびれ、口縁部	・外面横ナデ。	石英 にぶい橙色	覆土(4層)
					は外反する。		普通	
•		甕		A 17.2	底部欠損。頸部から口縁部にかけ	胴部内・外面へラ削り。口縁部内	砂粒·石英·長石	P 98 50%
49	土	師	器	B(19.1)	て丸みをもって外反する。口唇部	・外面横ナデ。	雲母 にぶい橙色	覆土(4層)
					を外上方にわずかにつまみ出す。		普通	
		甕	_	A 15.2	底部欠損。胴部中位に最大径を持	胴部外面中位以下斜位のヘラ磨き。	砂粒・石英・長石	P99 30%
50	土	師	쁆	B(20.0)	ち、頸部から口縁部にかけて丸み	口縁部内・外面横ナデ。	雲母 にぶい橙色	覆土(4層)
					をもって外反する。		普通	
	小	形	甕	A 13.6	底部欠損。胴部と頸部の境に稜を	胴部内・外面へラ削り。口縁部口	石英·長石·雲母	P100 30%
51	土	師	쁆	B(16.5)	持つ。頸部はくびれ、口縁部は外	唇部内・外面横ナデ。	明赤褐色	覆土(4層)
					反する。		普通	
	小	形	甕	A(18.6)	底部欠損。口縁部に最大径を持ち、	胴部外面中位以下斜位のヘラ磨き。	石英・長石・雲母	P 101 20%
52	土	師	器	B(15.7)	頸部から口縁部に緩やかに丸みを	口縁部内・外面横ナデ。	赤褐色	覆土(4層)
					もって外反する。		普通	
	小	形	甕	A(17.4)	底部欠損。口縁部に最大径を持ち、	胴部内・外面へラ削り。口縁部口	砂粒·石英·長石	P 102 20%
53	土	師	器	B(12.3)	頸部から口縁部にかけて緩やかに	唇部内・外面横ナデ。	雲母 赤色	覆土(4層)
					丸みをもって外反する。		普通	
		甕		A.(18.4)	胴下半部欠損。頸部から口縁部に	胴部内・外面へラ削り。口縁部内・	砂粒·石英·長石	P 103 20%
54	土	師	쁆	B(10.3)	かけて丸みをもって緩やかに外反	外面横ナデ。	雲母 赤褐色	覆土(4層)
					する。		普通	
第19図		甑		A 25.4	無底式。胴部は内彎気味に立ち上	胴部外面斜位のヘラ磨き。口縁部	砂粒・石英・長石	P 105 95%
55	土	師	쁆	B 30.0	がり、口縁部は外反する。	内・外面横ナデ。	にぶい黄橙色	覆土(4層)
				C 10.6			普通	
		餌		A 27.6	無底式。胴部は内彎気味に立ち上	胴部外面斜位のヘラ磨き。口縁部	砂粒·石英·長石	P 106 70%
56	土	師	器	B 28.2	がり、口縁部は外反する。	内・外面横ナデ。	雲母 にぶい黄橙色	床面(4層)
				C 10.2			普通	
		飯		A 29.6	無底式。胴部は内彎気味に立ち上	胴部外面斜位のヘラ磨き。口縁部	砂粒·石英·長石	P 107 30%
57	土	師	器	B(27.5)	がり、口縁部は外反する。	内・外面横ナデ。	雲母 にぶい橙色	覆土(4層)
							普通	
	提	-	瓶		胴部の破片である。	胴部外面カキ目、内面ナデ。	砂粒・石英・長石	P91 10%
58	須	恵:	器	B(20.0)			灰色	覆土(4層)
							良好	

第190号住居跡 (第20図)

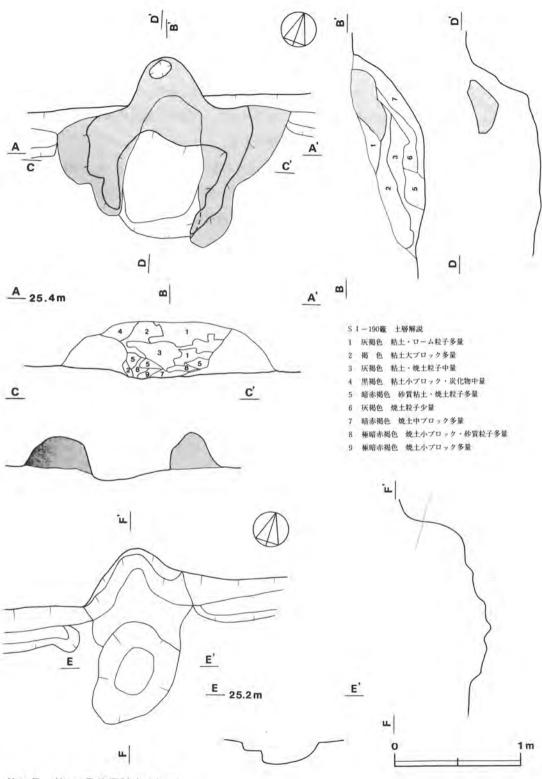
位置 調査区の南部, E11g 9区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.00 m, 短軸5.89 m の方形を呈している。

主軸方向 N −24°-W。



和20回 第130万压冶助关例回



第21号 第190号住居跡竈実測図

壁 壁高31~43cmを測り、垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を12cm程掘り窪め,断面形はU字形を呈している。竈部分を除き全周している。 床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

ピット 6か所 $(P1\sim P6)$ 検出されている。 $P1\sim P4$ は,径 $48\sim 56$ cm,深さ $42\sim 50$ cmを測り,いずれも主柱穴である。P5 は,径23 cm,深さ44 cmで,出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6 は,径43 cm,深さ38 cmで、性格は不明である。

電 北西壁中央部を40cm程壁外へ掘り込み、砂まじりの粘土で構築されている。規模は、長さ 155cm、幅115cmを測る。袖部が比較的良く遺存しており、袖基底部の幅は、26~28cm程で、高さ は30cm程である。火床はほぼ平らで焼土化している。煙道部は火床部から緩やかに外傾して立ち上がっている。

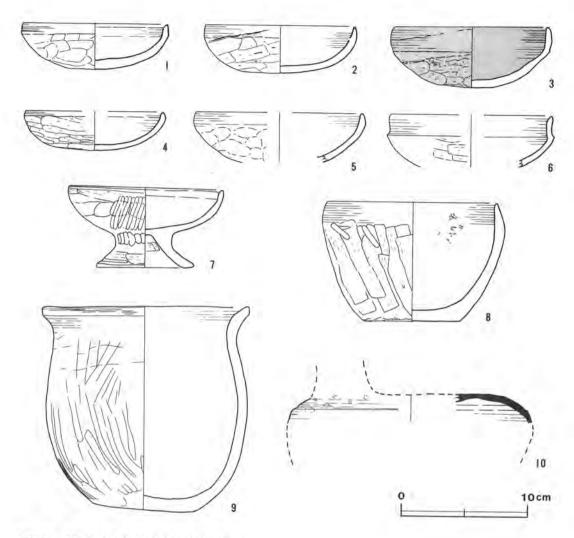
覆土 4層からなり、すべて自然堆積土層と考えられる。

遺物 床面や覆土中から土師器 (甕, 坏) 片574点が出土している。これらの遺物は、主に北コーナー付近と南コーナー付近の床面から出土している。7の土師器の高坏が、北東壁直下の床直上から、3の土師器の坏が、北コーナー床直上から、8の鉢形の土師器が、南西部床面からそれぞれ出土している。

所見 西部の床直上からは、焼土が多量に、東コーナー付近からは、炭化材が出土していることから焼失家屋と考えられる。遺構の形態や床面に残る遺棄された遺物等からは、7世紀前半の住居跡と考えられる。

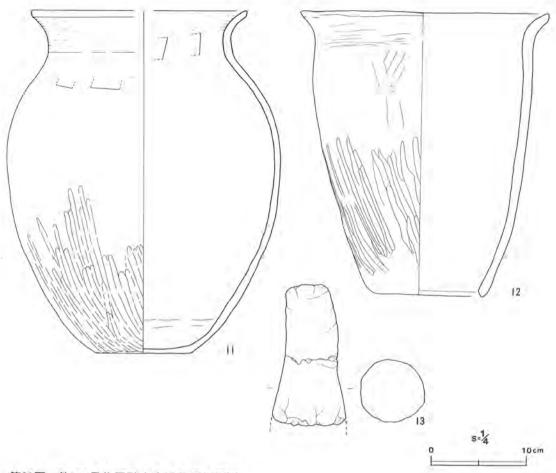
第190号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備考
第22図	坏	A 11.4	丸底。体部は内彎気味に立ち上が	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・長石・雲母	P 108 95%
1	土師器	В 3.7	り,体部と口縁部との境に弱い稜	ナデ。	褐灰色	竈内
			を持つ。口縁部は垂直に立ち上が		普通	
			る。			
	坏	A 11.8	丸底。体部は丸みを持って立ち上	底部へラ削り。口縁部内・外面横	砂粒·長石·石英	P 109 80%
2	土師器	В 3.8	がり、口縁部との境に弱い稜を持	ナデ。	明赤褐色(黒褐色)	覆土(1層)
			つ。口縁部は垂直に立ち上がる。		普通	
	坏	A 12.2	丸底。体部と口縁部の境に稜を持	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・雲母	P 110 80%
3	土師器	B 4.9	ち、口縁部は内彎気味に立ち上が	ナデ。内・外面黒色処理。	黒褐色	床面
			る。		普通	
	坏	A 10.6	丸底。体部は内彎気味に立ち上が	底部丁寧なヘラ削り。口縁部内・	砂粒・長石・石英	P111 40%
4	土師器	B 3,2	り、口縁部との境に弱い稜を持つ。	外面横ナデ。	赤褐色	覆土
			口縁部は垂直に立ち上がる。		普通	
	坏	A(13.2)	丸底。体部と口縁部との境に稜を	底部へラ削り後、押え調整。口縁	砂粒·雲母·長石	P 112 20%
5	土師器	B(3.9)	持ち,口縁部は内彎気味に立ち上	部内・外面横ナデ。	明赤褐色	覆土
			がる。		普通	



第22図 第190号住居跡出土遺物実測図(1)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土·色調·燒成	備	考
第22図	坏 土師器	A(12.8) B(4.2)	丸底。体部は内彎気味に立ち上が り、口縁部との境に稜を持つ。口 縁部は垂直に立ち上がる。	底部へラ削り。口縁部内・外面横 ナデ。	砂粒·石英·雲母 明赤褐色 普通	P113 徹	10%
7	高坏土師器	A 12.4 B 6.5 C 7.7	坏部は内骨気味に立ち上がる。脚 部はラッパ状に開く。	外全面へラ削り後、坏部へラ磨き。 脚部へラナデ。坏部内面から脚部 外面にかけて赤彩。	長石·雲母 明赤褐色 普通	P114 床面	95%
8	針 土 師 器	A 13.4 B 9.5 C 7.5	平底。体部は丸みを持って立ち上 がる。口縁部はわずかに内彎する。	体部へラ削り。口縁部内・外面横 ナデ。	砂粒・雲母 灰赤色 普通	P115 床面	70%
9	小形甕土師器	20 000	平底。胴部はゆるやかに内彎しながら立ち上がる。類部はくびれ、 口縁部は外反する。	胴部外面中位以下斜位のヘラ磨き。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒·雲母·長石 灰褐色 普通	P119 床面	90%
10	平瓶須恵器	B(2.4)	肩部破片。肩部に1条の沈線が廻 る。	体部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石 灰オリーブ色 良好	P 121 床面	5%



第23図 第190号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土·色調·燒成	備	考
第23図 11	差 土師器	A 22.6 B(36.3) C 10.0	平底。胴部中位に最大径を持ち, 頸部から口縁部にかけて丸みを持って外反する。	胴部外面中位以下斜位のヘラ磨き。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石 雲母 にぶい橙色 普通	P116 床面	50%
12	飯 土 師 器	A 26.1 B 30.0 C 11.2	無底式。胴部は内骨気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	胴部外面斜位のヘラ磨き。口縁部 内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石 雲母 に あい 褐色 普通	P120 床面	95%

図版番号	nur bir	種		法 量(c	m)	孔径	重量	現存率				-	
因从田力	bir	極	最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)	111	出土地点	THE	備考	
13	支	脚	(15.0)	(7.7)			(527.5)	80	復士			DP 4	

第194号住居跡 (第24図)

位置 調査区の南部, Ellf 6区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.28 m, 短軸6.19 m の方形を呈している。

主軸方向 N-37°-W。

壁 壁高52~58cmを測り、垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を 6 cm程掘り窪め、断面形は逆台形状を呈している。竈部分を除き全周している。

床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

ピット 5 か所 ($P1\sim P5$) 検出されている。 $P1\sim P4$ は,径 $64\sim 74$ cm,深さ $50\sim 54$ cmを測り,いずれも主柱穴である。P5 は,径40 cm,深さ30 cmで,出入り口施設に伴うピットと考えられる。

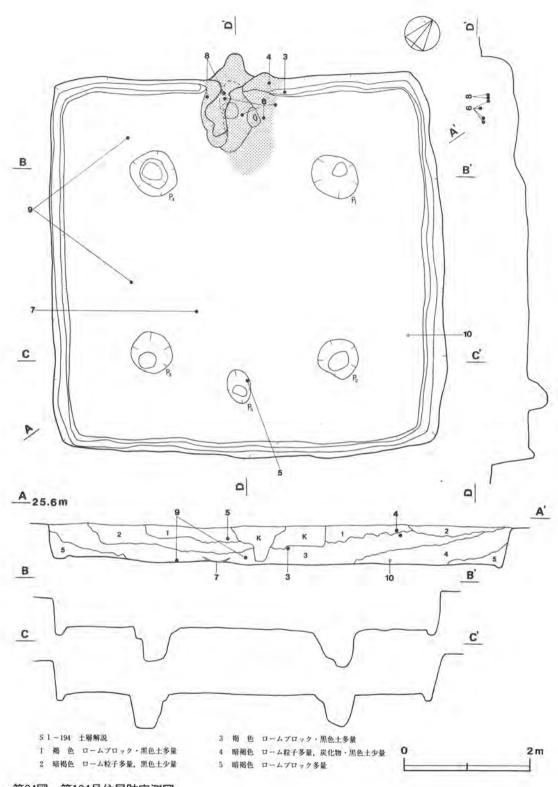
電 北西壁中央部を40cm程壁外へ掘り込み、砂まじりの粘土で構築されている。規模は、長さ155 cm、幅90cmを測る。南西側の袖部が遺存している。火床は、床面を6cm程掘り窪められ、焼土化している。煙道部は、燃焼部奥壁からほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土 5層からなる。第1層は、ロームブロックの混入状況から人為的堆積土層である。その他の土層は、自然堆積土層である。

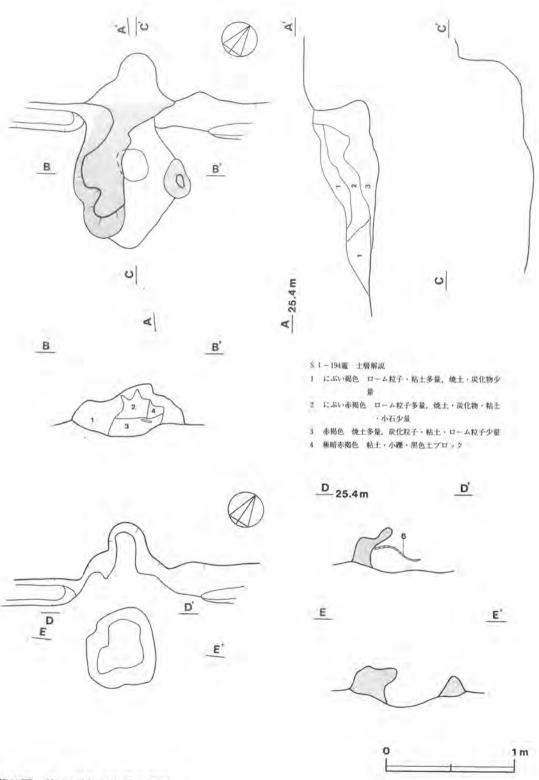
遺物 覆土中や床面から土師器 (甕, 坏) 片468点が出土している。9 の土師器の甑は、床直上から破片で、鉄鎌は、住居廃絶直後に堆積した覆土 (第4層) 中から、3 の土師器の坏と7 の土師器の甕は、覆土 (第3層) 中から細片で、8 の土師器の小形甕は、竈内からそれぞれ出土している。所見 遺構の形態や出土遺物から、6 世紀後半の住居跡と考えられる。

第194号住居跡出土遺物観察表

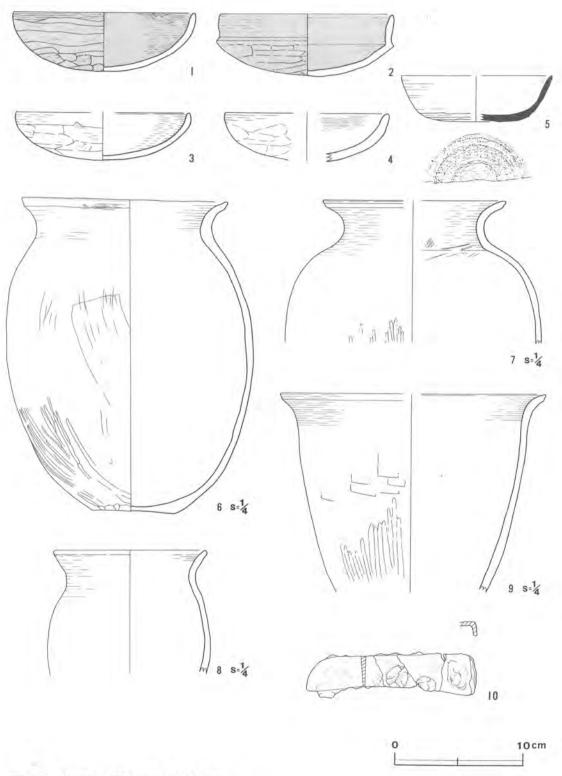
図版番号	器	4 種	ĺ	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備	考
第26図		坏		A 14.4	丸底。体部は内彎気味に立ち上が	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横	砂粒	P 130	98%
1	土.	師	쁆	B 4.8	る。口縁部は垂直に立ち上がる。	ナデ。内・外面黒色処理。	黒褐色	覆土	
							良好		
		坏		A 13.6	丸底。体部は丸みを持って立ち上	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・雲母	P 131	90%
2	土.	師	쁆	B 5.1	がり、口縁部との境に稜を持つ。	ナデ。内・外面黒色処理。	黒褐色	覆土	
					口縁部は垂直に立ち上がる。		普通		
		坏		A 13.8	丸底。体部は内彎して立ち上がる。	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・雲母	P 132	30%
3	土	師:	쁆	В 3.8	口縁部は垂直に立ち上がる。	ナデ。	にぶい橙色	覆土(3	層)
							良好		
		坏		A 13.0	丸底。体部は内彎して立ち上がる。	底部ヘラ削り後ヘラナデ。口縁部	砂粒・雲母	P 133	40%
4	土	師	器	B(3.9)	口縁部は垂直に立ち上がる。	内・外面横ナデ。	明赤褐色	覆土	
							普通		
		坏		A 12.0	平底。体部は下端に丸みを持ち,	底部回転へラ削り。口縁部内・外	砂粒・長石・石英	P 134	30%
5	須	恵	器	В 3.8	外傾して立ち上がる。	面横ナデ。	灰色	覆土(1	層)
				C(6.4)			良好		
		甕		A 21.6	平底。胴部中位に最大径を持ち,	胴部外面中位以下斜位のヘラ磨き。	砂粒·石英·長石	P 135	90%
6	土	ŘŘ :	器	B 33.5	頸部から口縁部にかけて丸みを持	口縁部内・外面横ナデ。	雲母 黒褐色	覆土	
				C 8.6	って外反する。		普通		
		甕		A(19.0)	底部欠損。胴部中位に最大径を持	胴部外面中位以下斜位のヘラ磨き。	砂粒・石英・長石	P 136	15%
7	土	師	뀲	B(15.1)	ち, 頸部から口縁部にかけて丸み	口縁部内・外面横ナデ。	雲母 にぶい褐色	床面(3	層)
					をもって外反する。		普通		



第24図 第194号住居跡実測図



第25図 第194号住居跡竈実測図



第26図 第194号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備考
第26図	小形甕	A 16.0	底部欠損。胴部の張りが弱く,頸	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石	P 137 60%
8	土師器	B(13.1)	部から口縁部にかけて丸みをもっ		雲母 赤褐色	竈
			て外反する。		普通	
	飯	A(27.8)	無底式。胴部は内彎気味に立ち上	胴部外面斜位のヘラ磨き。口縁部	砂粒・石英・長石	P 138 15%
9	土師器	B(21.0)	がり、口縁部は外反する。口唇部	内・外面横ナデ。	雲母 にぶい褐色	覆土(3層)
			をわずかに外上方につまみあげる。		普通	

	図版番号	器 種		法 量(cm)		重量	現存率	出土地点	備考
	凶似笛 ケ	6亩 石里	最大長	最大幅	最大厚	(g)	(%)		pro9
ı	10	鎌	13.5	(3.3)	0.3	(49.5)	90	覆土 (4層)	M 3

第196号住居跡 (第27図)

位置 調査区の南部, E11c5区を中心に確認されている。北西側の3分の2は調査区外に延びている。

規模と平面形 南西壁の長さ5.50mを測る。その他は不明である。

主軸方向 $N-27^{\circ}-W_{\circ}$

壁 壁高60cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を12cm程掘り窪め、断面形は逆台形状を呈している。

床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

ピット 3か所 $(P1\sim P3)$ 検出されている。P1は,径42cm,深さ30cmの主柱穴である。P2は,径42cm,深さ52cmで,出入り口施設に伴うピットと考えられる。P3は,径64cm,深さ54cmで,性格は不明である。その他は,調査エリア外のため確認できない。

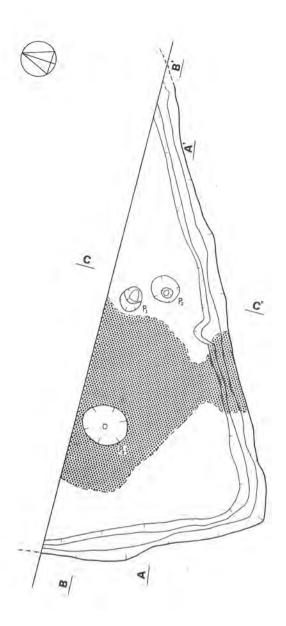
覆土 6層からなり、すべて自然堆積土層である。

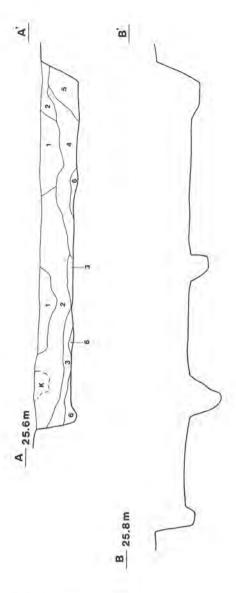
遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片101点が出土している。1・2の土師器の坏が、いずれも覆土中から出土している。

所見 焼失家屋である。住居跡の大部分が調査できなかったので、竈の検出は出来なかった。遺構 の形態や出土遺物から、6世紀後半の住居跡と考えられる。

第196号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·燒成	備	考
第28図	坏	A(12.8)	丸底。体部は丸味を持って立ち上	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・長石・雲母	P 139	15%
1	土師器	B(4.3)	がり、口縁部との境に稜を持つ。	ナデ。	灰褐色	覆土	
			口縁部は垂直に立ち上がる。		普通		
	坏	A(15.6)	丸底。体部は丸味を持って立ち上	底部ヘラ削り後、ナデ調整。口縁	砂粒・長石・雲母	P 140	15%
2	土師器	B(4.2)	がり、口縁部との境に弱い稜を持	部内・外面横ナデ。	にぶい黄橙色	覆土	
			つ。口縁部は垂直に立ち上がる。		普通		







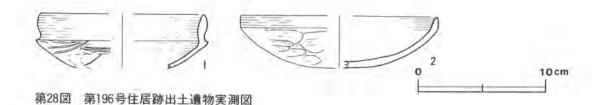
第27図 第196号住居跡実測図

S I -196 上層解認

1 掲 色 ローム粒子多量、黒色土・ローム中プロック 少量

- 2 暗褐色 ローム大ブロック多量、黒色土少量
- 3 褐 色 ロームプロック多量、焼土・炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量, 焼土・炭化物少量
- 5 暗褐色 ロームブロック多量
- 6 にぶい赤褐色 焼土多量、ロームブロック。炭化物少量





第198号住居跡 (第29図)

位置 調査区の北部, Allh 3区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.64 m, 短軸2.60 mの方形を呈している。

主軸方向 N-71°-E。

壁 壁高28~35cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 北東コーナー部に幅10cm、長さ90cmのみ認められ、断面形は皿状を呈している。

床 平坦で,踏み固められ堅緻である。

ピット 1 か所 (P1) 検出されている。P1は、径28cm、深さ12cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

電 東壁中央からやや南寄りの位置を20cm程壁外へ掘り込み、砂まじりの粘土で構築されている。 規模は、幅110cm、長さ140cmを測る。袖部は、ほとんど遺存していないが、床面に粘土がわずか に遺存しており袖の範囲が確認できる。火床部は、燃焼部奥からゆるやかに傾斜し煙道部に続い ている。煙道部は、ほぼ垂直に立ち上がっている。

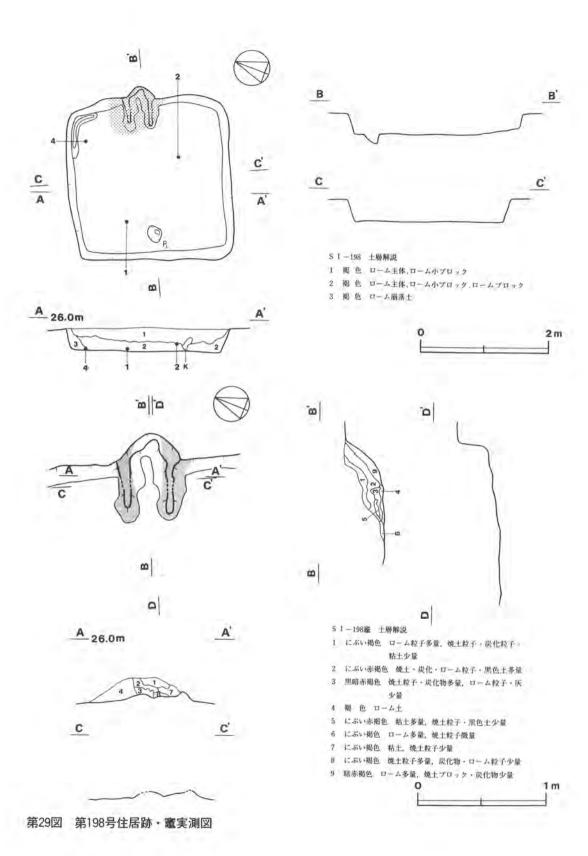
覆土 3層からなり、すべてロームを主体とする自然堆積土層である。

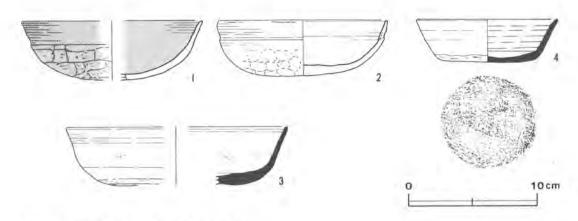
遺物 覆土中や床面から土師器 (甕, 坏) 片41点, 須恵器 (甕, 坏) 片 6 点が出土している。 4 の完形の須恵器の小形坏は、北西コーナー部の床面から出土している。 1 ・ 2 の土師器の坏は、 覆土 (第 2 層) 中から出土している。

所見 遺構の形態や出土遺物から、7世紀後半の住居跡と考えられる。

第198号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備考
第30図	本 土 師 器	A 14.4 B 4.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部との境に弱い稜を持つ。口 縁部は外上方に立ち上がる。	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横 ナデ。内・外面黒色処理。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P143 30% 養土(2層)
2	坏 土 師 器	A 13.4 B 4.6	丸底。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部との境に弱い機を持つ。口縁部は垂直に立ち上がる。	底部ハラ削り後押え。口縁部内・ 外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄橙色 普通	P142 70% 養土(2層)
3	坏 須 恵 器	A (17.4) B 4.7 C (10.0)	平底。底部と体部の境がはつきり せず、口縁部は直線的に外領する。 端部内面に弱い沈線を持つ。	底部回転ハラ削り。体部・口縁部 内・外面機ナデ。	砂粒·長石·雲母 灰黄色 良好	P144 15% 復土(2層)
4	坏 須 恵 器	A 11.1 B 3.5 C 7.2	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部・体部下端手持ちへラ削り。 口縁部内・外面横ナデ。	長石·石英·雲母 灰色 普通	P141 90% 床面





第30図 第198号住居跡出土遺物実測図

第199号住居跡 (第31図)

位置 調査区の北部、A11j4区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.53 m, 短軸3.36 m の方形を呈している。

主軸方向 N-75°-E。

壁 壁高13~26cmを測り、外傾して立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を6cm程掘り窪め、断面形は皿状を呈し、竈部分を除き全周している。

床 平坦で、踏み固められ堅緻である。北東コーナー付近は、撹乱されている。

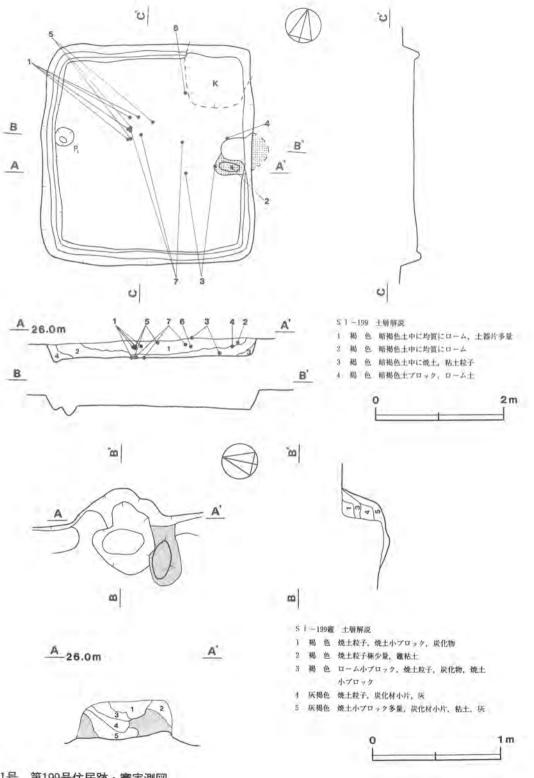
ピット 1 か所 (P1) 検出されている。P1 は、径30 cm、深さ17 cm で、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

電 東壁中央部を26cm程壁外へ掘り込み、白色砂粒を含むにぶい褐色粘土で構築されている。規模は、幅80cm、長さ85cmを測る。竈の遺存状態は悪く、わずかに右袖の基底部が残る。火床部は、8cm程掘り窪められ、焼土化している。煙道部は、奥壁からほぼ垂直に立ち上がっている。

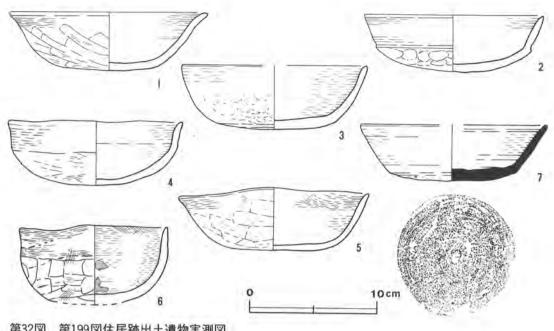
覆土 4層からなる。第1層は、多量の投棄遺物を含み、ロームブロックが均一に混じっており 人為的な堆積土層と考えられる。第2~4層は、自然堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片118点, 須恵器 (甕, 坏) 片36点が出土している。遺物はすべて, 覆土 (第1層) 中から出土しており, 東側から住居中央部に向かって投棄された状態である。遺物投棄後人為的に埋め戻されているので, 住居廃絶後まもない時点で一括投棄された遺物と考えられる。

所見 遺構の形態や出土遺物及び主軸方向と竈の形態等が類似する198号住居跡とほぼ同時期の、7世紀後半の住居跡と考えられる。



第31号 第199号住居跡・竈実測図



第32図 第199図住居跡出土遺物実測図

第199号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土·色洞·燒成	備考
第32図	坏 土 師 器	A 15.6 B 4.7	丸底。体部は内彎して立ち上がる。 口縁部はわずかに外反する。	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横 ナデ。	長石・雲母 にぶい橙色 普通	P 238 60% 養土(1 層)
2	坏 土 師 器	A 14.2 B 4.7	丸底。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。 口縁部は外上方に開く。	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横 ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 239 60% 覆土(1 層)
3	坏 土師器	A 14.6 B 5.2 C 6.4	平底。体部は内側気味に外傾して 立ち上がる。	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横 ナデ。	砂粒·雲母 淡黄色。 普通	P240 55% 優土(1~2層)
4	坏 土 師 器	A 13.8 B 5.1	丸底。体部は内骨して立ち上がり、 口縁部との境に弱い稜を持つ。口 縁部はわずかに外反する。	底部へラ削り後, 丁寧な磨き。口 緑部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P243 85% 鞭土(1層)
5	坏 土 師 器	A 15.0 B 5.3 C 6.0	平底。体部は内欄気味に外傾して 立ち上がる。	底部へラ削り。口縁部内・外面横 ナデ。	長石・石英 灰褐色 普通	P244 60% 養土(1層)
6	境 土師器	A 11.5 B 6.4 C 7.0	平底。体部は内骨して立ち上がる。 口縁部はほぼ直立する。	底部及び体部外面へラ削り。口縁 部及び体部内面横ナデ。内面に黒 色物質付着。	砂粒 にぶい褐色 普通	P 242 80% 養土(1層)
7	坏 須惠器	A 14.8 B 4.5 C 9.0	平底。底部はわずかに丸みを持つ。 体部は外傾して立ち上がる。口縁 部内面に一条の沈線がめぐる。	底部回転へラ削り。体部内・外面 横ナデ。	石英·長石·雲母 灰色 普通	P241 55% 覆土(1層)

第200号住居跡 (第33図)

位置 調査区の北部、B10a8区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.46 m, 短軸2.93 mの長方形を呈している。

主軸方向 N-83-E。

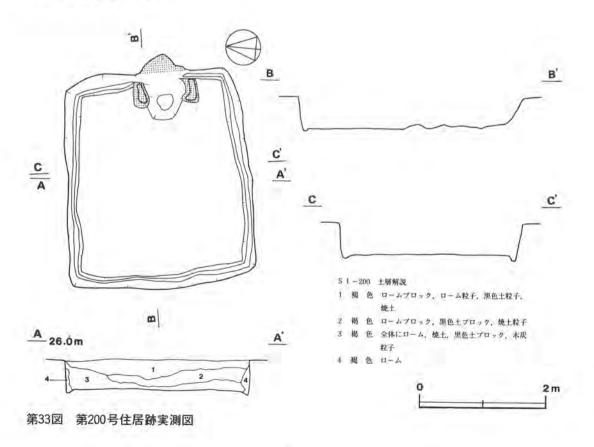
壁 壁高44~48cmを測り、垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を8cm程掘り窪め、断面形はU字状を呈し、竈部分を除き全周している。 床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

ピット検出されない。

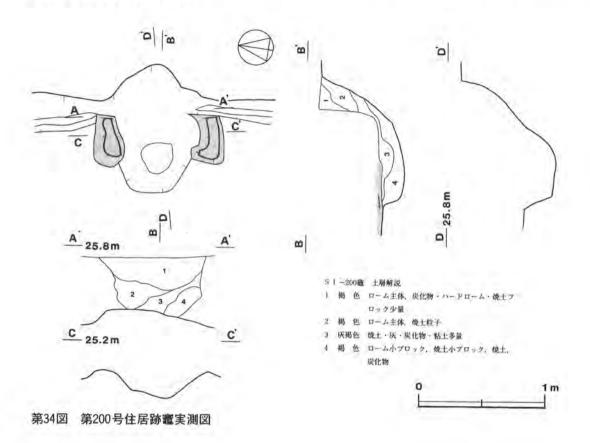
電 東壁中央からやや南寄りの位置を34cm程壁外へ掘り込み,酸化した赤色粒子と黒褐色粒子を含むにぶい橙色の粘土で構築されている。規模は、長さ160cm、幅166cmを測る。袖部粘土がわずかに遺存している。両袖とも基底部の幅は、約20cmを測り、火床部は、15cm程掘り窪められている。燃焼部からは、焼土、灰、炭化物が検出されている。煙道部は、火床部奥から急激に立ち上がっている。

覆土 4層からなる。第1-3層は,ロームを主体とした人為堆積土層である。第4層は,自然 堆積土層と考えられる。



遺物 覆土中から細片で極少量出土している。

所見 遺構の形態,主軸方向,配置関係から,第198号住居跡と第199号住居跡と同時期の,7世 紀後半の住居跡と考えられる。



第212 A 号住居跡 (第35図)

位置 調査区の南部、C11b5区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の東コーナーが,第212 B号住居跡の北西コーナーによって掘り込まれている。 規模と平面形 長軸5.20 m,短軸3.50 mの長方形を呈している。

主軸方向 N-34-W。

壁 壁高22cmを測り、緩やかに外傾して立ち上がっている。

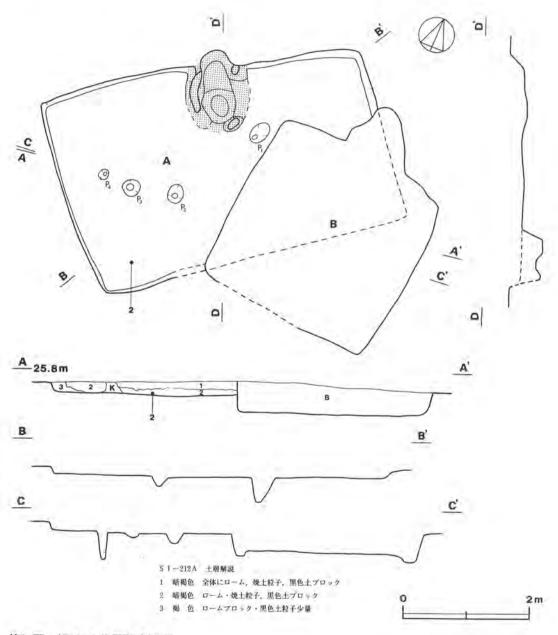
床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

ピット 4 か所 $(P1 \sim P4)$ 検出されている。 $P1 \sim P4$ は, $&16 \sim 34$ cm,深さ $8 \sim 44$ cm であり,いずれも主柱穴とは考えにくく性格が不明である。

電 北西壁中央部を20cm程壁外へ掘り込み、砂まじりの粘土で構築されている。規模は、長さ130 cm、幅104cmを測る。袖部がわずかに遺存している。火床は、床面を6cm程掘り窪められており焼 土化している。煙道部は、火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

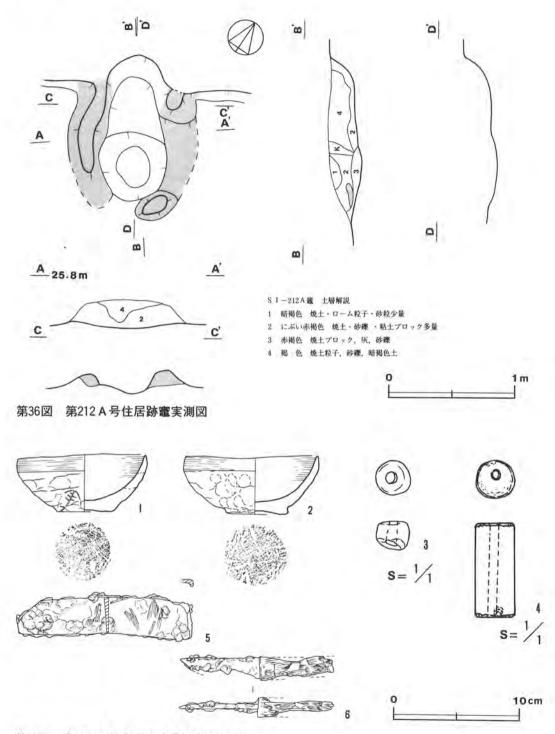
覆土 3層からなり、いずれもロームブロック混じりの人為堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片112点が出土している。 $1 \cdot 2$ の土師器の坏は、南東壁直下床面から2点とも完形で、6 の刀子、5 の鉄鎌、3 の石製の小玉が土器に接して、4 の管玉が、いずれも北東コーナー付近床面から出土している。



第35図 第212 A 住居跡実測図

所見 本跡は、重複関係から、第212 B 号住居跡よりも古い時期に構築されている。遺構の形態や出土遺物から、6世紀前半の住居跡と考えられる。



第37図 第212 A 号住居跡出土遺物実測図

第212 A 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備考	;
第37図	坏	A 10.2	平底。体部は内彎気味に立ち上が	底部木葉痕。体部外面指押え。口	砂粒・長石	P 156 95	5%
1	土師器	B 4.7	り,口縁部との境に弱い稜を持つ。	縁部内・外面及び底部内面横ナデ。	明赤褐色	床面	
		C 4.3	口縁部は垂直に立ち上がる。		普通		
	坏	A 10.6	平底。体部は内彎気味に立ち上が	底部木葉痕。体部外面指押え。口	砂粒	P 157 80)%
2	土師器	B 4.8	り,口縁部との境に弱い稜を持つ。	縁部内・外面及び底部内面横ナデ。	明赤褐色	床面	
		C 5.0	口縁部は垂直に立ち上がる。		普通		

図版番号	器	器 種	£#:		法 量(cm)		重量	現存率	ш	_1_	نابد	JE .	備	-14.
			最大長	最大幅	最大厚	(g) (%)	(%)	出	土	地	点	THE	考	
3	小	玉	0.8	0.9		0.8	100	床面				Q 7	滑石	
4	管	玉	2.5	1.1		4.8	100	床面				Q 8	碧玉	
5	Í	謙	14.0	3.0	0.3	(71.2)	90	床面				M12		
6	カ	子	(12.2)	1.9	0.4	(17.6)	70	床面				M13		

第222号住居跡(第38図)

位置 調査区の南部, B10j8区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、中央部を南北方向に第10号溝によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸5.96 m. 短軸5.89 m の方形を呈している。

主軸方向 N-4°-W。

壁 壁高35~40cmを測り、垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を8cm程掘り窪め、断面形は逆台形状を呈している。竈部分を除き全周している。

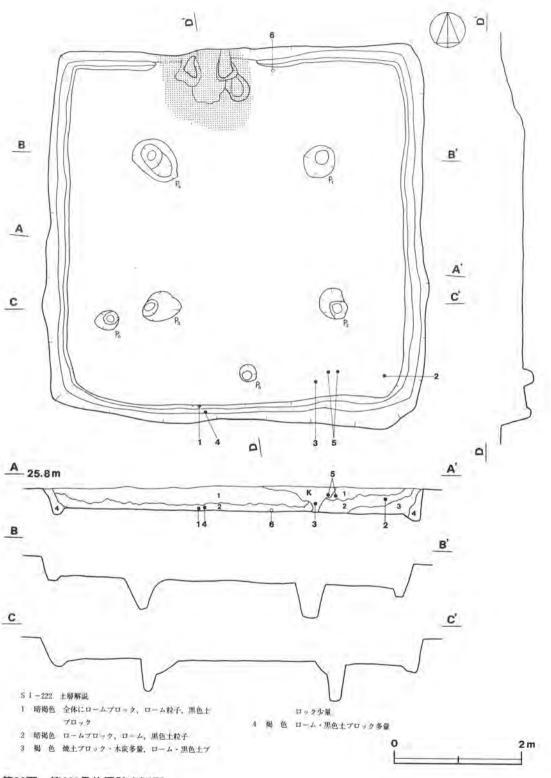
床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

ピット 6 か所(P 1 ~ P 6)検出されている。P 1 ~ P 4 は,径50~60cm,深さ51~62cmを測り,いずれも主柱穴である。P 5 は,径28cm,深さ19cmで,出入り口施設に伴うピットと考えられる。P 6 は,径34cm,深さ23cmで,性格は不明である。

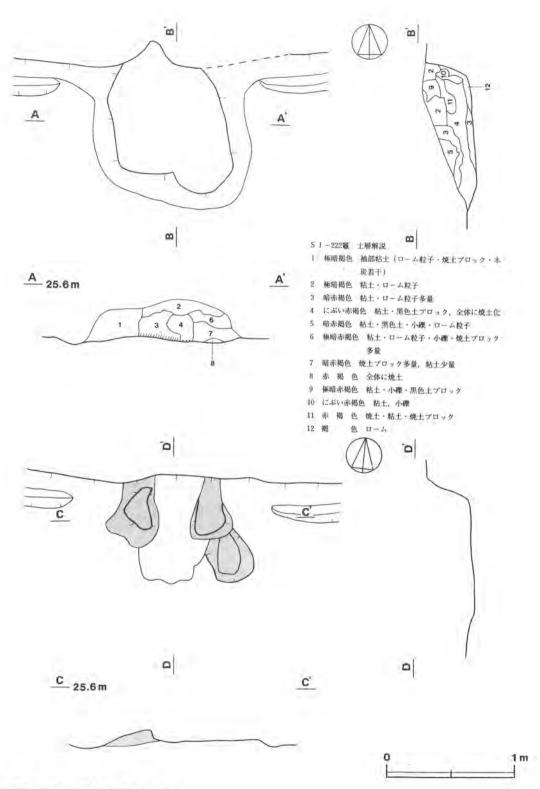
電 北壁中央からやや西寄りの位置に構築されているが、第10号溝によって煙道部から東側袖部 にかけてが削平されており遺存状態が悪い。火床は、ほぼ平らで焼土化している。

覆土 4層からなる。第1層は、黒色土主体の自然堆積土層である。第2・3層中に、焼土ブロックと木炭が含まれている。第2層は、ほぼ平坦に床の大部分を覆っており、ロームを主体とする人為的堆積土層である。第3・4層は自然堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器(甕, 坏)片316点が出土している。2・3の土師器の坏は,住居跡南東コーナー付近で第2層中に混入して,1・4の土師器の坏は,南壁直下の覆土(第4層)中から,5の土師器の甕は,崩壊した竈の覆土中層からそれぞれ出土している。

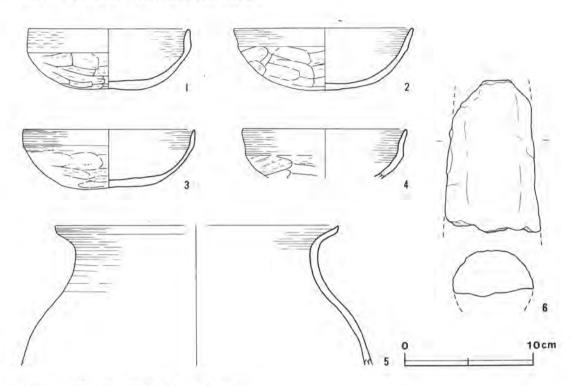


第38図 第222号住居跡実測図



第39図 第222号住居跡竈実測図

所見 本跡は、重複関係から、第10号溝よりも古い時期に構築されている。遺構の形態や出土遺物から、7世紀前半の住居跡と考えられる。



第40図 第222号住居跡出土遺物実測図

第222号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備考
第40図 1	坏 土 師 器	A 12.8 B 4.9	丸底。体部は丸みを持って立ち上 がり、口縁部との境に弱い稜を持 つ。口縁部は垂直に立ち上がる。	底部へラ削り。口縁部内・外面横 ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P159 95% 養土(4層)
2	坏 土 師 器	A 14.3 B 5.0	丸底。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持つ。口縁部は外傾し立ち上がる。	底部へラ削り。口縁部内・外面横 ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P160 80% 養土
3	坏 土 師 器	A 13.6 B 4.8	丸底。体部は内骨気味に立ち上が り、体部と口縁部との境に弱い稜 を持つ。口縁部は垂直に立ち上が る。	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横 ナデ。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P161 55% 覆土(1層)
4	坏 土 師 器	A 13.0 B(4.0)	体部は内骨気味に立ち上がり、口 縁部との境に弱い稜を持つ。口縁 部はわずかに外傾して立ち上がる。	体部へラ削り。口縁部内・外面横 ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P162 30% 覆土(4層)
5.	蹇 土 師 器	A(22.4) B(11.2)	manufacture services a manufacture of	口縁部内・外面横ナデ。	長石·石英·雲母 赤褐色 普通	P164 5% 確

図版番号	ge	200	1	法 量(cm)		孔 径	重 量	現存率	the de tole	Jr	Bu	-14
区版事与	器	種	最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)	面 工 地	H	Dist	5
6	支	脚	(12.3)	7.5			(301.7)	35	覆土		DP 6	

第231号住居跡 (第41図)

位置 調査区の南部、F10a7区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.76mで、南側4分の3は調査区外に延びている。

主軸方向 N-24-W,

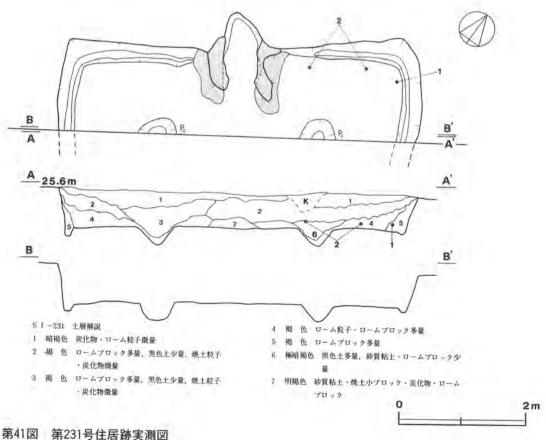
壁 壁高54~64cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

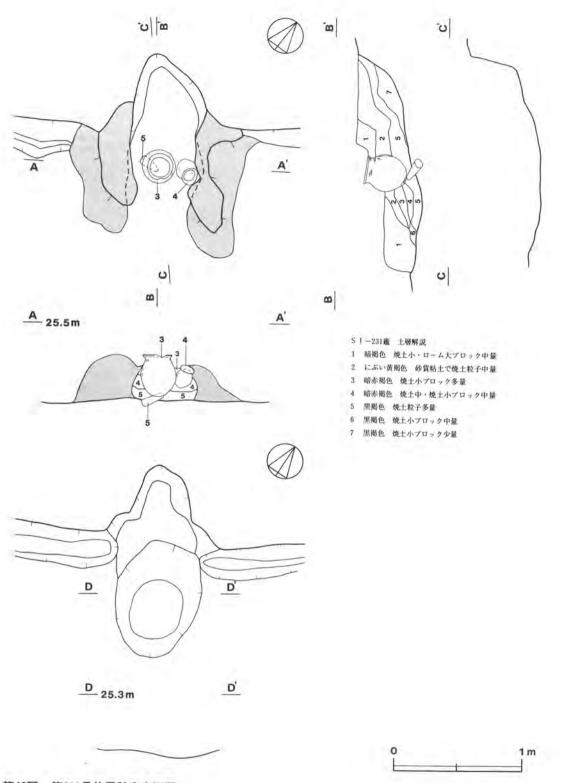
壁溝 壁直下の床面を10cm程掘り窪め、断面形は、逆台形状を呈している。竈部分を除き全周し ている。

床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

ピット 2 か所 (P1・P2) 検出されている。P1・P2は, 径60~62cm, 深さ28~29cmを測 り、いずれも主柱穴である。その他のピットは、調査区外のため確認できない。土層の堆積状況 から、埋没途上に柱の抜取りが行われたと考えられる。

電 北西壁中央部を78cm程壁外へ掘り込み、砂まじりの粘土で構築され、遺存状態は良い。規模 は、長さ160cm、幅140cmを測る。袖部及び天井部の一部が遺存している。燃焼部からは、天井部





第42図 第231号住居跡竈実測図

からの崩落粘土を主体とする土が検出されている。火床は、床面を8cm程掘り窪めて構築されており、焼土化している。煙道部は、火床部から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 7層からなる。第1層は、自然堆積土層と考えられるが、第2・5・6・7層は、ローム 主体の人為的に埋め戻しされた土層と考えられる。第3・4・6層には柱の抜取り痕が明瞭に残っている。

遺物 覆土中や竈内から土師器 (甕, 坏) 片75点が出土している。3・4の完形の土師器の甕2点と5の支脚は、竈内から出土し、いずれも本跡に伴うものである。1・2の土師器の坏は、第4層堆積後の投棄遺物である。

所見 遺構の形態や竈内の出土遺物から、6世紀後半の住居跡と考えられる。



第231号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備考
第43図	坏	A 13.3	丸底。体部は丸みを持って立ち上	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・雲母	P166 90%
1	土師器	B 4.1	がり、口縁部との境に弱い稜を持	ナデ。内・外面黒色処理。	黒褐色	覆土(4層)
			つ。口縁部は垂直に立ち上がる。		普通	
	坏	A 13.6	丸底。体部は丸みを持って立ち上	底部ヘラ削り後、ナデ調整。口縁	砂粒・長石・雲母	P 167 60%
2	土師器	B 4.9	がり、口縁部との境に稜を持つ。	部内・外面横ナデ。	褐灰色	覆土(4層)
			口縁部は垂直に立ち上がる。		普通	
	甕	A 21.8	平底。胴部中位に最大径を持ち,	胴部中位以下斜位のヘラ磨き。口	砂粒·長石·雲母	P 169 95%
3	土師器	B 34.1	頸部から口縁部にかけて丸みをも	縁部内・外面横ナデ。	明黄褐色	竈
		C 9.4	って外反する。		普通	
	甕	A 16.6	平底。胴部中位に最大径を持ち,	胴部中位以下斜位のヘラ磨き。口	長石·石英·雲母	P170 90%
4	土師器	В 18.7	頸部から口縁部にかけて丸みをも	縁部内・外面横ナデ。	にぶい橙色	鼀
		C 7.8	って外反する。口唇部でわずかに		普通	
			外反する。			

図版番号	器	種		法 量(cm)		孔径	重量	現存率	出	1.	Lel-	上	備	考
凶版笛号	50	1里	最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)	ш.	Т.	地	息	1 7VHI	45
5	支	脚	(11.9)	(5.8)			(295.0)	60	竈				DP 7	
6 .	支	脚	(8.2)	(6.1)			(161.2)	30	覆土	_			DP 8	

2. 奈良・平安時代の住居跡

第128号住居跡 (第44図)

位置 調査区の北西部、B9d3区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.90m, 短軸2.86mの方形を呈している。

主軸方向 N-52°--W。

出入り口 北西壁中央から西寄りの位置に、北西に向かって壁外に突出して、床面から確認面に 至る緩斜面を持った出入り口部を有している。規模は、長さ92cm、幅62cm、角度15°を測る。

壁 壁高24cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、堅く踏み固められ堅緻である。

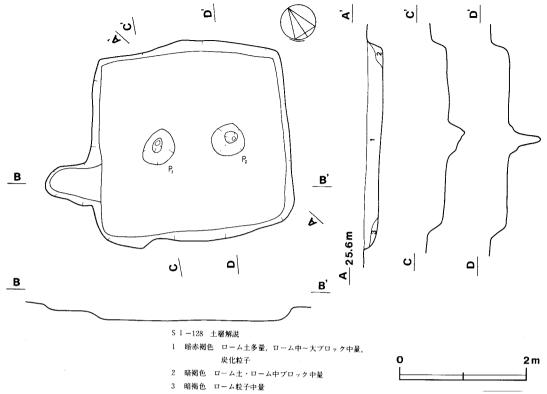
ピット 2 か所(P1・P2)検出されている。P1は, 径50cm, 深さ28cm, P2は, 径52cm, 深さ52cmで, いずれも主柱穴と考えられる。

炉 2 か所の主柱穴の間から、出入り口側の床中央部にかけて炭化物が薄く堆積している。炭化物の堆積の範囲は、長さ130cm、幅72cmの不定形を呈している。

覆土 3層からなり、すべてロームブロックを含む褐色土を主体とした土層であり、人為的な堆 積土層と考えられる。

遺物 覆土中から須恵器 (蓋) 片 2 点が出土している。

所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。



第44回 第128号住居跡実測図

第153号住居跡 (第45図)

位置 調査区の北西部, C8es区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸8.13 m, 短軸7.65 m の方形を呈している。

主軸方向 N-13°-W。

壁 壁高60cmを測り、垂直に立ち上がっている。

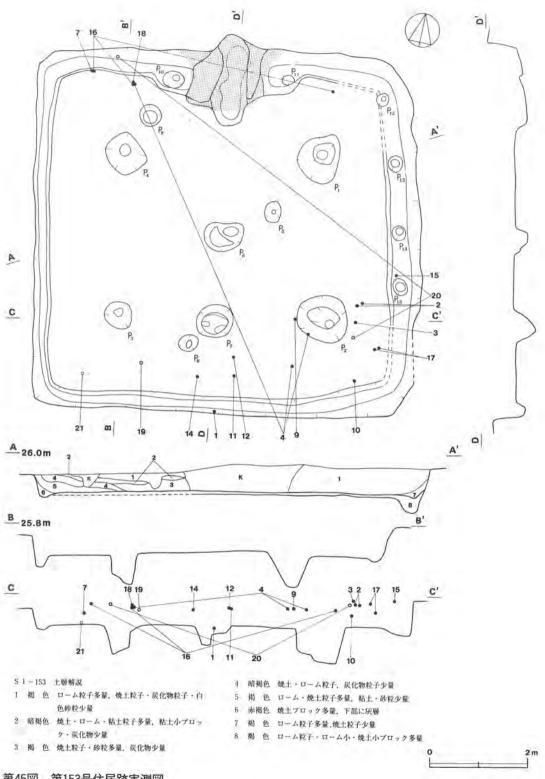
壁溝 規模や断面形は画一でないが、竈部分を除いて全周している。

床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

ピット 15か所 (P1~P15) 検出されている。P1~P4は,径56~96cm,深さ61~73cmで,いずれも主柱穴である。P5は,径42cm,深さ28cmで,補助柱穴の可能性が考えられる。P6~P9は,径38~68cm,深さ27~28cmで性格は不明である。P10・P11は,径20~36cm,深さ15~25cmで, 竈袖部に接する位置にあり性格は不明である。

P12~P15は, 径22~48cm, 深さ19~30cmで, 壁溝の底部に確認されている。

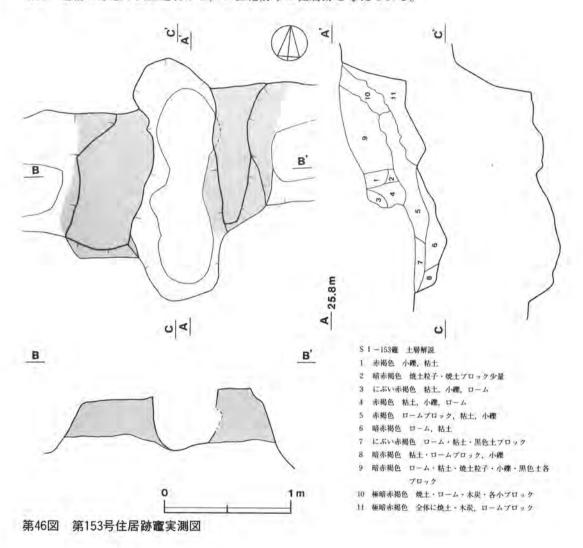
電 北壁中央部を40cm程壁外へ掘り込み、砂まじりの粘土で構築されている。規模は、幅165cm、 長さ195cmである。袖部の中位以下が良好に遺存しており、両袖とも基底部の幅は50cmを測る。煙 道部は、焚口部から緩やかに外傾して立ち上がっている。



覆土 8層からなる。南西部は、撹乱が少なく自然堆積状況を示している。北東部は、広範囲に 撹乱されている。

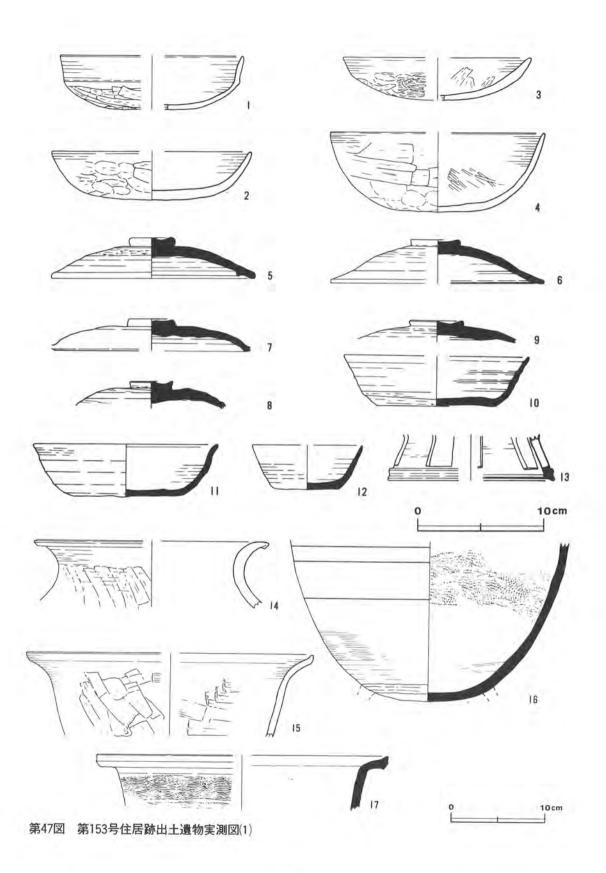
遺物 覆土中や床面から土師器 (甕, 坏) 片3,034点, 須恵器 (坏, 蓋) 片612点が出土している。 21の紡錘車と1の土師器の坏が南西部床直上から出土し、かえりのついた須恵器の蓋を含んだほ ぼ同時廃棄と考えられる遺物群が、上層から中層にかけて出土している。

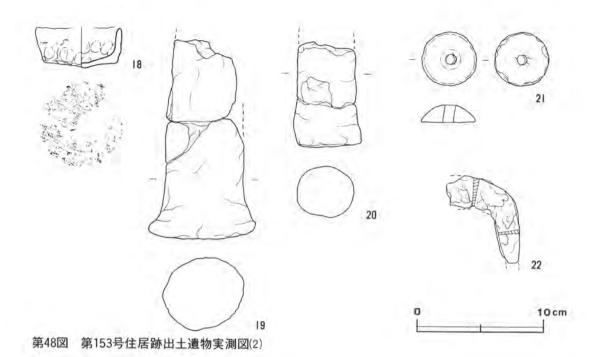
所見 遺構の形態や出土遺物から、8世紀前半の住居跡と考えられる。



第153号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·燒成	備考
第47図		1.00		体部外面不定方向のヘラ削り。口 緑部内・外面及び底部内面横ナデ。		P 2 25





図版番号	na for	重	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎士·色調·焼成	伽	考
第47図 2	土師		A 15.8 B 3.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部は外傾して開く。	底部へラ削り。口縁部内・外面横 ナデ。	砂粒:石英 明赤褐色 普通	P 4 復土	-50%
3	华		A 15.0 B 3.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり. 口縁部は外傾して開く。	底部へラ削り後、横位のヘラ磨き。 口縁部内・外面横ナデ。	長石·石英·雲母 橙色 普通	P 5 複生	50%
4	境 土 師		A 17.0 B 6.4	平底気味の丸底。体部は内彎して 立ち上がり、口縁部は外傾して開 く。	底部へラ削り。口縁部内・外面機 ナデ。	長石·石英·雲母 褐灰色 普通	P 3	30%
5	蓋須忠	器	A 16.3 B 3.3 F 3.6 G 0,6	天井部は丸みを持ち、緩やかに口 縁部に至る。内面口縁部付近にか えりがつく。偏平なつまみが付く。	天井部回転へラ削り。口縁部内・ 外面横ナデ。	長石·石英·雲母 灰白色 不良	P15 養土	95%
6	蓋 須 忠		A 17.0 B 3.6 F 3.9 G 0.5	天井部は丸みを持ち、綾やかに口 緑部に至る。口縁部内面付近にか えりがつく。偏平なつまみが付く。	天井部回転ヘラ削り。口縁部内・ 外面横ナデ。	長石·雲母 灰白色 良好	P 16 流 S1-226の遺	60%
7	養 須 忠		A(16.0) B(2.6) F(3.5) G 0.6	口縁部に至る。偏平なつまみが付	天井部回転へラ削り。口縁部内・ 外面横ナデ。	長石・雲母 灰白色 良好	P17 復士	30%
8	蓋 須 忠		B(2.2) F(3.4) G 0.7	口縁部欠損。天井部から緩やかに 口縁部に至る。中央のやや突出し た偏平なつまみが付く。	天井部回転へラ削り。口縁部内・ 外面横ナデ。	長石・石英 灰白色 良好	P 19 覆土	20%
9	蓋類恵			口縁部欠損。天井部から緩やかに 口縁部に至る。中央がやや突出し た偏平なつまみが付く。	天井部回転へラ削り。口縁部内・ 外面横ナデ。	長石・雲母 灰白色 良好	P18 W土	40%

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·燒成	備	考
第47図	坏	A 14.6	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端回転へラ削り。	長石・雲母	P 6	60%
10	須 恵 器	B 4.0		体部内・外面横ナデ。	灰白色	獲土	
		C 9.4			良好		
	坏	A(14.6)	平底。体部は内彎して立ち上がる。	底部及び体部下端回転へラ削り。	長石・雲母	P 7	60%
11	須 恵 器	B 4.2	口縁部はわずかに外反する。	体部内・外面横ナデ。	灰白色	覆土	
		C 8.2			良好		
	坏	A(8.6)	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部及び体部下端手持へラ削り。	長石・雲母	P 8	65%
12	須 恵 器	В 3.5			灰白色	覆土	
		C 5.0	·		良好		
	圏 足 硯		圏足硯の脚部の破片。脚端部内・	体部内・外面横ナデ。	砂粒·長石·石英	P 20	10%
13	須 恵 器	B(3.7)	外面に稜線が入る。透かしは長方		青灰色	覆土	
		C(13.4)	形。		良好		
[甕	A(25.0)	口縁部破片。頸部はくびれ、口縁	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母	P 9	10%
14	土師器	B(7.1)	部は強く外反する。		にぶい橙色	覆土	
					普通		
	甔	A(30.7)	口縁部破片。体部は外傾し、口縁	胴部ヘラナデ。口縁部内・外面横	長石·石英·雲母	P 10	10%
15	土 師 器	B(9.0)	部は外反する。端部を外上方につ	ナデ。	橙色	覆土	
			まみ上げる。		良好		
	甕	A(29.6)	底部破片。丸底で径13cmの高台の	胴部内・外面横ナデ。	長石・石英	P 13	10%
16	須恵器	B(17.1)	ついた痕跡がある。胴部は内彎し		褐灰色	覆土	
			て立ち上がる。		良好		
	甕	A(31.1)	口縁部破片。体部は外傾し, 口縁	胴部同心円文の叩き。口縁部内・	砂粒・長石・雲母	P 12	5%
17	須 恵 器	B(5.9)	部は強く外反する。端部が上方に	外面横ナデ。	褐灰色	覆土	
			突出する。		普通		
第48図	手捏土器	A 6.8	平底。体部はやや外傾して立ち上	体部内・外面に指による圧痕。底	砂粒·長石·礫	P 21	100%
18	土師器	B 3.3	がる。	部木葉痕。	橙色	覆土	
		C 6.0			普通		

図版番号	器	種		法 量(cm)		孔径	重 量	現存率	10, 1	DI.	L	/#:	-1-4
凶級電力	fur	1里	最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)	出土	地	点	備	考
19	支	脚	(16.0)	(8.5)			(506.6)	60	覆土			DP 1	
20	支	· 脚	(8.5)	5.3			(217.1)	30	覆土			DP 2	
図版番号	器	種		法 量(cm)		重 量	現存率	ılı		.I÷		/#±	+7
四版電号	full*	1里	最大長	最大幅	最大厚	(g)	(%)	出	土 地	点		備	考
21	紡翁	車車	4.3	4.3	1.4	(30.4)	95	床面				Q 1	粘板岩
22	翁	k	(6.2)	1.8	0.3	(32.1)	30	覆土				M 1	

第154号住居跡(第49図)

位置 調査区の北西部, C8d7区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.45 m, 短軸4.04 m の方形を呈している。

主軸方向 N-15°-W。

壁 壁高52~60cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を浅く掘り窪め、竈部分を除き全周している。

床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

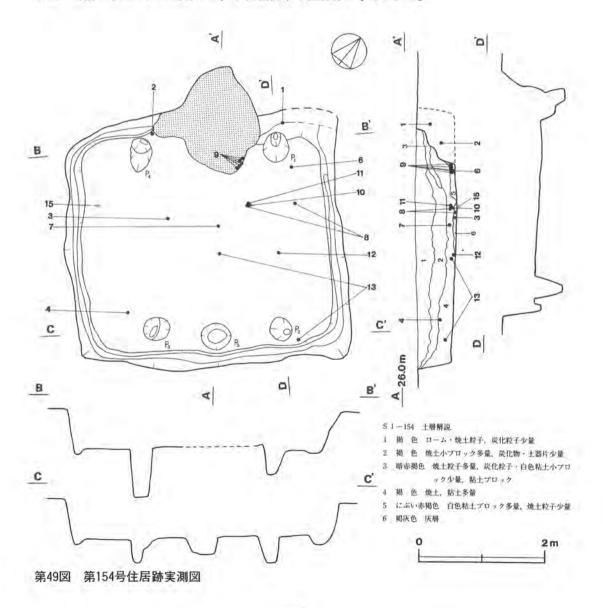
ピット 5か所 $(P1 \sim P5)$ 検出されている。 $P1 \sim P4$ は,径 $36 \sim 48$ cm,深さ $37 \sim 77$ cmで,いずれも主柱穴である。P5は,径48cm,深さ28cmで,出入り口施設に伴うピットと考えられる。

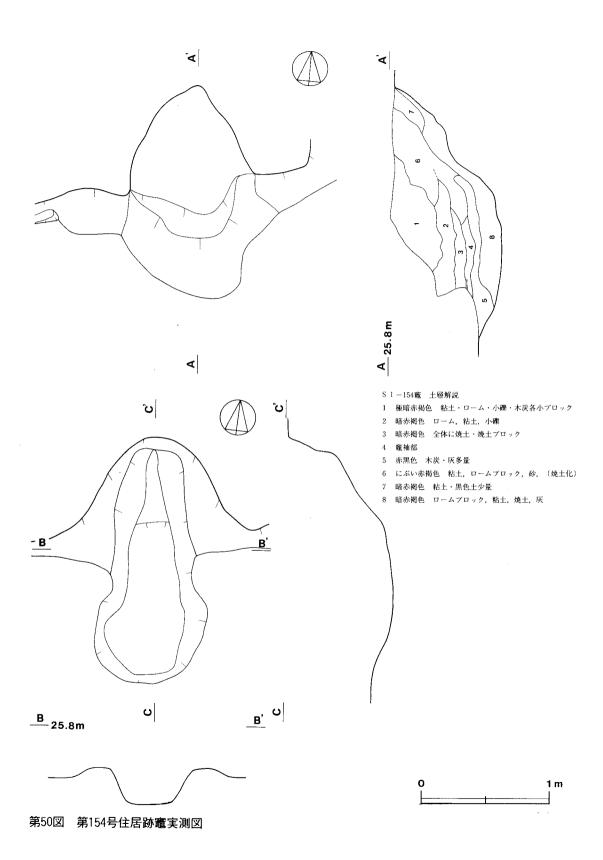
電 北壁中央部を80cm程壁外へ掘り込み,砂まじりの粘土で構築されている。規模は、幅125cm, 長さ170cmで袖部の破損が著しい。火床部は、床面を15cm程掘り窪めて構築しており、焼土化し ている。燃焼部には、焼土粒子、炭化物及び粘土ブロックが充満している。煙道部は、焚口部か ら緩やかに外傾して立ち上がっている。

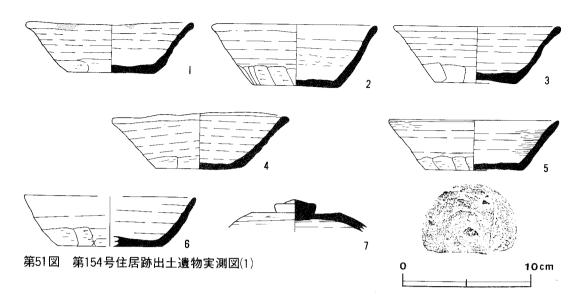
覆土 5層からなる。第1・4層は、ローム主体の人為堆積土で、2度にわたって埋め戻されている。第2層は自然堆積である。第2・4層の間には、竈の上部構造の粘土が流失して堆積しており、第3層となっている。第5層は、竈構築粘土の最初の流失土層である。

遺物 覆土中や床面から土師器 (甕, 坏) 片867点, 須恵器 (坏, 蓋) 片297点が出土している。 8の土師器の甕と12の小形の土師器の甕が, 床直上から破片で出土し, 1・2の須恵器の坏が竈 の西と東側の北壁直下の位置で, 上方から転落したような状態で出土している。

所見 遺構の形態や出土遺物から、9世紀後半の住居跡と考えられる。

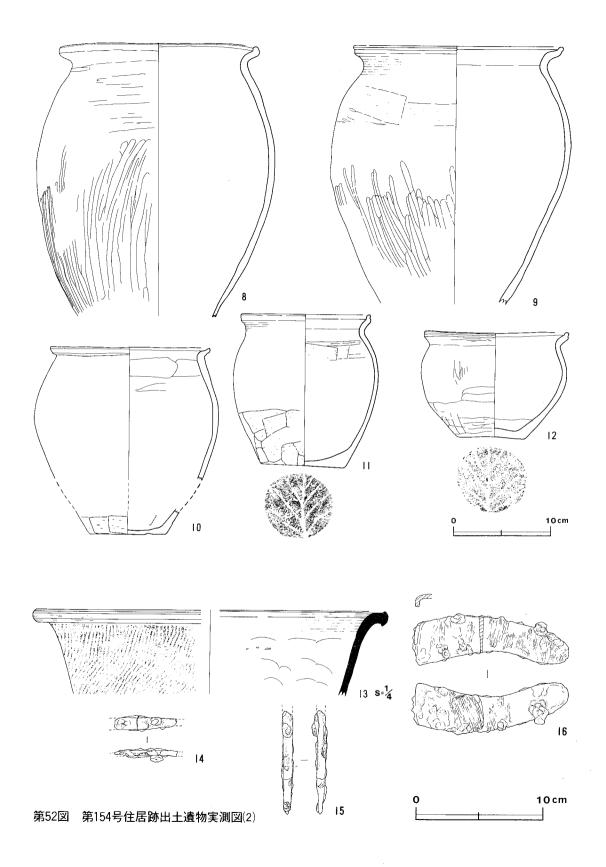






第154号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備考
第51図	坏	A 13.1	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後, 一方向ヘラ	長石·石英·雲母	P171 100%
1	須恵器	B 4.1	口唇部がわずかに外反する。	削り。体部下端手持ちへラ削り。	灰色	覆土(4層)
		C 7.0		体部内・外面横ナデ。	良好	灯明皿
	坏	A 12.4	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後、一方向ヘラ	砂粒·石英·長石	P172 100%
2	須恵器	B 5.1	口唇部がわずかに外反する。	削り。体部下端手持ちヘラ削り。	灰色	覆土(4層)
		C 6.6		体部内・外面横ナデ。	普通	
	坏	A 13.0	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転へラ切り。体部下端手持	砂粒・長石・石英	P 173 80%
3	須恵器	B 4.7	口唇部がわずかに外反する。	ちへラ削り。体部内・外面横ナデ。	灰色	床面
		C 6.3			普通	
	坏	A 13.5	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部ゆっくりした回転ヘラ切り。	砂粒·長石·石英	P174 90%
4	須 恵 器	B 4.6	口唇部がわずかに外反する。	体部下端手持ちへラ削り。体部内・	灰色	覆土(4層)
		C 6.9		外面横ナデ。	普通	
	坏	A 13.4	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部下端手持	砂粒·長石·雲母	P 176 50%
5	須 恵 器	B 4.0		ちへラ削り。体部内・外面横ナデ。	灰色	覆土
		C 7.6			普通	
	坏	A 13.6	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後, 一方向ヘラ	砂粒·長石·石英	P177 40%
6	須 恵 器	B 4.0		削り。体部下端手持ちへラ削り。	灰色	床面
		C(8.2)		体部内・外面横ナデ。	普通	
	蓋		天井部に平坦面を持つ。中央部の	天井部平坦面回転へラ削り。口縁	砂粒·長石·雲母	P 185 50%
7	須 恵 器	B(2.2)	突出する偏平なつまみが付く。	部内・外面横ナデ。	褐灰色	床面
		F 3.1			普通	
第52図	甕	A 21.1	底部欠損。胴部中位に最大径を持	胴部外面中位以下斜位のヘラ磨き。	砂粒・雲母・長石	P 178 80%
8	土師器	B(28.7)	ち、頸部から口縁部にかけて小さ	口縁部内・外面横ナデ。	明赤褐色	覆土(4層)
			く外反する。口唇部を上方につま		普通	
			みあげる。			
ļ	甕	A 22.0	底部欠損。胴部上位に最大径を持	胴部外面中位以下斜位のヘラ磨き。	長石·石英·雲母	P 179 50%
9	土 師 器	B(27.5)	ち、類部から口縁部にかけて小さ	口縁部内・外面横ナデ。	にぶい褐色	覆土(5層)
			く外反する。口唇部を外上方につ		普通	
			まみあげる。			
	甕		平底。胴部上位に最大径を持つ。	口縁部内・外面横ナデ。	雲母·長石·石英	P 180 60%
10	土 師 器	B(19.8)	口縁部は短く外傾する。口唇部を		赤褐色	覆土(4層)
		C 8.0	上方につまみ上げる。		やや不良	İ



図版番号	뀲	租		法量(cm)	器 形 の 特 徴	手法の特徴	胎土·色調·焼成	備考
第52図	小	形	ぎ	A 13.6	平底。胴部は内彎しながら立ち上	底部木葉痕。胴部外面へラ削り。	長石·石英·雲母	P181 60%
11	±.	師者	2	B 16.5	がる。頸部はくびれ、口縁部は外	口縁部内・外面横ナデ。	にぶい赤褐色	覆土(4層)
				C 8.6	反し、口唇部を上方につまみあげる。		普通	
ĺ	小	形	E	A 15.1	平底。底部は内彎気味に立ち上が	底部木葉痕。胴下半部横位のヘラ	雲母·長石·石英	P 182 100%
12	土口	師者	묾	B 11.4	り、頸部でくびれる。口縁部は外	削り。内面ナデ。口縁部内・外面	褐灰色	床面
				C 6.9	傾し、端部をつまみ上げる。	横ナデ。	普通	
第52図		甕		A(36.8)	胴下半部欠損。体部は外傾して立	胴部外面平行叩き。口縁部内・外	砂粒・長石・石英	P 184 15%
13	須	恵る	뭄	B(8.9)	ち上がり、口縁部で外反する。	面横ナデ。	灰色	覆土(4層)
L	L.,						普通	

図版番号	器	種		法 量(cm)		重 量	現存率						
23/X H /	tur	1里	最大長	最大幅	最大厚	(g)	(%)	出	土	地	点	備	考
14	IJ	子	(5.1)	0.5	1.1	(4.9)	30	覆土				M 4	
15	金	1	(8.2)	0.8	0.7	(9.8)	90	覆土.				M 5	
16	鉬	ŧ	(12.3)	3.3	0.3	(41.1)	90	覆土			****	M 6	

第155号住居跡 (第53図)

位置 調査区の北西部、C8d9区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.38m, 短軸4.20mの方形を呈している。

主軸方向 N-0°。

壁 壁高38~42cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 竈部分と東壁からやや南寄りの一部を除き全周している。

床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

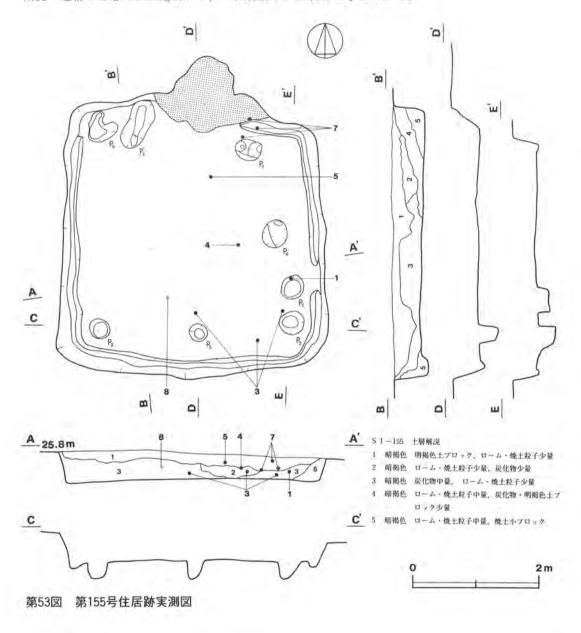
ピット 8か所 ($P1\sim P8$) 検出されている。 $P1\sim P4$ は,径 $34\sim 42$ cm,深さ $21\sim 31$ cmで,いずれも主柱穴である。P5は,径30cm,深さ32cmで,出入り口施設に伴うピットと考えられる。 $P6\sim P8$ は,径 $36\sim 44$ cm,深さ $9\sim 25$ cmで,性格不明である。

電 北壁中央部を70cm程壁外へ掘り込み、砂まじりの粘土で構築されている。規模は、全幅115cm、全長115cmを測る。袖部の基底部幅は27cmで、高さ45cmまで遺存し、西側の袖部は甕を芯材として構築している。火床部は、焼土化し、燃焼部には、焼土粒子、炭化物及び粘土ブロックが充満している。煙道部は、焚口部から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 5層からなる。第1層は、自然堆積土層である。第2~4層は、ロームブロックを多く含む人為的な埋め戻し土層である。第5層は、ロームの壁が剝落し、ローム土等が自然堆積した土層である。

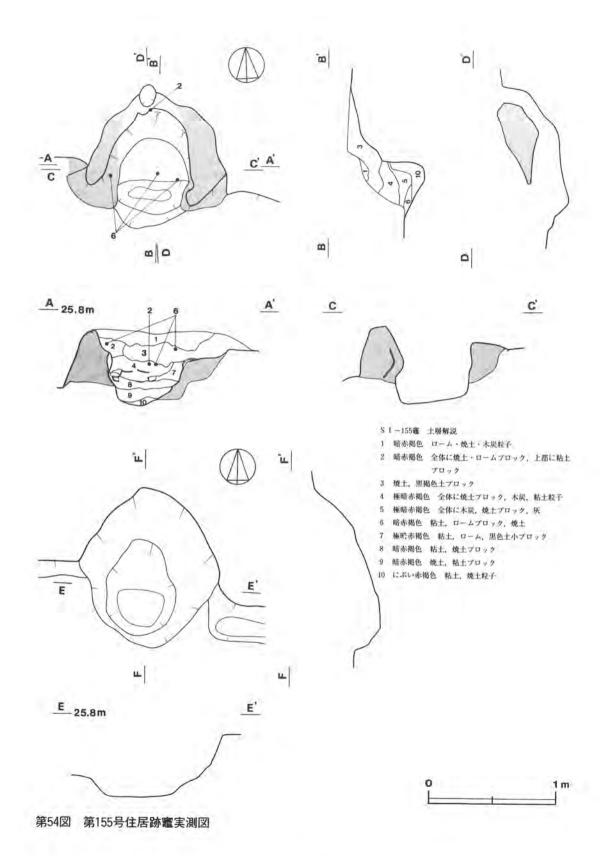
遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片682点が, 須恵器 (坏, 蓋) 片262点が出土している。 5 片程の土師器の小片が床に貼りついて出土した以外はすべて, 人為的に埋め戻された土とともに廃棄された遺物である。 6 の土師器の甕は, 竈内堆積土層 (第 4 層=竈天井部崩落土) 中から出土している。 8 の金銅製鈴は, 覆土 (第 3 層) 中から出土している。

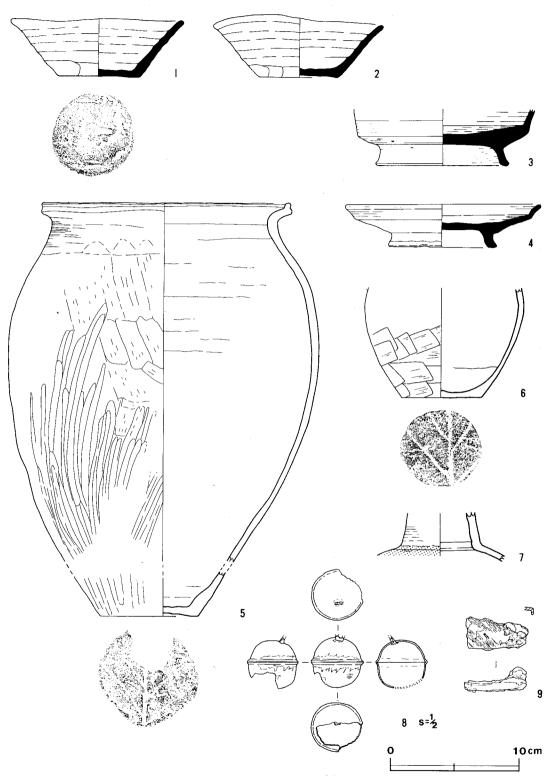
所見 遺構の形態や出土遺物から、9世紀前半の住居跡と考えられる。



第155号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土·色調·焼成	備考
第55図 1	坏 須 恵 器	A 13.7 B 4.6 C 6.5	平底。体部は外質して立ち上がり、 口唇部はわずかに外反する。	底部回転糸切り後、無調整。体部 内・外面欄ナデ。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P186 95% 覆土(3層) 酸化炎燒成
Ż	坏 須恵器	A 13.4 B 5.0 C 6.2	平底。体部は外側して立ち上がり、 口唇部はわずかに外反する。	底部回転ヘラ切り後、一方向ヘラ 削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒·長石·石英 灰色 普通	P 187 95%





第55図 第155号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·燒成	備考
第55図	高台付均	k	平底で「ハ」の字状に開く高台が	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付	長石·石英·雲母	P 188 50%
3	須恵る	B(4.5)	付く。体部は外傾して立ち上がる。	け。体部内・外面横ナデ。	灰黄色	覆土(3層)
		D 10.4			普通	
		E 1.7	·			
	高台付皿	I A 15.3	平底で「ハ」の字状に開く高台が	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付	長石・雲母	P 196 80%
4	須恵器	B 3.5	付く。体部は外傾して立ち上がり、	け。体部内・外面横ナデ。	灰褐色	覆土(3層, 5層)
		D 8.4	口縁部の境に稜を持つ。口唇部は		普通	
		E 1.4	やや外反する。			
	緁	A 19.6	平底。胴部中位に最大径を持ち,	底部木葉痕。胴部斜位のヘラ磨き。	長石・石英・雲母	P189 45%
5	土師器	B[32.6]	頸部から口縁部にかけて丸みをも	口縁部内・外面横ナデ。	にぶい橙色	鼄
		C 7.8	って外反する。口唇部を上方につ		普通	
			まみ上げる。			
	小形鹭	E	口縁部欠損。胴部は内彎して立ち	底部木葉痕。胴部横位のヘラ削り。	長石·石英·雲母	P 193 30%
6	土師器	B(8.8)	上がり、胴部中位に最人径を持つ。	内面ナデ。	暗赤褐色	覆土(4層)
		C 6.2			やや不良	
	長頸菌	i	口縁部・体部欠損。頸部と肩部の	頸部内・外面横ナデ。	砂粒微量	P 195 10%
7	陶器	B(3.4)	破片である。		オリーブ灰色	覆土(4層)
					普通	

図版番号	器種	法 量(cm) 重 量 現存率	III I. 16					
	tur 198.	最大長	最大幅	最大厚	(g)	(%)	出土地点	備考
8	鈴	(2.8)	2.7		(2.4)	60	覆土 (3層)	M 7 金銅製
9	鎌	(4.8)	2.4	1.1	(14.7)	20	覆土	M 8

第156号住居跡(第56図)

位置 調査区の北西部, C8c₀区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.00 m, 短軸3.36 mの長方形を呈している。

主軸方向 N-23°-W。

壁 壁高8cmを測り、緩やかに外傾して立ち上がっている。

壁溝 壁直下を浅く掘り窪め、断面形はU字状を呈し、全周している。

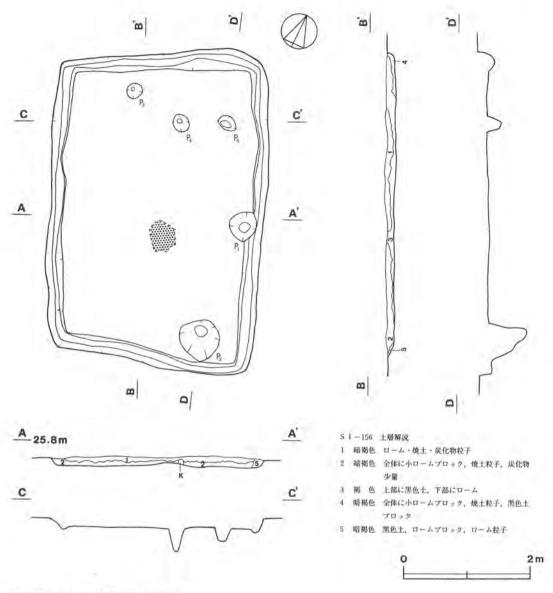
床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

ピット 5 か所 ($P1\sim P5$) 検出されている。 $P1\sim P5$ は、 $624\sim 64$ cm、深さ $15\sim 63$ cm である。配置が不規則なため、主柱穴は不明である。

電 袖部は、まったく遺存していないが、北西壁近くの床面に長径50cm、短径40cmの不定形の火 床部と思われる赤変硬化した跡が検出されている。

覆土 5層からなる。全体に小ロームブロックや焼土・炭化粒子を含んだ土層を主体とし,第1~3層は,人為的な堆積土層と考えられる。第4・5層は,自然堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片が72点出土しているが,本跡に伴う遺物は出土していない。 所見 第161・162号住居跡と平面形が類似するが,やや主軸の向きに差異がある。遺構の時期は 不明である。



第56図 第156号住居跡実測図

第157号住居跡 (第57図)

位置 調査区の北西部、B8is区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.90m, 短軸2.82mの方形を呈している。

主軸方向 N-25°-W。

出入り口 北西壁中央から西寄りの位置に、北西に向かって壁外に突出して、床面から確認面に 至る緩斜面を持った堅くしまった出入り口部を有している。規模は、長さ142cm、幅48cm、角度12°を測る。

壁 壁高約54cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

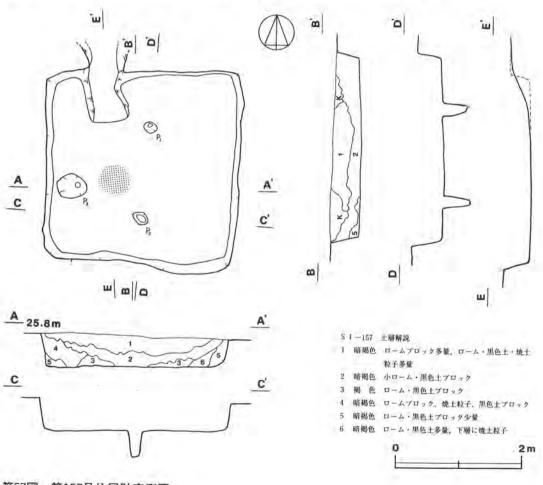
床 平坦で、堅く踏み固められ堅緻である。

ピット 3 か所(P1~P3)検出されている。P1は、径22cm、深さ36cm、P2は、径22cm、深さ42cm、P3は、径44cm、深さ約10cmを測る。P3は、住居覆土の堆積状況から住居廃絶後の第3層堆積後に抜き取られた可能性が考えられる。

炉 出入り口側の中央部付近に炭化物が薄く堆積し、その範囲は、長径44cm、短径38cmの楕円形を呈している。

覆土 5層からなる。第1-3層・5層は、自然堆積土層と考えられる。第4層は、P3の柱を抜き取った跡に堆積した土層と考えられる。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片232点, 須恵器 (坏, 蓋) 片84点, 及び極少量の土師質土器 片 5 点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。 覆土中の遺物のほとんどは平安時代 前半代の土器片である。土師質土器片は、底部に丸みを持った坏の破片である。



第57図 第157号住居跡実測図

所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。

第158号住居跡 (第58図)

位置 調査区の北西部、B9h1区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.94m, 短軸2.82mの方形を呈している。

主軸方向 N-2°-E。

壁 壁高約26cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

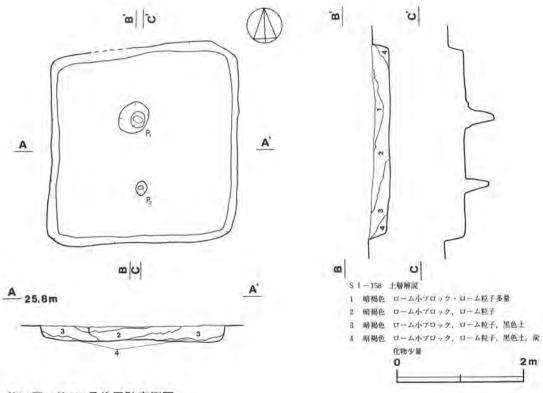
床 平坦で、堅く踏み固められ堅緻である。

ピット 2 か所(P1・P2)検出されている。P1は、径52cm、深さ44cm、P2は、径18cm、深さ40cmで、いずれも主柱穴と考えられる。

覆土 4層からなり、すべてローム小プロックを多く含む人為的な堆積土層と考えられる。

遺物 覆土中から平安時代以降の土師器 (甕, 坏) 細片82点, 須恵器 (甕, 坏) 片71点, 及び土 師質土器片 4 点が出土しているが, 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。



第58図 第158号住居跡実測図

第159号住居跡 (第59図)

位置 調査区の北西部、B9e4区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸(3.40m), 短軸(2.60m)の方形を呈していると考えられる。

主軸方向 N-75°-W。

壁 壁高約6㎝を測る。

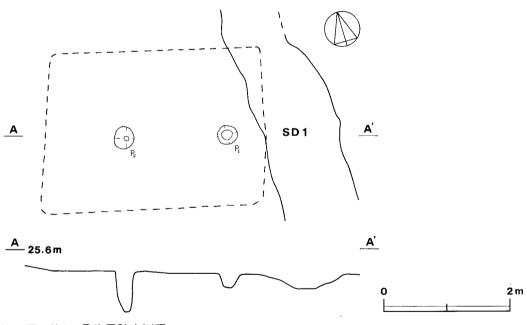
床 平坦で、堅く踏み固められている。

ピット 2 か所(P1・P2)検出されている。P1は, 径34cm, 深さ12cm, P2は, 径34cm, 深さ22cmで、いずれも主柱穴と考えられる。

覆土 残存する覆土がほとんど無く堆積状況は不明である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片26点, 須恵器 (甕, 坏, 蓋) 片 4 点が出土しているが, 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。



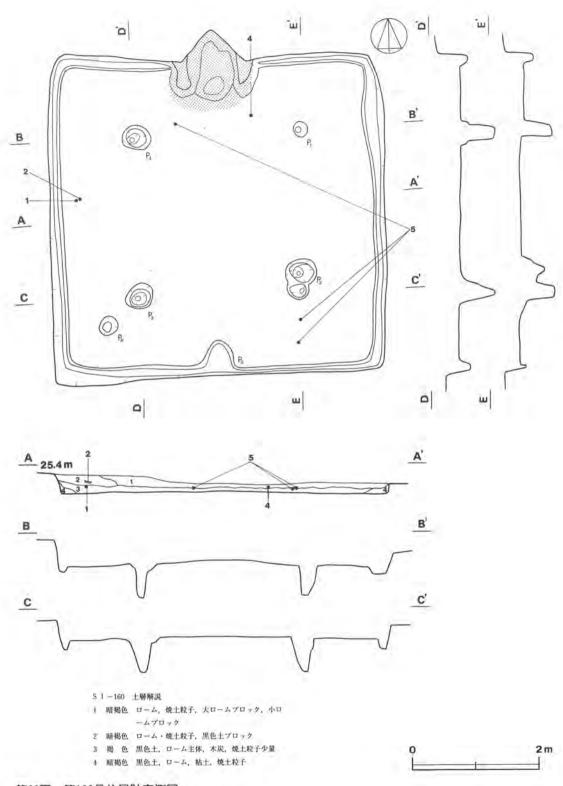
第59図 第159号住居跡実測図

第160号住居跡 (第60図)

位置 調査区の北西部, B9c6区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.30m, 短軸5.14mの方形を呈している。

主軸方向 $N-0^{\circ}$ 。



第60図 第160号住居跡実測図

壁 壁高16~30cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

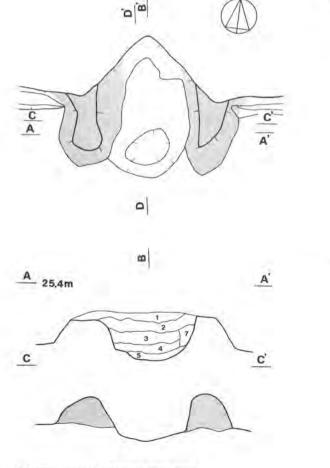
壁溝 規模や断面形は画一ではないが、竈部分を除き全周している。

床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

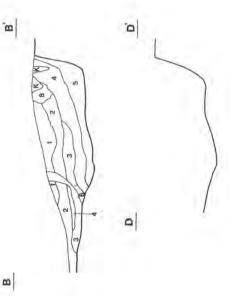
ピット 6 か所 $(P1 \sim P6)$ 検出されている。 $P1 \sim P4$ は、 $424 \sim 50$ cm、深さ $50 \sim 57$ cmで、いずれも主柱穴である。P5 は、448cm、深さ36cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6 は、432cm、深さ17cmで、性格は不明である。

電 北壁中央部を50cm程壁外へ掘り込み、砂まじりの粘土で構築されている。規模は、幅140cm、 長さ115cmを測る。袖部が、高さ25cm程遺存している。火床部は、床面を8cm程掘り窪めて構築されており、焼土化している。燃焼部には、焼土粒子、炭化物及び粘土ブロックが入っている。煙 道部は、火床部から緩やかに外傾して立ち上がっている。

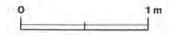
覆土 4層からなり、すべて自然堆積土層と考えられる。



第61図 第160号住居跡竈実測図

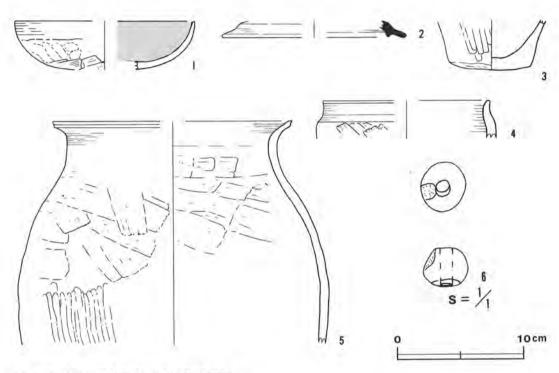


- S 1-160億 土粉解脱
- Ⅰ 極暗赤褐色 焼土・ローム・木炭・粘土粒子
- 2 にぶい赤褐色 砂・粘土・焼土プロック
- 3 極暗赤褐色 全体に焼土ブロック・木炭・粘土ブロック
- 4 にぶい赤褐色 焼土プロック・木炭少量
- 5 極暗赤褐色 焼土化したローム
- 6 極暗赤褐色 粘土, 焼土ブロック, 木炭
- 7 赤褐色 全体に加熱、粘土、小礫、黒色土プロッケ、 木炭
- 8 赤褐色 全体に加熱、粘土、砂、焼土・黒色土プロック



遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片204点が出土している。5の土師器の甕が床面に広範囲に散 乱しており、1の土師器の坏は、床面の破片と覆土上層の破片とが接合したものである。2の須 恵器の蓋片をはじめ遺物のほとんどは、覆土 (第2層) 中から出土している。

所見 遺構の形態や出土遺物から、7世紀前半の住居跡と考えられる。



第62図 第160号住居跡出土遺物実測図

第160号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備考
第62図 1	坏 土 師 器	A(14.4) B 3.9	丸底。体部は内彎して立ち上がる。 口縁部はほぼ直立する。	底部へラ削り。口縁部内・外面横 ナデ。内面赤彩。	長石・石英 明赤褐色 普通	P22 10% 覆土(3層)
2.	差 須 忠 器	A (14.8) B.(1.3)		口縁部内・外面横ナデ。	長石·石英·雲母 灰色 普通	P26 5% 覆土(2層)
3	小形甕土師器	B(4.0) C 6.2	底部破片。平底で胴部は外傾して 立ち上がる。	胴部外面ヘラ磨き。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P 25 5% 養土(3層)
4		A(13.3) B(3.1)	口縁部破片。胴部と口縁部の境に 弱い稜を持ち、口縁部は内彎気味 に立ち上がる。口唇部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	P23 5% 養土(1層)
5	選 土師器	A(19.0) B(17.8)		胴部中位以下へラ磨き。胴部上位 及び内面へラナデ。口縁部内・外 面横ナデ。	石英·長石·雲母 褐灰色 普通	P 24 15% 覆土(2層)

図版番号		дu	種		法 量(cm)		重 量	現存率	H	+	 地	占	備	老
		77	1里.	最大長	最大幅	最大厚	(g)	(%)	tri	· -	36	AA	, PHI	
Ì	第62図 6	小	玉	1.0	1.2		2,1	100	獲土				Q 2	滑石

第161号住居跡 (第63図)

位置 調査区の北西部、B9e8区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.10m, 短軸3.63mの長方形を呈している。

主軸方向 N-5°-E。

壁 壁高12~18cmを測り、緩やかに立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を8cm程掘り窪め、断面形は逆台形状を呈し、西壁と北壁、南壁の一部の壁 直下にめぐっている。

床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

ピット 検出されていない。

電 北壁中央部の壁から50cm程屋外に離れた位置に構築されている。平面形は,馬蹄形を呈しており,規模は,幅106cm,長さ110cm,袖基底部の幅は約20cmを測る。火床部は,ほぼ平らであり,中央部に支脚状の粘土が傾いた状態で遺存している。

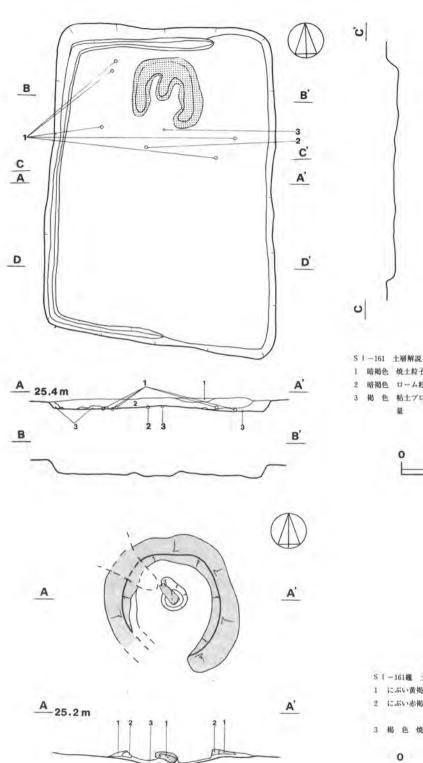
覆土 3層からなる。第1・2層は,耕作による撹乱で土が動いている。第3層は,自然堆積土層と考えられる。

遺物 北部覆土中から土師器 (甕, 坏) 片466点が出土している。竈内に遺存していた粘土製の支脚は、遺存状態が悪く、取り上げることができなかった。粘土製支脚は、長さ19cm、底部径 7 cm を測る。粘土製支脚の胎土は、荒い擬灰岩の砂粒及び暗褐色土を混ぜた白色粘土でできており、にぶい黄褐色を呈している。その他に、第1・2層中から、縄文式土器細片や奈良時代の須恵器の坏細片等が出土している。

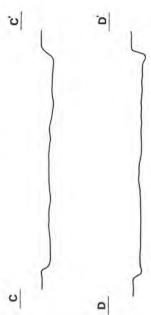
所見 住居の平面形が南北方向に長い長方形であり、竈が壁から離れた位置にあるという点に特 徴が見られる。覆土中の土器群等から、9世紀代の住居跡と考えられる。

第161号住居跡出土遺物観察表

150 ME 34- 12.	器	種	法 量(cm)			孔径	L 径 重 量	現存率	出	+	地	点	備	考
図版番号		1里	最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		<u></u>	76		ина	
第64図 1	支	脚	(17.4)	(7.9)			(530.0)	80	覆土				DP 9	
2	支	脚	(8.3)	(4.6)			(131.4)	30	覆土				DP10	
3	刀	子	9.5	0.9	0.3		9.9	100	覆土				M 15	



第63図 第161号住居跡・竈実測図

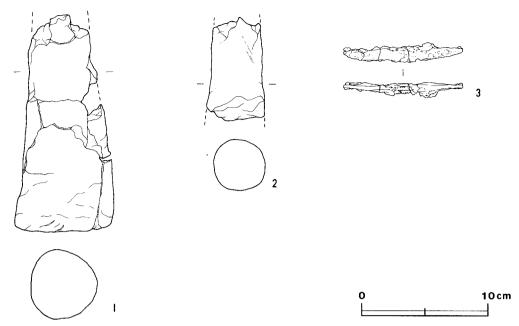


- 1 暗褐色 烧土粒子多量
- 2 暗褐色 ローム粒子, 炭化物少量
- 3 褐 色 粘土プロック・焼土粒子多量、炭化物粒子少



- S 1-161確 土層解説
- 1 にぶい黄褐色 砂粒・暗褐色土混ぜた白色粘土
- 2 にぶい赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子多量、 (流出粘土)
- 3 楊 色 焼土粒子少量





第64図 第161号住居跡出土遺物実測図

第162号住居跡 (第65図)

位置 調査区の北西部, C9c2区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.59m, 短軸3.75mの長方形を呈している。

主軸方向 N-6°-W。

壁 壁高6~10cmを測り、緩やかに外傾して立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を 4~10cm程掘り窪め、断面形は U字状を呈し、全周している。

床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

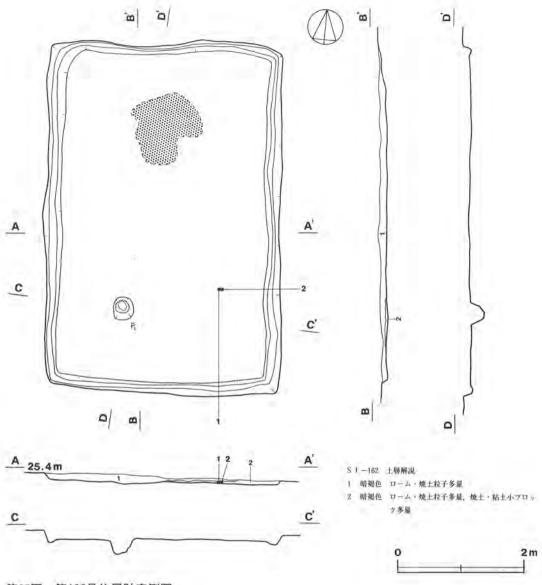
ピット 1 か所 (P1) 検出されている。 P1は, 径38cm, 深さ24cmを測る。主柱穴とは考えられない。

電 北壁から約60cm離れ,長径120cm,短径110cmの不定形の焼土の広がりがあり,竈の火床と考えられる。火床部は、床面を12cm程掘り窪めて構築されており、その中に、木炭片、灰を含む焼土とロームブロックが堆積している。竈の上部構造はまったく残っていない。

覆土 2層からなる。第1層は,焼土粒子やローム粒子を含む薄い人為的な堆積土層であり,踏み固められたようによく締まっている。第2層は,粘土ブロックを含み,竈の崩壊後の自然堆積土層と考えられる。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片434点, 須恵器 (坏, 蓋) 片 6 点が出土している。本跡に伴う遺物はなく, すべて流れ込みと思われる。

所見 遺構の形態から、9世紀代の住居跡と考えられる。第156号住居跡と第161号住居跡と類似する遺構である。



第65図 第162号住居跡実測図

第163号住居跡 (第66図)

位置 調査区の北西部、C9b6区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.90m, 短軸2.89mの方形を呈している。

主軸方向 N-61°-W。

出入り口 南東壁中央から北東寄りの位置に、南東に向かって壁外に突出し、床面から確認面に 至る堅く締った緩斜面を有している。規模は、長さ112cm、幅56cm、角度17°を測る。

壁 壁高約28cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、出入り口側を中心に出入り口部斜面から、P2周辺にかけての範囲が堅く踏み固められている。

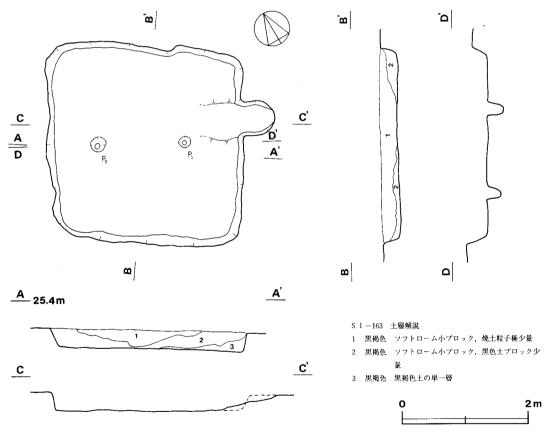
ピット 2 か所(P 1 ・P 2)検出されている。 P 1 は,径18cm,深さ24cm, P 2 は,径22cm,深さ22cmで,いずれも主柱穴と考えられる。

炉 出入り口側の床中央部付近に炭化物が薄く堆積している。範囲は,長径60cm,短径30cmの長 楕円形を呈している。

覆土 3層からなる。第1・2層は、人為的な一括の埋め戻し土層と考えられる。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片38点, 須恵器 (甕, 坏) 片29点, 土師質土器片 4 点が出土 している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。



第66図 第163号住居跡実測図

第164号住居跡(第67図)

位置 調査区の北西部, B9j6区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南部を第4号溝によって切られている。

規模と平面形 長軸2.70m, 短軸2.69mの方形を呈している。

主軸方向 N-88-E。

出入り口 東壁中央から北寄りの位置に、東に向かって壁外に突出して、床面から確認面に至る 緩斜面を持った出入り口部を有している。規模は、長さ25cm、幅70cmである。

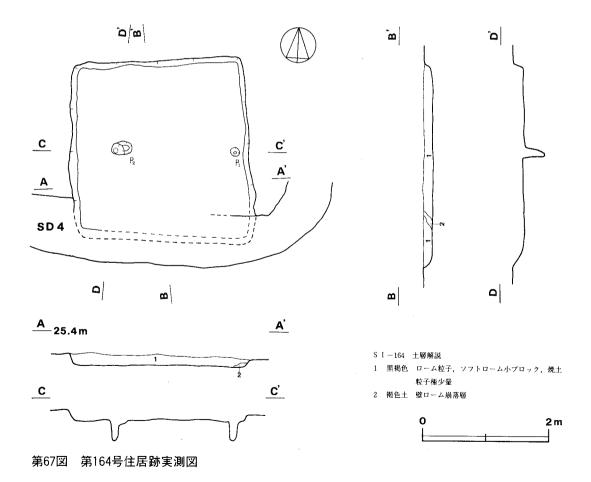
壁 壁高約18cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、堅く踏み固められ堅緻である。

ピット 2 か所 (P1・P2) 検出されている。P1は, 径15cm, 深さ28cm, P2は, 径28cm, 深さ28cmで, いずれも主柱穴と考えられる。

覆土 2層からなる。第1層は、ロームブロックを均一に含む人為的堆積土層である。第2層は、ロームの壁が剝落し、ローム土等が自然堆積した土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片23点, 須恵器 (高台付坏, 蓋) 片 7点, 土師質土器片 3点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。



所見 本跡は、重複関係から、第4号溝よりも古い時期に構築されている。遺構の形態から、12 世紀以降の住居跡と考えられる。

第165号住居跡 (第68図)

位置 調査区の北西部、C9bs区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.05m, 短軸2.86mの方形を呈している。

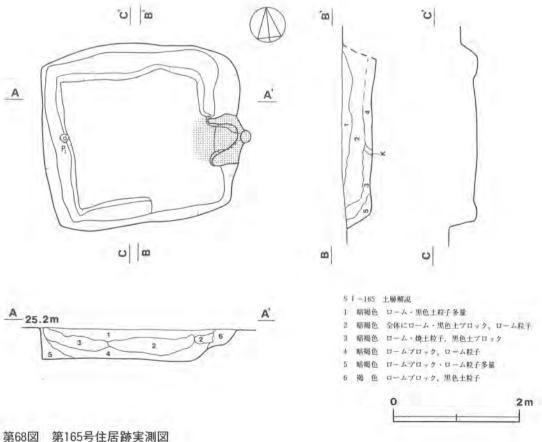
主軸方向 N-10°-W。

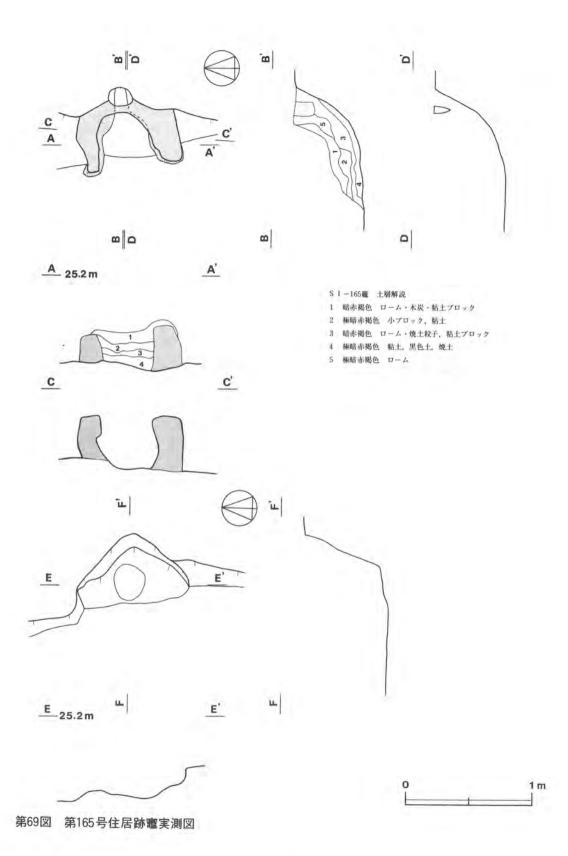
壁 壁高42~50cmを測り、緩やかに外傾して立ち上がっている。

壁満 壁直下の床面を17cm程掘り窪め、断面形はU字状を呈し、竈部分と南東コーナー部付近を 除き全周している。

床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

ピット 1 か所 (P1) 検出されている。 P1は、 径14cm、 深さ12cmで, 出入り口施設に伴うピ





-95-

ットと考えられる。

電 東壁中央部を20cm程壁外へ掘り込み、砂まじりの粘土で構築されている。規模は、幅80cm、 長さ68cmである。袖部が良好に遺存しており、両袖基底部の幅は17~20cmを測る。火床部は、ほ ぼ平らで焼土化している。燃焼部からは、焼土粒子や木炭小片、粘土が検出されている。煙道部 は、焚口部から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 5層からなる。第1層は自然堆積土層である。第2~4層にかけては、ローム・黒色土プロックを層全体に含み、人為的堆積土層である。

遺物 竈内と覆土中から土師器 (坏,蓋) 片 2点,須恵器 (甕,托) 片 5点が出土している。須恵器の小形甕の破片は、竈内から、1の須恵器の蓋の破片は、覆土中から、2の完形の須恵器の托は、竈西側の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 遺構の形態と出土遺物から、12世紀以降の住居跡と考えられる。



第165号住居跡出土遺物觀察表

図版番号	器種		法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·燒成	備考
第70図	蓋須恵者	alle alle	1 1430	天井部は丸みを持ち、緩やかに口 縁部に至る。中央部の突出した傷 平なつまみが付く。	Charles Committee Committee	長石·石英·雲母 黄灰色 普通	P 199 20% 模士
2	托須恵者	d	24.5	平底。口縁部は外傾して短く立ち 上がる。中央部に中のくほんだ偏 平なつまみ状の受け部が付く。	底部手持ちへラ削り。体部内・外 面横ナデ。	石英・雲母 灰色 良好	P 201 100% 授土

第166号住居跡(柴崎遺跡1区第69号住居跡)(第71図)

位置 調査区の南部, F10j2区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.64m, 短軸5.60mの方形を呈している。

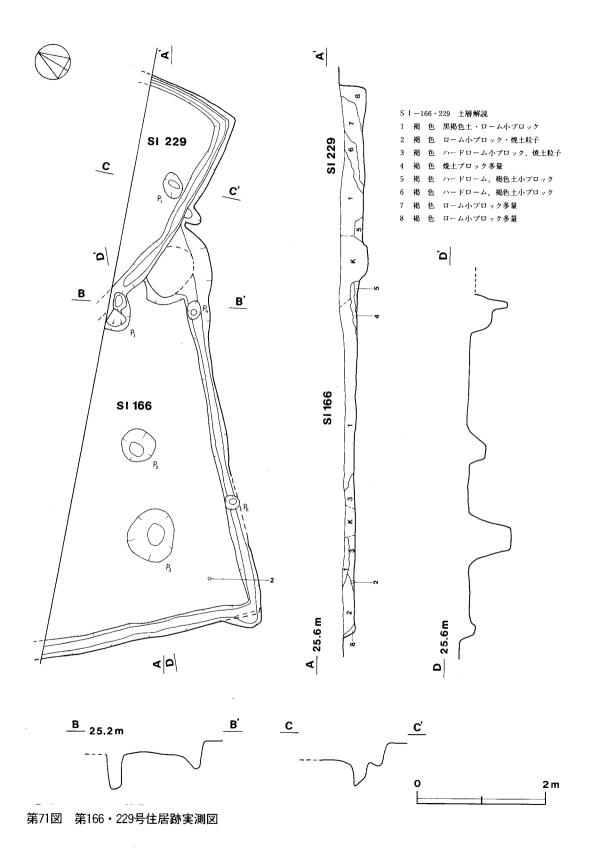
主軸方向 N-40°-W。

壁 壁高約20cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 南西壁と南東壁直下の床面が浅く掘り窪められている。

床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

ピット 5か所 $(P1 \sim P5)$ 検出されている。 $P1 \cdot P2$ は、 $254 \sim 64$ cm、深さ $60 \sim 66$ cmで、いずれも主柱穴である。 $P3 \sim P5$ は、 $210 \sim 26$ cm、深さ $12 \sim 27$ cmで、性格は不明である。

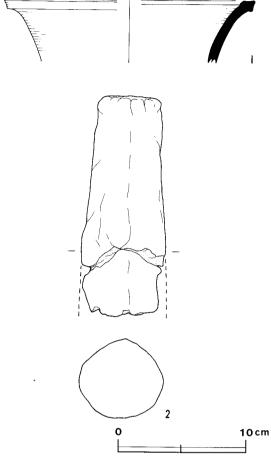


-97-

覆土 5層からなる。すべて自然堆積土 層である。

遺物 覆土中から土師器(甕, 坏)片156 点,須恵器(坏)片12点が出土している。 2の支脚が、南コーナー部の床面から出 土している。その他では、鬼高期の坏細 片や奈良時代前半の須恵器の甕口縁部片 等が覆土中から破片で出土している。

所見 遺構の形態と出土遺物から, 6世 紀後半の住居跡と考えられる。



第72図 第166号住居出土遺物実測図

第166号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備考	
第72図	甕	A(19.6)	口縁部破片。口縁部は外反し、端	口縁部外面カキ目。内面横ナデ。	砂粒·長石·石英	P 30 55	%
1	須 恵 器	B(5.0)	部内・外面に突線がめぐる。		黄灰色	覆土	
					普通		ı

図版番号 器 種			法量(cm)		孔 径									
四級曲り	tur	1生	最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)	出	土	地	ĽΪ	備	考
2	支	脚	(17.6)	(6.8)			(605.8)	80	床面	***************************************			DP 3	

第167号住居跡(第73図)

位置 調査区の南部、G10a3区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南西部が、第168号住居跡の北東部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.70m, 短軸3.69mの方形を呈している。

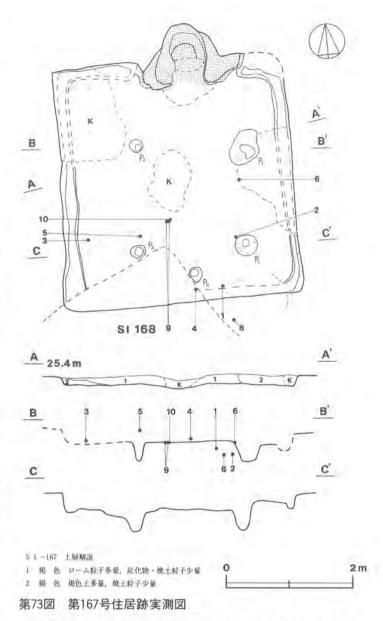
主軸方向 $N-1^{\circ}-W_{\circ}$

壁 壁高10~15cmを測り、緩やかに外傾して立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を14cm程 掘り窪め、断面形はU字状を 呈している。竈部分を除き全 周している。

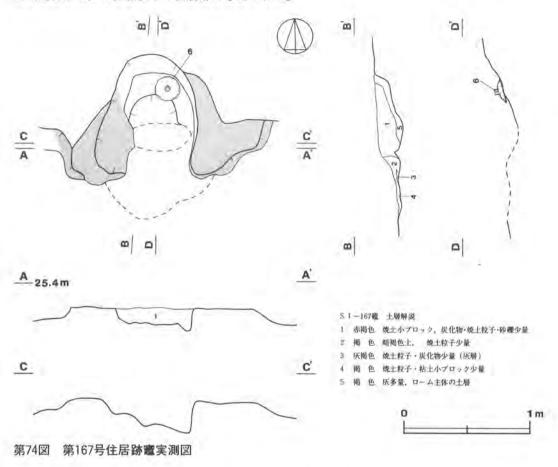
床 平坦で, 踏み固められ堅 級である。

ピット 5か所(P1~P5) 検出されている。P1~P4 は、径24~60cm、深さ30~42 cmで、いずれも主柱穴である。 P5は、径24cm、出入り口施 設に伴うピットと考えられる。 竈 北壁中央からやや東寄り の位置を60cm程壁外へ掘り込 み,砂まじりの粘土で構築さ れている。規模は、幅160cm, 長さ132cmを測るが,遺存状況 が悪く、竈のほとんどは削平 され残っていない。火床部は、 5 cm程窪んで焼土化している。 燃焼部には、焼土粒子や炭化 物、灰が充満している。煙道 部は、火床部から緩やかに外 傾して立ち上がっている。



覆土 2層からなる。第1層は、壁崩壊の自然堆積土層である。第2層は、褐色のローム土を主体とした自然堆積土層と考えられる。

遺物 覆土中から土師器(甕, 坏)片230点,須恵器(坏,蓋)片13点,及び瓦片が出土している。 8の土師器の甕は,竈内から破片で,6の須恵器の高坏の坏部は,逆位で煙道部付近の補強材と して使用された状態で出土し,4の須恵器の坏と10の須恵器の平底の甕は,住居内中央部の床面 から出土している。また,2の土師器の坏と1の土師器の内黒の坏,8の中形の土師器の甕片は, 貼床の下から出土し,5の須恵器の坏と3の土師器の坏は,覆土(第1層)中からそれぞれ出土 している。 所見 本跡は、重複関係から、第168号住居跡よりも新しい時期に構築されている。遺構の形態と 出土遺物から、9世紀後半の住居跡と考えられる。



第167号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手法の特徴	胎土·色調·焼成	備	考
第75図	坏 土 師 器	A 14.5 B 3.9 C 6.2	平底。体部は内彎気味に外傾して 立ち上がる。	底部及び体下半部回転へラ削り。 口縁部内・外面横ナデ後,内面黒 色処理。	長石・砂粒・雲母 にぶい橙色 良好	P 202	60%
2	坏 土 師 器	A 16.0 B 4.7 C(8.5)	平底。体部は内冑気味に外傾して 立ち上がる。	底部及び体部下端手持ちへラ削り。 体部内・外面横ナデ。内面へラ磨 き。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 良好	P 205	35%
3	坏 土 師 器	A 11.2 B 4.4 C(6.4)	平底。体部は内鬱気味に外傾して 立ち上がる。	底部及び体部下端手持ちへラ削り。 体部外面へラ磨き。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 206 覆土	40%
4	. 坏須惠器	A 14.0 B 4.2 C 5.1	平底。体部は外傾して立ち上がる。 口縁部がわずかに外反する。	底部回転へラ切り後, 無調整。体部下端手持ちヘラ削り。体部内・ 外面横ナデ。	石英·長石·雲母 褐灰色 普通	P 203 覆土	60%
5	坏類患器	A 14.2 B 4.1 C 5.6	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部一方向へラ削り。体部下端手 持ちへラ削り。体部内・外面横ナ デ。	長石·石英·雲母 灰色 普通	P 204 製土	40%



第75図 第167号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·燒成	備	考
第75図	高坏	A 20.4	脚裾部欠損。坏部は緩やかに外傾	坏部及び脚部内・外面横ナデ。	長石・石英	P 207	70%
6	須 恵 器	B(8.0)	して開く。脚部には三窓の透かし		褐灰色	確	
			が入る。		良好		
	小形甕	A(13.2)	胴下半部欠損。頸部はくびれ, 口	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母	P 208	5%
7	土師器	B(5.8)	縁部は短く外反する。端部を上方		にぶい赤褐色	覆土	
			につまみあげる。		普通		
	甕	A(16.4)	口縁部破片。口縁部は短く外反す	口縁部内・外面横ナデ。	長石·石英·雲母	P 209	5%
8	土師器	B(3.2)	る。端部を上方につまみあげる。		にぶい黄橙色		
					普通		
	甕	A(31.6)	底部欠損。体部は外傾して立ち上	胴部平行叩き。内面及び口縁部内・	砂粒・雲母	P 211	10%
9	須 恵 器	B(16.0)	がり、口縁部は外反する。口唇部	外面横ナデ。	灰黄色	床面	
			が上方に突出する。		普通		
	甕		底部破片。平底。体部は外傾して	底部及び体部下端へラ削り。体部	長石・石英・雲母	P 210	20%
10	須恵器	B(5.8)	立ち上がる。	内・外面格子目叩き。	褐灰色	床面	
		C 16.7			良好		

図版番号 器 種		法 量(cm)		重量	現存率	ш	٠.	141.		/#:	#	
四版曲 7	tur 1st.	最大長	最大幅	最大厚	(g)	(%)	ш,		地	从	備	45
11	不明鉄製品	(11.1)	0.8	0.4	(12.8)	20	覆土				M 9	

第169号住居跡(第76図)

位置 調査区の南部、G10c4区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.23 m, 短軸4.07 m の方形を呈している。

主軸方向 $N-7^{\circ}-W_{\circ}$

壁 壁高14cmを測り、緩やかに外傾して立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を8cm程掘り窪め、断面形はU字状を呈し、竈部分を除き全周している。

床 平坦で,踏み固められ堅緻である。床面は2面あり,古い床面の上位に厚さ10cmの貼床を行っている。

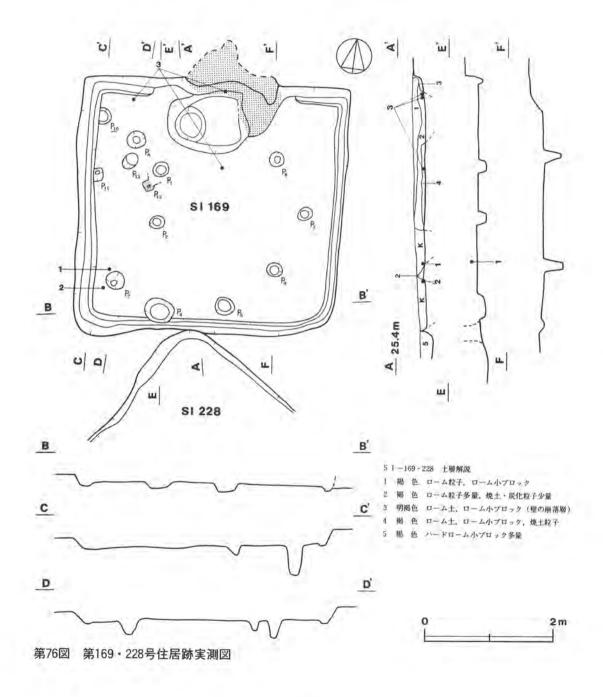
ピット 13か所 $(P1 \sim P13)$ 検出されている。 $P1 \sim P4$ は,径 $24 \sim 30$ cm,深さ $20 \sim 32$ cmで,いずれも主柱穴である。 $P5 \sim P11$ は,径 $22 \sim 30$ cm,深さ $14 \sim 41$ cmで,性格は不明である。古い床面から掘り込まれるP12 は,径30 cm,深さ16 cmで,新しい方の床面から掘り込まれる。P13 は,径44 cm,深さ12 cmで,両方とも出入り口施設に伴うピットと考えられる。 $P6 \cdot P7 \cdot P9 \cdot P10$ は,新しい床面から, $P8 \cdot P11$ は,古い床面から掘り込まれているが性格は不明である。P7 は,平面形が一辺約20 cmの方形で,内部には灰褐色の粘土が床面と同じ高さまで充填されており,中心部には4 cm×5 cmのやや深い方形の小さな穴が開いており,性格は不明である。

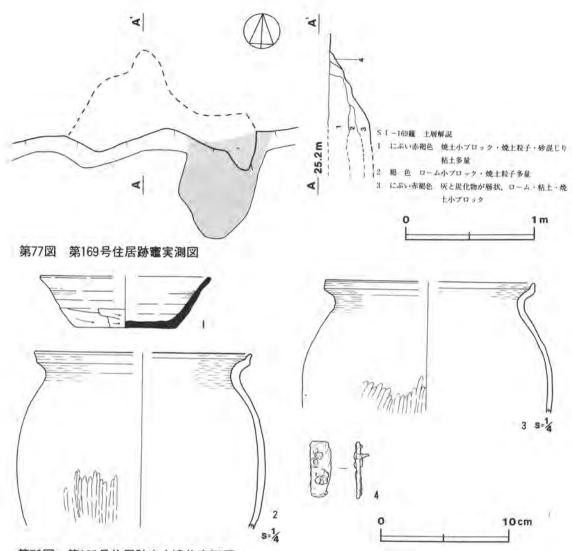
電 北壁中央からやや東寄りの位置を54cm程壁外へ掘り込み、砂まじりの粘土で構築されている。 規模は、幅166cm、長さ160cmである。西側の袖部が撹乱のため、まったく遺存していない。煙道 部は、燃焼部奥から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 4層からなり、すべてローム主体の自然堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片318点、須恵器 (坏, 蓋) 片83点が出土している。3の土師器の甕が、竈の西側から南側にかけての覆土 (第1層) 中から、2の土師器の甕と1の須恵器の坏の破片が、南西コーナー付近から出土している。

所見 遺構の形態と出土遺物等から、9世紀前半の住居跡であると考えられる。





第78図 第169号住居跡出土遺物実測図

第169号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土·色調·燒成	備考
第78図	坏 須 惠 器	A(13.4) B 4.1 C 8.0	平底。体部は、外傾して立ち上が る。口縁部がわずかに外反する。	底部一方向へラ削り。体部下端手 持ちへラ削り。体部内・外面横ナ デ。	砂粒·石英·雲母 灰色 普通	P212 20% 床直上
2	麦 土師器	A(22.8) B(18.5)	底部欠損。胴部中位に最大径を持つ。口縁部は短く外反し、端部を 外上方につまみ上げる。	胴部中位以下縦位のヘラ磨き。口 緑部内・外面横ナデ。	長石·石英·雲母 にぶい褐色 不良	P213 20% 養土(1層)
3		A(21.8) B(13.7)	The same and the same in the same in	胴部中位以下縦位のヘラ磨き。口 緑部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P214 10% 養土(1層)

図版番号	器種	1 0 0 4	法 量(cm)		重量	現存率	in 1 in 1-	## ##
	es th	最大長	最大幅	最大厚	(g)	(%)	出土地点	懶 考
4	不明鉄製品	(4.5)	1.6	0.3	(5.6)	90	覆土 (1層)	M10

第170号住居跡 (第79図)

位置 調査区の北部、A12hi区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の中央部を,第6号溝によって掘り込まれてる。

規模と平面形 長軸4.19m, 短軸3.86mの方形を呈している。

主軸方向 N-4°-W。

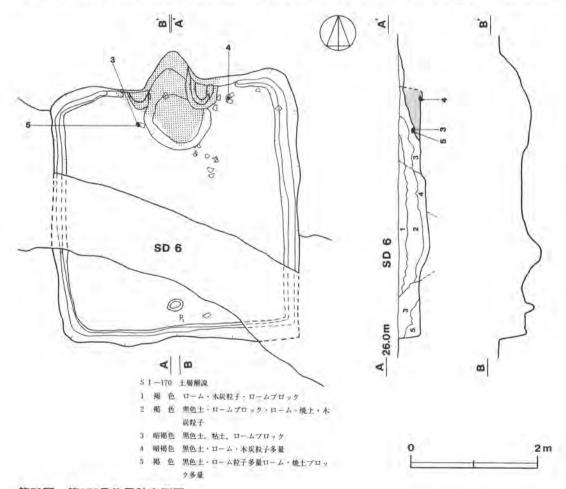
壁 壁高36~40cmを測り、緩やかに立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を6cm程掘り窪め、断面形は皿状を呈している。竈部分を除き調査範囲内では全周している。

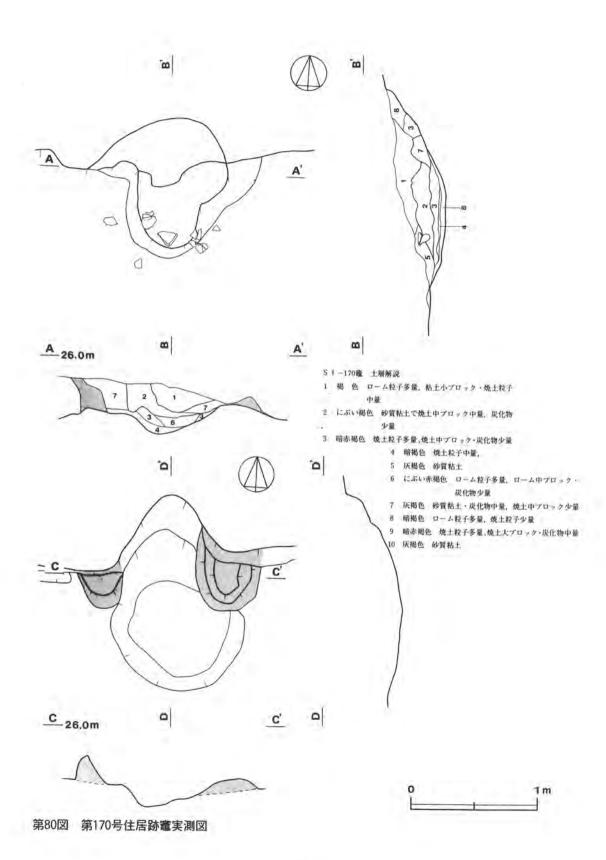
床 平坦で、コーナーまで踏み固められ堅緻である。

ピット 1 か所 (P1) 検出されている。P1は、径26cm、深さ20cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

電 北壁中央部を60cm程壁外へ掘り込み、砂まじりの粘土で構築されている。規模は、幅145cm、



第79図 第170号住居跡実測図

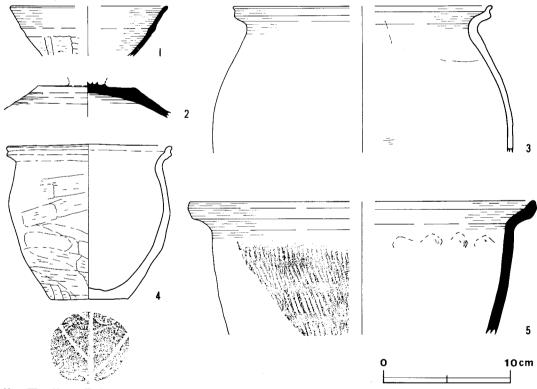


長さ157cmを測り、竈の遺存状態は悪い。両袖とも基底部の幅は40cmを測る。燃焼部には、焼土粒子や焼土ブロック、炭化物が充満しており、天井部の崩落ブロックも見られる。火床部は、10cm程掘り窪められており焼土化している。煙道部は、焚口部から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 2層からなり、暗褐色土主体の自然堆積層である。

遺物 覆土中や床面から土師器 (甕, 坏) 片218点, 須恵器 (坏, 蓋) 片54点が出土している。 4 の土師器の小形甕が, 破砕状態で竈西側の床面から, 3 の土師器の甕が破片で竈東側床面から, 5 の須恵器の甕破片が, 覆土中からそれぞれ出土している。その他の須恵器の坏の蓋は覆土中から出土している。

所見 6号溝よりも古い遺構である。遺構の形態と出土遺物から、9世紀後半の住居跡と考えられる。



第81図 第170号住居跡出土遺物実測図

第170号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備考
第81図	坏	A(12.4)	口縁部破片。体部は外傾して立ち	体部外面下半部手持ちヘラ削り。	砂粒·長石·雲母	P 215 5%
1	須恵器	B(4.0)	上がる。	体部内・外面横ナデ。	灰色	北東部覆土
					普通	

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備考
第81図	蓋		天井部に平坦面を持ち,緩やかに	天井部平坦面へラ削り。口縁部内	雲母·長石·砂粒	P 200 20%
2	須恵器	B(2.4)	口縁部に至る。	・外面横ナデ。	灰褐色	覆土
					良好	
	甕	A(20.4)	口縁部破片。頸部はくびれ、口縁	口縁部内・外面横ナデ。	長石·石英·雲母	P216 5%
3	土師器	B(11.7)	部は短く外傾する。口唇部を上方		にぶい橙色	覆土(3層)
			につまみ上げる。		普通	
	小 形 甕	A 13.0	平底。胴部上位に最大径を持つ。	底部木葉痕。胴下半部横位のヘラ	長石·石英·雲母	P 217 60%
4	土師器	B 12.6	頸部はくびれ,口縁部は短く外傾	削り。口縁部内・外面横ナデ。	赤褐色	床面
		C 6.1	する。口唇部をつまみ上げる。		不良	
	燛	A(27.2)	口縁部片。胴部は内彎気味に外傾	胴部平行叩き後、間隔を置いて横	長石·石英·雲母	P218 5%
5	須 恵 器	B(10.6)	し,口縁部で短く外反する。口縁	位の指ナデ。口縁部内・外面横ナ	灰色	覆土(3層)
			端部は外上方に屈曲する。	デ。	普通	

第171号住居跡 (第82図)

位置 調査区の中央, D12i2区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.22m, 短軸4.02mの方形を呈している。

主軸方向 N-5°-W。

壁 壁高52~60cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を6cm程掘り窪め、断面形は皿状を呈している。竈部分を除き全周している。 床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

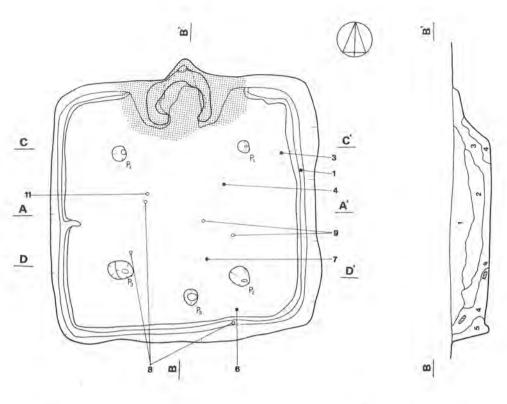
ピット 5か所 ($P1\sim P5$) 検出されている。 $P1\sim P4$ は、径20 \sim 42cm、深さ56 \sim 68cmで、いずれも主柱穴である。P5は、径28cm、深さ19cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

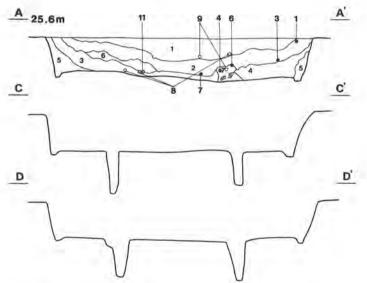
電 北壁中央部を35cm程壁外へ掘り込み、砂まじりの粘土で構築されている。規模は、幅144cm、長さ132cmで、基底部の幅は、約40cmを測り袖部が高さ20cm程遺存している。火床部は、ほぼ平らで焼土化している。煙道部は、燃焼部から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 5層からなる。第1層は、自然堆積土層である。第2~4層は、投棄遺物を多く含む堆積 土層であり、第2~4層中の遺物は接合するものが多く、短い期間の人為的な堆積土層と考えら れる。第5層は、ロームの壁が剝落し、ローム土が自然堆積した土層である。

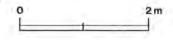
遺物 覆土中や床面から、土師器(甕、坏)片596点、須恵器(坏、蓋)片24点、布目瓦片13点が出土している。5の須恵器の坏の蓋は竈内から出土している。4の須恵器の坏は床面から出土しているが、瓦を含む覆土(第3層)中の混入遺物と考えられる。6の土師器の甕、2の土師器の坏は、覆土(第4層)中から出土し、1の土師器の坏、7の土師器の甕も、覆土(第2層)中から出土している。8・9・10・11の布目瓦片は、第2~4層にかけて出土している。

所見 遺構の形態や出土遺物から、8世紀前半の住居跡であると考えられる。

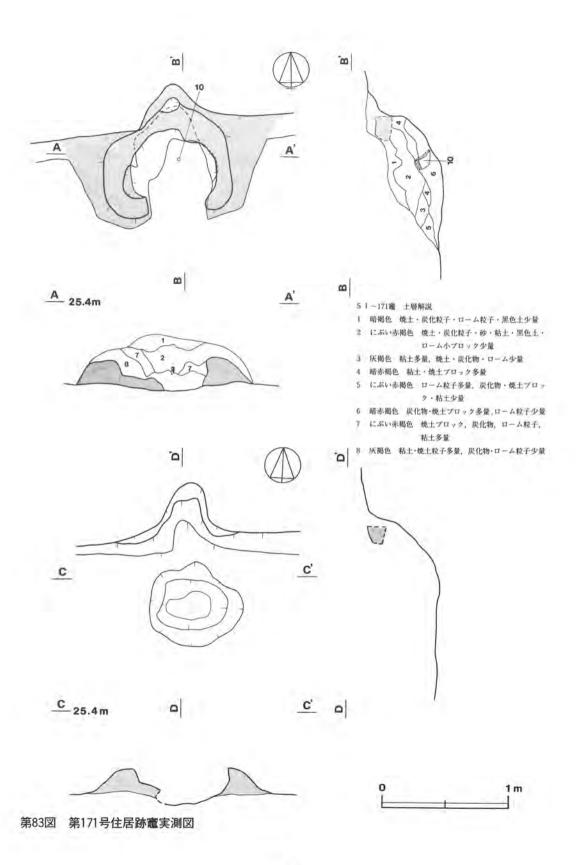


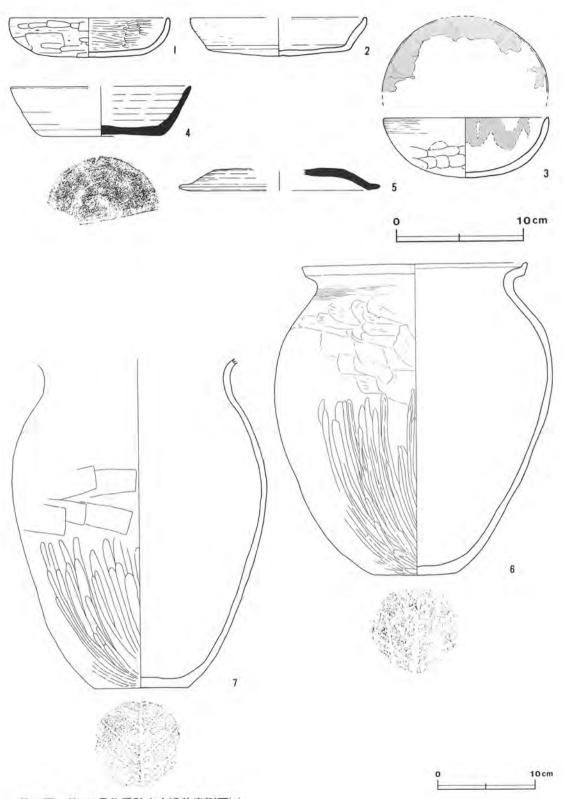


- 5.1-171 土場解説
 - 1 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・ローム小ブロッ 4 無褐色 ローム粒子多量。焼土・炭化粒子少量
- ク少量、炭化粒子極少量 5 椹 色 ローム粒子多量、焼土・炭化粒子極少量 2 黒褐色 ロームハブロック・ローム粒子多量、焼土・ 6 黒褐色 ローム粒子中蔵 焼土・炭化粒子少量 炭化粒子極少量 7 掲 色 炭化粒子極少量
- 3 無褐色 ローム粒子多量、炭化粒子少量

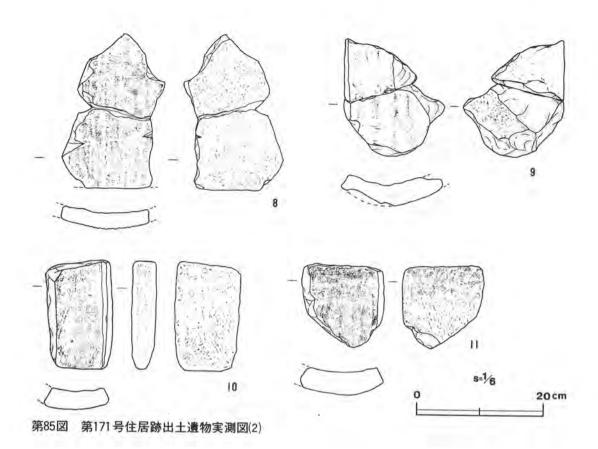


第82図 第171号住居跡実測図





第84図 第171号住居跡出土遺物実測図(1)



第171号住居跡出土遺物観察表

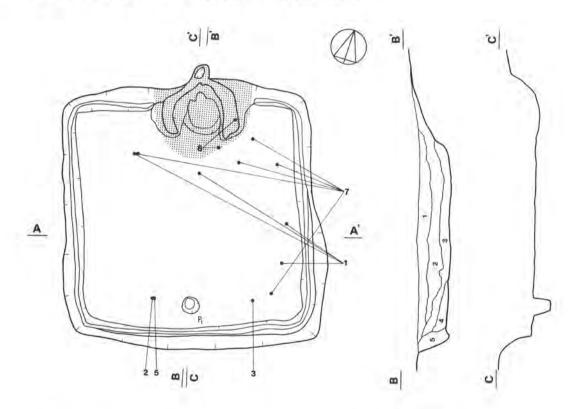
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土·色調·燒成	備考
第84図	上 師 器	A 12.6 B 3.1 C 8.5	平底。体部は内彎して立ち上がる。 口縁部はほぼ直立する。	体部外面横位の幅広へラ磨き。内 面横位の幅の狭いヘラ磨き。	砂粒 明赤褐色 良好	P219 80% 養土(2層)
2	上師器	A 13,8 B 3,1 C 11.0	平底。体部は外傾して立ち上がる。 口唇部は直立する。	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横 ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 220 40% 覆土(4層)
3	境 土 師 器	A 13.0 B 4.8	丸底。体部は内彎して立ち上がる。	底部ヘラナデ。体部横位のヘラ削 り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 石英 にぶい赤褐色 普通	P 222 70% 廠 灯明皿
4	坏 須恵器	A 14.4 B 4.0 C (9.4)	平底。体部はやや内彎しながら外 傾して立ち上がる。	底部一方向のヘラ削り。体部手持 ちヘラ削り。底部内面及び口縁部 内・外面横ナデ。	砂粒·長石·雲母 明灰褐色 普通	P 221 40% 覆土(3層)
5	蓋 須 恵 器	A 15.9 B(1.7)	天井部はほぼ平坦で, 緩やかに口 縁部に至る。内面にかえりの痕跡 を残す。	天井部回転へラ削り。体部内・外 面横ナデ。	雲母·長石·石英 褐色 良好	P 225 40%
6	変 土 師 器	A 23.7 B 33.2 C 8.6	平底。胴部上位に最大径を持つ。 類部はくびれ、口縁部は外反する。 口唇部を上方につまみ上げる。	底部木業痕。胴部中位以下斜位の へラ磨き。胴部上位及び胴部内面 横位のヘラナデ。	長石·石英·雲母 褐色 普通	P 223 60% 養土(4層)
.7	差	B(34.8) C 9.8	平底。口縁部欠損。胴部上位に最 大径を持ち、類部はくびれる。	底部木業痕。胴部中位以下斜位の へラ磨き。胴部上位及び胴部内面 横位のヘラナデ。	長石·石英·雲母 褐色 普通	P 224 50% 覆土(2層)

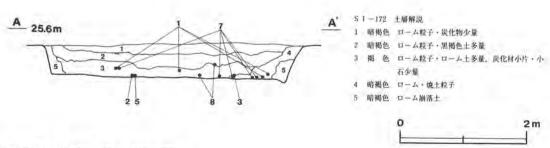
図版番号	go 54:		法 量(cm)		孔径	重 量	現存率	W 1 W 10	iii ar
Barren Barren	器種	最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)	出土地点	
第85図 8	瓦	(24,8)	(16.0)			(989.9)	30	覆土(1, 3層)	DP16
9	A.	(18.8)	(15.9)	5.2		(881.8)	20	覆土 (1, 2層)	DP17
10	Æ	(17.3)	(10.8)	3.9		(651.2)	10	覆土 (1層)	DP18
11	瓦	(13.3)	(13.0)	4.4	- 6	(735.5)	10	覆土 (3層)	DP19

第172号住居跡 (第86図)

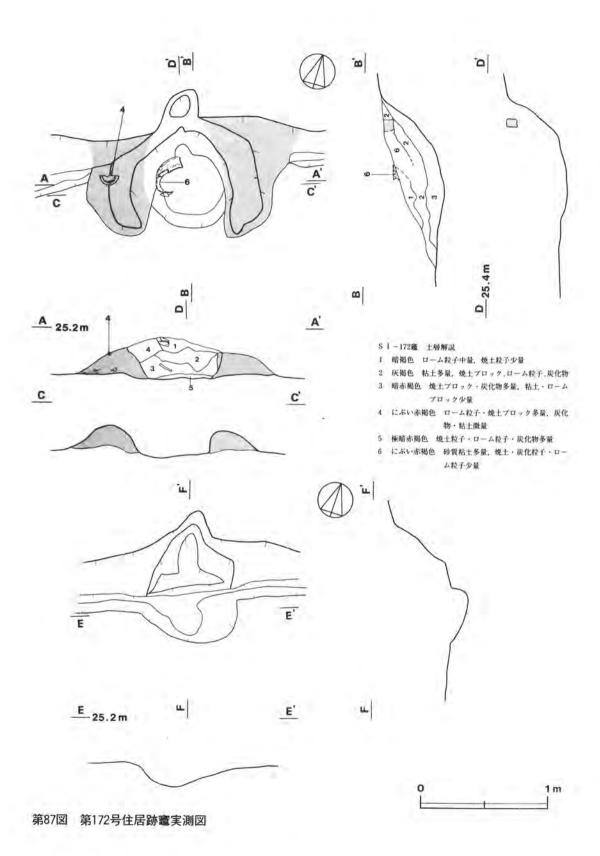
位置 調査区の南東部、E12b7区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.20m, 短軸4.18mの方形を呈している。





第86図 第172号住居跡実測図



-114-

主軸方向 N-23°-W。

壁溝 壁直下の床面を6cm程掘り窪め、断面形は皿状を呈している。竈部分を除き全周している。 床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

ピット 1 か所 (P1) 検出されている。P1 は,径28cm,深さ31cmで,出入り口に伴うピットと考えられる。

電 北壁中央からやや東寄りの位置を34cm程壁外へ掘り込み、砂まじりの粘土で構築されている。 規模は、幅150cm、長さ122cmである。袖部が遺存しており、両袖とも基底部の幅は50cmを測る。 燃焼部からは、焼土粒子、炭化物が検出されている。火床部は、ほぼ平らで焼土化している。煙 道部は、火床部から緩やかに外傾して立ち上がっている。

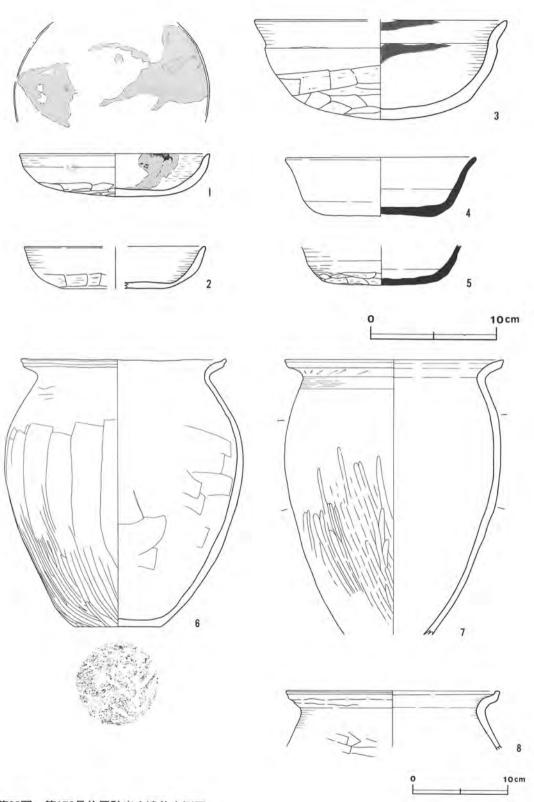
覆土 5層からなる。第1・2・4・5層は、自然堆積土層である。第3層は、ロームブロックを土層中に均質に含む人為堆積土層である。

遺物 覆土中や床面から土師器 (甕, 坏) 片194点, 須恵器 (甕, 坏) 片11点が出土している。 1 の土師器の坏は, 北西壁直下の床面から出土しており, 遺棄された遺物と考えられる。その他の遺物は, ほとんど覆土 (第3層) 中に混入している遺物である。

所見 遺構の形態や出土遺物から、8世紀前半の住居跡と考えられる。

第172号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器	種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備	考
第88図		坏	A 15.0	丸底。体部は内彎気味に立ち上が	底部はヘラ削り。口縁部内・外面	砂粒・雲母	P 38	95%
1	土	師 器	B 3.4	り、口唇部はわずかに外反する。	横ナデ。	橙色	内面炭	素付着
•						普通	一部に炭	
		坏	A 14.4	平底。体部はやや内彎しながら外	底部は一方向のヘラ削り。体部手	砂粒・雲母	P 39	55 %
2	土	師 器	B 3.4	傾して立ち上がる。	持ちヘラ削り。底部内面及び口縁	橙色	覆土(3	層)
			C(7.4)		部内・外面横ナデ。	普通		
		埦	A 20.0	丸底。体部は内彎気味に立ち上が	底部はヘラ削り。口縁部内・外面	砂粒・雲母	P41	95 %
3	土	師器	B 8.0	る。口唇部はわずかに外反する。	横ナデ。内面一部赤彩。	橙色	覆土(3	層)
						普通		
		坏	A 15.2	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部は回転ヘラ削り。体部下端回	砂粒・雲母・長石	P 37	80%
4	須	恵器	B 4.7	口縁部はわずかに外反する。	転によるヘラ削り調整。体部内・	石英 明赤褐色	鼀	
			C 8.8		外面横ナデ。	普通	器外面	荒れ
		坏		平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部は一方向ヘラ削り。体部下端	砂粒・雲母・長石	P 40	40%
5	須	恵 器	B(3.2)		手持ちヘラ削り調整。口縁部内・	石英 にぶい赤褐色	竈内覆	土
			C 6.0		外面横ナデ。	普通	P41と同	質の胎土
		甕	A 21.5	平底。胴部上位に最大径を持つ。	底部木葉痕。胴部外面縦位のヘラ	長石・石英・雲母	P 42	70%
6	土	師器	B 28.5	頸部はくびれ,口縁部は外反する。	削り後、斜位のヘラ磨き。内面へ	橙色	竈	
1			C 9.1	口唇部を外上方につまみ上げる。	ラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	普通		
		甕	A 23.0	底部欠損。胴部上位に最大径を持	胴部外面縦位のヘラ磨き。口縁部	長石·石英·雲母	P 43	80%
7	土	師 器	B(29.2)	つ。口縁部は外反し、端部を外上	内・外面横ナデ。	にぶい赤褐色	覆土	
İ				方につまみ上げる。		普通	胴部に精	占土付着
		甕	A 22.6	口縁部破片。頸部はくびれ、口縁	口縁部内・外面横ナデ。	長石·石英·雲母	P 44	10%
8	土	師器	B(6.3)	部は外反する。端部を外上方につ		にぶい褐色	竈	
				まみ上げる。		普通		



第88図 第172号住居跡出土遺物実測図

第174号住居跡 (第89図)

位置 調査区の東南部, F13a7区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸4.90m, 短軸4.70mの方形を呈している。

主軸方向 N-4°-E。

壁 壁高43~48cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を13cm程掘り窪め、断面形は皿状を呈している。竈部分を除き全周している。 床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

ピット 5か所 (P1~P5) 検出されている。P1~P4は,径18~30cm,深さ15~30cmで,いずれも主柱穴である。P5は,径38cm,深さ13cmで,出入り口施設に伴うピットと考えられる。電 北壁中央からやや東寄りの位置を34cm程壁外へ掘り込み,砂まじりの粘土で構築され,竈の遺存状態はよい。規模は,幅110cm,長さ135cmを測る。袖部が良好に遺存しており,両袖とも基底部の幅は34cmを測る。燃焼部からは,天井部の崩落土及び焼土粒子等が検出されている。火床部及び袖部の内壁面は、焼土化している。煙道部は、燃焼部奥で一旦垂直に立ち上がった後,再び緩やかな傾斜で立ち上がっている。

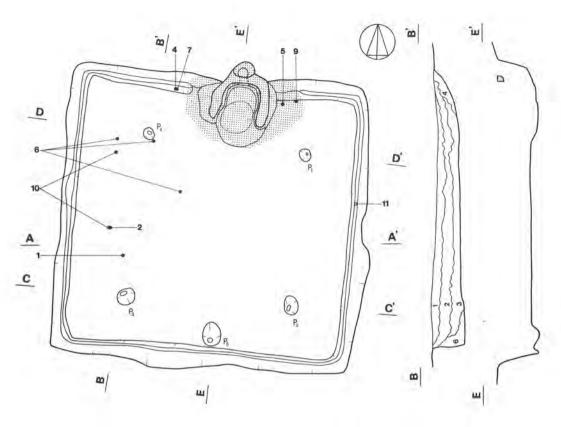
覆土 6層からなり、すべて自然堆積土層であるが、第3層は、ロームブロックを多く含んでいる。

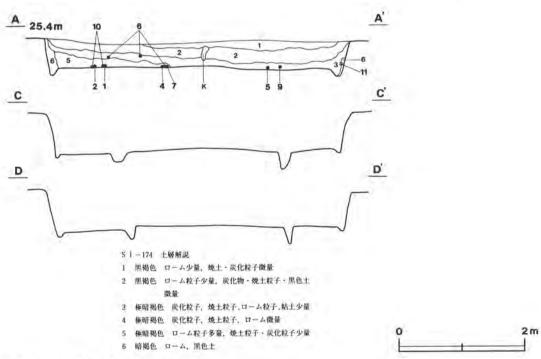
遺物 覆土中や床面から土師器(甕, 坏)片86点,須恵器(甕, 坏)片53点が出土している。3 ・5の須恵器の坏と9の外面に叩き目のある須恵器の甕,及び1・2の土師器の坏は,床面へ遺棄された遺物である。6の須恵器の蓋は,覆土(第2~3層)中から破片で出土している。

所見 $1 \cdot 2$ など少数ながら床面へ遺棄された遺物もあり、そうした出土遺物等から、8世紀前半の住居跡と考えられる。

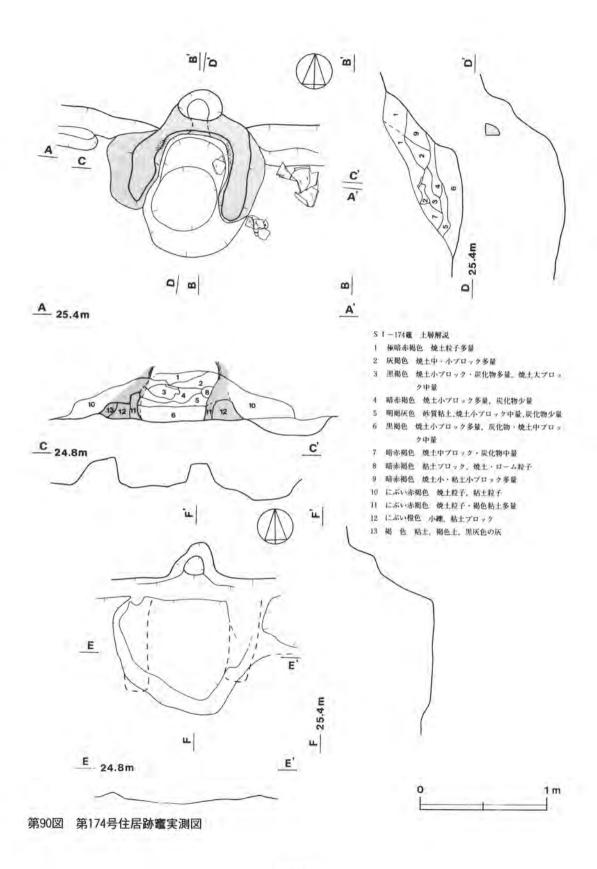
笠171里	什 笆 肚 山	」上、実 #/m	知宏士
第174号	比压奶证	」 1. 1貝 4別	観察表

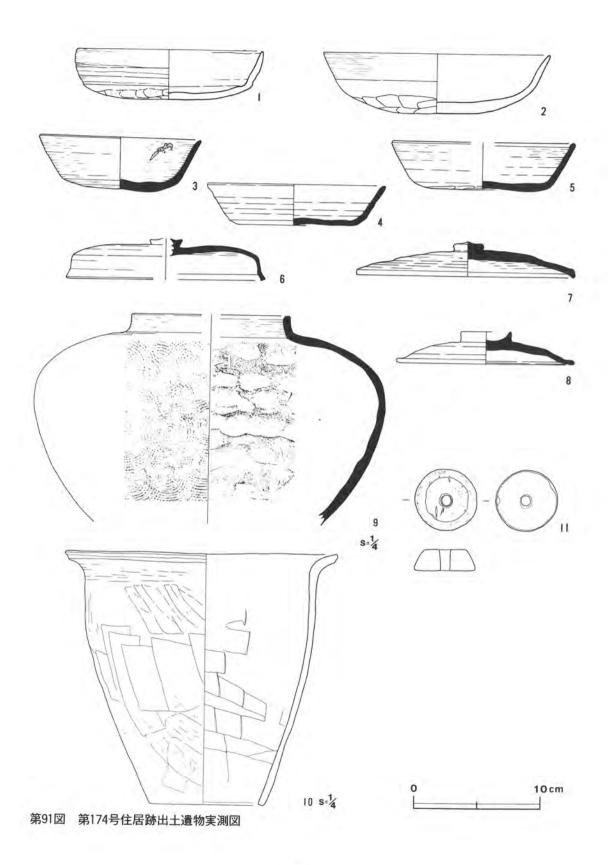
図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·燒成	備考
第91図	坏	A 15.0	丸底。体部は内彎気味に立ち上が	底部へラ削り。口縁部内・外面横	長石・白色粒子	P 226 90%
1	土師器	B 4.0	り、口縁部との境に稜を持つ。口	ナデ。	にぶい褐色	覆土(2層)
			縁部は外傾して立ち上がる。		やや不良	
	坏	A 17.8	平底。底部と体部の境は不明瞭で、	底部へラ削り。口縁部内・外面横	長石・雲母	P 227 70%
2	土 師 器	B 4.8	体部は内彎気味に立ち上がる。	ナデ。	にぶい赤褐色	覆土
		C 6.0	口縁部は外傾する。		普通	
	坏	A 12.7	平底。底部と体部の境は不明瞭で、	底部回転ヘラ切り後,弱いヘラナ	長石・石英	P 228 90%
3	須 恵 器	B 4.2	体部は外傾して立ち上がる。	デ。内面一部黒色物質付着。	明灰褐色	覆土
		C 5.5			普通	
	坏	A 14.1	平底。底部と体部の境は不明瞭で、	底部及び体部全面横ナデ。	長石・石英	P 229 80%
4	須 恵 器	В 3.3	体部は外傾して立ち上がる。		明灰褐色	壁溝
		C 8.8			普通	





第89図 第174号住居跡実測図





図版番号	器種	法量(em)	器 形 の 特 徴	手法の特徴。	胎土·色調·焼成	備考
第91回	坏	A 14.5	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部不定方向へラ削り。体部下端	白雲母・長石	P 230 55%
5	須恵器	В 3.7		へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	にぶい褐色	覆土.
		C 9.1			普通	
,	Ž.	A 15.7	天井部はほぼ平坦で、口縁部は下	天井部间転へラ削り。口縁部内・	雲母·長石·石英	P 235 50%
6	須恵器	В 3.3	方に屈曲し,端部がわずかに開く。	外面横ナデ。	灰白色	覆土(3層)
		F 2.6	偏平なつまみが付く。		普通	
		G(0.7)				
	蓋	A 17.4	天井部から緩やかに口縁部に至る。	天井部回転へラ削り。口縁部内・	長石	P 233 40%
.7	須恵器	В 2.8	口縁端部は下方に屈曲する。中央	外面横ナデ。	灰色	覆土
		F 2.5	部がわずかに突出する偏平なつま		良好	
		G 0.7	みが付く。			
	蓋	A 14.2	天井部から緩やかに口縁部に至る。	天井部回転へラ削り。口縁部内・	雲母·長石·石英	P 234 70%
8	須恵器	B 2.6	口縁部内面にわずかにかえりが付	外面横ナデ。	灰色	覆土
		F 4.0	く。リング状のつまみが付く。		普通	-
		G 0.8		•		
	短頭童	A(16.6)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上	胴部同心円文の叩き。内面手の平	長石·石英·雲母	P 231 15%
9	須恵器	B(22.2)	がり、肩部に丸みを持つ。頸部は	による押え痕。	灰色	床面
			短く上方に屈曲し口縁部に至る。	। ।	普通	
	顲	A 28.8	無底式。胴部は内彎気味に立ち上	体部内・外面へラ削り。	長石·石英·雲母	P 232 70%
10	土師器	B 26.8	がり、口縁部は外反する。		浅黄橙色	覆土(5層)
		C 12.2			普通	

ı	図版番号	器 種		法 量(cm)		重量	現存率	щ	+	Hh	占	備	老
		行 任里	最大長	最大幅	最大厚	(g)	(%)	ΙΤ		地	ж	VHS	*5
	11	紡 錘 車	4.9	4.9	1.7	56.2	90	覆土				Q 5	頁岩

第176号住居跡 (第92図)

位置 調査区の南部、E12e4区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.84 m, 短軸2.82 m の方形を呈している。

主軸方向 N-20°-W。

出入り口 南壁中央から西寄りの位置に、南に向かって壁外に突出するように、堅く踏み固められた緩斜面を持っている。規模は、幅44cm、傾斜面の長さ58cm、角度15°を測る。

壁 壁高約32cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

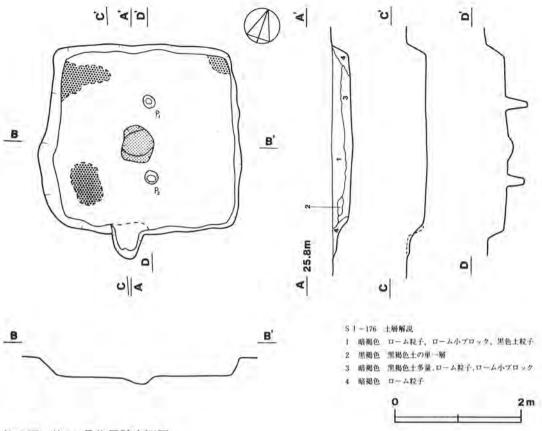
床 平坦で、全面が堅く踏み固められている。

ピット 2 か所 (P1・P2) 検出されている。P1は, 径20cm, 深さ36cm, P2は, 径22cm, 深さ29cmで、いずれも主柱穴と考えられる。

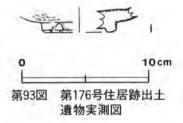
炉 出入り口側の床面中央部に床を浅く掘り窪めた炉と思われる施設を有している。規模は、長径60cm、短径54cmの楕円形を呈し、深さ12cmを測る。

覆土 4層からなる。第1~3層は、ロームブロックを均一に含む人為的な一括の埋め戻し土層と考えられる。第4層は、ロームの壁が剝落し、ローム土が自然堆積した土層である。

遺物 覆土中から時期不明の青磁(碗)片1点が出土している。



第92図 第176号住居跡実測図



第176号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器	種	法	k(cm)	100	形	0	特	徵	手 法 の 特 徴 胎土・色調・焼成 備	考
第93図 1	高青		1.3	2.0) 6.0) 0.8	で低い	小高	台を打	寺つ。		削り出し高台。底部を除き、貫入 の入ったオリーブ色の厚い釉がか かる。 という という という という という という という という という という	5%

第177号住居跡 (第94図)

位置 調査区の南部, E12f3区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.11 m, 短軸2.63 mの長方形を呈している。

主軸方向 N-15°-W。

出入り口 南壁中央から西寄りの位置に、南に向かって壁外に突出して、床面から確認面に至る 緩斜面を持った出入り口部を有している。規模は、長さ90cm、幅60cm、角度12°を測る。

壁 壁高約32cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

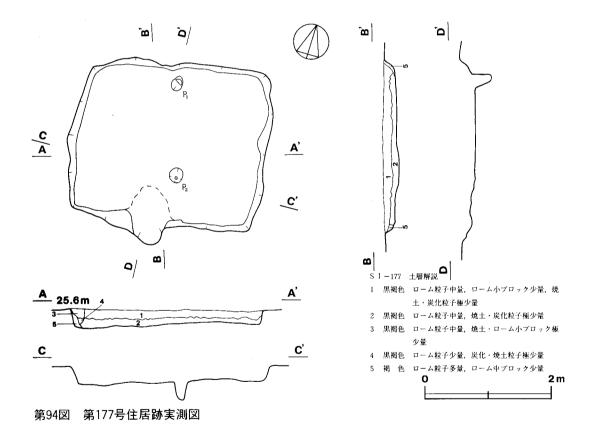
床 平坦で、堅く踏み固められ堅緻である。

ピット 2 か所(P 1 ・ P 2)検出されている。P 1 は,径18cm,深さ29cm,P 2 は,径21cm,深さ31cmで、いずれも主柱穴と考えられる。

覆土 3層からなる。第1・2層は、黒褐色の自然堆積土層と考えられる。第3層は、ロームの 壁が剝落し、ローム土等が自然堆積した土層である。

遺物 出土していない。

所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。



第178号住居跡(第95図)

位置 調査区の南部、E12g3区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.72m, 短軸2.70mの方形を呈している。

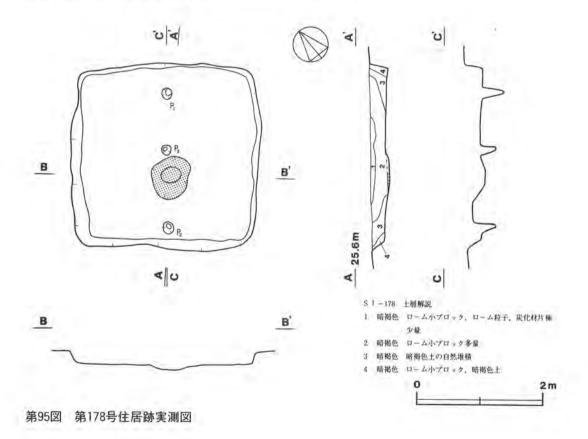
主軸方向 N-46°-E。

壁 壁高19~30cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、ほぼ全面が堅く踏み固められている。

ピット 3か所 $(P1\sim P3)$ 検出されている。P1は,径17cm,深さ36cm,P2は,径17cm,深さ42cmで,いずれも主柱穴と考えられる。P3は,径14cm,深さ27cmで補助柱穴と考えられる。炉 中央部南西寄りの床面を浅く掘り窪めている。規模は,長径70cm,短径62cmの楕円形で深さ12cmを測り,炉の中からは,灰と炭化物が検出されている。

覆土 4層からなる。第1・2層は,人為的な一括の埋め戻し土層と考えられる。第3・4層は,暗褐色の自然堆積土層である。第2層と床面との間に,厚さ2cmの炭化物層が観察されている。 遺物 覆土中から土師器(甕, 坏)片24点,須恵器(坏)片2点,土師質土器片3点が出土している。土師質土器中の1点は糸切り底の小皿である。本跡に伴う遺物は出土していない。 所見 遺構の形態から,12世紀以降の住居跡と考えられる。



第179号住居跡 (第96図)

位置 調査区の南部, F12b2区を中心に確認されている。 規模と平面形 長軸2.96m, 短軸2.90mの方形を呈している。 主軸方向 $N-2^{\circ}-W_{\circ}$

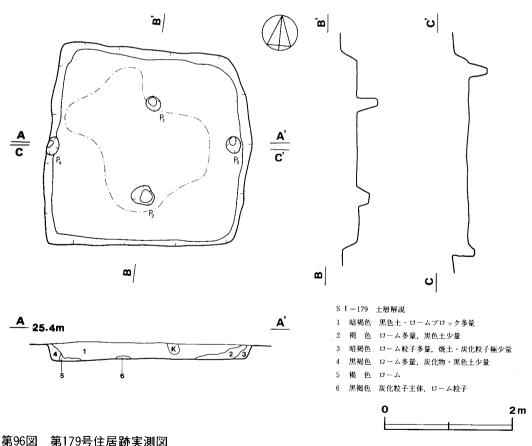
壁 壁高約22cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、P1、P2、P3に囲まれた範囲と、住居北西コーナ付近が堅く踏み固められ堅緻 である。

ピット 4か所 (P1~P4) 検出されている。P1は、径24cm、深さ32cm、P2は、径36cm、 深さ18cmで,いずれも主柱穴と考えられる。P3は,径24cm,深さ30cm, P4は,径25cm,深さ10 cmで,いずれも補助柱穴と考えられる。

覆土 5層からなり、すべてロームブロックや黒色土ブロックを均一に含む人為的な堆積土層と 考えられる。

遺物 覆土中から土師器 (甕) 片 9 点, 土師質土器片 2 点が出土している。本跡に伴う遺物は出 土していない。



第180号住居跡(第97図)

位置 調査区の南部, F12c2区を中心に確認されている。

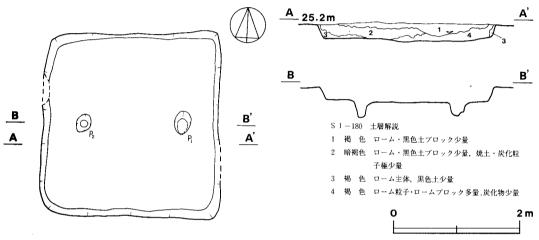
規模と平面形 長軸2.72m, 短軸2.60mの方形を呈している。

主軸方向 N-88°-E。

壁 壁高約22cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、ほぼ全面が堅く踏み固められ堅緻である。

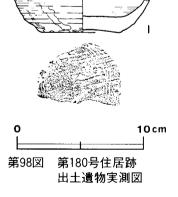
ピット 2 か所 $(P1 \cdot P2)$ 検出されている。P1 は,径30cm,深さ20cm,P2 は,径24cm,深さ24cmで,いずれも主柱穴と考えられる。



第97図 第180号住居跡実測図

覆土 4層からなり、すべて褐色土を主体とした自然堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕) 細片11点, 土師質土器片13点 が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。



第180号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備考
第98図	坏		平底。口縁部欠損。体部は内彎気	底部回転糸切り後, 無調整。体部	精製土を使用	P 301 35%
1	土師質土器	B(2.6)	味に立ち上がる。	内・外面横ナデ。	橙色	覆土
		C 6.3			良好	内面油煙付着

第181号住居跡 (第99図)

位置 調査区の南部、F12d2区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.72 m, 短軸2.70 m の方形を呈している。

主軸方向 N-0°。

壁 壁高6~16cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

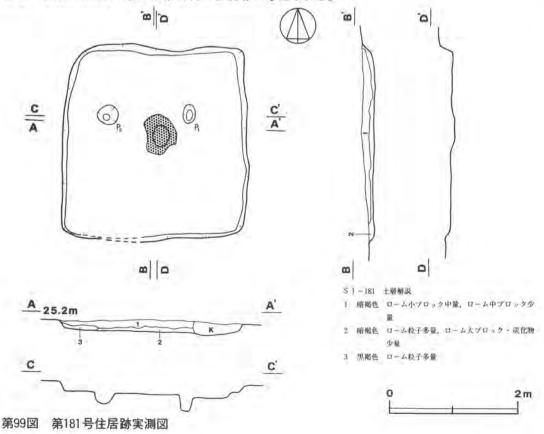
床 南部は近代の溝で削平されている。残存する北部は平坦で、堅く踏み固められている。

ピット 2 か所 (P1・P2) 検出されている。P1は, 径24cm, 深さ24cm, P2は, 径33cm, 深さ18cmで, いずれも主柱穴と考えられる。

炉 住居中央部から南寄りの位置に、床を浅く掘り窪めた炉と思われる施設を有している。炉からは、焼土と炭化物が検出されている。規模は、長径64cm、短径46cmの楕円形で、深さ5cmを測る。

覆土 3層からなり、いずれもロームを主体とした人為的な堆積土層と考えられる。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片21点, 須恵器 (坏) 片 1 点が出土している。すべて鬼高 期の土器の細片であり, 覆土への混入遺物と考えられる。本跡に伴う遺物は出土していない。



第182号住居跡 (第100図)

位置 調査区の南部, F12c1区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.72m, 短軸2.62mの方形を呈している。

主軸方向 N-1-E。

壁 壁高12~24cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

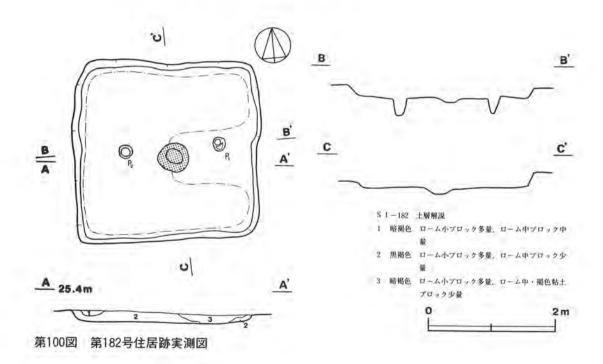
床 平坦で、P1付近を除いてほぼ全面が堅く踏み固められている。

ピット 2 か所 (P1・P2) 検出されている。P1は、径19cm, 深さ26cm、P2は、径23cm、深さ28cmで、いずれも主柱穴と考えられる。

炉 住居中央部から南寄りの位置に、床を浅く掘り窪めた炉と思われる施設を有している。規模は、長径50cm、短径48cmの楕円形で深さ8cmを測る。

覆土 3層からなり、いずれもローム小ブロックを多量に含み、人為的な堆積土層と考えられる。 遺物 出土していない。

所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。



第183号住居跡 (第101図)

位置 調査区の南部, F11co区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.90m, 短軸2.80mの方形を呈している。

主軸方向 N-1°-E。

壁 壁高8~15cmを測る。

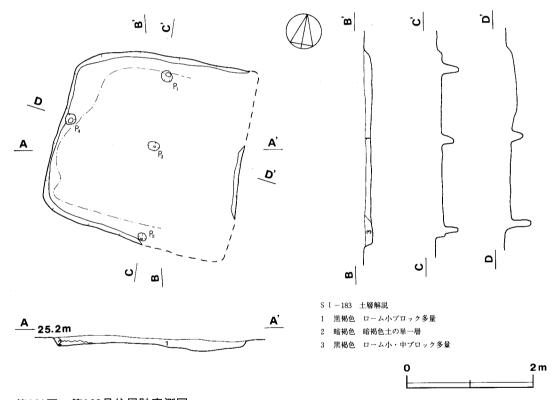
床 P1, P2の東側は,近代の溝により削平されている。残存部分は,平坦で堅く踏み固められている。

ピット 4 か所 $(P1\sim P4)$ 検出されている。P1 は,径18cm,深さ26cm,P2 は,径15cm,深さ22cmで,いずれも主柱穴と考えられる。P3 は,径17cm,深さ18cm,P4 は,径18cm,深さ36cmで,いずれも補助柱穴と考えられる。

覆土 2層からなり、いずれもローム小ブロックを主体とした人為的な堆積土層と考えられる。

遺物 覆土中から土師器 (甕) 細片 3 点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。



第101回 第183号住居跡実測図

第184号住居跡 (第102図)

位置 調査区の南部, F11c9区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.80m, 短軸2.78mの方形を呈している。

主軸方向 N-89°-E。

壁 壁高約17cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

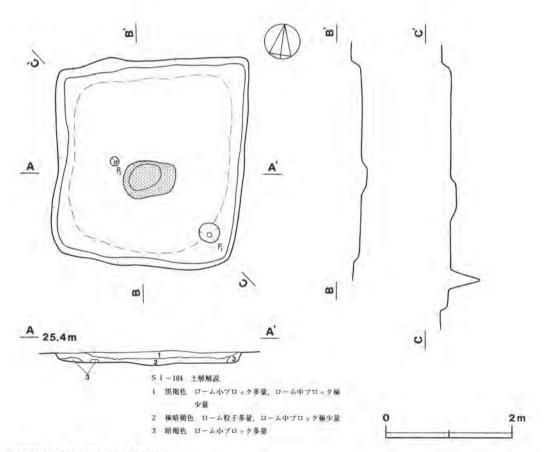
床平坦で、ほぼ全面が堅く踏み固められている。

ピット 2 か所 (P1・P2) 検出されている。 P1は, 径34cm, 深さ48cm, P2は, 径15cm, 深さ16cmで、 いずれも主柱穴と考えられる。

炉 住居中央部から南寄りの位置に床を浅く掘り窪めた炉のような施設を有している。規模は、 長径82cm、短径58cmの楕円形で深さ10cmを測る。

覆土 3層からなり、いずれもローム小ブロックを主体としており、人為的な堆積土層と考えられる。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏)片 8 点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。 所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。



第102図 第184号住居跡実測図

第185号住居跡 (第103図)

位置 調査区の南部, B10e8区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南西コーナー部が、第10号溝によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.75m, 短軸3.74mの方形を呈している。

主軸方向 N-9°-W。

壁 壁高約4~10cmを測る。

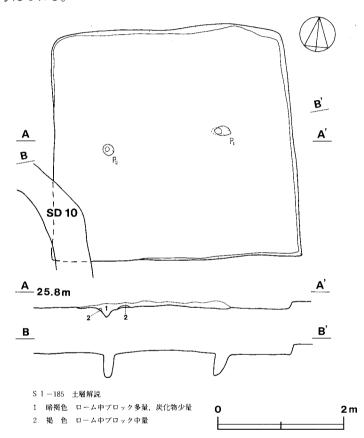
床 平坦で,堅く踏み固められ堅緻である。

ピット 2 か所 (P 1 ・ P 2) 検出されている。 P 1 は, 径21cm, 深さ34cm, P 2 は, 径17cm, 深さ36cmで、いずれも主柱穴と考えられる。

覆土 2層からなる。褐色土 を主体とした土層であるが, 残存する覆土が薄く堆積状況 は不明である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片 5 点, 内耳土器片 1 点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は,重複関係から,第10号溝よりも古い時期に構築されている。遺構の形態から,12世紀以降の住居跡と考えられる。



第103回 第185号住居跡実測図

第186号住居跡 (第104図)

位置 調査区の南部, E12d1区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.90m, 短軸2.82mの方形を呈している。

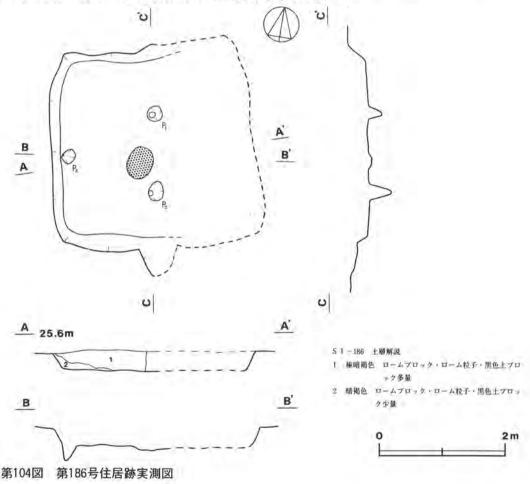
主軸方向 N-10°-W。

出入り口 南壁中央から東寄りの位置に、南に向かって壁外に突出して、床面から確認面に至る 緩斜面を持った出入り口部を有している。規模は、緩斜面の長さ70cm、幅50cm、角度23°を測る。 壁 壁高約26cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。 床 平坦で、堅く踏み固められている。住居の東部は近代の溝によって掘り込まれている。 ピット 3か所($P1\sim P3$)検出されている。P1は、径24cm、深さ22cm、P2は、径46cm、深さ36cmで、いずれも主柱穴と考えられる。P3は、径23cm、深さ24cmで、補助柱穴と考えられる。

炉 住居中央部から西寄りの位置に炭化物が薄く堆積している。堆積の範囲は、長径52cm、短径 42cmの楕円形を呈している。

覆土 2層からなりいずれもローム小ブロックを主体としており、人為的な堆積土層と考えられる。

遺物 覆土中から土師器 (甕) 細片 2 点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。 所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。



第187号住居跡 (第105図)

位置 調査区の南部, E12g2区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.74m, 短軸2.66mの方形を呈している。

主軸方向 N-16°-W。

壁 壁高約12cmを測る。

床 平坦で、東部が堅く踏み固められている。

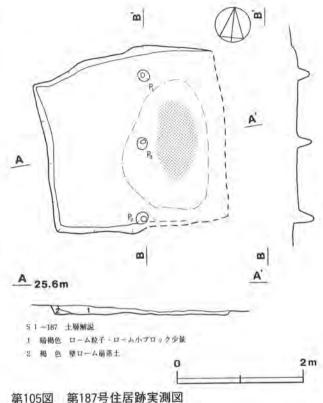
ピット 3か所 (P1-P3) 検出 されている。 P 1 は、径19cm, 深さ 20cm、P2は、径19cm、深さ30cmで、 いずれも主柱穴と考えられる。P3 は、径18cm、深さ24cmで、補助柱穴 と考えられる。

炉 住居中央部から南東寄りの位置 に炭化物が薄く堆積している。堆積 の範囲は、長径52cm、短径42cmの精 円形を呈している。

覆土 覆土が5~12cmと薄く堆積状 況は不明である。

遺物 出土していない。

所見 遺構の形態から、12世紀以降 の住居跡と考えられる。



第188号住居跡 (第106図)

位置 調査区の南部, Elleo区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.80m, 短軸2.60mの方形を呈している。

主軸方向 N-20°-W。

出入り口 南壁中央から東寄りの位置に、南に向かって壁外に突出して、床面から確認面に至る 緩斜面を持った出入り口部を有している。規模は、長さ124cm、幅80cm、角度13°を測る。

壁 壁高約34cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

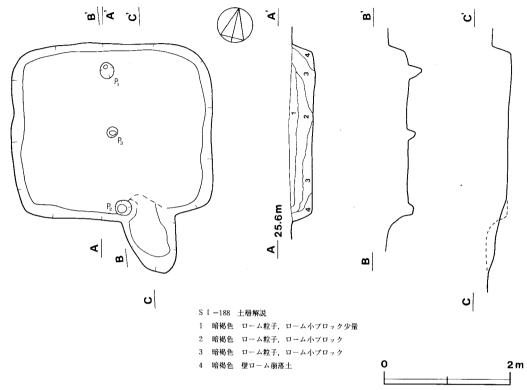
床平坦で、堅く踏み固められ堅緻である。

ピット 3か所 (P1~P3) 検出されている。P1は、径24cm、深さ22cm、P2は、径26cm、 深さ14cmで、いずれも主柱穴と考えられる。P3は、径18cm、深さ14cmで、補助柱穴と考えられ 30

覆土 4層からなり、全体にわたってロームブロックを均一に含む人為堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕) 片26点, 布目瓦片 1 点が P 1 のピットの直上から出土している。 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。



第106図 第188号住居跡実測図

第189A号住居跡 (第107図)

位置 調査区の南部, Elle9区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の西部が、第189B号住居跡の北東部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.18m, 短軸2.92mの方形を呈している。

主軸方向 N-20°-W。

出入り口 南壁中央から東寄りの位置に、南へ向かって壁外に突出して、床面から確認面に至る 緩斜面を持った出入り口部を有している。規模は、長さ68cm、幅38cm、角度13°を測り、粘土で 補強されている。

壁 壁高28~33cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

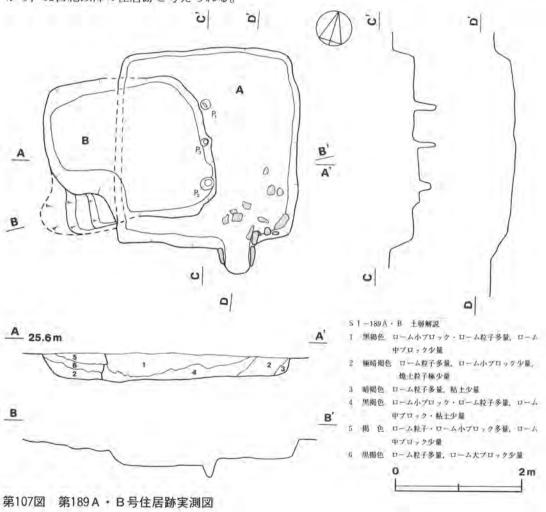
床 平坦で、堅く踏み固められ堅緻である。

ピット 3か所 $(P1\sim P3)$ 検出されている。P1は、径17cm、深さ24cm、P2は、径21cm、深さ20cmで、いずれも主柱穴と考えられる。P3は、径13cm、深さ22cmで、補助柱穴と考えられる。

覆土 4層からなり、いずれも暗褐色土主体で、やや少量のローム小ブロックを均一に含んだ人 為的な堆積土層と考えられる。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片20点, 須恵器 (坏) 片 1 点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は、重複関係から、第189B号住居跡よりも新しい時期に構築されている。遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。



第189B号住居跡 (第107図)

位置 調査区の南部, Elleg区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、北東部が第189 A号住居跡の西部に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸2.53m, 短軸2.40mの方形を呈している。

主軸方向 N-118-W。

壁 壁高約43cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、堅く踏み固められ堅緻である。

ビット 検出されていない。

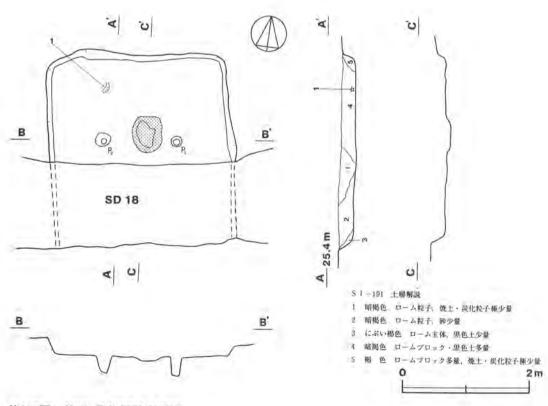
覆土 3層からなり、すべてロームブロックを均一に含む人為堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片10点, 須恵器 (坏) 片 1 点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は、重複関係から、第189 A 号住居跡よりも古い時期に構築されている。遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。

第191号住居跡 (第108図)

位置 調査区の南部, F11as区を中心に確認されている。



第108図 第191号住居跡実測図

重複関係 本跡の南部が、第18号溝によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸2.70 m, 短軸2.67 m の方形を呈している。

主軸方向 N-85°-E。

壁 壁高約24cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、堅く踏み固められている。

ピット 2か所 (P1・P2) 検出されている。

P1は、径18cm、深さ30cm、P2は、径23cm、

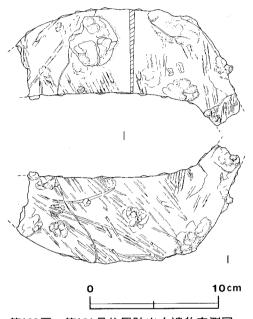
深さ28cmで、いずれも主柱穴と考えられる。

炉 住居中央部からやや北寄りの位置に床を浅く 掘り窪めた炉と思われる施設を有しており、炭化 物が充満している。規模は、長径60cm、短径46cm の楕円形で深さ8cmを測る。

覆土 3層からなり、すべてロームブロックを均 一に含む人為堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片20点, 須恵 器(甕)片2点,土師質土器片7点,鉄鎌片1点 が出土している。本跡に伴う遺物は出土していな V1º

所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考 第109図 第191号住居跡出土遺物実測図 えられる。



第191号住居跡出土遺物観察表

回收录品	器 種	法 量(cm)		孔径	重量	現存率	一			į.	
図版番号	矿 俚	最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)	T	ж	備考	
第109図 1	鎌	(17.6)	6.7	0.4		(139.4)	80	床直上		M16	

第192号住居跡(第110図)

位置 調査区の東南部、E11e。区を中心に確認されている。北側4分の1は調査区外に伸びている。 規模と平面形 南壁の長さ3.76mである。

主軸方向 N-4°-E。

壁 壁高100cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

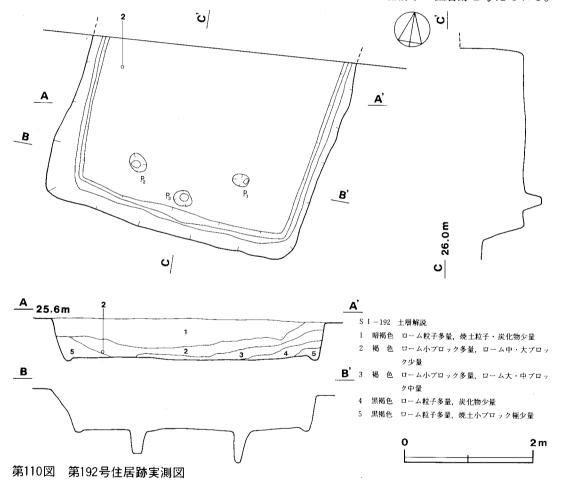
壁溝 壁直下を深さ5cm程浅く掘り窪め、断面形は皿状を呈し、竈部分を除き調査した範囲内は 全周している。

床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

ピット 3 か所 (P1~P3) 検出されている。P1·P2は, 径26~32cm, 深さ38~52cmで, いずれも主柱穴である。P3は, 径32cm, 深さ28cmで, 出入り口施設に伴うピットと考えられる。 **覆土** 5層からなる。第1·4·5層は, 自然堆積土層である。第2·3層は, ロームを均一に含み人為的に埋め戻された土層である。

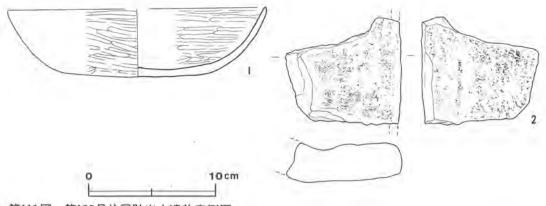
遺物 覆土中や床面から土師器(甕, 坏)片125点,須恵器(甕)片7点が出土している。布目瓦の破片(平瓦)3点と外面タタキの須恵器の破片が,覆土(第2層)中から出土し,1の土師器の大形の坏は、南東部の覆土中から出土している。

所見 遺構の形態や出土遺物から、第171号住居跡の時期に近い8世紀前半の住居跡と考えられる。



第192号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備考
第111図	坏	A 20.4	平底。体部は内彎して立ち上がる。	体部内・外面横位のヘラ磨き。	砂粒・長石・雲母	P 122 30%
1	土師器	B 5.5	口縁部は外上方に開く。		橙色	覆土
		C 10.0			良好	



第111図 第192号住居跡出土遺物実測図

図版番号	40. 86	法 献(cm)		孔径	承 最	現存率	10. 1 16. 3	th: W	
	器種	最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g.)	(%)	出土地点	備考
第111国 2	瓦	(8,7)	(9,3)	3,9		(265.6)	5	覆土 (2層)	DP14

第193号住居跡 (第112図)

位置 調査区の東南部、Ellg7区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸5.33 m, 短軸5.02 mの方形を呈している。

主軸方向 N-10°-E。

壁 壁高約58cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

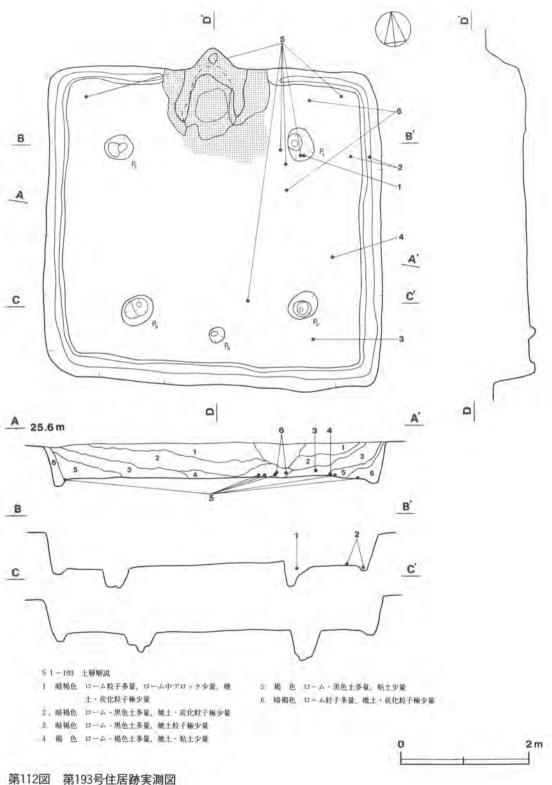
壁溝 壁直下を深さ5cm程浅く掘り窪め、断面形は皿状を呈し、竈部分を除き全周している。 床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

ピット 5 か所 (P1~P5) 検出されている。P1~P4は、径44~56cm、深さ32~50cmで、いずれも主柱穴である。P5は、径28cm、深さ10cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。 電 北壁中央部を34cm程壁外へ掘り込み、砂まじりの粘土で構築されている。規模は、長さ130cm、幅150cmを測り、袖部が良好に遺存している。燃焼部からは、天井部崩落土及び焼土粒子等が検出されている。火床部及び内壁面は、焼土化している。煙道部は、燃焼部奥から緩やかに外傾して立ち上がっている。

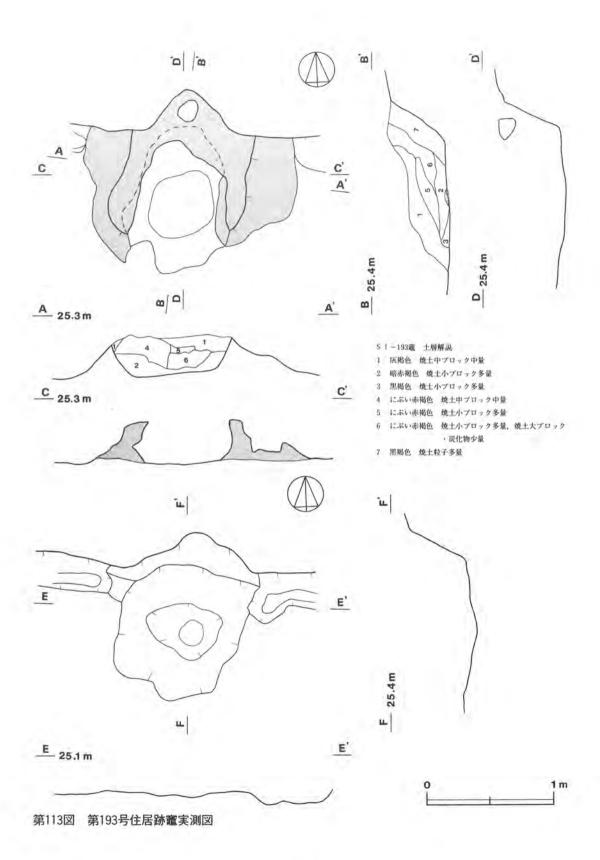
覆土 6層からなる。住居の廃絶後、自然堆積土層(第5・6層)が壁から1m程まで床面を覆った時点で、人為的な埋め戻し(第3・4層)が行われたものと思われる。その後は、竈の粘土(第2層)が溶けて流失して堆積し、最後に自然に土砂(第1層)が住居を埋没させたものと思われる。

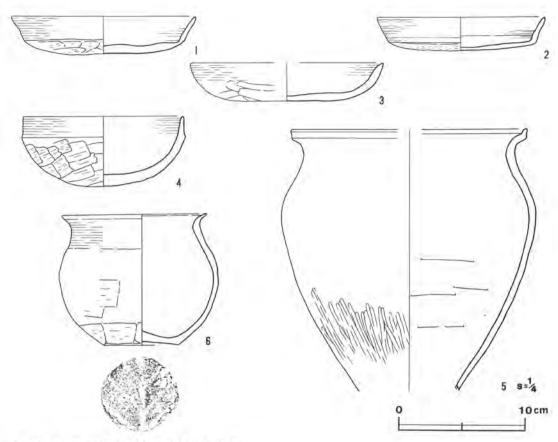
遺物 覆土中や床面から土師器 (甕、坏) 片402点, 須恵器 (坏) 片16点が出土している。遺棄 遺物群が一括して, 住居跡東部全面にかけてと北西コーナー付近の床面から, 住居廃絶後の自然 堆積土に覆われるように出土している。

所見 遺構の形態と出土遺物から、8世紀前半の住居跡と考えられる。



NATION OF THE STATE





第114図 第193号住居跡出土遺物実測図

第193号住居跡出土遺物観察表

划版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形の特徴	胎土·色調·焼成	備	考
第114図	坏 土 師 器	A 14.6 B 3.2	平底でわずかに丸みを持つ。底部 と口縁部の境に弱い稜を持つ。口 縁部は外傾して立ち上がる。	底部不定方向のヘラ削り。口縁部 内・外面横ナデ。	砂粒·長石·雲母 暗赤灰色 普通	P 123 床面	80%
2	本 士 師 器	A 13.3 B 2.7 C 11.8	平底でわずかに丸みを持つ。底部 と口縁部の境に弱い稜を持つ。口 縁部は外傾して立ち上がる。	底部不定方向のヘラ削り。口縁部 内・外面横ナデ。	砂粒·長石·雲母 橙色 普通	P124 床面	70%
3	本 土師器	A 15.2 B 3.1 C 8.0	平底。体部は内劈して立ち上がる。 口縁部は外上方に立ち上がる。	底部へラ削り。口縁部内・外面横 ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 良好	P125 床面	30%
4	本 土師器	A 12.6 B 5.6	丸底。体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部との境に稜を持つ。 口縁部は垂直に立ち上がる。	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横 ナデ。	砂粒·長石·雲母 橙色 普通	P126 床面	90%
.5	売 土 師 器	A 24.8 B(28.0)	底部欠損。胴部上位に最大径を持ち、顕部から口縁部にかけて丸み をもって外反する。口唇部を上方 につまみあげる。	胴部外面中位以下斜位のヘラ磨き。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒·石英·長石 雲母 橙色 普通	P127 床面	30%
6	小形斃土師器	B 10.4	平底。胴部は内彎しながら立ち上 がる。頚部はくびれ、口縁部は外 反する。	底部木葉痕。胴部外面へラ削り。 口縁部内・外面横ナデ。	砂粒 赤褐色 普通	P 129 復士(3~	70% 4₩)

第195号住居跡 (第115図)

位置 調査区の東南部、E12d3区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.41 m. 短軸2.38 mの方形を呈している。

主軸方向 N-7°-W。

壁 壁高約14cmを測り、ほば垂直に立ち上がっている。

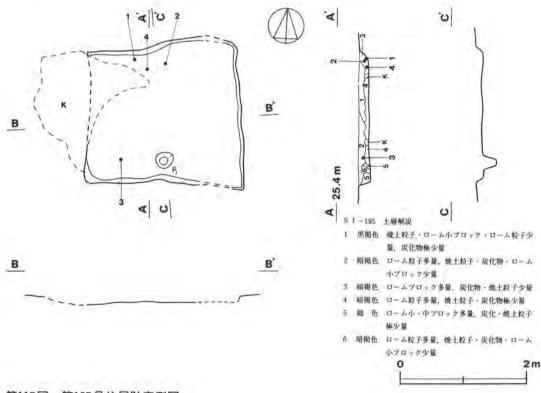
床 平坦で、床面全体が踏み固められている。北西コーナー付近から西壁にかけて撹乱を受けて いる。

ピット 1か所 (P1) 検出されている。P1は、径24cm、深さ21cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

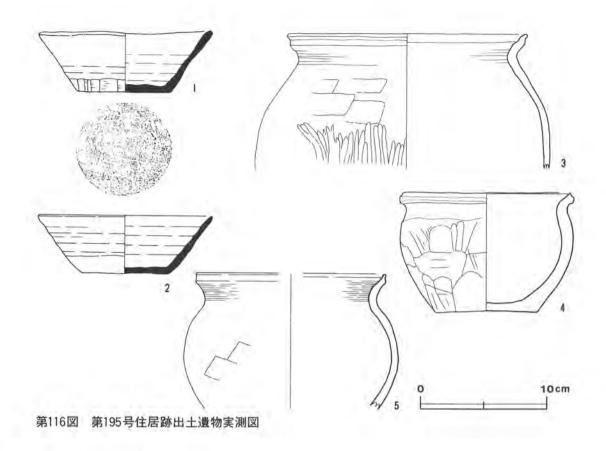
覆土 6層からなる。第1~3層は、自然堆積土層である。第4層は、崩壊した床の一部と考えられ、ローム土・ロームプロックを主体としている。第5·6層は、柱穴内の堆積土層である。

遺物 覆土中や床面から土師器 (甕, 坏) 片130点, 須恵器 (甕, 坏) 片40点が出土している。北部の床面から、4の土師器の甕と1・2の須恵器の坏が出土している。

所見 遺構の形態や出土遺物から、9世紀前半の住居跡と考えられる。



第115図 第195号住居跡実測図



第195号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土·色調·燒成	備考
第116図 1	坏 須恵器	A 13.6 B 5.0 C 7.3	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部一方向へラ削り。体部下端手 持ちへラ削り。体部内・外面横ナ デ。	砂粒·長石·雲母 浅黄色 普通	P302 100% 床面
2	坏 須 惠 器	A 13.8 B 5.7 C 6.9	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部一方向ヘラ削り。体部下端手 持ちヘラ削り。体部内・外面横ナ デ。	砂粒·長石·雲母 灰色 普通	P 303 70% 床面
3	養 土 師 器	A 19.0 B(10.8)	胴下半部欠損。頭部はくびれ、口 縁部は外傾する。口唇部を外上方 につまみあげる。	胴部へラ磨き。口縁部内・外面横 ナデ。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 304 20% 覆土(2局)
4	A STATE	A 13.2 B 9.5 C 7.8	平底。胴部は内劈気味に立ち上が り、口縁部で外反する。口唇部を わずかにつまみあげる。	胴下半部ペラ削り。口縁部内・外 面横ナデ。	長石・石英・雲母 にふい赤褐色 普通	P305 100% 床面
5	33,547,53	A (15.0) B (10.8)	底部欠損。胴部中位に最大径を持 ち口縁部は外反する。口唇部を上 方につまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。	長石·石英·雲母 褐灰色 不良	P 306 20% 養土 摩耗

第197号住居跡 (第117図)

位置 調査区の北部, Allig区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北東部は、第6号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 南壁の長さ2.82mを測る。

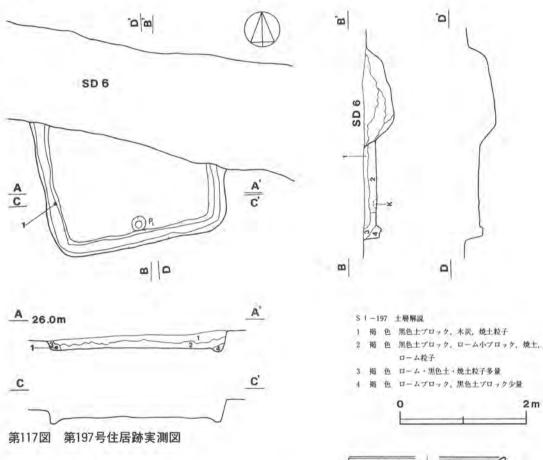
主軸方向 N-12°-W。

壁 壁高14~30cmを測り、垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を6cm程掘り窪め、断面形は皿状を呈している。

床平坦で、踏み固められ堅緻である。

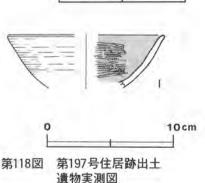
ピット 1 か所 (P1) 検出されている。P1は、径26cm、深さ22cmで、出入り口施設に伴うビ ットと考えられる。



覆土 4層からなり、すべて自然堆積土層である。

遺物 覆土中や床面から土師器 (甕, 坏) 片178点, 須恵 器(甕,坏)片31点が出土している。1の内黒の土師器 の坏の破片が,床直上から出土している。

所見 遺構の形態や出土遺物から、第170号住居跡とほぼ 同時期に存在したと考えられ、9世紀後半の住居跡と考



2m

えられる。

第197号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·燒成	備考
第118図	坏	A(12.5)	底部欠損。体部は外傾して立ち上	体部外面横ナデ。内面磨き後,黒	砂粒・雲母	P 237 20%
1	土師器	B(4.3)	がる。	色処理。	にぶい褐色	覆土
					普通	

第201号住居跡 (第119図)

位置 調査区の北部、B11e5区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.23m, 短軸

2.22 m の方形を呈している。

主軸方向 $N-0^{\circ}$ 。

壁 壁高約6~10cmを測る。

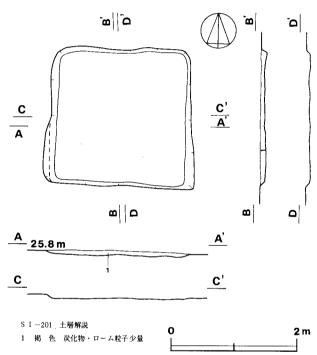
床 平坦で、堅く踏み固められて いる。

ピット 検出されていない。

覆土 覆土が薄く堆積状況は不明である。

遺物 出土していない。

所見 遺構の形態から、12世紀以 降の住居跡と考えられる。



第119図 第201号住居跡実測図

第202号住居跡 (第120図)

位置 調査区の北部, B11g3区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.64 m, 短軸2.50 m の方形である。

主軸方向 N-72°-W。.

壁 壁高2~6cmを測る。

床 平坦で、堅く踏み固められ堅緻である。

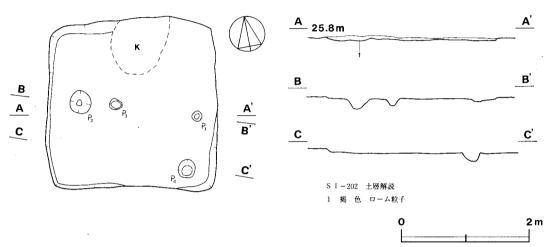
ピット 4 か所 (P1~P4) 検出されている。P1は, 径16cm, 深さ4cm, P2は, 径35cm, 深さ16cmで, いずれも主柱穴と考えられる。P3は, 径20cm, 深さ12cm, P4は, 径31cm, 深さ

14cmで、いずれも補助柱穴と考えられる。

覆土 覆土が薄く堆積状況は不明である。

遺物 出土していない。

所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。



第120図 第202号住居跡実測図

第203号住居跡 (第121図)

位置 調査区の北部、Bllf1区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.58 m, 短軸2.51 mの方形を呈している。

主軸方向 N-12°-E₀

出入り口 南壁中央からやや東に寄った位置に、南へ向かって壁外に突出して、床面から確認面に至る緩斜面を持った出入り口部を有している。規模は、長さ50cm、幅54cm、角度11°を測る。 壁 壁高4~16cmを測る。

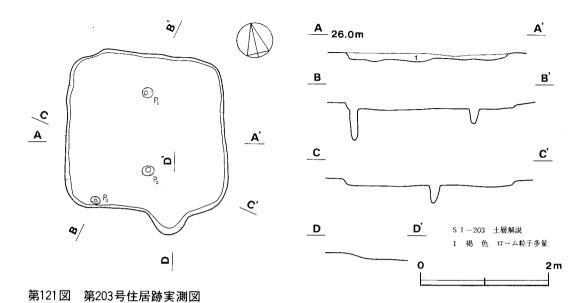
床 平坦で、堅く踏み固められ堅緻である。

ピット 3か所 ($P1\sim P3$) 検出されている。P1は,径17cm,深さ24cm,P2は,径21cm,深さ26cmで,いずれも主柱穴である。P3は,径16cm,深さ50cmで,補助柱穴と考えられる。

覆土 残存する覆土が薄く堆積状況は不明である。

遺物 覆土中から土師器 (甕) 片 1 点, 須恵器 (甕) 片 1 点, 土師質土器片 1 点が出土している。 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。

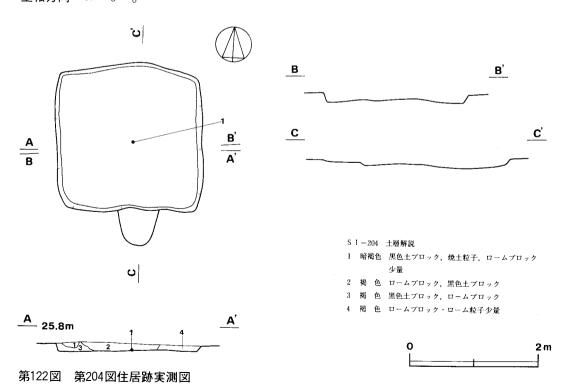


第204号住居跡 (第122図)

位置 調査区の北部, B11f7区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.36 m, 短軸2.33 mの方形を呈している。

主軸方向 N-0°。



出入り口 南壁中央から東に寄った位置に、南へ向かって壁外に突出して、床面から確認面に至る緩斜面を持った出入り口部を有している。規模は、長さ66cm、幅56cm、角度8°を測る。

壁 壁高約8~12cmを測る。

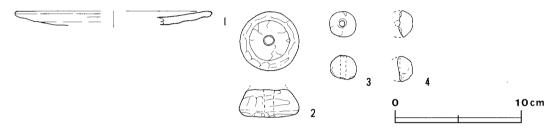
床 平坦である。北部中央に木の根による撹乱が見られる。

ピット 確認できない。

覆土 4層からなる。褐色土主体の土層で、覆土が浅く堆積状況は不明である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏, 蓋, 高台付皿) 片 8 点, 須恵器 (甕) 細片 1 点, 土製紡錘車 1 点, 球状土錘 2 点が出土している。 1 の土師器の高台付皿の破片と須恵器の甕の細片は, 中央部床面から出土しているが、覆土の堆積と同時に流れ込んだものと考えられる。

所見 遺構の形態と出土遺物等から、12世紀以降の住居跡と考えられる。



第123回 第204号住居跡出土遺物実測図

第204号住居跡出土遺物観察表

7,0001	DO 66	A Format / A	DD TV CD det /dl/	手法の特徴	胎土·色調·焼成	備	考
凶版番号	器 種	法量(em)	器形の特徴	手法の特徴	后工, 巴納, 观风	THE	- 15
第123図	高台付皿	A(15.6)	口縁部片。体部は緩やかに立ち上	体部内面へラ磨き。外面回転へラ	長石・石英・雲母	P 308	5%
1	土師器	B(1.1)	がり, 口縁部に至る。	削り。口縁部外面横ナデ。	灰褐色	床面	
					普通		

contract to	ДO		重		法 量(cm)	_	孔径	重 量	現存率	出	+	地	点	備	考
図版番号	器	1	浬	最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)	ш		75	7111	pia	,
2	紡	錘	車	4.7	4.7	2.3		50.2	90					DP11	
3	土		錘	1.9	2.1		0.5	6.6	100					DP12	
4	土		錘	2.1	(1.2)			3.9	50					DP13	

第205号住居跡(第124図)

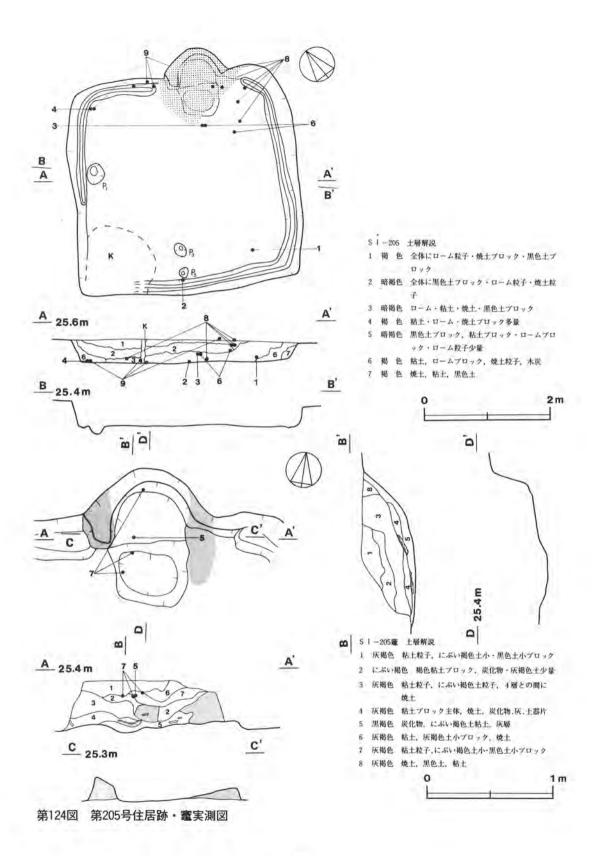
位置 調査区の北部, B11jo区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.53 m, 短軸3.50 m の方形を呈している。

主軸方向 N-15°-W。

壁 壁高33cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を6cm程掘り窪め、断面形は皿状を呈し、竈部分を除き全周している。



床 平坦で、踏み固められ堅緻である。南西コーナー付近は撹乱を受けている。

ピット 3か所 $(P1 \sim P3)$ 検出されている。P1は、220cm、深さ14cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。 $P2 \cdot P3$ は、 $224 \sim 34$ cm、深さ14cmで、性格は不明である。

電 北壁中央からやや東寄りの位置を約40cm程壁外へ掘り込み、砂まじりの粘土で構築されている。規模は、長さ約110cm、幅は袖部が遺存せず不明である。燃焼部からは、灰、炭化物、崩落粘土が検出されている。火床部は、ほぼ平らで焼土化している。煙道部は、火床部から緩やかに立ち上がっている。

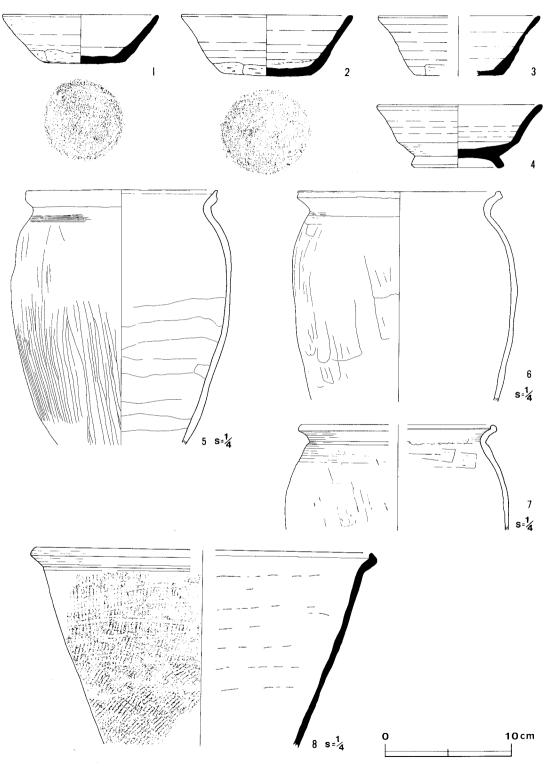
覆土 7層からなる。第1・3~7層は、自然堆積土層である。第2層は、ロームブロックを均一に含む人為的に埋め戻された土層である。第3層は、竈の粘土ブロックを含んでいる。第6層は、住居廃絶直後の薄い暗褐色の自然堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片125点, 須恵器 (坏, 甑) 片49点が出土している。 2 · 3 の 須恵器の坏, 5 ~ 7 の土師器の甕までは, 住居廃絶後の床面を覆う自然堆積土層中への投棄遺物 である。住居内への遺物破片の投棄は, 住居北部と南部の中央付近に限られている。

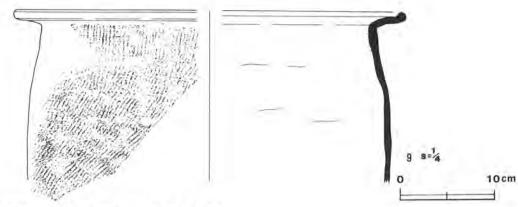
所見 遺構の形態や出土遺物から、9世紀前半の住居跡と考えられる。

第205号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	£	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·燒成	備	考
第125図	坏		A 12.2	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部不定方向ヘラ削り。体部下端	砂粒・石英・長石	P 146	95%
1	須 恵	器	B 4.0		手持ちヘラ削り。口縁部内・外面	灰色	覆土(3	層)
			C 6.5		横ナデ。	普通		
	坏		A 13.4	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部一方向ヘラ削り。体部下端回	砂粒·長石·雲母	P 147	60%
2	須 恵	器	B 4.9	口縁部はわずかに外反する。	転へラ削り。口縁部内・外面横ナ	灰色	床面	
			C 9.0		デ。	良好		
	坏		A 12.8	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部一方向ヘラ削り。体部下端回	砂粒·長石·石英	P 148	40%
3	須 恵	쁆	B 4.8	口縁部はわずかに外反する。	転へラ削り。口縁部内・外面横ナ	灰黄褐色	床面直上	(3層)
			C(7.0)		デ。	普通		
	高台付	坏	A 13.0	平底で「ハ」の字状に開く高台が	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付	長石・雲母	P 150	90%
4	須 恵	器	B 5.0	付く。体部は外傾して立ち上がり、	け。体部内・外面横ナデ。	黄灰色	覆土(3	層)
			C 7.4	口縁部はわずかに外反する。		普通		
	甕		A 20.1	底部欠損。胴部上位に最大径を持	胴部外面中位以下斜位のヘラ磨き。	砂粒・石英・長石	P 151	40%
5	土師	器	B(27.1)	ち、頸部から口縁部にかけて小さ	口縁部内・外面横ナデ。	雲母 にぶい褐色	篭	
				く丸みをもって外反する。口唇部		普通		
				を外上方につまみ上げる。				
	甕		A 21.3	底部欠損。胴部上位に最大径を持	胴部外面ヘラ削り。口縁部内・外	砂粒・石英・長石	P 152	30%
6	土 師	器	B(22.3)	ち,頸部から口縁部にかけて小さ	面横ナデ。	雲母 にぶい橙色	竈	
		İ		く丸みをもって外反する。口唇部		普通		
				をわずかに外上方につまみ上げる。				
	甕	Ţ	A 20.2	底部欠損。頸部は「く」の字状に	胴部内・外面へラ削り。口縁部内・	砂粒・石英・長石	P 153	15%
7	土師	器	B(11.2)	屈曲する。口唇部は内側に小さく	外面横ナデ。	雲母 にぶい赤褐色	竈	
				折り返され、一条の沈線を残す。		普通		
	甕	T	A 36.2	底部欠損。胴部は外傾して立ち上	胴部長方形の格子状叩き。口縁部	砂粒・長石	P 154	30%
8	須恵	끊	B(20.9)	がり, 口縁部は外反する。口唇部	内・外面横ナデ。	暗青灰色	竈	
				は折り返され内上方に立ち上がる。		良好		



第125図 第205号住居跡出土遺物実測図(1)



第126図 第205号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量(em)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備	考
第126図 9		1000	底部欠損。胴部はほぼ直線的に立 ち上がり,顕部で大きく屈曲する。 口縁部は外反する。口唇部内側は 上方が肥厚する。		砂粒·長石 暗青灰色 良好	P 155	30%

第206号住居跡 (第127図)

位置 調査区の北部, Clla 9区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.79m, 短軸3.61mの方形を呈している。

主軸方向 N-7°-W。

壁 壁高44cmを測り、緩やかに外傾して立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を 6 cm程据り窪め、断面形はU字状を呈している。竈部分を除き全周している。

床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

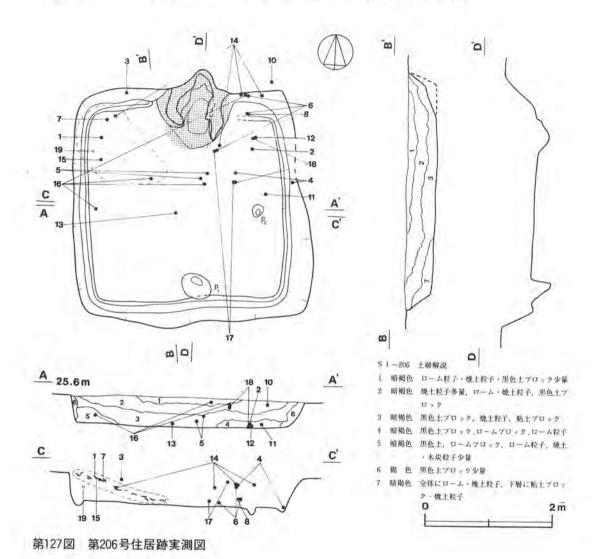
ビット 2か所 (P1・P2) 検出されている。P1は、径50cm, 深さ28cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P2は、径20cm、深さ15cmで、性格は不明である。

電 北壁中央からやや東寄りの位置を32cm程壁外へ掘り込み、砂まじりの粘土で構築されている。 規模は、長さ120cm、幅110cmを測る。袖部が良好に遺存しており、両袖とも基底部の幅は35cmを 測る。燃焼部には、焼土粒子が入っている。火床部は、ほぼ平らで焼土化している。煙道部は、 火床部から緩やかに立ち上がっている。

覆土 7層からなる。第1層は、自然堆積土層である。第3・4層は、投棄遺物を多量に含む黒色土主体の自然堆積土層である。第2・7層は、ロームブロックを均一に含む人為的な堆積土層である。第6層は、壁ロームの崩落土層である。

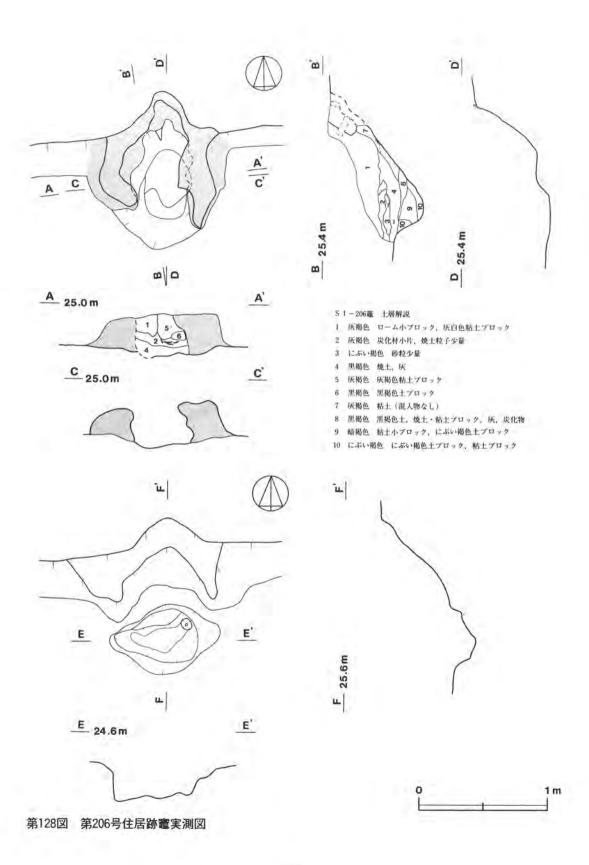
遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片443点, 須恵器 (甕, 坏, 盤) 片248点が出土している。多量の投棄された土器が, 覆土 (第3層) 中から出土している。

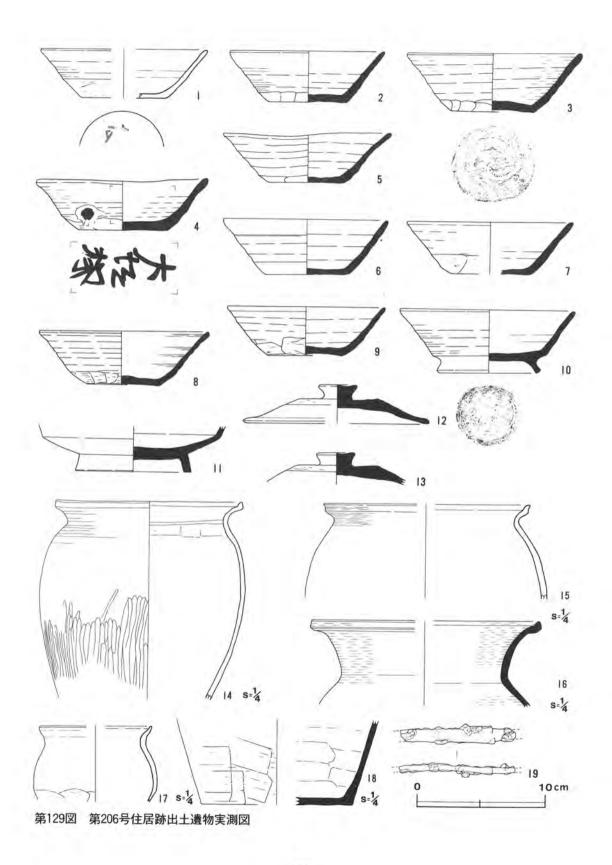
所見 遺構の形態や多量の投棄遺物から、9世紀後半の住居跡と考えられる。



第206号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(em)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備考
第129図 1	本 新 器	A 13.2 B 3.9 C (6.8)	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部不定方向へラ削り。体部下端 手持ちへラ削り。口縁部内・外面 横ナデ。	長石・雲母・スコ リア 灰黄褐色 普通	P 246 30% 養土(3層) 刻書
2	坏须惠器	A 12.2 B 4.1 C 6.2	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部一方向へラ削り。体部下端回 転へラ削り。口縁部内・外面横ナ デ。	砂粒·長石·雲母 灰色 普通	P 248 100% 床面(4層)





図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土·色調·焼成	備考
第129図	坏	A 13.6	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。体部下端手持	長石·石英·雲母	P 249 95%
3	須恵器	B 4.8		ちへラ削り。体部内・外面横ナデ。	にぶい赤褐色	覆土(3層)
		C 6.4		ロクロ目を明瞭に残す。	普通	
	坏	A 13.4	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後押え。体部下	砂粒·長石·雲母	P 250 80%
4	須恵器		口縁部はわずかに外反する。	端手持ちヘラ削り。体部内・外面	灰色	覆土
•	750 750 111	C 7.0		横ナデ。	普通	墨書「大垣郷」
-	坏	A 13.2	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部一方向ヘラ削り。体部下端回	長石·石英·雲母	P 251 80%
5	須恵器	i	口縁部はわずかに外反する。	転へラ削り。口縁部内・外面横ナ	灰色	覆土
		C 5,9	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	デ。	普通	
ļ	坏	A 12.9	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後、一方向ヘラ	長石・石英・雲母	P 252 85%
6	1	B 4.5	, ==== ,, .,,	削り。体部下端手持ちヘラ削り。	灰白色	獲土(3層)
		C 6.4		体部内・外面横ナデ。	普通	
-	坏	A 13.1	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部一方向へラ削り。体部下端回	砂粒・雲母	P 253 80%
7		B 4.2	口縁部はわずかに外反する。	転へう削り。口縁部内・外面横ナ	灰色	覆土
-		C(6.2)	, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	デ。	普通	
	坏	A 13.5	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転へラ切り後、一方向へラ	長石・石英・砂粒	P 254 60%
8	i .	B 4.3	口縁部はわずかに外反する。	削り。体部下端手持ちへラ削り。	灰褐色	覆土
		C 5.6	,	体部内・外面横ナデ。	普通	
	坏	A 12.5	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転へラ切り後、一方向へラ	長石·石英·砂粒	P 255 60%
9		В 3.8	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	削り。体部下端手持ちヘラ削り。	黄灰色	覆土
ľ	75K 765. BB	C 5.9		体部内・外面横ナデ。	良好	
 	高台付坏	A 13.6	平底で「ハ」の字状に開く高台が		砂粒・長石・雲母	P 256 90%
10		B 5.1	付く。体部は外傾して立ち上がる。	け。体部内・外面横ナデ。	灰色	 北東コーナー
10	754 7G. III	C 7.8	11 (0 Habito) (NO (E) SELO (O)	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	普通	
		E 1.0				
	高台付坏		口縁部欠損。平底で高台が付く。	底部回転へラ削り後、高台貼り付	砂粒·長石·石英	P 270 30%
11		D 9.2	体部下端は内彎気味に立ち上がる。	it.	灰色	覆土(4層)
	72. 110	E 1.5	11 44 1 14 14 14 14 14 14 14 14 14 14 14	, ,	普通	
	蓋	A 14.8	天井部に平坦面を持ち、緩やかに	天井部平坦面回転へラ削り。口縁	長石・石英・雲母	P 268 40%
12	須恵器	В 3.1	口縁部に至る。腰高で偏平なつま	部内・外面横ナデ。	にぶい褐色	床面(7層)
		F 2.9	みが付く。		普通	
		G 1.2				
	蓋	B(2.5)	天井部に平坦面を持ち、緩やかに	天井部平坦面回転へラ削り。	砂粒・長石・雲母	P 269 40%
13	須 恵 器	F 3.1	口縁部に至る。腰高で偏平なつま		にぶい褐色	覆土(3層)
		G 1.1	みが付く。		普通	
	発	A 19.7	底部欠損。胴部上位に最大径を持	胴部外面中位以下斜位のヘラ磨き。	長石・石英・雲母	P 257 60%
14	土師器	B(21.1)	ち、頸部から口縁部にかけて小さ	口縁部内・外面横ナデ。	にぶい赤褐色	北東コーナー
ŧ			く外反する。		普通	
<u> </u>	甕	A(21.6)	胴下半部欠損。頸部はくびれ,口	口縁部内・外面横ナデ。	長石·石英·雲母	P 264 5%
15		B(10.0)			明赤褐色	
1	"		上方につまみ上げる。		普通	
	甕	A(23.8)	胴部欠損。頸部は屈曲し、口縁部	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒·長石·雲母	P 258 5%
16		B(9.1)			灰色	北東コーナー
			かにつまみ上げる。		普通	
	小形碧	E A(11.8)		胴部外面中位以下へラ削り。	砂粒·長石·雲母	P 267 20%
17		B(8.1)			灰赤色	覆土(2~3層)
		/			不良	
	甕		平底。胴上半部欠損。胴部は外傾	胴部外面斜位のヘラ削り。	長石・石英・雲母	P 260 10%
18		B(9.0)			灰色	覆土(2~4層)
		C(15.8)			普通	
		1 - (20.0)	<u> </u>		1	

図版番号	器	種	法 量(cm)			重量	現存率		,	4 141	<u></u>	(#:	+-
	tia		最大長	最大幅	最大厚	(g)	(%)	出	土	地	点	備	考
第129図 19	刀	子	(9.2)	0.9	0.4	(13.5)	50	覆土				M11	

第207号住居跡 (第130図)

位置 調査区の北部、C11b8区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の東部が、第208号住居跡の西部を掘り込んでいる。

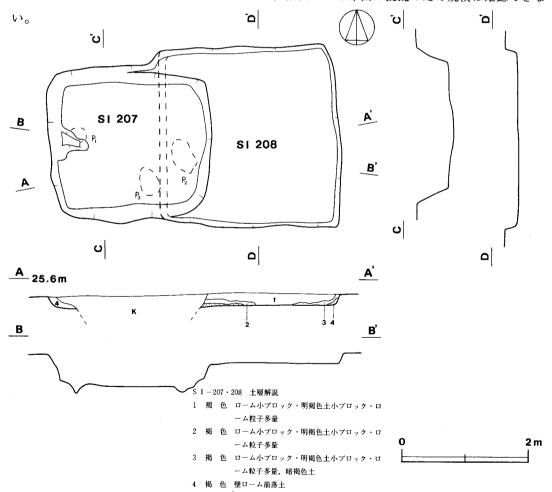
規模と平面形 長軸2.51 m, 短軸2.45 mの方形を呈している。

主軸方向 N-0°。

壁 壁高約67cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 中央部に大木の抜根による撹乱が入っており、床の残存状態が著しく悪い。

ピット 3か所 (P1~P3) 検出されている。抜根による床面の撹乱のため規模は確認できな



第130図 第207・208号住居跡実測図

覆土 抜根による撹乱を受けており堆積状況は不明である。

遺物 覆土中から平安時代前半の土師器 (甕) 片23点, 須恵器 (甕, 坏, 甑) 片 9点, 土師質土器片 1点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は,重複関係から,第208号住居跡よりも新しい時期に構築されている。遺構の形態から,12世紀以降の住居跡と考えられる。

第208号住居跡 (第130図)

位置 調査区の北部、C11b8区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の西部が、第207号住居跡の東部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸2.88 m, 短軸2.87 m の方形を呈している。

主軸方向 N-0°。

出入り口 南壁中央から西に寄った位置に、南へ向かって壁外に突出している。床面から確認面は緩斜面となっている。規模は、幅60cm、緩斜面の長さは104cm、角度は15°を測る。

壁 壁高約16cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、堅く踏み固められ堅緻である。

ピット 検出されない。

炉 南西部の床面全体に炭化物が薄く堆積している。

覆土 4層からなり、いずれも褐色土を主体とした自然堆積土層である。

遺物 覆土中から平安時代の土師器(甕)片12点,須恵器(甕,坏)片 2 点が出土している。本 跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は,重複関係から,第207号住居跡よりも古い時期に構築されている。遺構の形態から,12世紀以降の住居跡と考えられる。

第209号住居跡 (第131図)

位置 調査区の北部, B11h2区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.99 m, 短軸2.90 m の方形を呈している。

主軸方向 N-0°。

出入り口 南壁中央から西に寄った位置に、南へ向かって壁外に突出して、床面から確認面に至る堅く踏み固められた緩斜面を有している。規模は、長さ104cm、幅60cm、角度は15°を測る。

壁 壁高約20~26cmを測り、緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、西部が堅く踏み固められている。

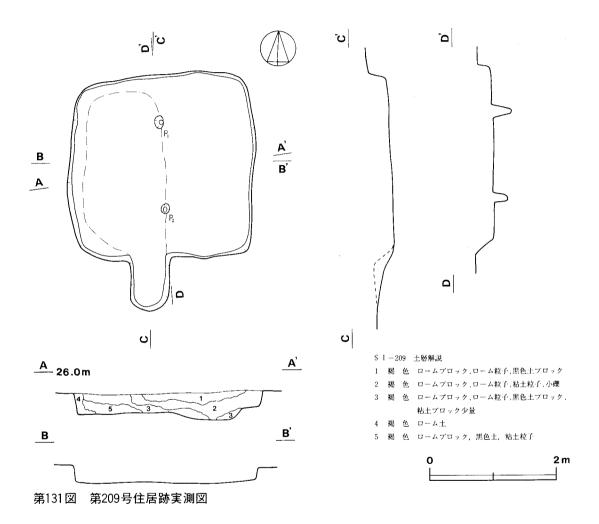
ピット 2 か所 (P 1 ・ P 2) 検出されている。 P 1 は、径18 cm、深さ32 cm、 P 2 は、径14 cm、

深さ22cmで、いずれも主柱穴と考えられる。

覆土 5層からなり、いずれも各層中にロームブロックが入っており、人為的な堆積土層と考えられる。

遺物 覆土中から土師器 (甕) 片が14点出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。



第210号住居跡 (第132図)

位置 調査区の北部、B11i3区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.64 m, 短軸2.42 m の方形を呈している。

主軸方向 N-22°-E。

壁 壁高約5cmを測る。

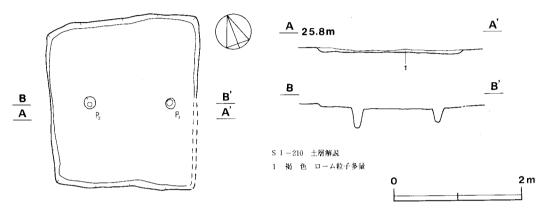
床 平坦で、堅く踏み固められ堅緻である。

ピット 2 か所 $(P1 \cdot P2)$ 検出されている。P1 は,径16 cm,深さ22 cm,P2 は,径19 cm,深さ31 cm で、いずれも主柱穴と考えられる。

覆土 1層で、ローム主体の土層であり、覆土が薄く堆積状況は不明である。

遺物 覆土中から平安時代の土師器 (甕, 坏) 片14点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。



第132図 第210号住居跡実測図

第211号住居跡(第133図)

位置 調香区の北部、B11i4区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.90 m, 短軸2.80 mの方形を呈している。

主軸方向 N-0°。

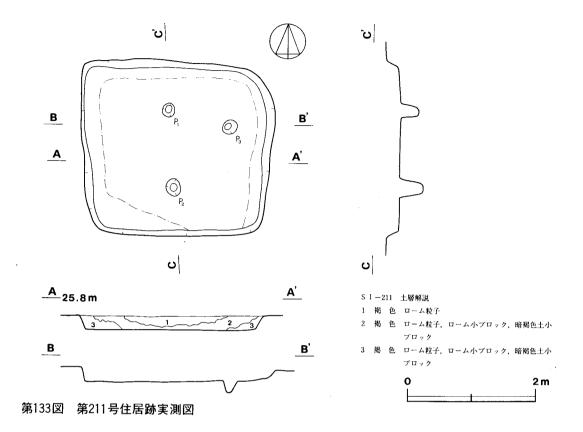
壁 壁高18~24cmを測り、緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、全面が堅く踏み固められている。

ピット 3 か所(P 1 ~ P 3)検出されている。P 1 は,径18cm,深さ28cm,P 2 は,径25cm,深さ38cmで,いずれも主柱穴と考えられる。P 3 は,径23cm,深さ18cmで,補助柱穴と考えられる。**覆土** 3 層からなり,いずれも褐色土主体の自然堆積土層と考えられる。

遺物 覆土中から平安時代の土師器 (甕, 坏) 片57点, 須恵器 (甕) 片 2点, 土師質土器片 1点が出土している。覆土 (第1・2層) 中に混入した遺物がほとんどである。

所見 遺構の形態と出土遺物から、12世紀以降の住居跡と考えられる。



第212 B 号住居跡 (第134図)

位置 調査区の北部, C11b5区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第212 A 号住居跡の東コーナー部を掘り込んで構築されている。

規模と平面形 長軸3.05 m, 短軸3.00 m の方形を呈している。

主軸方向 N-34°-W。

壁 壁高36~49cmを測り,垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を12cm程掘り窪め、断面形はU字状を呈し、竈部分を除き全周している。 床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

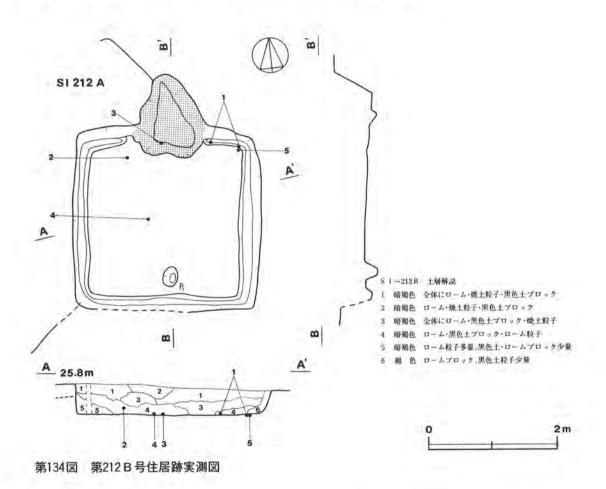
ピット 1 か所 (P1) 検出されている。P1は、径30cm、深さ20cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

電 北壁中央部を72cm程壁外へ掘り込み、砂まじりの粘土で構築されている。規模は、長さ135cm、幅120cmを測り、袖部は、ほとんど遺存していない。火床部は、ほぼ平らで焼土化している。煙道部は、燃焼室奥壁から急に立ち上がっている。

覆土 5層からなる。第 $1 \sim 4$ 層まで人為的な埋め戻し土層である。第5層は,ロームの壁が剝落し,ローム等が自然堆積している。

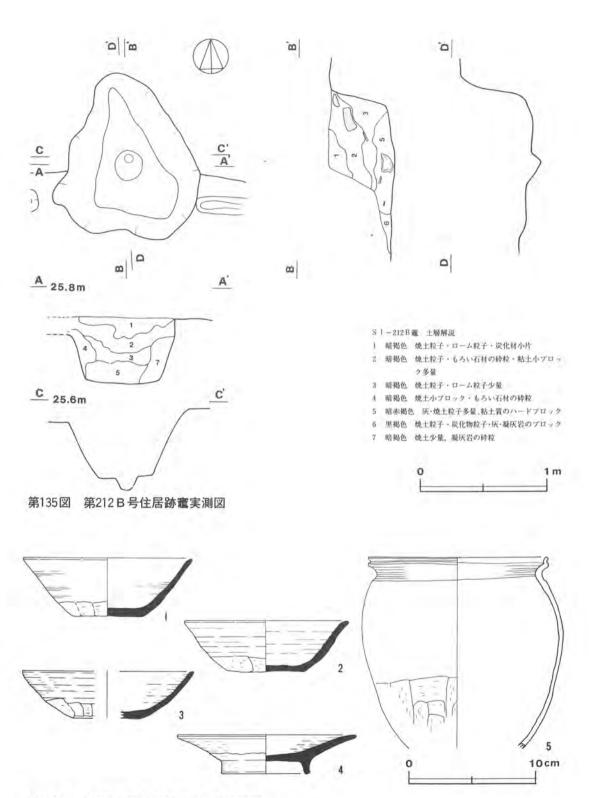
遺物 床面や覆土中から土師器 (甕, 坏) 片114点, 須恵器 (甕, 坏) 片16点が出土している。遺物は, すべて覆土 (第3・4層) 中から出土している。2・3の須恵器の坏, 5の土師器の小形甕, 4の土師器の高台付皿は床直上から出土しているが, 他の土器片と同様に覆土中への廃棄遺物であると考えられる。

所見 遺構の形態や出土遺物等から、9世紀後半の住居跡と考えられる。



第212 B 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器利		法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土·色調·燒成	備考
第136図 1	坏須恵	an her	A 13.4 B 4.7 C 5.5	平底。体部は外傾して立ち上がる。 口縁部はわずかに外反する。	底部一方向へラ削り。体部下端手 持ちへラ削り。体部内・外面横ナ デ。	砂粒·長石·雲母 灰白色 普通	P271 65% 北東コーナー
2	坏须惠	-	A 13.0 B 4.1 C 6.0	平底。体部は外額して立ち上がる。 口縁部はわずかに外反する。	底部一方向ヘラナデ。体部下端手 持ちヘラ削り。体部内・外面横ナ デ。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P 272 50% 覆土(4 層)
3	坏须患	器	A(13.6) B 3.8 C(5.4)	立ち上がる。	底部回転へラ切り。体部下端手持 ちへラ削り。体部内・外面横ナデ。	砂粒·石英·雲母 灰白色 普通	P 273 25% 床面



第136図 第212 B 号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量(em)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·燒成	備	考
第136図 4	1	A 14.2 B 3.1 D 7.0 E 1.0		底部及び体部内・外面横ナデ。	長石·石英·雲母 灰褐色 普通	P 276 床面	60%
5	C-1		底部欠損。胴部上位に最大径を持 ち頸部はくびれる。口縁部は短く 外傾し、端部断面が「S」字状を呈 する。	胴部下半部へラ削り。口縁部内・ 外面横ナデ。	長石·石英·雲母 赤褐色 普通	P 275 循	40%

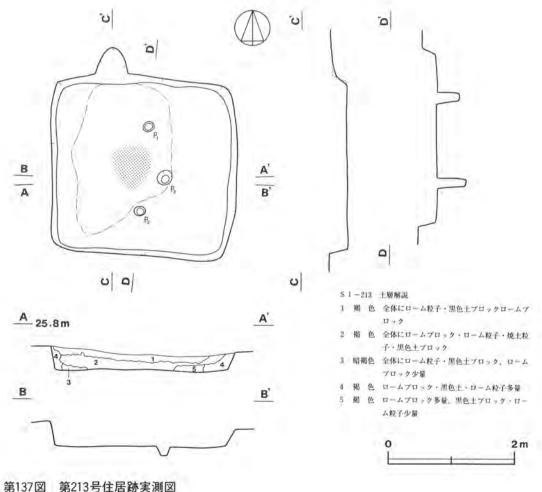
第213号住居跡 (第137図)

位置 調査区の北部、C11c7区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.94 m, 短軸2.80 mの方形を呈している。

主軸方向 N-3-E。

出入り口 北壁中央から西に寄った位置に、北へ向かって壁外に突出する緩斜面を持つ。規模は、



幅44cm, 緩斜面の長さは60cm, 角度は24°を測る。

壁 壁高約26~36cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で, 西部は堅く踏み固められている。

ピット 3か所 $(P1\sim P3)$ 検出されている。P1は、径18cm、深さ38cm、P2は、径17cm、深さ48cmで、いずれも主柱穴と考えられる。P3は、径22cm、深さ18cmで、補助柱穴と考えられる。

炉 中央部からやや西寄りの床面に炭化物が薄く広がって堆積している。範囲は、径約60cmの広がりを有している。

覆土 5層からなり、いずれも褐色土を主体とし、ロームブロックを均一に含んだ人為堆積土層である。

遺物 覆土中から平安時代の土師器 (甕, 坏) 片 9 点, 須恵器 (甕, 坏) 片 5 点が出土している。 住居跡南東コーナー付近の床面から長さ14cm, 幅13cm, 厚さ 4 cmの板状の石片 (1.65 kg) が出土 している。屋根の上の置き石に使用されたものと考えられる。

所見 遺構の形態や出土遺物から、12世紀以降の住居跡と考えられる。

第214 A 号住居跡 (第138図)

位置 調査区の北部, Clle 8区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北西コーナー部は,214 B 号住居跡の南東コーナー部によって掘り込まれている。 本跡の西部は、第10号溝によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.05m, 短軸2.93mの方形を呈している。

主軸方向 N-0°。

壁 壁高約24cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、北部と南西部が堅く踏み固められている。

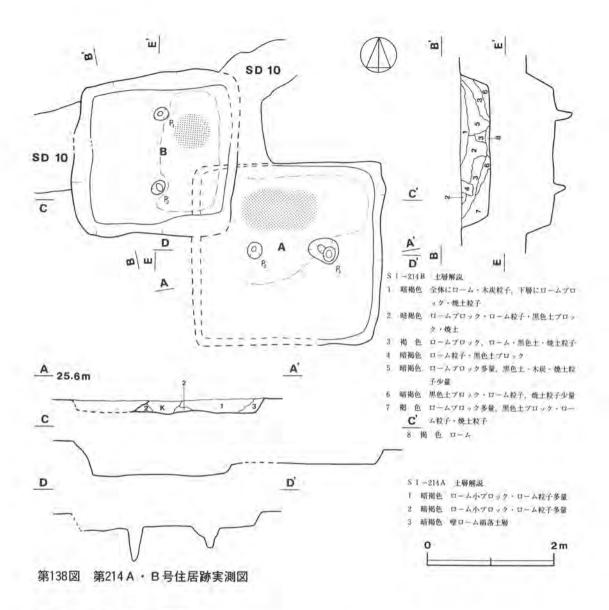
ピット 2 か所 ($P1 \cdot P2$) 検出されている。P1は,径46cm,深さ32cm,P2は,径25cm,深さ42cmで,いずれも主柱穴と考えられる。

炉 住居中央からやや北寄りの床面に炭化物が薄く広がって堆積している。範囲は,長径60cm, 短径50cmの広がりを有している。

覆土 3層からなる。第1・2層ともロームブロックの混入が多く,人為的に埋め戻された土層と考えられる。第3層はロームの壁が剝落し,ローム土等が自然堆積した土層である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は,重複関係から,第214B号住居跡よりも古い時期に構築されている。遺構の形態から,12世紀以降の住居跡と考えられる。



第214B号住居跡 (第138図)

位置 調査区の北部, Cl1e7区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南東コーナーが、第214 A 号住居跡の北西コーナーを掘り込んでいる。本跡の北部は、第10号溝によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸2.60 m, 短軸2.56 mの方形を呈している。

主軸方向 N-4°-E。

壁 壁高約40cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、東半分が堅く踏み固められている。

ピット 2か所 (P1・P2) 検出されている。P1は、径22cm、深さ26cm、P2は、径23cm、

深さ16cmで、いずれも主柱穴と考えられる。

炉 中央部からやや東寄りの床面に炭化物が薄く広がって堆積している。範囲は、長径約64cm, 短径約60cmの広がりを有している。

覆土 2層からなり、いずれも土層全体にロームブロックを含み、人為的な堆積状況を示す。

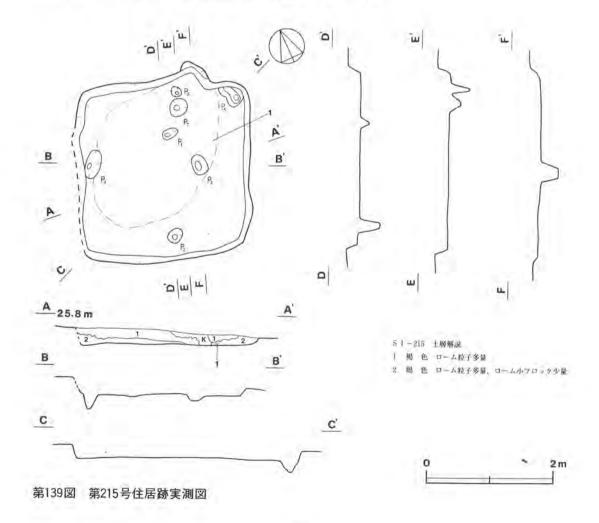
遺物 覆土中から土師質土器片 2 点,中世陶器片 1 点が出土しているが,これらは第10号溝あるいは、第214 A 号住居跡中の遺物の可能性もある。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は、重複関係から、第214 A 号住居跡よりも新しい時期に構築されている。遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。

第215号住居跡 (第139図)

位置 調査区の北部, Clics区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.90 m, 短軸2.70 m の方形を呈している。



主軸方向 N-74°-E。

出入り口 北壁中央から東に寄った位置に、北へ向かって壁外に突出して、床面から確認面に至る緩斜面を持っている。規模は、幅40cm、長さ60cmを測る。

壁 壁高約20cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

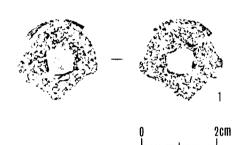
床 平坦で、堅く踏み固められ堅緻である。

ピット 7か所 $(P1\sim P7)$ 検出されている。P1は,径20cm,深さ16cm,P2は,径23cm,深さ34cmで,いずれも主柱穴と考えられる。P3は,径31cm,深さ10cm,P4は,径38cm,深さ24cm,P5は,径15cm,深さ32cm,P6は,径37cm,深さ16cm,P7は,径28cm,深さ26cmを測る。 $P3\sim P7$ の性格は不明である。

覆土 2層からなり、すべて褐色土主体の自然堆 積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片 7 点, 土師 質土器細片 1 点, 銅銭 1 点が出土している。 1 の 銅銭は, 北東部床面から出土している。

所見 遺構の形態と出土遺物から、12世紀以降の 住居跡と考えられる。



第140図 第215号住居跡出土遺物実測図

第215号住居跡出土遺物観察表

図版番号	銭 名 初鋳年		鋳造地名	出 土 位	置 備 考
第140図 1	判說小明		_	床面	M17

第216号住居跡 (第141図)

位置 調査区の北部, C11d4区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.64 m, 短軸2.60 mの方形を呈している。

主軸方向 N-17°-E。

出入り口 北壁中央から西に寄った位置に、北へ向かって壁外に突出して、床面から確認面に至る。緩斜面を持った出入り口部を有している。規模は、長さは72cm、幅52cm、角度は13°を測る。 壁 壁高約22cmを測り、緩やかに外傾して立ち上がっている。

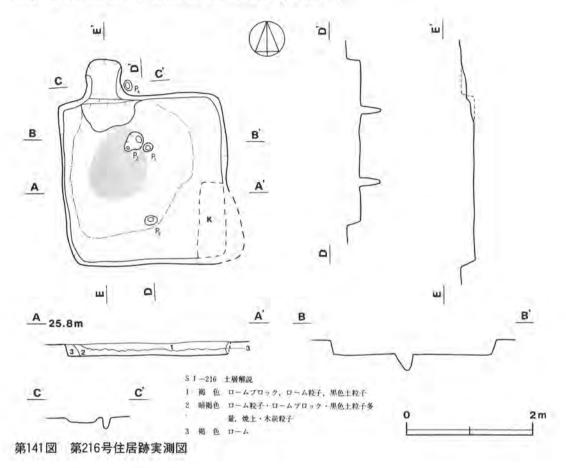
床 平坦で、出入り口部から住居中央部にかけて堅く踏み固められている。

ピット 4か所 (P1~P4) 検出されている。P1は, 径16cm, 深さ35cm, P2は, 径18cm, 深さ34cmで, いずれも主柱穴と考えられる。P3は, 径28cm, 深さ25cm, P4は, 径16cm, 深さ17cmで, いずれも補助柱穴と考えられる。

炉 主柱穴から北西寄りの床中央付近に、灰と炭化物が薄くひろがって堆積している。範囲は、 長径120cm、短径90cmの広がりを呈している。

覆土 3層からなり、いずれもローム小ブロックの混入が多く、人為的な堆積状況を示している。 遺物 覆土中から土師器 (甕) 片 3 点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。



第217 A 号住居跡 (第142図)

位置 調査区の北部, C11c3区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は南部が,第217B号住居跡の北部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸2.86 m, 短軸2.72 mの方形を呈している。

主軸方向 N-0°。

出入り口 東壁中央から北に寄った位置に、東へ向かって壁外に突出して、床面から確認面に至る緩斜面を持った出入り口部を有している。規模は、幅62cm、長さ64cm、角度21°を測る。

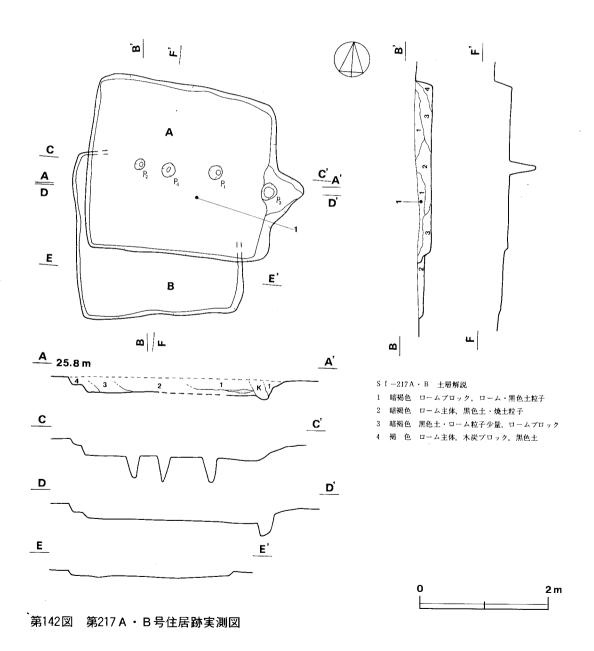
壁 壁高約27cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、堅く踏み固められ堅緻である。

ピット 4か所 ($P1\sim P4$) 検出されている。P1は,径23cm,深さ40cm,P2は,径18cm,深さ34cmで,いずれも主柱穴と考えられる。P3は,径23cm,深さ20cm,P4は,径21cm,深さ42cmで,いずれも補助柱穴と考えられる。

覆土 4層からなり、いずれも褐色土主体の堆積土層で、ローム小ブロックを均一に含み人為的 な堆積と考えられる。

遺物 覆土中から平安時代の土師器 (甕, 坏) 14点が出土している。本跡に伴う遺物は出土して



-171-

いない。

所見 本跡は,重複関係から,第217 B 号住居跡よりも新しい 時期に構築されている。遺構の形態から,12世紀以降の住居 跡と考えられる。





第143図 第217 A 号住居跡 出土遺物実測図

第217 A 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·燒成	備考
第143図	坏		口縁部欠損。平底気味の丸底。 底部・	ヽ ラ削り。手捏ね。	長石·石英·雲母	P 309 5%
1	土師質土器	B(1.2)			橙色	覆土(1層)
					普通	

第217B号住居跡 (第142図)

位置 調査区の北部、Cl1c3区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北部は、第217 A 号住居跡の南部に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸2.66 m, 短軸2.58 m の方形を呈している。

主軸方向 N-8°-W。

壁 壁高約16cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、堅く踏み固められている。

ピット 検出されない。

覆土 2層からなり、暗褐色土主体の土層であるが、残存する覆土が薄く堆積状況は不明である。

遺物 覆土中から土師器 (甕) 片 1 点,土師質土器片 2 点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は,重複関係から,第217 A 号住居跡よりも古い時期に構築されている。遺構の形態から,12世紀以降の住居跡と考えられる。

第218号住居跡 (第144図)

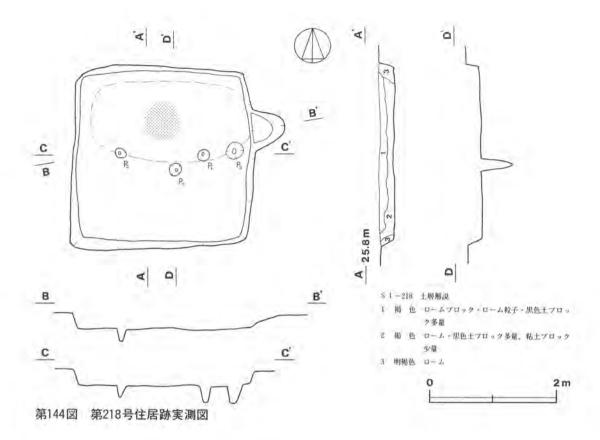
位置 調査区の北部、C11b4区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.95 m, 短軸2.88 m の方形を呈している。

主軸方向 N-90°-W。

出入り口 東壁中央から北に寄った位置に、東へ向かって壁外に突出して、床面から確認面に至る緩斜面を持った出入り口部を有している。規模は、長さ60cm、幅54cm、角度14°を測る。

壁 壁高約26cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。



床 平坦で、北半分が堅く踏み固められている。

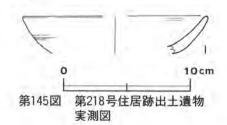
ピット 4か所 (PI-P4) 検出されている。P1は、径19cm、深さ28cm、P2は、径16cm、深さ20cmで、いずれも主柱穴と考えられる。P3は、径28cm、深さ32cm、P4は、径20cm、深さ50cmで、いずれも補助柱穴と考えられる。

炉 中央部からやや北寄りの床面に灰と炭化物の層が薄く堆積し、その範囲は、長径64cm、短径52cmの広がりを有している。

覆土 3層からなり、3層ともロームプロックを土層中に均一に含む人為的堆積土層と考えられる。

遺物 覆土中から平安時代の土師器 (甕) 片 8 点,土師質土器 2 点が出土している。1 の浅黄橙 色の土師質土器の坏は,覆土中から出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。



第218号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·燒成	fili	考
		A(14.4) B(3.0)	底部欠損。体部は内彎して開く。	体部内・外面横ナデ。	砂粒、粉っぽい にぶい黄橙色 普通	P310 覆土	5%

第219号住居跡 (第146図)

位置 調査区の北部, Cl1c2区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.81 m, 短軸2.75 m の方形を呈している。

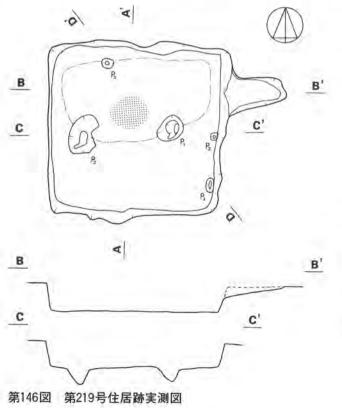
主軸方向 N-90°-W。

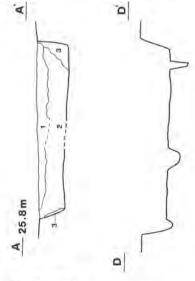
出入り口 東壁中央から北に寄った位置に、東へ向かって壁外に突出して、床面から確認面に至る緩斜面を持った出入り口部を有している。規模は、幅48cm、長さ114cm、角度23°を測る。

壁 壁高約52cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、北半分が堅く踏み固められている。

ピット 5 か所 (P1~P5) 検出されている。P1は、径44cm、深さ20cm、P2は、径51cm、深さ24cmで、いずれも主柱穴と考えられる。P3は、径12cm、深さ15cm、P4は、径21cm、深さ





S 1-219 土層解説

- 1 掲 色 ローム・黒色土ブロック。木炭・塊土粒子
- 2 暗褐色 ロームブロック・黒色七粒子多量、木炭少量
- 3 暗褐色 ローム・黒色上プロック



10cm, P 5 は, 径18cm, 深さ28cmで, いずれも補助柱穴と考えられる。

炉 主柱穴から北に寄った床中央付近に灰と炭化物が薄くひろがって堆積し、その形状は、長径62cm、短径54cmの楕円形を呈している。

覆土 3層からなり、いずれも大量のローム小ブロックを均一に含む人為的な堆積土層である。

遺物 覆土中から奈良~平安時代の土師器 (甕, 坏) 片 6 点, 土師質土器 (坏) 細片 2 点が出土 している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。

第220号住居跡 (第147図)

位置 調査区の北部、C11c1区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.17 m, 短軸2.95 m の方形を呈している。

主軸方向 N-90°-W。

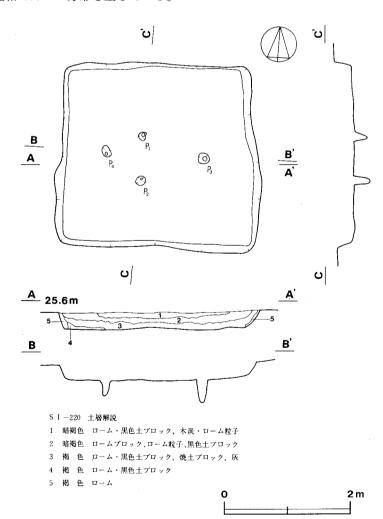
壁 壁高約28cmを測り,緩やかに外傾して立ち上がっている。

床 平坦で、堅く踏み固められている。

ピット 4か所(P1~P4) 検出されている。P1は,径 11cm,深さ20cm,P2は,径 15cm,深さ26cmで,いずれも 主柱穴と考えられる。P3は, 径18cm,深さ36cm,P4は, 径17cm,深さ26cmで,いずれ も補助柱穴と考えられる。

覆土 4層からなる。ローム ブロックを均一に含む土層を 主体としており、人為的な堆 積土層である。第2層には厚 さ4cm程の焼土が堆積してい る。

遺物 覆土中から土師器 (甕,



第147図 第220号住居跡実測図

坏) 片14点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。 所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。

第221号住居跡 (第148図)

位置 調査区の北部、C10bo区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.85 m, 短軸2.83 m の方形を呈している。

主軸方向 $N-2^{\circ}-E_{\circ}$

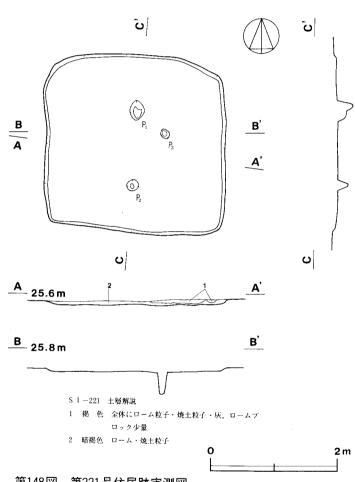
壁 壁高約6cmを測る。

床 平坦で、堅く踏み固めら れ堅緻である。

ピット 3か所(P1~P3) 検出されている。P1は、径 23cm, 深さ29cm, P2は, 径 20cm, 深さ17cmで、いずれも 主柱穴と考えられる。P3は、 径14cm, 深さ39cmで, 補助柱 穴と考えられる。

覆土 覆土が薄く堆積状況は 不明である。

遺物 覆土中から土師器(甕) 片4点が出土している。本跡 に伴う遺物は出土していない。 所見 遺構の形態から,12世 紀以降の住居跡と考えられる。



第148図 第221号住居跡実測図

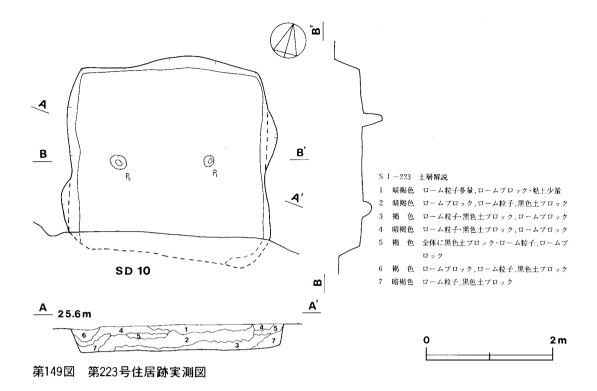
第223号住居跡 (第149図)

位置 調査区の北部、Clle1区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南部が、第10号溝によって掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.10 m, 短軸3.05 mの方形を呈している。

主軸方向 N-17°-W。



壁 壁高約22cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

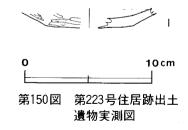
床 平坦で、堅く踏み固められている。

ピット 2か所(P1・P2)検出されている。P1は、径 $18\,\mathrm{cm}$ 、深さ $16\,\mathrm{cm}$ 、P2は、径 $25\,\mathrm{cm}$ 、深さ $33\,\mathrm{cm}$ で、いずれも主柱穴と考えられる。

覆土 7層からなり、いずれも大量のロームブロックを含む人為的堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片 6 点, 土師質土器片 1 点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は,重複関係から,第10号溝よりも古い時期に構築されている。遺構の形態から,12世紀以降の住居跡と考えられる。



第223号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備考
第150図	坏		平底。体部は緩やかに外傾して立	底部及び体部外面へラ削り。体部	砂粒・長石	P 311 5%
1	土師質土器	B(1.6)	ち上がる。	内面横ナデ。	明赤褐色	覆土
		C(7.0)			普通	

第224号住居跡 (第151図)

位置 調査区の北部、C11e3区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸2.80 m, 短軸2.75 m の方形を呈している。

主軸方向 N-15°-W。

出入り口 東壁中央から北に寄った位置に、東へ向かって壁外に突出して、床面から確認面に至る緩斜面を持った出入り口部を有している。規模は、幅36cm、緩斜面の長さは70cmを測る。

壁 壁高18~26cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

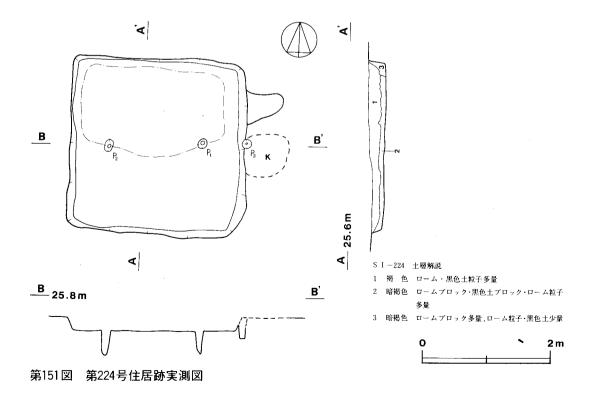
床 平坦で、北半分が堅く踏み固められている。

ピット 3か所 ($P1\sim P3$) 検出されている。P1は,径 $14\,cm$,深さ $36\,cm$,P2は,径 $17\,cm$,深さ $38\,cm$ で,いずれも主柱穴と考えられる。P3は,径 $15\,cm$,深さ $34\,cm$ で,補助柱穴と考えられる。

炉 中央部からやや北寄りの位置に、灰と炭化物が薄く堆積している。範囲は、長径106cm、短径80cmの広がりを有している。

覆土 3層からなる。ロームの混入が少ない褐色土層であり、自然堆積土層と考えられる。

遺物 覆土中から須恵器 (甕) 片 2 点が細片で出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。 所見 遺構の形態から、12世紀以降の住居跡と考えられる。



第225号住居跡 (第152図)

位置 調査区の北部、C11f5区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南部は、12号溝を掘り込んで構築している。

規模と平面形 長軸3.00 m, 短軸2.56 mの方形を呈している。

主軸方向 N-0°。

出入り口 東壁中央から北に寄った位置に、東へ向かって壁外に突出して、床面から確認面に至る緩斜面を持った出入り口部を有している。規模は、幅56cm、長さ68cm、角度8°を測る。

壁 壁高約14cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

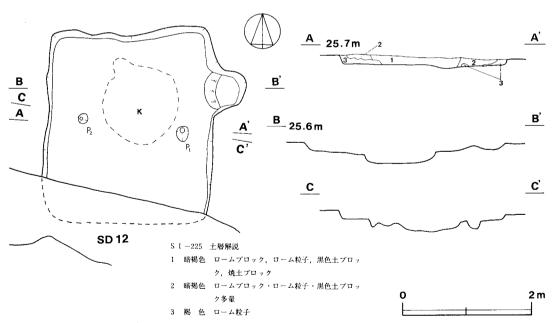
床 平坦で、堅く踏み固められ堅緻である。

ピット 2 か所 (P1・P2) 検出されている。P1は, 径20cm, 深さ17cm, P2は, 径17cm, 深さ14cmで、いずれも主柱穴と考えられる。

覆土 3層からなる。ロームを主体とする土層であるが、堆積状況は不明である。

遺物 覆土中から平安時代の土師器(甕)片4点,須恵器(甕)片1点が出土している。本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は、重複関係から、第12号溝よりも新しい時期に構築されている。遺構の形態から、 12世紀以降の住居跡と考えられる。



第152図 第225号住居跡実測図

第226号住居跡 (第153図)

位置 調査区の北西部, C8d3区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸6.63 m, 短軸6.50 mの方形を呈している。

主軸方向 N-5°-W。

壁 壁高20~32cmを測り、垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を12cm程掘り窪め,断面形はU字状を呈している。竈部分を除き全周している。 床 平坦で,踏み固められ堅緻である。

ピット 10か所 $(P1\sim P10)$ 検出されている。主柱穴は $P1\sim P4$ の4か所で,径 $30\sim 52$ cm,深さ $25\sim 32$ cmである。P5は,径26cm,深さ15cmで,出入り口施設に伴うピットと考えられる。 $P6\sim P10$ は,径 $26\sim 36$ cm,深さ36cmを測り,性格不明である。

電 北壁中央部を50cm程壁外へ掘り込み、砂まじりの粘土で構築されている。規模は、長さ100cm、幅150cmを測り、竈の遺存状態は悪い。燃焼部からは、焼土粒子、炭化物、灰、天井部からの崩落焼土等が検出されている。火床部は、ほぼ平らで焼土化している。煙道部は、火床部から緩やかに立ち上がっている。

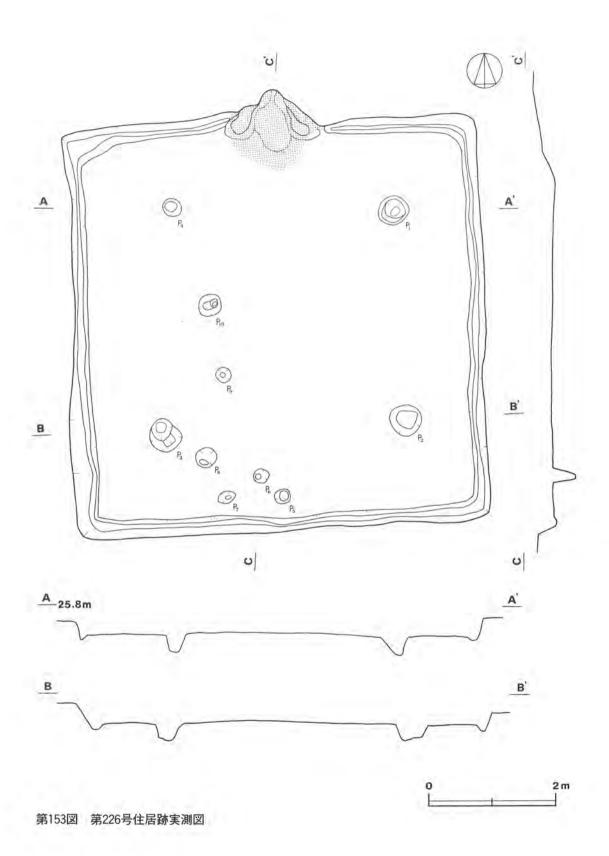
覆土 7層からなり、いずれも自然堆積土層である。第3層はロームブロックを多く含む土層である。

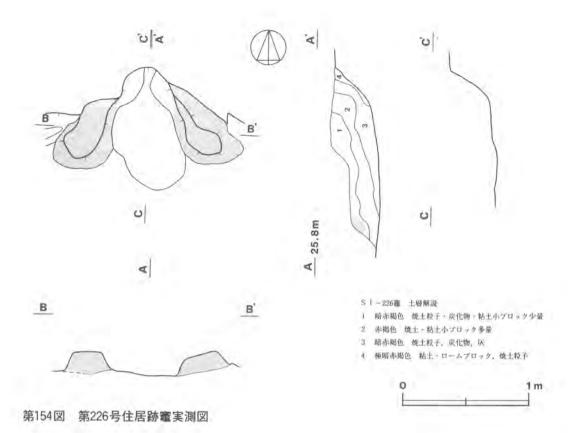
遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片97点, 須恵器 (甕, 坏, 硯) 片25点が出土している。出土 遺物のほとんどは, 第3層中に混入する破片であり, すでに廃棄された遺物の2次的な混入と考 えられる。遺物の種類は, 須恵器の圏足硯の破片や須恵器の坏, 蓋, 土師器の甕や土師器の甑の 破片である。

所見 遺構の形態や出土遺物から、第153号住居跡とほぼ同時期の、8世紀前半の住居跡と考えられる。

第226号住居跡出土遺物観察表

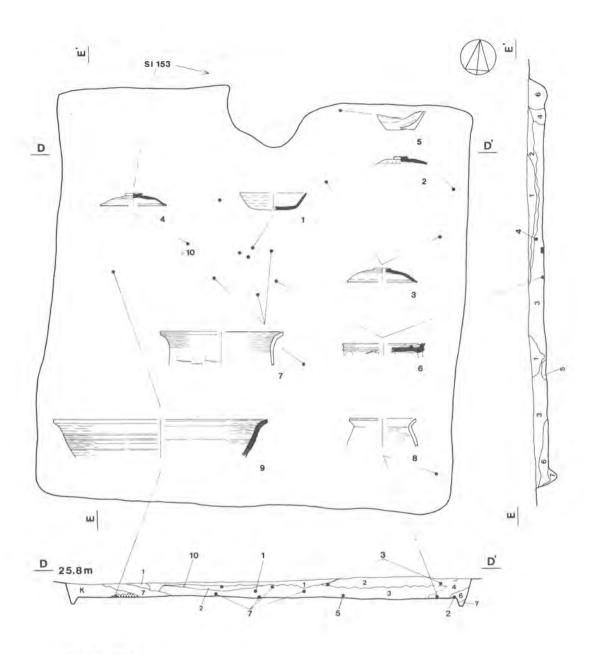
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備考
第156図	坏	A(16.0)	わずかに丸みを持った平底。体部	体部内・外面ナデにより平滑。	長石·石英·雲母	P 277 20%
1	須 恵 器	B 4.1	は外傾して立ち上がる。		灰色	覆土(3層)
					普通	
	蓋	B(2.0)	天井部に平坦面を持って、緩やか	天井部回転ヘラ削り。口縁部内・	石英·長石·雲母	P 285 45 %
2	須 恵 器	F 3.3	に口縁部に至る。偏平なつまみが	外面横ナデ。	にぶい黄橙色	床面
		G 0.7	付く。		普通	
	蓋	A(16.6)	天井部から丸みを持って、緩やか	天井部回転ヘラ削り。口縁部内・	長石・石英・雲母	P 286 10%
3	須 恵 器	B 3.4	に口縁部に至る。内面にかえりが	外面横ナデ。	灰色	覆土(2層)
		F(4.0)	付く。中央部が窪む偏平なつまみ		普通	
		G 0.5	が付く。			





刘版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·燒成	備考
第156図 4	蓋須 思 器	A 15.8 B 3.3 F 3.4 G 0.8	天井部から丸みを持って、緩やか に口縁部に至る。内面にかえりが 付く。中央部がわずかに突出する 偏平なつまみが付く。	天井部回転へラ削り。口縁部内・ 外面横ナデ。	砂粒·長石 灰色 普通	P 287 40% 覆土(3層)
5	変 土 師 器	A(11.2) B 4.4 C 6.4	胴上半部欠損。平底。胴部は内彎 気味に立ち上がる。	底部木葉痕。甕の底部片を波状に 加工し、再利用。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 282 5% 糧士:
6		A(19,6) B(2,7)	The second secon	脚部及び硯面部内・外面横ナデ。	長石·石英·雲母 灰褐色 普通	P288 15% 床面(3層)
7	版 土 師 器	A(29,4) B(8,2)	胴下半部欠損。胴部は外傾して立 ち上がり、口縁部は外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P279 10% 覆土(3層)
-8		200	胴下半部欠損。頭部はくびれ、口 縁部は外反する。口唇部をわずか につまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P 280 10% 床面
.9	場 須 惠 器		底部欠損。体部は内煙気味に開き、 口縁部で外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	長右·石英·雲母 灰色 普通	P284 5% 床面

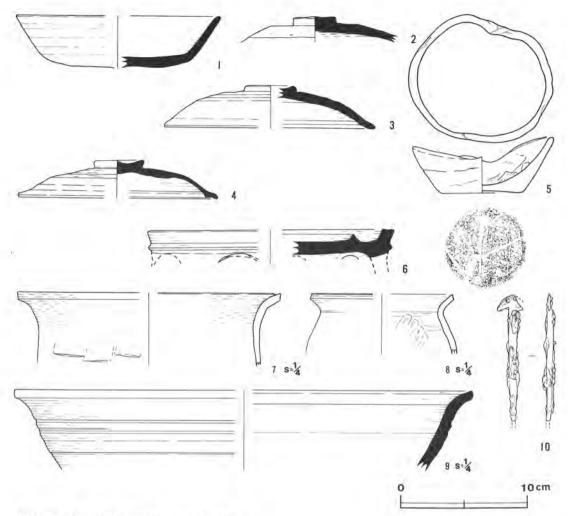
図版番号	98	種	-	法 量(cm)		孔 径	重 量	現存率	100	40	146	j.	tele	-60
INDUSTRES.	ful	191	最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)	(11)	土	地	A	THE	专
10	鉄	鏃	(10.1)	(2.2)	(0.5)		(11.5)	80	製土	(1-	- 2 層		M14	



- S 1-226 土層解説
- 1 褐 色 ローム・焼土・木炭粒子
- 2 楊 色 焼土ブロック、木炭、焼土粒子、ローム小ブ ロック
- 3 掲 色 ロームブロック、焼土・木炭・粘土粒子
- 4 掲 色 ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子少量
- 5 捌 色 焼土粒子, 木炭粒子, ロームプロック
- 6 掲 色 ロームブロック。焼土粒子、木炭、黒色土ブ ロック
- 7 暗褐色 ローム粒子、焼土、木炭、ロームブロック

0 2 m

第155図 第226号住居跡遺物出土位置図



第156図 第226号住居跡出土遺物実測図

第227号住居跡 (第157図)

位置 調査区の北部, Cl1e 4区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の中央部は、第10号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸2.70 m, 短軸2.61 m の方形を呈している。

主軸方向 N-69°-E。

出入り口 北東壁中央から北に寄った位置に、北へ向かって壁外に突出して、床面から確認面に至る緩斜面を持った出入り口部を有している。規模は、長さ62cm、幅66cm、角度は20°を測る。

壁 壁高約40cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、堅く踏み固められ堅緻である。

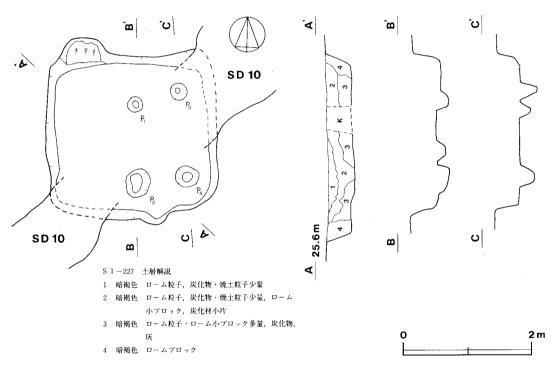
ピット 4か所 (P1~P4) 検出されている。P1は, 径24cm, 深さ16cm, P2は, 径42cm,

深さ21cmで、いずれも主柱穴と考えられる。 P 3 は、径27cm、深さ28cm、 P 4 は、径37cm、深さ26cmで、性格は不明である。

覆土 2層からなり、すべて褐色土主体の土層である。第10号溝により覆土の大半が掘り込まれており、堆積状況は不明である。

遺物 覆土中から土師器 (甕) 片14点, 須恵器 (坏) 片 1 点, 内耳土器片 2 点が出土している。 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 本跡は,重複関係から,第10号溝よりも古い時期に構築されている。遺構の形態から,12世紀以降の住居跡と考えられる。



第157図 第227号住居跡実測図

第228号住居跡(第76図)

位置 調査区の南部, G10d4区を中心に確認されている。

規模と平面形 方形を呈していると考えられるが、南部の3分の2が削平されているため、規模 は不明である。

主軸方向 N-57°-W。

壁 壁高は最もよく遺存している所で約10cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 確認できない。

床 平坦で、踏み固められ堅緻であるが、部分的に抜根による撹乱をうけている。南部の床は、 緩やかに傾斜しており、流失している。

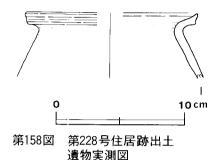
ピット 確認できなかった。

電 削平と抜根により、確認できなかった。

覆土 覆土は1層で、ハードロームブロックを多量に含む人為的堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片 6 点が出土している。 1 の土師器の甕の破片は覆土中から出土している。 本跡に伴う遺物は出土していない。

所見 遺構の形態から,本跡10世紀前半の住居跡と考えられる。



第228号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 黴	胎土·色調·焼成	備考
第158図	蓌	A(13.4)	胴部欠損。頸部はくびれ, 口縁部	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒·長石·雲母	P 290 55
1	土師器	B(5.2)	が短く外反する。口唇部を上方に		明赤褐色	覆土
			つまみあげる。		普通	

第229号住居跡(柴崎遺跡 I 区第71号住居跡)(第71図)

位置 調査区の南部, F10j3区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.30 m, 短軸(3.20 m)の方形を呈している。

主軸方向 N-0°。

壁 壁高約40cmを測り、垂直に立ち上がっている。

壁溝 壁直下の床面を深さ5cm程浅く掘り窪め、断面形はU字状を呈している。

床 平坦で、踏み固められ堅緻である。

ピット 1 か所 (P1) 検出されている。P1 は、(E42cm)、深さ(E40cm)で、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 4 層からなり、すべて自然堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片19点, 須恵器 (甕, 坏) 片 4 点が出土している。いずれも 細片である。

所見 柴崎 I 区の調査の際に、本跡の北部は、第71号住居跡として既に調査を終了していた。その北部の床面と竈内から須恵器の蓋、高台付盤、土師器の甕が出土している。遺構の形態と出土遺物等から、9世紀後半の住居跡と考えられる。

第230号住居跡(第159図)

位置 調査区の南部, F10j6区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の西部は、第5号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.10 m, 短軸2.82 m の方形を呈している。

主軸方向 N-61°-E。

壁 壁高20~34cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

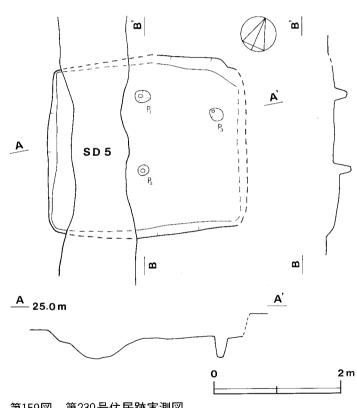
床 平坦で、堅く踏み固められ堅緻である。

ピット 3か所 (P1~P3) 検出されている。P1は, 径25cm, 深さ22cm, P2は, 径17cm, 深さ23cmで、いずれも主柱穴と考えられる。P3は、径22cm、深さ32cmで、補助柱穴と考えられ る。

覆土 1層からなり、ローム 主体の人為的な堆積土層であ る。

遺物 覆土中から平安時代の 土師器(甕, 坏)片14点, 須 恵器 (甕) 片16点, 土師質土 器細片が1点出土している。 本跡に伴う遺物は出土してい ない。

所見 本跡は,重複関係から, 第5号溝よりも古い時期に構 築されている。遺構の形態か ら,12世紀以降の住居跡と考 えられる。



第159図 第230号住居跡実測図

第232号住居跡(第160図)

位置 調査区の北東部、B12d4区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸3.09 m, 短軸2.65 mの長方形を呈している。

主軸方向 N-0°。

壁 壁高約42cmを測り、垂直に立ち上がっている。

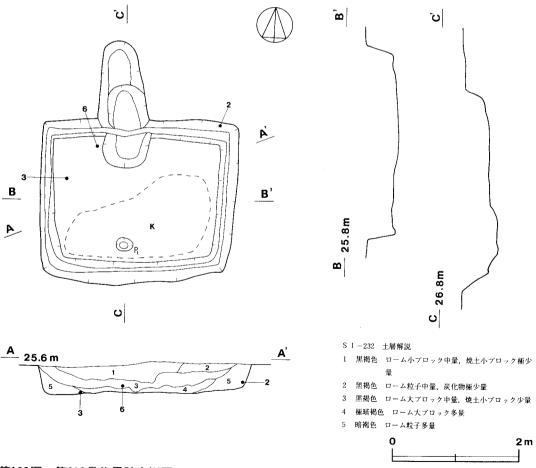
壁溝 壁直下の床面を5cm程浅く掘り窪め、断面形は皿状を呈し、全周している。 床 平坦で、踏み固められている。

ピット 1 か所 (P1) 検出されている。P1 は、428 cm、深さ14 cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

電 北壁中央からやや西寄りの位置を120cm程壁外へ掘り込み,砂まじりの粘土で構築されている。 規模は、長さ約200cmで、幅は、袖部が遺存しておらず不明である。焚口部は、深さ約18cm程掘 り窪められ、焼土小ブロックが検出されている。煙道部は、火床部から緩やかに立ち上がってい る。火床部中央から、支脚として転用した甕と坏が、重ねられた状態で出土している。

覆土 5層からなり、いずれも黒褐色の腐植土を主体とした自然堆積土層である。

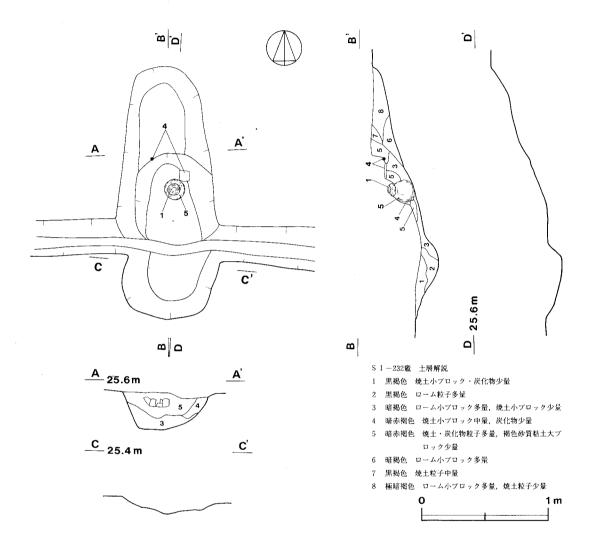
遺物 床面や覆土中から土師器(甕, 坏)片206点,須恵器(甕)片11点が出土している。2の土師器の坏は、北壁際の覆土中層から出土している。それ以外はすべて床面への遺棄遺物と竈内の支脚転用土器である。5の土師器の甕と1の須恵器の坏は、竈内から出土し、1の須恵器の坏は、



第160回 第232号住居跡実測図

竈内から支脚に転用された状態で出土している。

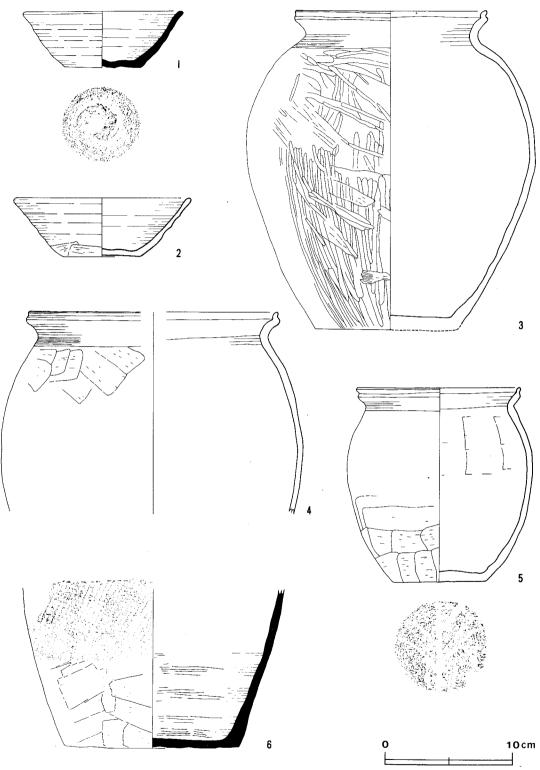
所見 遺構の形態や出土遺物から、10世紀前半の住居跡と考えられる。



第161図 第232号住居跡竈実測図

第232号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備考
第162図	坏	A 12.6	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後、無調整。体	長石·石英·雲母	P 291 100%
1	須 恵 器	B 4.6	口縁部はわずかに外反する。	部内・外面横ナデ。	にぶい橙色	篭
		C 6.0			普通	
	坏	A 13.8	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後、一方向ヘラ	長石·石英·雲母	P 292 80%
2	土師器	В 4.7		削り。体部下端手持ちへラ削り。	褐灰色	覆土(5層)
		C 6.0		体部内・外面横ナデ。	普通	



第162図 第232号住居跡出土遺物実測図

図版番号	뀲	種	法量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·燒成	備	考
第162図		甕	A 15.1	平底。胴部中位に最大径を持つ。	胴部外面へラ磨き。口縁部内・外	石英·長石·雲母	P293	95%
3	土	師 器	B 25.6	頸部はくびれ,口縁部が外反する。	面横ナデ。	橙色	床面	
			C 11.2	口唇部を上方につまみ上げる。		普通		
		甕	A(19.7)	底部欠損。胴部中位に最大径を持	胴部ヘラ削り後,ナデ。口縁部内	長石·石英·雲母	P294	20%
4	土	師 器	B(16.1)	つ。頸部はくびれ,口縁部が外反	・外面横ナデ。	赤褐色	覆土・竈	
				する。口唇部を上方につまみ上げ		普通		
				る。				
	小	形甕	A 12.8	平底。胴部中位に最大径を持つ。	底部木葉痕。胴下半部横位へラ削	長石·石英·雲母	P295 1	.00%
5	土	師 器	B 15.4	頸部は「く」の字状にくびれ、口	り。口縁部内・外面横ナデ。	にぶい橙色	竈	
			C 7.2	縁部は外傾する。口唇部を外上方		普通		
				につまみ上げる。				
	Г	甕		胴上半部欠損。平底。胴部は内彎	胴部下端へラ削り。胴部外面格子	石英·長石·雲母	P296	20%
6	須	恵 器	B(12.7)	気味に立ち上がる。	状叩き。内面横ナデ。	にぶい黄橙色	覆土(5月	晉)
			C 13.8			普通		

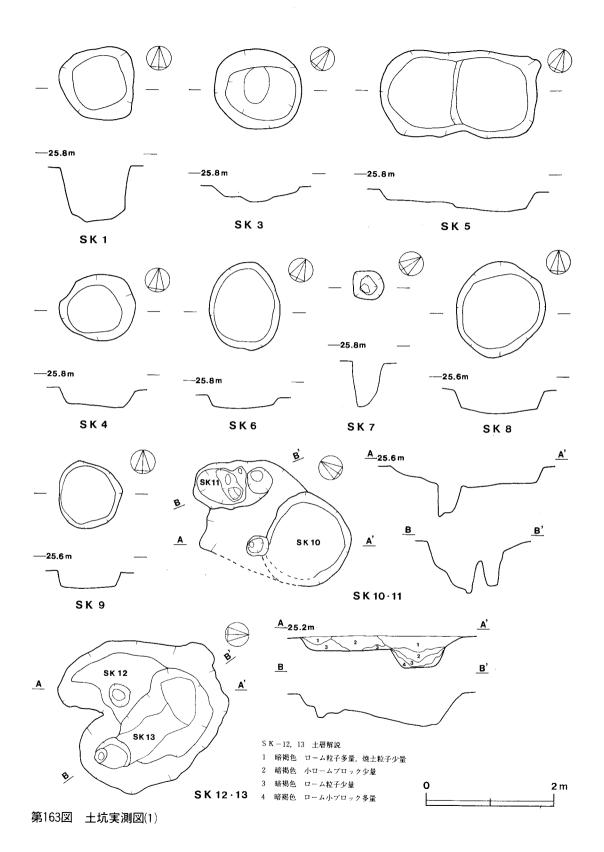
第3節 土坑

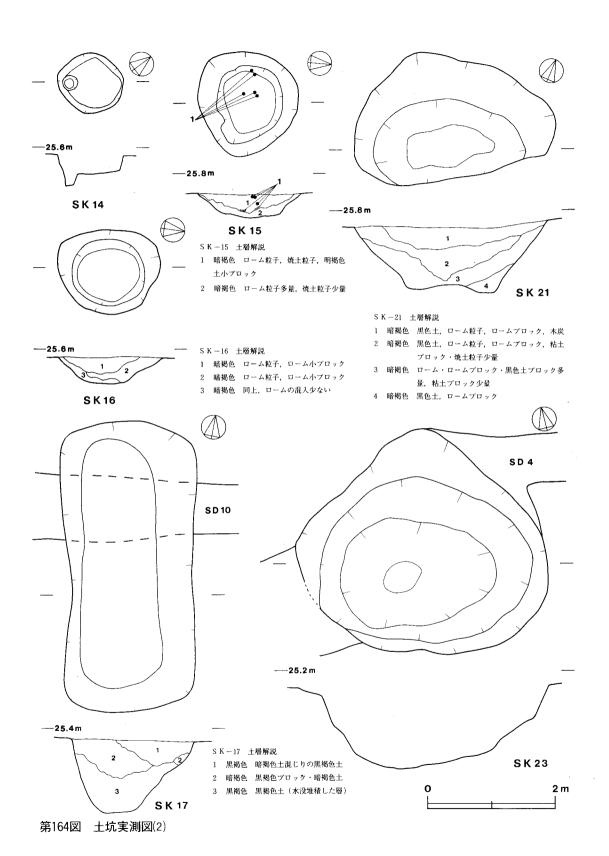
当調査区からは、18基の土坑が検出されている。それぞれの土坑からは、必ずしも充分な資料が得られなかったために、時期や性格等を解明できたものは殆どなかった。

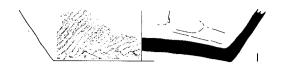
各々の土坑の解説は、一覧表中に掲載した。

表 2 土坑一覧表

土坑	位置	長径方向	平面形	規模(m)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考	図版
番号	120	(長軸方向)	干圓形	長径×短径	深さ	延用	底Щ	1及工	ц 1 и и	Ç- 614	番号
1	B8h8	N-42°-₩	円形	1.16×1.14	0.87	垂直	平坦	自然	土師器(甕)片40点,須恵器(甕,坏,高台付坏)片15点		第163図
3	B8h9	N 58° E	円形	1.36×1.26	0.25	緩斜	皿状	自然	土師器(甕,坏)片 5 点,須恵器(坏)片 1 点		"
4	B8h9	N-62°-E	楕円形	1.20×0.94	0.26	緩斜	皿状	自然	土師器(甕)片 4 点		"
5	B8h∘	N-66°-E	長方形	2.46×1.05	0.33	緩斜	平坦	自然	土師器(甕)片16点		"
6	B8h0	N-26°-₩	楕円形	1,42×1.10	0.17	緩斜	平坦	自然	土師器(甕)片7点		"
7	B8h∘	N — 54° — ₩	楕円形	1.10×0.74	0.72	垂直	皿状	自然	土師器(甕)片 3 点,須恵器(坏)片 2 点		"
8	B9 i 2	N 0°	円形	1.40×1.38	0.37	外傾	平坦	自然	土師器(甕)片16点,須恵器(坏)片2点		"
9	В9 і з	N-11°-W	円形	1.02×1.00	0.27	外傾	皿状	自然			"
10	В9 ј з	N — 28° — ₩	不定形	2.84×1.14	0.86	垂直	凹凸	自然	土師器(甕)片6点,須恵器(甕,坏)片9点	SK-11と重複	"
11	В9 і з	N− 8°−₩	不定形	2.72×1.70	0.82	緩斜	四凸	人為	土師器(甕)片8点,須恵器(甕,坏,高台付坏)片10点	SK-10と重複	"
12	B9e 7	N − 26° – ₩	不定形	2.03×0.98	4.70	緩斜	平坦	自然		SK-13と重複	"
13	B9e7	N-46°-₩	楕円形	2.73×1.55	5.20	緩斜	平坦	自然	縄文式土器片 2 点	SK-12と重複	"
14	AO i 3	N-48-E	楕円形	1.06×0.96	0.50	緩斜	平坦	自然	土師器(甕,坏)片 2 点,縄文式土器片 1 点		第164図
15	A9 i 5	N — 75°—₩	円形	1.60×1.58	0.39	緩斜	皿状	自然	土師器(甕)片 5 点		"
16	A9h5	N — 13°— ₩	不整円形	1.64×1.36	4.30	緩斜	皿状	自然	土師器(甕)片 5 点		"
17	C12c5	N — 4° — ₩	長方形	4.55×1.91	1.16	外傾	平坦	自然			"
21	B11c5	N-58°-E	楕円形	3.22×2.05	1.14	緩斜	平坦	自然	土師器(甕)片12点,須恵器(甕,坏)片2点		"
23	C9a5	N-67°-₩	楕円形	4.05×3.57	1,50	緩斜	平坦	自然	土師器(甕)片18点,須恵器(甕,坏、蓋,高台付坏)片63点		"









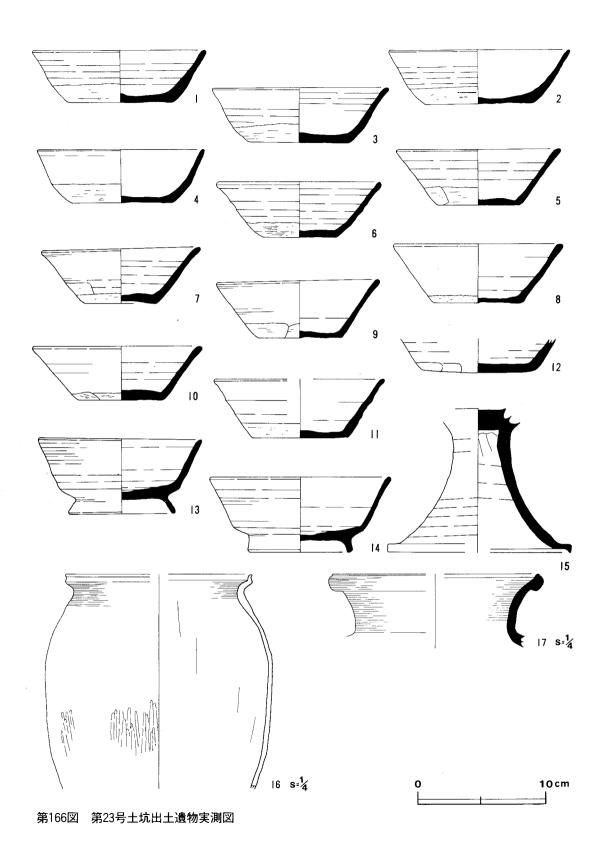
第165図 第15号土坑出土遺物実測図

第15号土坑出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴 手法の特	徴	胎土·色調·焼成	備	考
第165図	甕		平底。胴部欠損。胴部はわずかに 胴部外面格子状叩き。		長石·石英·雲母	P312	10%
1	須 恵 器	B(4.2)	内彎しながら立ち上がる。		灰色	覆土	
L		C 14.0			普通		

第23号土坑出土遺物観察表

図版番号	器	種	ì	去量(cm)	器	形の	特	徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備	考
第166図		坏	1	A 13.7	平底。体部	は外傾	- て立	ち上がる。	底部・体部下端回転へラ削り。	長石·石英·雲母	P318	90%
1	須	恵書	2	B 4.2					体部内・外面横ナデ。	灰白色	覆土	
			1	C 8.0						普通		
		坏	,	A 14.2	平底。体部	は外傾し	て立	ち上がる。	底部及び体部下端回転ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母	P319	80%
2	須	恵品	F 1	B 4.4					体部内・外面横ナデ。	灰白色	覆土	
			1	8.3						普通		
		坏	1	A 13.8	平底。体部	は外傾し	て立	ち上がる。	底部及び体部下端回転へラ削り。	長石·石英·雲母	P320	80%
3	須	恵器	F 1	B 4.5					体部内・外面横ナデ。	灰白色	覆土	
			1	7.8						普通		
		坏	1	A 13.0	平底。体部	は外傾し	て立	ち上がる。	底部及び体部下端回転へラ削り。	砂粒・長石・雲母	P321	60%
4	須	恵器	<u> </u>	3 4.3					体部内・外面横ナデ。	灰白色	覆土	
			(8.0						普通	İ	
		坏		A 12.9	平底。体部	は外傾し	て立	ち上がる。	底部一方向ヘラ削り。体部下端手	長石・石英・雲母	P322	90%
5	須	恵器	į I	3 4.5					持ちヘラ削り。体部内・外面横ナ	灰白色	覆土	
			(6.4					デ。	普通		
		坏	I	12.8	平底。体部	『は直線	的にタ	傾し,口	底部一方向ヘラ削り。体部下端手	砂粒・長石・雲母	P323	85%
6	須	恵器	i I	3 4.5	唇部でわす	げかに外	反する	00	持ちへラ削り。体部内・外面横ナ	灰色	覆土	
			(5.6					デ。	普通		
		坏	I	12.5	平底。体部	『は直線	的に外	傾し,口	底部一方向ヘラ削り。体部下端手	長石·石英·雲母	P324	80%
7	須	恵器	i I	3 4.5	唇部でわす	がに外	反する	0 0	持ちへラ削り。体部内・外面横ナ	灰色	覆土	
			(5.6					デ。	普通		
		坏	F	13.2	平底。体部	は外傾し	て立	ち上がる。	底部ヘラ切り後,無調整。体部内・	長石·石英·雲母	P325	70%
8	須	恵器	E	3 4.8					外面横ナデ。	灰色	覆土	
			(6.9						普通		
		坏	P	12.7	平底。体部	は外傾し	て立	ち上がる。	底部ヘラ切り後,一方向ヘラ削り。	長石·石英·雲母	P326	80%
9	須	恵 器	E	3 4.7					体部下端手持ちヘラ削り。体部内・	灰色	覆土	
			C	6.6					外面横ナデ。	普通		
		坏	A	13.2	平底。体部	は外傾し	て立っ	ち上がる。	底部ヘラ切り後,一方向ヘラ削り。	長石・石英・雲母	P327	50%
10	須	恵 器	E	4.3					体部下端手持ちヘラ削り。体部内	灰色	覆土	
			C	6.6					・外面横ナデ。	普通		
		坏	A	13.3	平底。体部	は外傾し	て立っ	ち上がる。	底部一方向ヘラ削り。体部下端手	長石・石英・雲母	P328	40%
11	須	恵 器	E	4.7					持ちヘラ削り。体部内・外面横ナ	灰色	覆土	:
			C	7.6					デ。	普通		



-195-

図版番号	器種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手法の特徴	胎土·色調·焼成	備	考
第166図	坏		平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部一方向ヘラ削り。体部下端手	長石・石英・雲母	P329	35 %
12	須 恵 器	B(2.7)		持ちヘラ削り。体部内・外面横ナ	灰色	覆土	
		C 8.8		デ。	普通		
	高台付坏	A 13.0	平底で「ハ」の字状に開く高台が	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付	長石・石英・雲母	P330	85%
13	須 恵 器	B 6.1	付く。体部は外傾して立ち上がり	け。体部内・外面及び底部横ナデ。	灰色	覆土	
10		D 8.4	口縁部はわずかに外反する。		普通		
		E 1.2					
	高台付坏	A 14.2	平底で高台が付く。体部は外傾し	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付	砂粒・石英・長石	P331	55%
14	須 恵 器	В 6.1	て立ち上がる。	け。体部内・外面横ナデ。	灰色	覆土	
14		D 8.2			· 普通		
		E 1.0					
	高坏		坏部欠損。脚部はラッパ状に広が	脚部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母	P332	20%
15	須恵器	B(11.5)	り、端部を下方に折り返す。		灰色	覆土	
		C(14.4)			普通		
	甕	A(19.6)	底部欠損。胴部中位に最大径を持	胴部外面中位以下斜位のヘラ磨き。	長石・石英・雲母	P333	20%
16	土師器	B(22.7)	ち, 頸部から口縁部にかけて小さ	口縁部内・外面横ナデ。	褐灰色	覆土	
.10		1	く外反する。口唇部を上方につま		普通		
			み上げる。				
	甕	A(21.6)	口縁部の破片。口縁部は外反し、	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母	P334	5%
17	須恵器	B(7.8)	端部を折り返す。		灰色	覆土	
			·		普通		

第4節 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡(第167図)

位置 調査区の南部, Ellhı~Ellj4区にかけて確認されている。

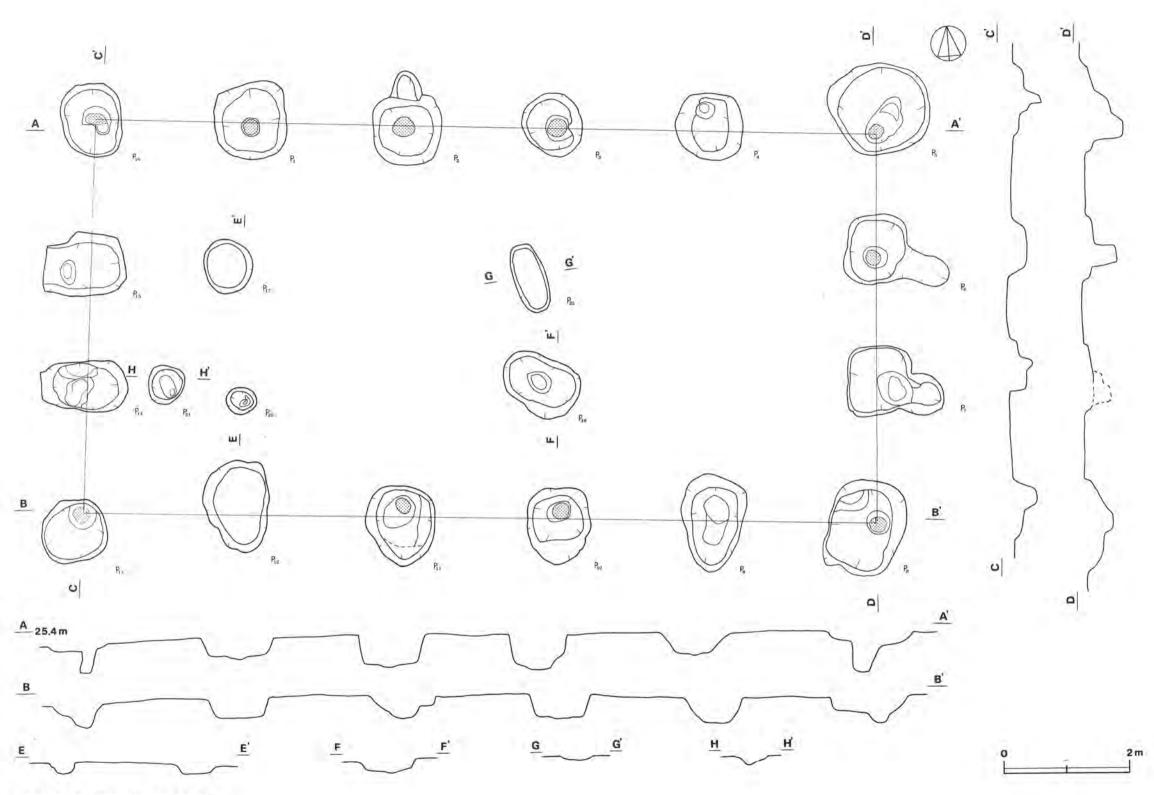
長軸方向 N-87°-W。

規模 柱穴数は、16ケ所($P1\sim P16$)であり、長方形に検出されている。南北 3 間(約6.34 m)、東西 5 間(約12.56 m)の東西棟の建物で、柱間寸法は、桁行 $2.46\sim 2.56$ m、梁行 $2.03\sim 2.27$ mである。柱穴の掘り方は、平面形が、長軸 $1.02\sim 1.58$ m、短軸 $0.80\sim 1.50$ mの長方形を呈している。深さは、 $0.29\sim 0.73$ mを測り、断面形は方形状を呈している。掘り方は、底面の中央部には、皿状に、径 $26\sim 38$ cm、深さ約 4 cmの柱痕跡が検出されている。

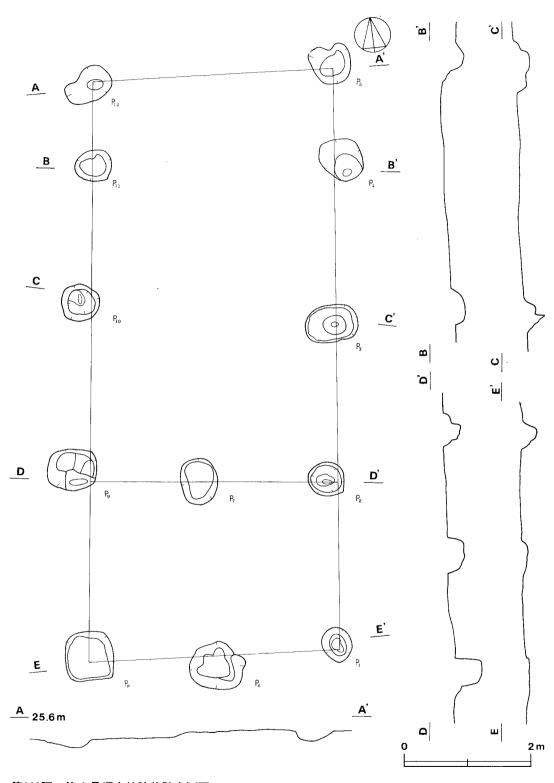
覆土 ロームブロック, 粘土ブロック, 黒色土ブロックを含む褐色土を主体にした, 人為的な堆 積土層である。

遺物 遺構に伴う遺物は出土していない。P8の東側約4.00mの遺構確認面から銅製の鋺片が2点出土している。

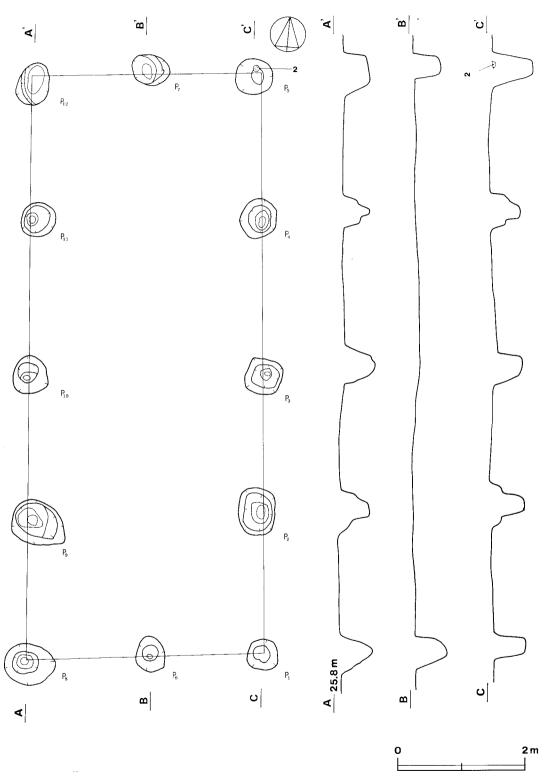
所見 本跡は、出土遺物がないこと、関連する他の施設が周囲に見つからないことから、時期、 性格については不明である。銅製の鋺が本跡に伴うかどうかは不明である。



第167図 第1号堀立柱建物跡実測図



第168図 第2号堀立柱建物跡実測図



第169回 第3号堀立柱建物跡実測図

第2号掘立柱建物跡(第168図)

位置 調査区の北部, B10h 5区~A10a 6区にかけて確認されている。

長軸方向 N-1°-E。

規模 柱穴数は、12ケ所($P1\sim P12$)であり、長方形に検出されている。南北 4 間(約9.20 m)、東西 2 間(約3.94 m)の南北棟の建物であり、柱間寸法は桁行 $2.54\sim 2.80$ m、梁行 $1.96\sim 2.00$ mを測る。柱穴の掘り方は、平面形が、長軸 $0.60\sim 0.84$ m、短軸 $0.46\sim 0.67$ mの方形を呈している。深さは、 $0.08\sim 0.26$ mを測り、断面形はU字状を呈している。

覆土 覆土は、ローム粒子やロームブロックを含んだ柔らかい暗褐色土や黒褐色土であり、人為的な堆積土層である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、出土遺物がなく、時期、性格は不明である。

第3号掘立柱建物跡(第169図)

位置 調査区の北部, B10b 8区~B10e 9区にかけて確認されている。

長軸方向 N-6°-W。

規模 柱穴数は、12ケ所(P1~P12)であり、長方形に検出されている。南北4間(約9.24m)、東西2間(約3.50m)の南北棟の建物で、柱間寸法は、桁行2.28~2.52m、梁行約1.72mである。柱穴の掘り方は、平面形が、長軸0.48~0.74m、短軸0.46~0.58mの方形を呈している。深さは、0.39~0.54mを測り、断面形はU字状を呈している。

覆土 ロームブロック, 黒色土ブロックを含むよく締まった褐色土であり, 人為的な堆積土層である。

遺物 2の須恵器の坏が、P5の覆土上層から正位の状態で出土している。

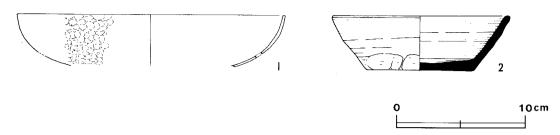
所見 本跡は、遺構の形態と出土遺物から、9世紀後半の建物跡と考えられる。

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器種		法 量(cm)		重量	現存率			地 点	備	
ESTACE	ter 13E	口径	器高	最大厚	(g)	(%)	ш ј	上 地			考
第170図 1	銅製浅鉢	(21.2)	4.2	0.25	(17.0)	5	確認面			M18	

第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備考
第170図	坏	A 13.8	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部一方向ヘラ削り。体部下端手	砂粒・長石・雲母	P 335 90%
2	須 恵 器	B 4.4		持ちヘラ削り。体部内・外面横ナ	灰色	覆土
		C 8.3		デ。	普通	



第170図 第1・3号堀立柱建物跡出土遺物実測図

第5節 地下式塘

当遺跡からは、2基の地下式壙が検出されている。

第1号地下式壙(第171図)

位置 調査区の南西側, G10i 6区を中心に確認されている。

規模と形状 竪坑と主室からなり、主室の天井部は、既に崩落している。竪坑は、上面が長方形で、規模は、長軸 $1.03\,\mathrm{m}$ 、短軸 $(0.80)\,\mathrm{m}$ で、深さ $0.43\,\mathrm{m}$ を測る。底面は、幅約 $0.20\,\mathrm{m}$ の二段の階段状を呈している。主室は、底面が隅丸長方形を呈し、長さ $2.53\,\mathrm{m}$ 、幅 $1.51\,\mathrm{m}$ を測る。壁は、高さ $0.72\,\mathrm{m}$ で、立ち上がりの傾斜から判断して、ドーム状を呈していたものと考えられる。主軸方向 N $-110\,\mathrm{^o}$ W。

覆土 7層からなる自然堆積土層である。第3・4層は,壁が崩壊した土層である。第7層は, 天井部の崩落土層と考えられる。

所見 本跡は、比較的小型の地下式壙であり、時期を決定する遺物は検出されなかったが、遺構の形状、規模等から判断して、中世の地下式壙と考えられる。

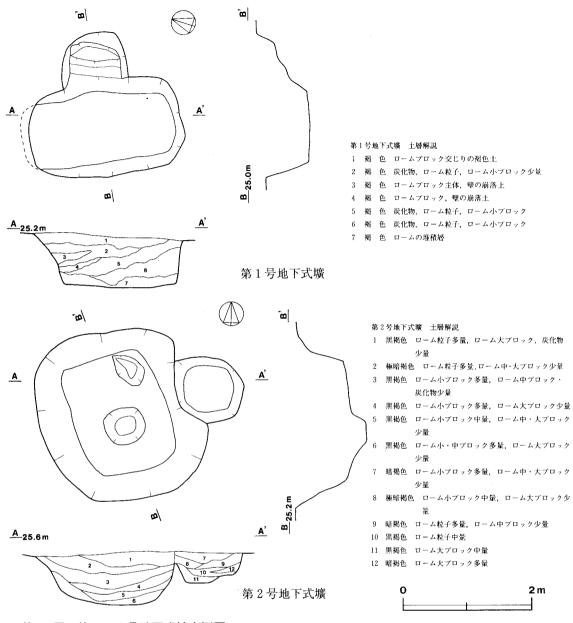
第2号地下式壙(第171図)

位置 調査区の南側, E11d 9を中心に確認されている。

規模と形状 竪坑と主室からなり、主室の天井部は、既に崩落している。竪坑は、上面が楕円形状で、長軸1.19 m、短軸(1.10) m、深さ 0.50 mを測る。底面は、長軸0.79 m、短軸0.74 mの方形を呈している。主室は、底面が隅丸方形を呈し、規模は、長軸2.71 m、短軸2.50 m、高さ1.10 mで、壁の崩落が激しく、天井部の状況は不明である。

主軸方向 $N-116^{\circ}-W_{\circ}$

覆土 主室は,6層からなる自然堆積土層である。竪坑は,6層からなる自然堆積土層である。 所見 本跡は,比較的小型の地下式壙であり,時期を決定する遺物は検出されなかったが,遺構 の形状,規模等から判断して,中世の地下式壙と考えられる。



第171図 第1・2号地下式壙実測図

第6節 井戸

当調査区からは、6基の井戸が検出された。各々の井戸は調査区域内に分散して検出されている。なお、調査時には、井戸から湧水している状況であり、1基を除いて、壁の崩落が激しく完堀はできなかった。また、調査の過程で井戸ではなく、土坑であることが明らかになったものは欠番とした。

第2号井戸(第172図)

位置 調査区の北側、B9a4区に確認されている。

規模と形状 掘り方は、上面が、長径1.30 m、短径1.25 mの円形を呈し、深さは、0.70 mで、円 筒形を呈している。

覆土 3層からなる自然堆積土層である。

遺物 出土していない。

所見 素掘りの井戸で、確認面から $0.70\,\mathrm{m}$ の深さまで調査したが、湧水による壁の崩落が著しくそれ以下の調査は断念した。

第3号井戸(第172図)

位置 調査区の北側、C9a3区に確認されている。

規模と形状 掘り方は、上面が、長径4.10 m、短径3.40 mの不整楕円形を呈し、深さ1.22 mまで擂鉢状を呈しており、そこからさらに円筒形に、直径1.40 m、深さ1.50 mまで掘り込まれている。

覆土 8層からなる。第1~5層は,井戸内の覆土であり,自然堆積土層である。第6~8層は, 井戸構築時の井戸枠の裏込めの人為的堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器(甕, 坏, 羽釜)片26点, 須恵器 (甕, 坏, 蓋)片5点が出土している。 4の土師器の羽釜は,口縁部だけが覆土中から出土している。

所見 確認面から1.50 mで湧水が激しく、それ以下の調査は断念した。遺構の形態と出土遺物から、9世紀後半の井戸と考えられる。

第5号井戸(第172図)

位置 調査区の北側、A9i3区に確認されている。

規模と形状 掘り方は、上面が、長径2.10 m、短径1.40 mの長楕円形を呈し、深さ1.07 mまで円 筒形を呈している。

覆土 3層からなる自然堆積土層である。

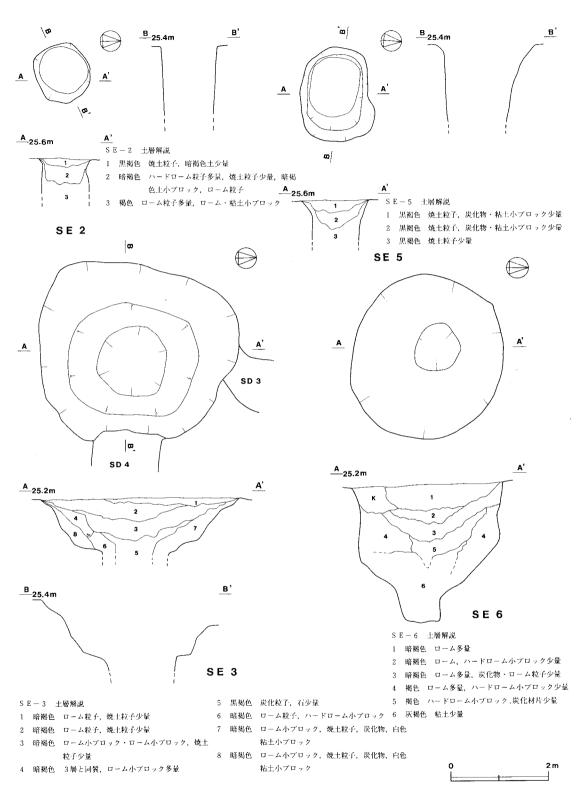
遺物 出土していない。

所見 素掘りの井戸で、確認面から1.70mの深さまで調査したが、湧水による壁の崩落が著しいため、それ以下の調査は断念した。

第6号井戸(第172図)

位置 調査区の南側, G10a 5区に確認されている。

規模と形状 掘り方は、上面が、長径3.50m、短径3.20mの円形を呈し、確認面から深さ1.60m



第172図 井戸実測図(1)

までは、円筒形で、そこから深さ $0.54\,\mathrm{m}$ までは擂鉢状に下り、再び径 $0.90\,\mathrm{m}$ 、深さ $0.68\,\mathrm{m}$ の円筒形を呈している。

覆土 6層からなる自然堆積土層である。

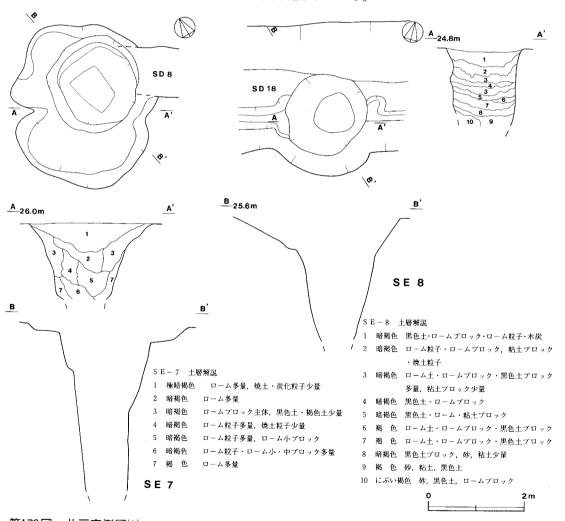
遺物 覆土中から土師器 (坏) 片 8 点,内耳土器片 3 点,石臼片 2 点が出土している。7・8の 内耳土器片,石臼片は,覆土中層から出土している。

所見 二段掘り込みの井戸で、深さ1.60mで湧水があったが完掘している。遺構の形態と出土遺物から、中世の井戸と考えられる。

第7号井戸(第173図)

位置 調査区の北東側, B12b5区に確認されている。

重複関係 本跡の上部は、第8号溝によって掘り込まれている。



第173図 井戸実測図(2)

規模と形状 掘り方は、上面が、長径2.00m、短径1.90mの円形を呈し、確認面から1.80mの深さまで急傾斜を持ち、そこから深さ1.80mまで円筒形を呈している。

覆土 7層からなる自然堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器(坏)片7点,須恵器(甕)片2点が出土している。本跡に伴う遺物は 出土していない。

所見 本跡は,重複関係から,第8号溝よりも古い時期に構築されている素掘りの井戸で,時期 等は不明である。

第8号井戸(第173図)

位置 調査区の南側, E12i 4区に確認されている。

規模と形状 掘り方は、上面が、直径1.70 mの円形を呈し、確認面から深さ2.6 mまで、円筒形を呈している。

覆土 10層からなる。ロームの崩落土と暗褐色土が互層となっており、自然堆積土層である。

遺物 出土していない。

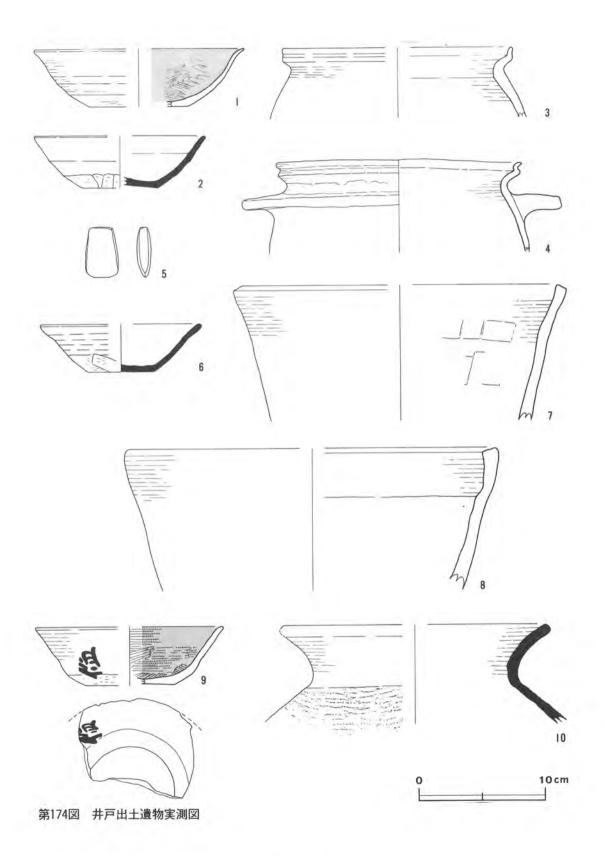
所見 素掘りの井戸で、確認面から2.6 mの深さまで調査したが、湧水による壁の崩落が著しく それ以下の調査は断念した。

第3号井戸出土遺物観察表

図版番号	쁆	種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備	考
第174図	技	:	A(16.8)	平底。体部は直線的に外傾し, 口	底部・体部下端回転へラ削り。体	砂粒・長石・雲母	P 337	15%
1	土部	5 器	B 4.7	唇部で外反する。	部外面横ナデ。内面磨き。	にぶい褐色	覆土	
			C(7.8)		内面黑色処理。	普通		
	į.	ς	A 13.6	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部一方向ヘラ削り。体部下端手	砂粒・石英・雲母	P 336	40%
2	須思	器	B 4.2		持ちヘラ削り。	灰色	覆土	
			C(6.0)			普通		
	퓢	E	A(18.2)	底部欠損。頸部はくびれ、口縁部	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母	P 338	5%
3	土的	市器	B(5.7)	は、短く外傾する。口唇部を上方		にぶい黄橙色	覆土	
				につまみ上げる。		普通		
	羽	釜	A 19.6	底部欠損。頸部直下に水平な鍔を	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母	P 339	30%
4	土的	下 器	B(7.7)	持つ。頸部はくびれ、口唇部を		灰褐色	覆土	
				「S」字状に上方につまみ上げる。		普通		

第5号井戸出土遺物観察表

	図版番号	器種		法 量(cm)		重 量	現存率	出	+	-láh	占	備	老
		一届 作生	最大長	最大幅。	最大厚	(g)	(%)	щ	ــــــــــــــــــــــــــــــــــــــ	地	Art.	VH	15
I	第174図 5	石斧	4.0	2.6	1.1	18.2	100	覆土				Q12	粘板岩



第6号井戸出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備	考
第174図	坏	A 12.8	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り後、一方向ヘラ	砂粒·長石·雲母	P 340	35%
6	須恵器	В 3.8		削り調整。	灰色	獲土	
		C 5.2			普通		
	内耳土器	A(26.6)	底部欠損。体部は外傾して立ち上	体部内・外面横ナデ。	長石·石英·雲母	P 341	5%
7	土 師 器	B(10.8)	がる。		にぶい橙色	覆土	
					普通		
	内耳土器	A(29.4)	底部欠損。体部は外傾して立ち上	体部内・外面横ナデ。	長石·石英·雲母	P 342	5%
8	土師器	B(11.3)	がる。口縁部はわずかに内彎する。		にぶい橙色	覆土	
					普通		

第7号井戸出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土·色調·焼成	備	考
第174図	坏	A(14.8)	平底。体部は、内彎気味に立ち上	底部及び体部下端回転ヘラ削り。	長石·石英·雲母	P 343	20 %
9	土 師 器	B 4.2	がる。口縁部は、直線的に外	体部外面横ナデ。内面へラ磨き。	にぶい橙色	覆土	
		C(7.0)	傾する。	内面黑色処理。	普通	墨書	
	差	A(20.8)	口縁部の破片。頸部は屈曲し、口	胴部外面叩き。口縁部内・外面横	砂粒・長石・雲母	P 344	5%
10	須 恵 器	B(7.7)	縁部は外反する。	ナデ。	灰黄色	覆土	
					普通		

第7節 溝

当調査区からは、29条の溝が検出されている。各溝の構築時期や性格については、溝の配置状況や地形等からみて、排水路的な用途や区画的な用途が考えられるが、出土遺物も少なく不明な点が多い。なお、第9・20・23・25・26・27・30・31・36号溝は欠番となっているが、これらは、いずれも、現代の土地区画の溝であることが判明したため欠番とした。

第1号溝(第175図)

位置 調査区の北西部, A9j 7区~B9h4区に確認されている。

重複関係 本跡は、第2・3号溝と交差し、第2・3号溝を掘り込んでいる。

規模と形状 上幅1.40~0.40 m, 下幅0.60~0.10 m, 深さ0.40~0.20 mを測り, 全長43.50 mで, 断面形状は「 ∪ 」状を呈し, 底面は, 硬く締まっている。

方向 $A9j_7$ 区から西 $(N-90^{\circ}-W)$ へほぼ直線的に延び, $B9a_5$ 区でほぼ直角に向きを変え,南方向 $(N-180^{\circ})$ にほぼ直線に延びている。

覆土 3層からなる自然堆積土層である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、重複関係から、第2・3号溝より新しい時期に構築されている。第2号井戸に付属する溝と考えられるが、出土遺物がなく時期は捉えられない。

第2号溝(第175図)

位置 調査区の北西部, B9g4区~B9g6区に確認されている。

重複関係 本跡は、第1号溝と交差し、第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 上幅4.20~1.00 m, 下幅0.72~0.20 m, 深さ0.07 mを測り, 全長7.40 mで断面形状は「 ン 」状を呈し, 底面は, 硬く締まっている。

方向 B9g₄区から東 (N-80°-E) へほぼ直線的に延びている。

覆土 1層からなる自然堆積土層である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、重複関係から、第1号溝よりも古い時期に構築されている。出土遺物がなく、性格は不明である。

第3号溝(第175図)

位置 調査区の北西部, B9j3区~B9i7区に確認されている。

重複関係 本跡は、第1号溝と交差し、第1号溝によって掘り込まれている。

規模と形状 上幅2.10~1.30 m, 下幅1.20~0.60 m, 深さ0.17~0.15 mを測り,全長19.60 mで, 断面形状は「 ∪ 」状を呈し, 底面は, 硬く締まっている。

方向 $B9j_3$ 区から北北東 $(N-25^{\circ}-E)$ に直線的に延び, $B9h_4$ 区でほぼ直角に,更に東方向($N-107^{\circ}-E$)に向きを変え,わずかに蛇行しながら東側の谷地形の方向に延びている。

覆土 4層からなる自然堆積土層である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は,重複関係から,第1号溝より古い時期に構築されている。第3号井戸に付属するものと考えられその関連から、9世紀後半の溝と考えられる。

第4号溝(第175図)

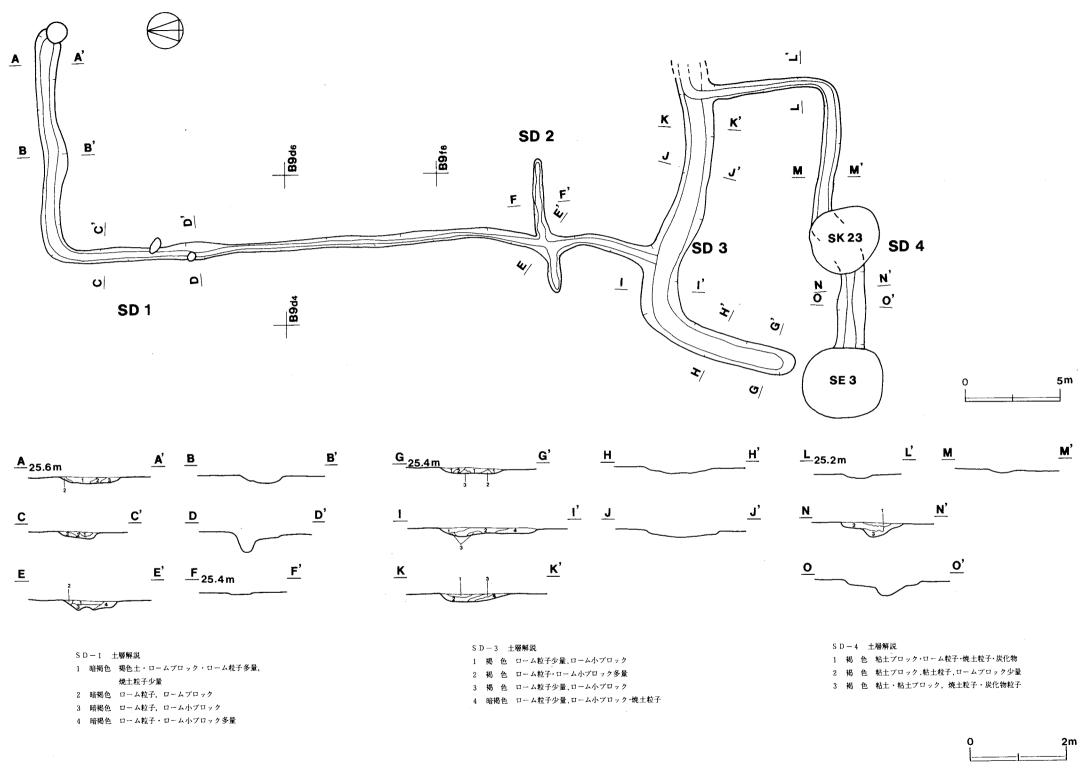
位置 調査区の北西部、C9a3区~B9i7区に確認されている。

重複関係 本跡は、第164号住居跡の南部と第23号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 上幅1.50~0.40 m, 下幅0.60~0.10 m, 深さ0.35~0.07 m を測り, 全長19.00 mで, 断面形状は「〜」 」状を呈し, 底面は, 硬く締まっている。

方向 $C9a_3$ 区から東($N-86^\circ-E$)へわずかに蛇行しながら延び, $C9a_7$ 区でほぼ直角に,北方向に向きを変えほば直線的に延び,さらに $B9i_7$ 区で再び東($N-85^\circ-E$)に向きを変え谷地形に落ちている。

覆土 3層からなる自然堆積土層である。



第175図 第1・2・3・4号溝実測図

遺物 出土していない。

所見 本跡は、重複関係から、第164号住居跡と第23号土坑よりも新しい時期に構築されている。 第3号井戸に付属すると考えられ、9世紀後半以降の溝と考えられる。

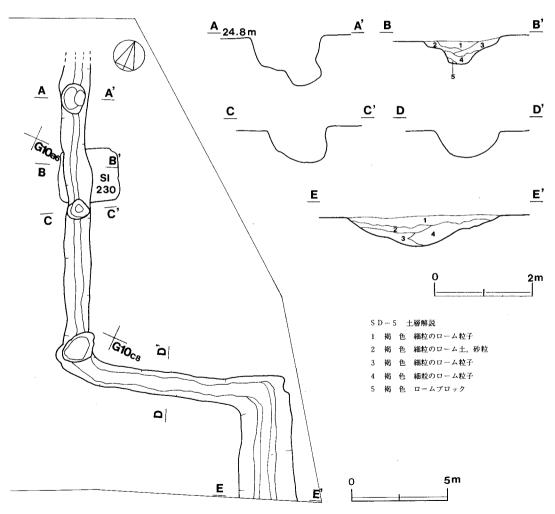
第5号溝(第176図)

位置 調査区の南部、F10i7区~G10b0区に確認されている。

重複関係 本跡は、第23号住居跡の西部を掘り込んでいる。

規模と形状 上幅1.60~0.70 m, 下幅0.70~0.30 m, 深さ0.50~0.43 mを測り, 全長30.50 mで, 断面形状は「 レ 」状を呈し, 底面は, 硬く締まっている。

方向 F10i 7区から南(N-146°-E)へほぼ直線的に延び、G10c 8区で東方向(N-60°-E)へ向きを変え、G10b 0区で再び南(N-152°-E)へ向きを変え、ほぼ直線的に延びる。



第176図 第5号溝実測図

覆土 5層からなる自然堆積土層である。

遺物 覆土中から煙管,古銭が出土している。1の煙管は,覆土(第3・4層)中から出土している。

所見 本跡は、第230号住居跡よりも新しい時期に構築されており、南端部が、柴崎遺跡 I 区の調査の際の第1号溝とつながっている。出土遺物から、近世の溝と考えられる。

第6号溝(第177図)

位置 調査区の北東部から東部にかけて、A11f5区~E13c0区に確認されている。

重複関係 本跡は、第190・197号住居跡、第12号溝を掘り込んでいる。

方向 $A11f_5$ 区から東南東へ向かって大きく弧を描き、 $C13a_1$ 区から南東($N-120^{\circ}-E$) に向かって直線的に延びている。

覆土 8層からなる自然堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏, 高台付坏) 片579点, 須恵器 (甕, 坏, 高台付坏) 片231点, 陶器片16点, 渡来銭 (祥符通寶, 嘉祐通寶) 2点, 砥石 2点, 瓦片 3点, 金属製品 1点, 砥石 2点, 礫774点が出土している。7・8の渡来銭と3の灰釉陶器片, 多数の礫は, 溝の東側から流れ込んだ状態で, D13c6区の覆土 (第2層) 中から出土している。

所見 本跡は,重複関係から,第190・197号住居跡,第12号溝よりも新しい時期に構築されている。溝の両端が調査区外に伸びているため、全容を捉えることができないが、出土遺物から、11世紀後半以降の溝と考えられる。

第7号溝(第177図)

位置 調査区の北東部, B12d 6区~B12c 9区に確認されている。

重複関係 本跡は、第6・8号溝を掘り込んでいる。

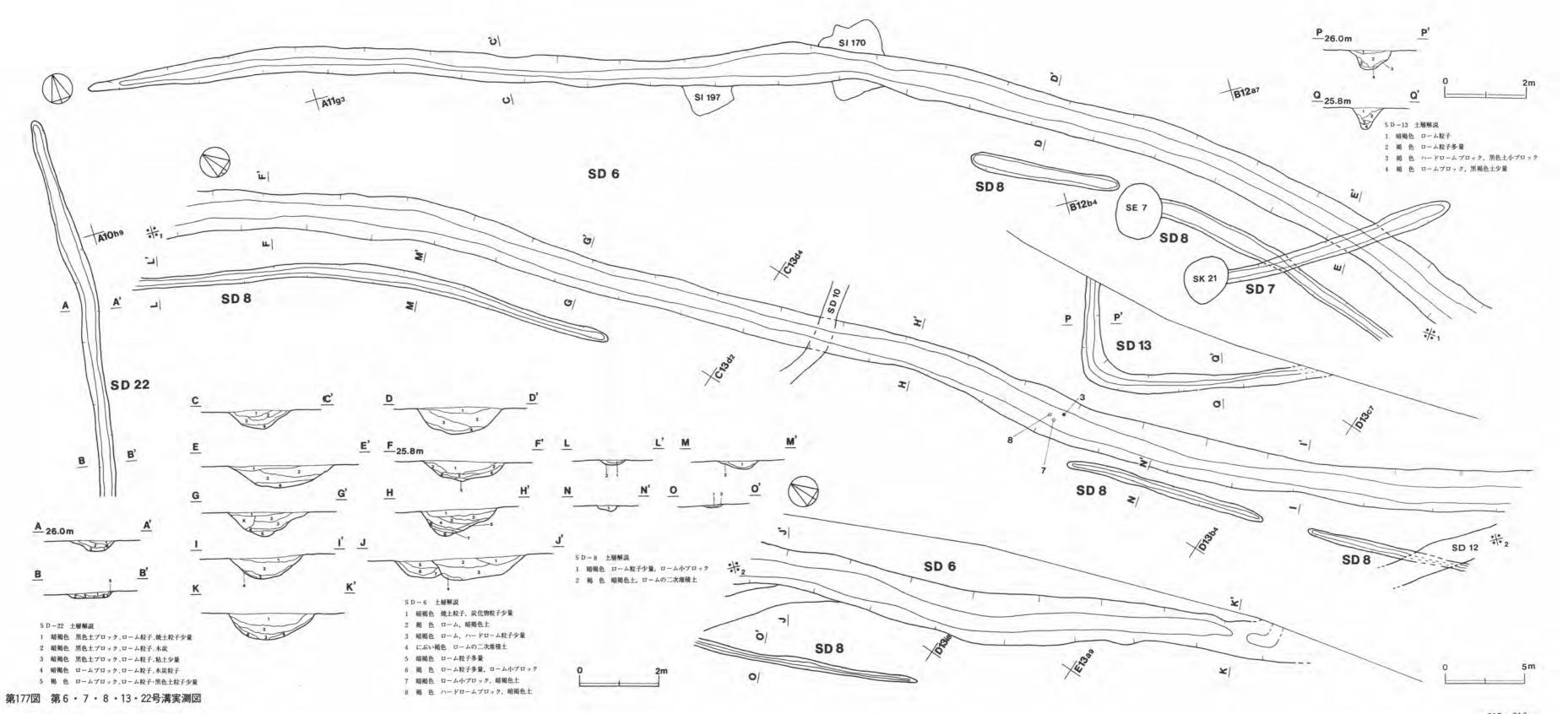
規模と形状 上幅1.35~0.85 m, 下幅0.70~0.35 m, 深さ約0.26 mを測り, 全長15.2 mで, 断面形状は「 ∪ 」を呈し, 底面は, 硬く締まっている。

方向 $B12d_6$ 区から東 $(N-88^{\circ}-E)$ へほぼ直線的に延びている。

覆土 1層からなる自然堆積土層である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は,重複関係から,第6・8号溝よりも新しい時期に構築されており,形態的に土地を区画する溝としての性格を持つと考えられる。



第8号溝(第177図)

位置 調査区の北東から東部、B12a2区~D13b4区に確認されている。

重複関係 本跡は、第7号井戸の一部を掘り込んでいる。

規模と形状 上幅 $1.30\sim0.60\,\mathrm{m}$, 下幅 $1.10\sim0.20\,\mathrm{m}$, 深さ $0.20\sim0.13\,\mathrm{m}$ を測り、全長 $104.20\,\mathrm{m}$ で、断面形状は「フノ」状を呈し、底面は、硬く締まっている。

方向 B12a 2区から南東に向かって弧を描くように第6号溝と平行して延びている。

覆土 2層からなる自然堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (坏) 片 2 点が出土している。

所見 本跡は、重複関係から、第7号井戸よりも新しい時期に構築されている。第6号溝と平行 して伸びていることから、第6号溝と同時期に存在した11世紀後半以降の溝と考えられる。

第10号溝 (第178図)

位置 調査区の北部、B10f 5区~C13d 5区に確認されている。

重複関係 本跡は、第214 A・214 B・222・223・227 号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 上幅1.30~0.60 m、下幅1.10~0.20 m、深さ0.20~0.13 m を測り、全長104.20 m で、断面形状は「 、 」、状を呈し、底面は、硬く締まっている。

方向 $B10f_5$ 区から東 $(N-83^{\circ}-E)$ に向かって直線的に延び、 $B10f_7$ 区で向きを変え南 $(N-169^{\circ}-E)$ に直線的に延び、再び $C10f_9$ 区で向きを変え東 $(N-80^{\circ}-E)$ に延びている。

覆土 5層からなる自然堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器(甕, 坏)片40点、須恵器(甕, 坏)片11点が出土している。

所見 本跡は、重複するどの遺構よりも新しく、形態、配置から土地区画溝としての性格を持つと考えられる。遺構の形態と出土遺物から、近世以降の溝と考えられる。

第11号溝(第179図)

位置 調査区の中央部、C11j3区~C13h3区に確認されている。

重複関係 本跡は、第12号溝を掘り込んでおり、第24号溝によって掘り込まれている。

規模と形状 上幅2.50~1.50m, 下幅2.10~0.20m, 深さ0.55~0.22mを測り, 全長85.70mで, 断面形状は「 ン 」状を呈し, 底面は, 硬く締まっている。

方向 C11j3区から東(N-85°-E)へ直線的に延びている。

覆土 4層からなる自然堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片48点, 須恵器 (甕) 片13点が出土している。

所見 本跡は、重複関係から、第12号溝よりも新しく、第24号溝よりも古い時期に構築されてい

る。出土遺物から、11世紀後半以降に構築されたものと考えられる。

第12号溝(第179図)

位置 調査区の中央部から東部にかけて、C11f3区~D13f9区に確認されている。

重複関係 本跡は、第10・11・15・16号溝によって掘り込まれている。

規模と形状 上幅2.00~1.00 m, 下幅1.10~0.60 m, 深さ0.63~0.09 mを測り, 全長117.00 mで, 断面形状は「 辶 」 状を呈し, 底面は, 硬く締まっている。

方向 $C11f_3$ 区から南東($N-103^{\circ}-E$)にほぼ直線的に延び, $D13c_1$ 区から緩やかに南東($N-135^{\circ}-E$)に向かって弧を描く。

覆土 5層からなる自然堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片206点, 須恵器 (甕, 坏, 高台付坏) 片69点, 陶器片 1点が出土している。

所見 本跡は、重複関係から、第10・11・15・16号溝よりも古い時期に構築されている。出土遺物から、8世紀の排水溝的な性格の溝と考えられる。

第13号溝(第177図)

位置 調査区の東部, C13h6区~D13b7区に確認されている。

規模と形状 上幅1.30~0.80 m, 下幅0.50~0.10 m, 深さ0.62~0.52 mを測り, 全長20.00 mで, 断面形状は「 ___ 」状を呈し, 底面は, 硬く締まっている。

方向 $C13h_6$ 区から南西 $(N-123^\circ-W)$ に直線的に延び, $C13i_5$ 区で直角に向きを変え南東 $(N-146^\circ-E)$ にほぼ直線的に延びている。

覆土 4層からなる自然堆積土層である。

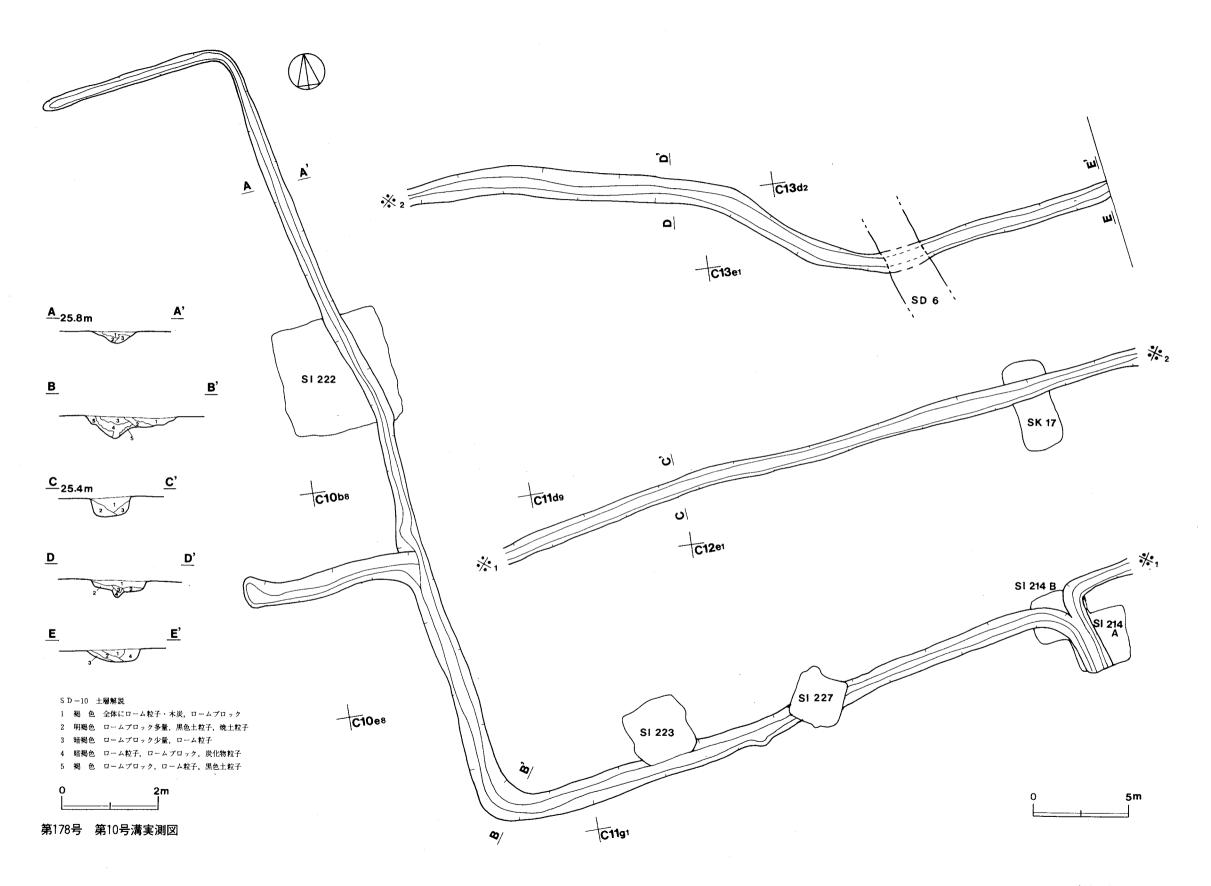
遺物 覆土中から土師器(甕, 坏)片 5 点が出土している。すべて覆土上層中から出土している。 所見 本跡は、東部と南東部が調査区外に延びており、全容を把握することができず、遺構に伴 う遺物がないことから、時期を特定することができない。遺構の形態から、土地区画の溝の可能 性も考えられる。

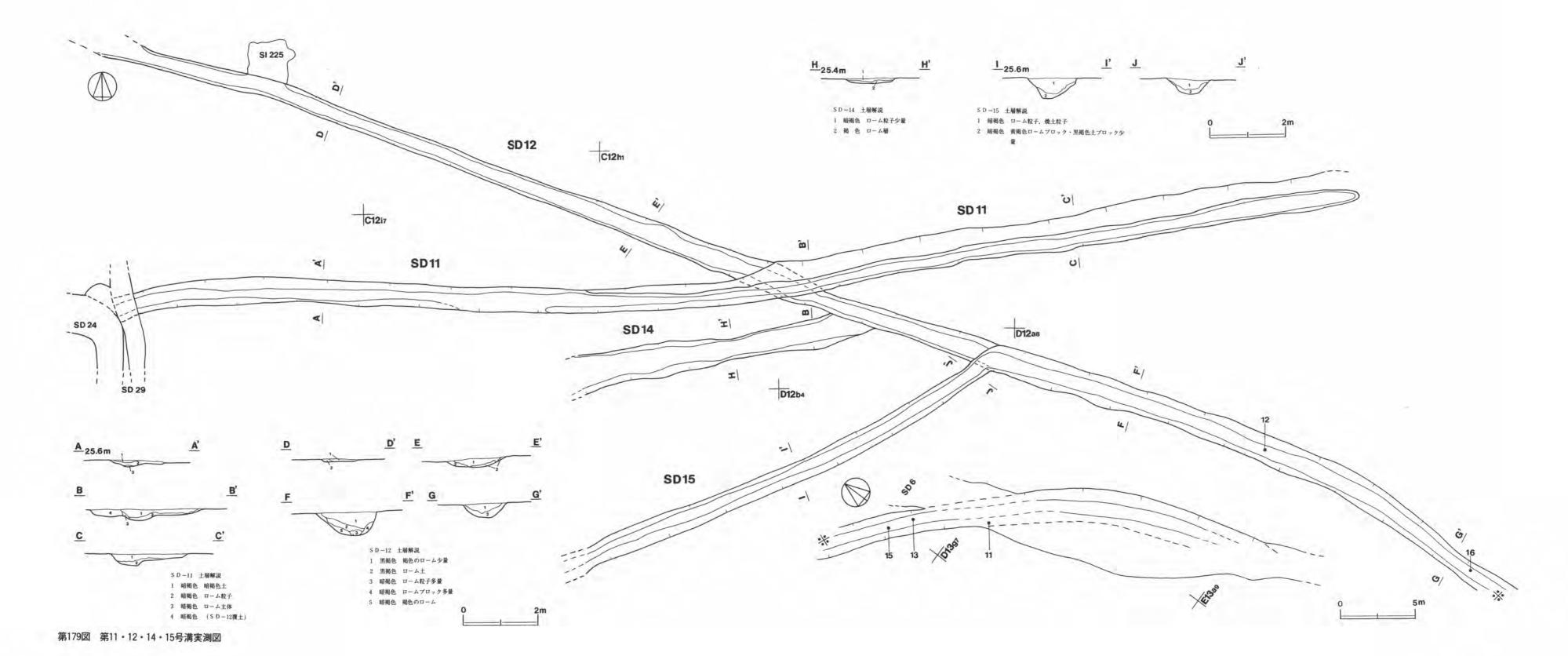
第14号溝 (第179図)

位置 調査区の中央部, D11a 0区~C12a 7区に確認されている。

規模と形状 上幅2.50~2.00 m, 下幅1.50~1.00 m, 深さ0.14~0.07 mを測り, 全長18.60 mで, 断面形状は「 __ 」状を呈し,底面は,硬く締まっている。

方向 D11a ₀区から東 (N-81°-E) へ直線的に延びている。





覆十 2層からなる自然堆積土層である。

遺物 覆土中から須恵器 (甕) 片1点が出土している。

所見 本跡は,第12号溝と接続していることから,第12号と同じ8世紀の排水溝的な溝と考えられる。

第15号溝 (第179図)

位置 調査区の中央部、D11do区~D12a7区に確認されている。

重複関係 本跡は、第12号溝を掘り込んでいる。

規模と形状 上幅1.60~1.20 m, 下幅0.70~0.20 m, 深さ0.57~0.42 m を測り, 全長30.20 mで, 断面形状は「___ 状を呈し, 底面は, 硬く締まっている。

方向 $D11d_0$ 区から北東 $(N-66^\circ-E)$ へ直線的に延び, $D12a_7$ 区で東南東 $(N-112^\circ-E)$ へ向きを変え緩やかな弧を描いて延びている。

覆土 2層からなる自然堆積土層である。

遺物 覆土中から須恵器 (甕,蓋)片20点が出土している。

所見 本跡は、途中から第12号溝に重なっており、第12号溝よりもやや新しい時期に構築されている。第12号溝東南部の覆土中出土遺物は、本跡の遺物の可能性がある。出土遺物から、8世紀の溝と考えられる。

第16号溝 (第180図)

位置 調査区の東部, D12j7区~D12j0区に確認されている。

規模と形状 上幅1.10~0.55 m, 下幅0.45~0.20 m, 深さ0.21~0.17 mを測り, 全長17.80 mで, 断面形状は「◯」を呈し、底面は、硬く締まっている。

方向 D12j 7区から東(N-67°-E)へほぼ直線的に延び、D12i 9区から南東へ弧を描いている。

覆土 2層からなる自然堆積土層である。

遺物 出土していない。

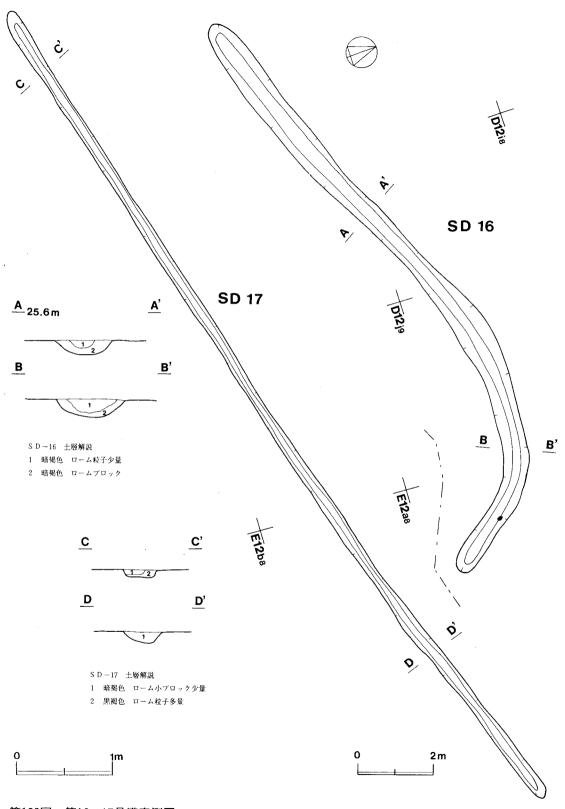
所見 本跡は、出土遺物がなく性格、時期等は不明である。

第17号溝(第180図)

位置 調査区の東部, D13b4区~D12j0区に確認されている。

規模と形状 上幅0.60~0.50 m, 下幅0.30~0.10 m, 深さ0.14~0.11 mを測り, 全長25.90 mで, 断面形状は「∪」を呈し、底面は、硬く締まっている。

方向 $D13b_4$ 区から北東 $(N-75^{\circ}-E)$ へ直線的に延びている。



第180図 第16・17号溝実測図

覆十 2層からなる自然堆積土層である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、形態的に、土地区画の溝としての性格が考えられる。

第18号溝 (第181図)

位置 調査区の南部、E12j1区~F13a5区に確認されている。

重複関係 本跡は、西部が第19号溝によって掘り込まれている。

規模と形状 上幅1.40~1.00 m, 下幅1.00~0.40 m, 深さ0.37~0.07 m を測り, 全長69.50 m で, 断面形状は「—」状を呈し、底面は、硬く締まっている。

方向 $E12j_1$ 区から東北東 $(N-70^{\circ}-E)$ へ緩やかに弧を描き, $E13h_3$ 区から南 $(N-165^{\circ}-E)$ に 方向を変えてそのまま南へ直線的に延びている。

覆土 4層からなる自然堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片77点, 須恵器 (甕, 坏) 片38点, 陶器片29点, 砥石 2 点が 出土している。

所見 本跡は,重複関係から,第19号溝よりも古い時期に構築されている。第19号溝とともに土地を区画するように掘られており,覆土中の出土遺物から,中世の溝と考えられる。

第19号溝 (第181図)

位置 調査区の南部、F11f6区~G13a4区に確認されている。

重複関係 本跡は、第191号住居跡の南部、第18・33号溝を掘り込んでいる。

規模と形状 上幅2.80~1.40 m, 下幅1.40~0.50 m, 深さ0.32~0.07 mを測り, 全長139.00 mで, 断面形状は「—」状を呈し, 底面は, 硬く締まっている。

方向 $F111f_6$ 区から北($N-16^{\circ}-E$)へほぼ直線的に延び、 $F11b_5$ 区で東($N-78^{\circ}-E$)へ向きを変えて直線的に延び、 $E13i_2$ 区で更に南($N-170^{\circ}-E$)へ向きを変え、直線的に延びている。

覆十 9層からなる自然堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片241点, 須恵器(甕, 坏, 高坏) 片67点, 土師質土器片 2点, 陶器片22点, 砥石 2点, 鉄製品 3点, 瓦片 5点が出土している。24・25の土師質土器は, F11b5区 の覆土下層から出土している。

所見 本跡は,重複関係から,第191号住居跡,第18・33号溝よりも新しい時期に構築されている。 コの字状に巡っており,土地区画の溝としての性格が考えられる。出土遺物から,中世の溝と考えられる。

第21号溝(第182図)

位置 調査区の南東部, F13i 8区~F14g 5区に確認されている。

重複関係 本跡は、第34号溝を掘り込んでいる。

規模と形状 上幅1.55~1.00 m, 下幅1.05~0.45 m, 深さ0.32~0.18 m を測り, 全長29.15 mで, 断面形状は「」」を呈し、底面は、硬く締まっている。

方向 F13i 8区から東北東 (N-72°-E) へ直線的に延びている。

覆土 3層からなる自然堆積土層である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、重複関係から、第34号溝よりも新しい時期に構築されている。出土遺物がなく性格、時期等は不明である。

第22号溝 (第177図)

位置 調査区の北部, A10is区~B10bs区に確認されている。

規模と形状 上幅 $1.40\sim0.80\,\mathrm{m}$,下幅 $0.80\sim0.40\,\mathrm{m}$,深さ $0.27\sim0.12\,\mathrm{m}$ を測り,全長 $25.00\,\mathrm{m}$ で,断面形状は「U」状を呈し,底面は,硬く締まっている。

方向 $A10i_8$ 区から南 $(N-10^{\circ}-E)$ に直線的に延びている。

覆土 5層からなる自然堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片42点, 須恵器 (甕, 坏) 片12点が出土している。

所見 本跡は、第8号溝と形態的に類似しているが、性格等は捉えられない。出土遺物から、11世紀後半以降の溝と考えられる。

第24号溝(第183図)

位置 調査区の中央部, C10i 5区~D11b 2区に確認されている。

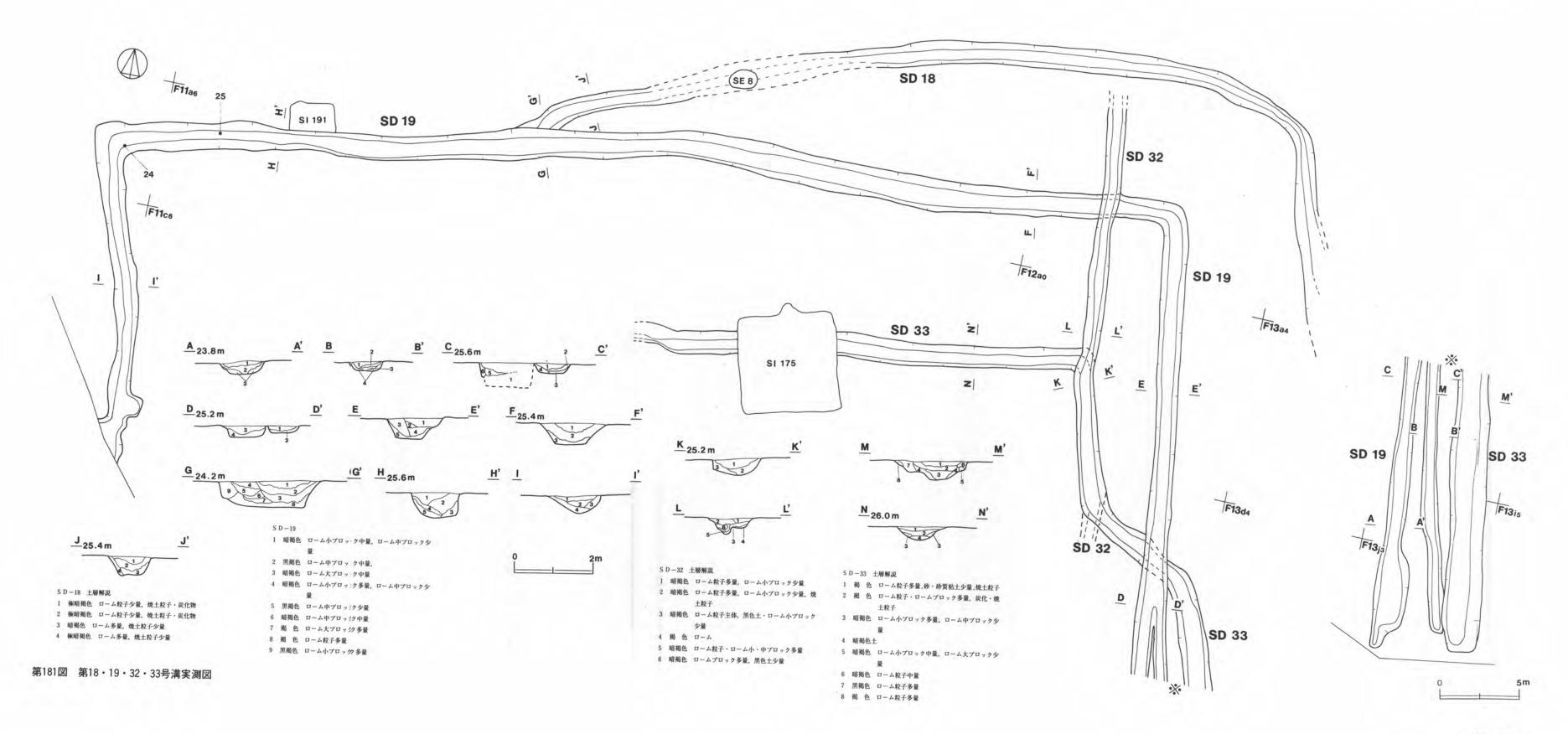
重複関係 本跡は、第11・28号溝を掘り込んでいる。

規模と形状 上幅2.70~1.20 m, 下幅1.30~0.70 m, 深さ1.20~0.90 mを測り, 全長36.00 mで, 断面形状は「辶」状を呈し、底面は、硬く締まっている。

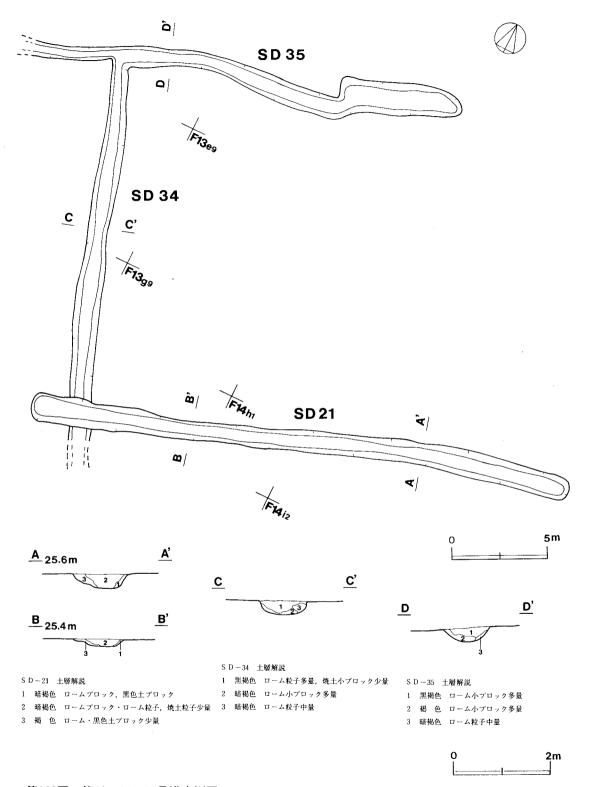
方向 C10i s区から東南東 (N-104 - E) へ直線的に延び,C11j 2区で向きを変え南 (N-180 - E) へ直線的に延びている。

覆土 8層からなる自然堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片 3 点, 須恵器 (甕) 片 4 点, 陶器片 2 点が出土している。 所見 本跡は, 重複関係から, 第11・28号溝よりも新しい時期に構築されている。南端は, 調査 エリア外に延びており, 全容を捉えることはできないが, 西端がなだらかに谷地形に向かって



-227~228-



第182図 第21・34・35号溝実測図

傾斜することから、排水溝的な性格が考えられる。出土遺物から、13世紀末以降の溝と考えられる。

第28号溝(第183図)

位置 調査区の中央部, C11j1区~D11a1区に確認されている。

重複関係 本跡は、第24号溝によって掘り込まれている。

規模と形状 上幅1.70~1.20 m, 下幅0.60~0.40 m, 深さ0.44 mを測り, 全長6.00 mで, 断面形状は「U」状を呈し、底面は、硬く締まっている。

方向 C11j 1区から南 (N-168°-E) へ直線的に延びている。

覆土 2層からなる自然堆積土層である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は,重複関係から,第24号溝よりも古い時期に構築されている。両端が調査区外に伸びており全容を把握することができず,遺物の出土もない状況から,時期,性格を特定できない。

第29号溝 (第183図)

位置 調査区の中央部、C11j1区~D11b3区に確認されている。

重複関係 本跡は、第11号溝に掘り込まれている。

規模と形状 上幅 $1.30\sim1.05\,\mathrm{m}$,下幅 $0.65\sim0.43\,\mathrm{m}$,深さ $0.37\,\mathrm{m}$ を測り,全長 $5.70\,\mathrm{m}$ で,断面形状は,「 \smile 」を呈し,底面は,硬く締まっている。

方向 C11j₁区から南(N-174°-E)へ直線的に延びている。

覆土 1層からなる自然堆積土層である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は,重複関係から,第11号溝よりも古い時期に構築されている。南部が調査地区外に延びており、全容を把握することができず、遺物の出土もない状況から,時期、性格を特定できない。

第32号溝 (第181図)

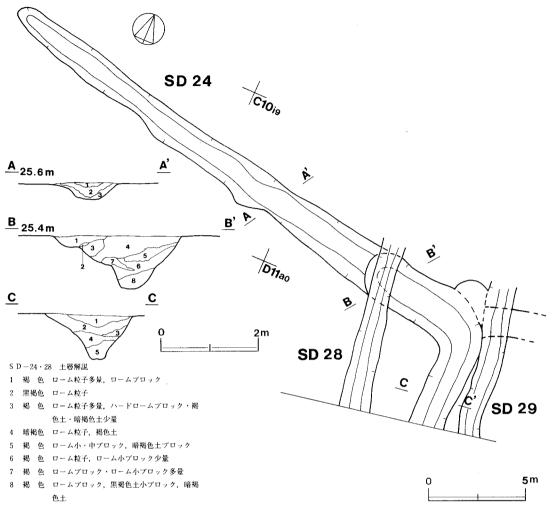
位置 調査区の南東部、D12ho区~F13d1区に確認されている。

重複関係 本跡は、第18・19・33号溝を掘り込んでいる。

規模と形状 上幅2.25~0.90 m, 下幅0.95~0.25 m, 深さ0.40~0.37 mを測り, 全長26.50 mで, 断面形状「辶」を呈し, 底面は, 硬く締まっている。

方向 $D12h_0$ 区から南 $(N-168^{\circ}-E)$ へ直線的に延びている。

覆土 6層からなる自然堆積土層である。



第183図 第24・28・29号溝実測図

遺物 出土していない。

所見 本跡は,重複関係から,第18·19·33号溝よりも新しい時期に構築されている。出土遺物がなく,時期,性格は不明である。

第33号溝(第181図)

位置 調査区の南部、F12c4区~F13b1区に確認されている。

重複関係 本跡は、第175号住居跡を掘り込んでおり、第19号溝に掘り込まれている。

規模と形状 上幅 $1.65\sim1.15\,\mathrm{m}$,下幅 $0.80\sim0.15\,\mathrm{m}$,深さ $0.45\sim0.20\,\mathrm{m}$ を測り,全長 $69.50\,\mathrm{m}$ で,断面形状は「 $_$ 」を呈し,底面は,硬く締まっている。

方向 F12c 4区から東 (N-81°-E) へ直線的に延び、F13b1区で南 (N-160°-E) へ向きを変え

蛇行しながら南に延びている。

覆土 4層からなる自然堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片16点, 須恵器 (甕, 坏) 片 5 点が出土している。すべて流れ込んだ遺物である。

所見 本跡は,重複関係から,第175号住居跡よりも新しい時期に構築されている。出土遺物がなく,時期,性格は不明であるが,形態的に土地区画の溝の可能性が考えられる。

第34号溝(第182図)

位置 調査区の南東部、F13d7区~F13i9区に確認される。

重複関係 本跡は、第21号溝に掘り込まれている。

規模と形状 上幅1.35~0.85 m, 下幅0.85~0.35 m, 深さ0.29 mを測り, 全長18.10 mで, 断面形状は「―」を呈し, 底部は、硬く締まっている。

方向 $F13d_7$ 区から南南東 $(N-160^{\circ}-E)$ へ直線的に延びている。

覆土 3層からなる自然堆積土層である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は,重複関係から,第21号溝よりも新しい時期に構築されている。出土遺物がなく,時期,性格は不明であるが,遺構の形態,配置から近世の土地区画溝の可能性が考えられる。

第35号溝 (第182図)

位置 調査区の南東部, F13d 6区~F14c 2区に確認される。

規模と形状 上幅 $1.65\sim0.75\,\mathrm{m}$,下幅 $1.10\sim0.30\,\mathrm{m}$,深さ $0.33\,\mathrm{m}$ を測り,全長 $23.70\,\mathrm{m}$ で,断面形状は「 \bigcirc 」を呈し,底面は,硬く締まっている。

方向 $F13d_6$ 区から東北東 $(N-73^{\circ}-E)$ へ直線的に延びている。

覆土 3層からなる自然堆積土層である。

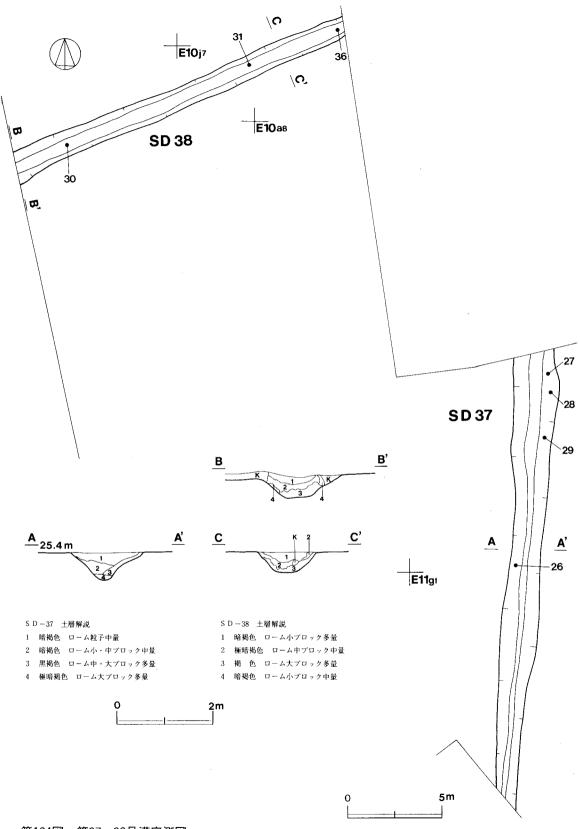
遺物 出土していない。

所見 出土遺物がなく,時期,性格は不明であるが,遺構の形態,配置から現代の土地区画溝の可能性が考えられる。

第37号溝 (第184図)

位置 調査区の南部, Elld1区~Elli1区に確認されている。

規模と形状 上幅2.50~1.00 m, 下幅0.70~0.20 m, 深さ0.53~0.49 m を測り, 全長25.00 m で, 断面形状は「__」状を呈し, 底面は, 硬く締まっている。



第184図 第37・38号溝実測図

方向 $E11d_1$ 区から南 $(N-5^{\circ}-E)$ へ直線的に延びている。

覆土 5層からなる自然堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器 (甕, 坏) 片 2 点, 須恵器 (甕, 高坏) 片 2 点, 陶器 (甕, 長頸壺) 片 4 点が出土している。

所見 本跡は、南北の両端が調査区外に延びており、全容を捉えられないが、北端を延長すると 第28号溝があり、連結する可能性がある。出土遺物から、13世紀末以降の排水溝的な性格の溝と 考えられる。

第38号溝(第184図)

位置 調査区の西部、D10ig区~E10a4区に確認されている。

規模と形状 上幅1.50~1.10 m, 下幅0.80~0.60 m, 深さ0.28 mを測り, 全長19.00 mで, 断面形状は「--」状を呈し、底面は、硬く締まっている。

方向 D10i 9区から西南西 (N-116°E) へ直線的に延びている。

覆土 3層からなる自然堆積土層である。

遺物 覆土中から土師器(甕, 坏, 埦) 片133点, 須恵器(高台付坏) 片1点が出土している。

所見 本跡は、東西の両端が調査区外に伸びており、全容を捉えられないが、東端を延長すると 第15号溝があり、連結する可能性がある。出土遺物から、7世紀後半の排水溝的な性格の溝と考 えられる。

第5号溝出土遺物観察表

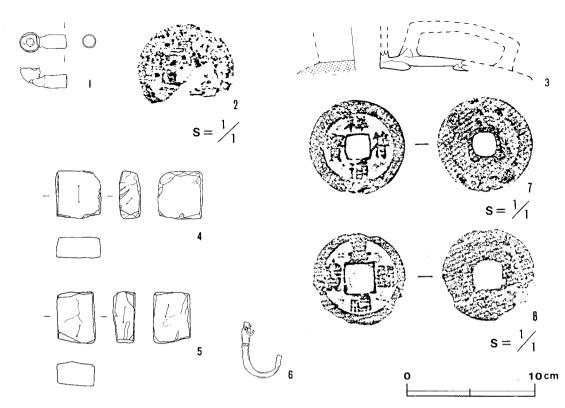
回版来早	99	器 種	法 量 (cm)		重 量	現存率	出土地点	備	老	
図版番号	奋		最大長	最大幅	最大厚	(g)	(%)	山土地点		45
第185図 1	煙	管	3.7	1.6		(3.5)	90	覆土.	M19	

図版番号	銭 名	初鋳年	鋳造地名	出土位置	備考
2	寛永通寶	1668年	日本	覆土	M20

第6号溝出土遺物観察表

図版番号	器	種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備	考
第185図	平	瓶	A (6.2)	体上部に「コ」の字状の把手が付	把手の付け根に面取り。内面中央	砂粒	P 346	5 %
3	陷	器	B (2.1)	く。口縁部は直線的に立ち上がる。	部に成形時の円窓痕あり。緑灰色	灰オリーブ色	覆土	
					の自然釉。	普通		

図版番号	器	• 種	注	;量(cr	n)	重量	現存率	th L to be	μ± ±ν.
凶队宙与	fair	▶ 1里	最大長	最大幅	最大厚	(g)	(%)	出土地点	備考
4	砥	石	(3.8)	3.6	1.6	(38.7)	30	覆土	Q16 砂岩
5	砥	石	4.1	3.0	1.8	(35.1)	30	覆土.	Q15 流文岩質凝灰
6	掛	金 具	4.4	0.7	0.2	2.2	100	覆土	M23 青銅製

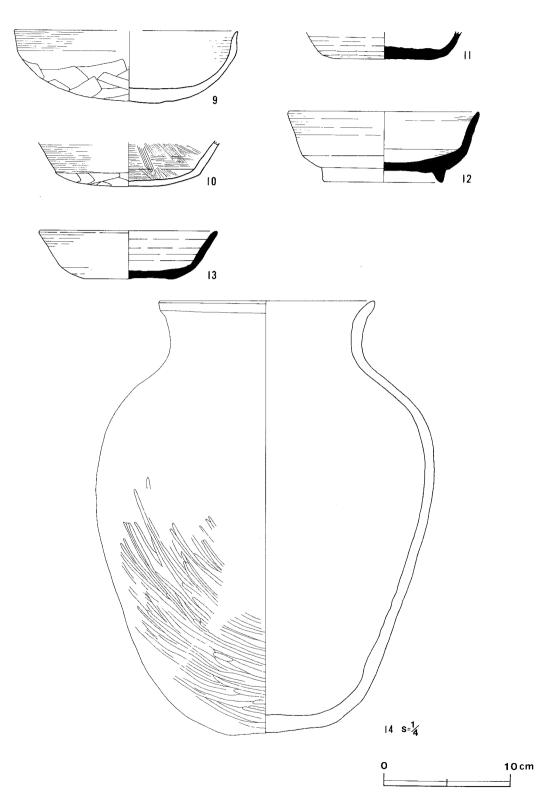


第185図 第5・6号溝出土遺物実測図

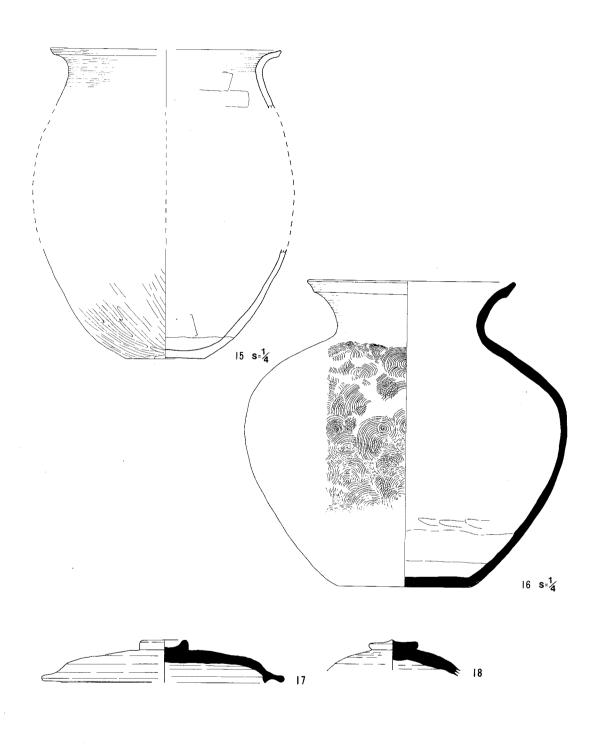
図版番号	銭 名	初铸年	鋳 造	地名	出土位置	備	考
第185図 7	祥符通寶	北宋1009年	北	宋	覆土(2層)	M21	
8	嘉祐通寶	北宋1056年	北	朱	覆土(2層)	M22	

第12号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第186図	坏	A 17.6	丸底。体部は内彎して立ち上がる。	底部へラ削り。口縁部内・外面横	長石・雲母	P 349 40%
9	土 師 器	В 5.9	口縁部は垂直に立ち上がる。	ナデ。	にぶい褐色	覆土
					普通	
	坏		丸底。底部と体部との境に稜を持	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・雲母	P 350 30%
10	土 師 器	B 3.7	つ。体部は外傾して立ち上がる。	ナデ。	橙色	覆土
]					普通	
-	坏	B (2.2)	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ削り。体部内・外面	長石・石英・雲母	P 352 20%
11	須 恵 器			横ナデ。	灰色	覆土
		C 8.0			普通	
	高台付坏	A 15.0	平底で高台が付く。底部と体部の	底部及び体部下端回転へラ削り。	長石・石英・雲母	P 353 50%
12	須 恵 器	B 5.7	境に稜を持ち、体部は外傾して立	体部内・外面横ナデ。	灰白色	覆土
		D 9.2	ち上がる。		普通	
	坏	A 14.0	平底。底部と体部の境がはっきり	底部回転へラ削り後、不定方向の	砂粒・長石・雲母	P 351 50%
13	須 恵 器	В 3.9	せず、体部は外傾して立ち上がる。	ヘラナデ。体部内・外面横ナデ。	灰白色	覆土
		C 4.2			普通	

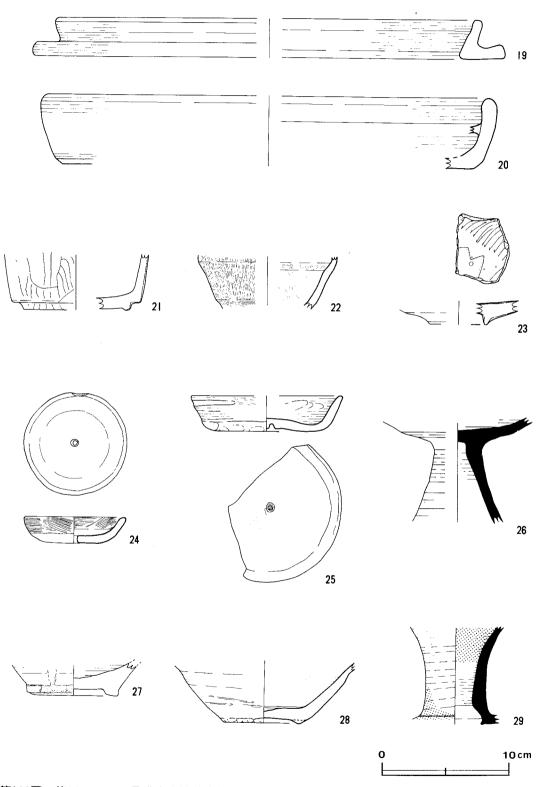


第186図 第12号溝出土遺物実測図(1)

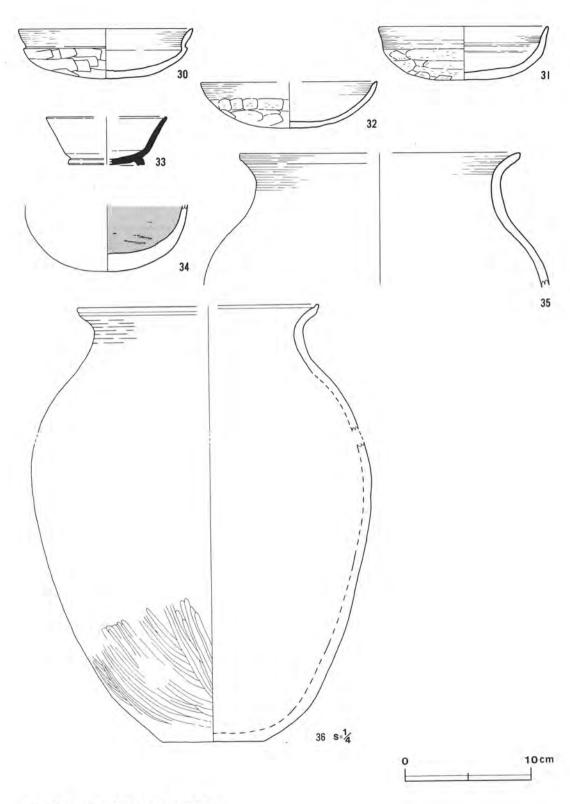




第187図 第12(2)・15号溝出土遺物実測図



第188図 第18・19・37号溝出土遺物実測図



第189図 第38号溝出土遺物実測図

図版番号	器		種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備	考
第186図		甕		A 22.7	平底。胴部中位に最大径を持ち、頸	胴部外面中位以下斜位のヘラ磨き。	雲母・長石・石英	P 347	45%
14	±.	師	뿂	В 46.7	部から口縁部にかけて小さく外反	口縁部内・外面横ナデ。	にぶい橙色	覆土	
•				C 9.7	する。		普通		
第187図		斃		A 24.2	平底。胴部中位に最大径を持ち,頸	胴部中位以下斜位のヘラ磨き。	長石・石英・雲母	P 354	30%
15	.t.	飾	器	В [33.0]	部から口縁部にかけて外反する。	口縁部内・外面横ナデ。	にぶい橙色	覆土	
				C 8.2			普通		
		甍		A 21.2	平底。胴部上位に最大径を持つ。	胴部外面同心円文叩き。口縁部横	砂粒・雲母・砂礫	P 348	50%
16	須	恵	器	B [20.8]	頸部はくびれ、口縁部は外反する。	ナデ。	灰白色	覆土	
				C 13.8	口縁部外面に弱い稜を持つ。		普通		

第15号溝出土遺物観察表

図版番号	器		種	法	量(cm)	器形の特徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備	考
第187図		蓋		Α	19.1	天井部は浅く、緩やかな傾斜で口縁	天井部二分の一の範囲, 回転へラ	長石・石英・雲母	P 355	40%
17	須	恵	뀲	В	3.4	部に至る。口縁部は垂直に下向きに	削り。口縁部内・外面横ナデ。	灰色	覆土	
				F	3.6	屈曲する。内側に短く垂下するかえ		普通		
				G	0.8	りが行く。リング状のつまみが行く。				
		蓋		В	(2.5)	天井部は,内彎しながら口縁部に	天井部回転へラ削り。内面横ナデ。	砂粒・雲母	P 356	25%
18	須	惠	器	F	3.9	至る。中央がわずかに突出した偏		灰黄色	覆土	
				G	0.8	平なつまみが付く。		普通		

第18号溝出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備	考
第188図	羽釜状土器	A (33.2)	羽釜のつば状を呈する。内側から	体部内・外面横ナデ。	石英・長石・雲母	P 357	5%
19	土師質土器	В 3.1	外上方に向かって直線的に外傾す		にぶい赤褐色	覆土	
		C (30.0)	る口縁部が付く。		普通		
		(37.2)					
	内耳土器	A (35.0)	平底。体部は内彎気味に直立する。	体部内・外面横ナデ。体部下端へ	長石・石英・雲母	P 358	5%
20	土 師 器	B 5.6	厚さの薄い内耳が付く。	ラ削り。	オリーブ黒色	覆土	
		C (32.4)			普通		
	筒 花 生	B (4.4)	平底で短い高台が付く。体部はや	削り出し高台。釉には貫入が入る。	緻密な精製土	P 359	5%
21	磁 器	D (8.4)	や外傾して立ち上がる。		明緑灰色	覆土	
		E 0.5	,		良好		
	天目茶碗		体部の破片である。体部はわずか	体部全体に黒色の鉄釉がかかる。	緻密な精製土	P 360	5%
22	磁 器	B (4.2)	に屈曲しながら、外傾する。		浅黄橙色	覆土	
					良好		
	高台付皿	B (1.9)	径の小さい高台に、緩やかな傾斜	内面に片切彫りの花紋を施す。	緻密な精製土	P 361	5%
23	磁 器	D (4.6)	の皿部が付く。		灰白色	覆土	
		E 0.9			良好		

第19号溝出土遺物観察表

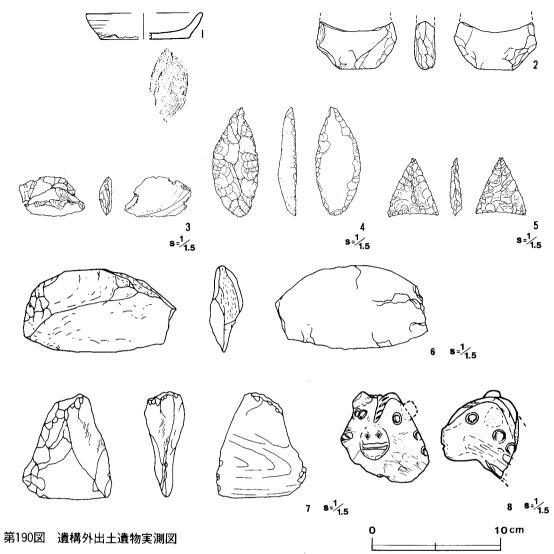
図版番号	器 種 法量(cm)		法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備	考
第188図	小 Ⅱ	11	A 7.9	平底。底部と口縁部との境は、不	手捏ね。底部無調整。口縁部及び	砂粒・長石・赤色	P 363	98%
24	土師質土器	뭄	B 2.1	明瞭で口縁部は内彎して立ち上が	底部内面横ナデ。	粒子 にぶい橙色	覆土.	
1			C 4.0	る。中央に穿孔。		普通		
	小	1	A 12.0	平底。底部と口縁部の境にわずか	手捏ね。底部無調整。口縁部及び	砂粒・長石・赤色	P 364	50%
25	土師質土都	뚬	B 2.8	に稜を持ち、口縁部は外傾する。	底部内面横ナデ。	粒子 にぶい橙色	覆土	
			C 8.0	底部外面に小さい窪みを持つ。		普通		

第37号溝出土遺物観察表

					, · · · · · ·			
図版番号	器	種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備	考
第188図	高	坏		坏部欠損。脚部はラッパ状に開く。	内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石	P 365	20 %
26	須 恵	器	B (7.2)			暗青灰色	覆土	
						普通		
	長頸	瓶	B (2.4)	胴部欠損。平底で低い高台が付く。	内・外面横ナデ。高台部に一部濃	緻密な精製土	P 366	10%
27	灰釉	淘 器	D 7.4		い緑色の自然釉が流下する。	暗オリーブ灰色	覆土	
			E 0.5			普通		
	碗		B (4.9)	平底で断面三角形の低い高台が付	底部糸切り後ナデ。体部横ナデ。	砂粒・長石・石英	P 367	25 %
28	陶	器	D 6.0	く。体部は直線的に外傾する。	内面コテナデ。	灰白色	覆土	
			E 0.3			普通	山茶碗	
	長頸	壺		頸部破片。頸部は直角に屈曲する。	内・外面横ナデ。褐色自然釉。	級密黒色微粒子	P 368	10%
29	須 恵	器	B (7.7)	口縁部はラッパ状に上方に開く。		オリーブ黄色	覆土:	
						普通		

第38号溝出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備	考
第189図	坏	A 13.8	丸底。体部は内彎気味に立ち上が	底部へラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・長石・雲母	P 369	60%
30	土 師 器	B 4.0	り、口縁部との境に稜を持つ。口	ナデ。	にぶい橙色	覆土	
			縁部は外傾する。		不良		
	坏	A 13.4	丸底。体部は内彎気味に立ち上が	底部へラ削り。口縁部内・外面横	石英・長石・雲母	P 370	50%
31	土 師 器	B 4.3	り、口縁部はほぼ垂直に立ち上が	ナデ。	にぶい橙色	覆土	
			る。		普通		
	坏	A 14.0	丸底。体部は内彎気味に立ち上が	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横	砂粒・雲母	P 371	30%
32	土 師 器	B 3.7	り、口縁部は外上方に開く。	ナデ。	灰褐色	覆土	
					普通		
	高台付坏	A (9.6)	丸底気味の底部に「ハ」の字状に	底部回転ヘラ削り。体部内・外面	長石・石英・雲母	P 374	20 %
33	須 恵 器	B 3.8	開く高台が付く。体部は直線的に	横ナデ。口縁部内側に浅い沈線を	灰白色	覆土	
		D (6.0)	外傾する。	施す。	普通		
		E 0.5					
	埦		丸底。体部は強く内彎して立ち上	内面黑色処理。	砂粒・長石・石英	P 375	70%
34	土 師 器	B 5.3	がる。底部は器厚が厚く, 口縁部		にぶい橙色	覆土	
			に向かって薄くなる。		不良		
	甕	A (22.3)	胴部欠損。頸部は内彎し,口縁部	口縁部内・外面横ナデ。	長石・石英・雲母	P 373	10%
35	土 師 器	B (10.7)	で短く外反する。		にぶい赤褐色	覆土	
					普通		
	薎	A 25.7	平底。胴部中位に最大径を持ち,	胴部外面中位以下斜位のヘラ磨き。	長石・雲母・石英	P 372	90%
36	土 師 器	B [45.6]	頸部から口縁部にかけて小さく外	口縁部内・外面横ナデ。	明黄褐色	覆土	
		C 10.6	反する。		普通		



遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	法量	豊(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備	考
第190図	坏	Α	9.2	平底。体部はわずかに内彎気味に	底部回転糸切り。体部内・外面横	砂粒・酸化鉄	P 31	30%
1	土師質土器	В	2.1	外傾して立ち上がる。	ナデ。	橙色	G 10a 2	X
		C (7.0)			普通		

図版番号	器	種	法	去 量 (cm)		重量	現存率	Ur I W. F	/#: ±/
四/灰雷 ケ	fuit .	1里	最大長	最大幅	最大厚	(g)	(%)	出土地点	備考
2	石	斧	(6.4)	(3.8)	(1.7)	(41.2)	30	G10a ₂⊠	Q3 安山岩
3	剝	片	1.6	2.6	0.5	1.7	100	C 9 c 1 区	Q9 チャート
4	尖 頭	器	4.4	1.8	0.7	4.0	100	Fllas区	Q11 黒燿石
5	石	鏃	2.4	2.1	0.5	1.1	100	F 12a8区	Q17 チャート
6	搔,	器	3.4	6.2	1.3	16.4	100	B 8 h 9 ⊠	Q10 頁岩
7	ナイフ州	形石器	4.3	3.5	1.6	13.2	100	D 12h₂⊠	Q4 頁岩
8	縄文式 獣 面:		(3.5)	(3.5)	(3.5)	24.8	2	C 8 d₅⊠	P 376

第5章 考 察

柴崎遺跡における集落の変遷について

柴崎遺跡は3年間にわたって総面積82,081㎡の調査を行なった。調査によって古墳時代から平安時代に亘る竪穴住居跡359軒を検出した。この調査成果に基づいて、柴崎遺跡における集落の変遷について考えてみることとする。

第1節 出土遺物と時期区分

ここでは柴崎遺跡の出土遺物の具体的な様相から、柴崎遺跡の時期区分を検討していくこととする。

1 I 期

Ⅰ期は、古墳時代後期の中で6世紀から7世紀前半にあたり、土師器の甕、坏、高坏、甑を中心とした構成で、まれに須恵器が出土している。Ⅰ期の中頃の時期のものに良好な資料が残っており、特に詳しく述べることとする。

1段階

5軒の住居跡が該当すると考えられるが、そこからの出土遺物は数が少ない。坏においては、 口径が大きい模倣坏タイプのものや、器高が高く埦のような形態のものが出土している。甕については、胴部に比較的丸みを持ったものが出土している。本期1段階の坏や甕は、2段階の遺物 (甕. 坏)に比べると、より古い様相を残している。

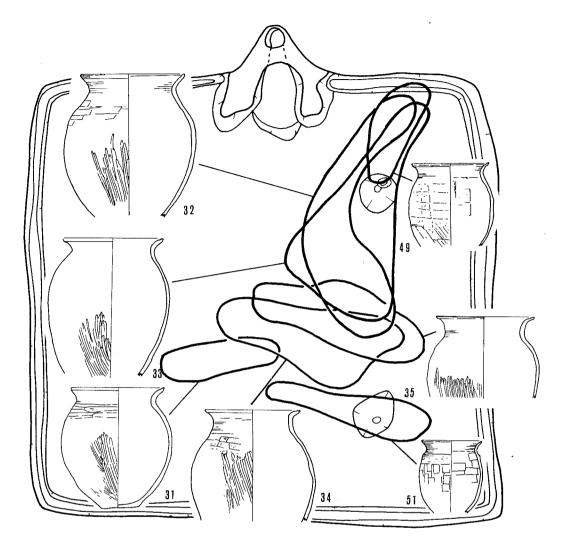
2段階

この時期の住居跡としては、24軒が該当し、中でも175号住居跡から良好な一括の資料⁽³⁾が出土しており、柴崎遺跡の時期区分を行う上で基準資料となるものと思われるので詳しく分析してみたい。

大量の土師器片の内,50パーセント以上が接合でき、坏、甕、甑合わせて38個体に及んでいる。 これらの土器は、住居廃絶後の埋没途上に投棄された土器片であり、共通して覆土第3層に覆われている。第191図に表された太線は各土器が細片を含めてどの範囲に散布していたかを、接合個体ごとに示したものである。甕類の破片の分散状況から投棄の状況が窺われる。

ここから出土した土師器の坏30個は、その形態から5種に分類できる。(第192図)

A種は、古い段階の須恵器の蓋を模倣した土師器の坏を祖形とする形態のもの⁽⁴⁾で、全部で12個体出土している。口縁部の断面形の違いでさらに2つに分けることが可能と思われる。

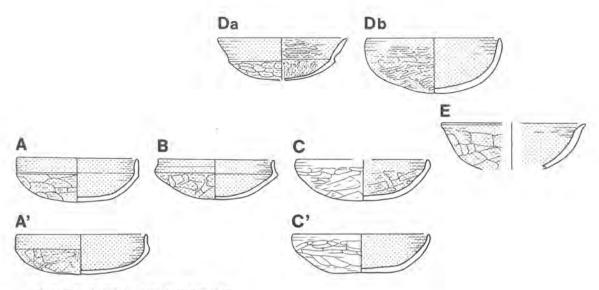


第191図 第175号住居跡甕類の個体ごとの出土範囲

B種は、2個体あり、明らかに新しい段階の須恵器の坏身を意識している。

 $^{\rm C}$ 種は、11個体、これも新しい段階(陶邑 2 形式の中頃)の須恵器の坏蓋を模倣したタイプである。

E種は口縁部が外傾するもので、1個体が出土している。E種は、東北地方南部の土師器編年の中で、栗囲式の古段階に類似形態の土器が見られ、近県では栃木方面に類例が見られる。 それ以外には、A'種としA種と比べて器高が低く、体部と口縁部の境の稜線がなく沈線だけで表されるタイプのものが3個体出土している。C'種としては、C種と比べて器高が低く、底部が平底



第192図 第175号住居跡坏類の分類

化しているものが1個体出土している。A'種とC'種の坏も数が少ないが、これらに見られる平底 化等の特徴は、この期における新進の要素であると考えられる。

175号住居跡で主体となる坏は、A種とじ種である。この時期、栃木県方面では、坏身模倣の坏 B種が、C種と共に坏の中で主体となっている。反対に主体となり得ない坏は、他の地域からの 移入品と考えるか、前段階からの遺存品と考えられる。

続いて甕について見ておきたい。甕は形と法量から分類すると、7種に分類できる。(第193図) 甕A種は口径約21~27cm、胴部最大径は29cm前後、器高は35cm以上のやや長胴気味の大形品で あり、6個体出土している。

B種は口径は18~21cm, 胴部最大径は, 25~27cm, 器高は約27cmとそれぞれA種と比べると若干小さいが, 器高だけは特に低く球胴形を呈するものであり, 2個体出土している。

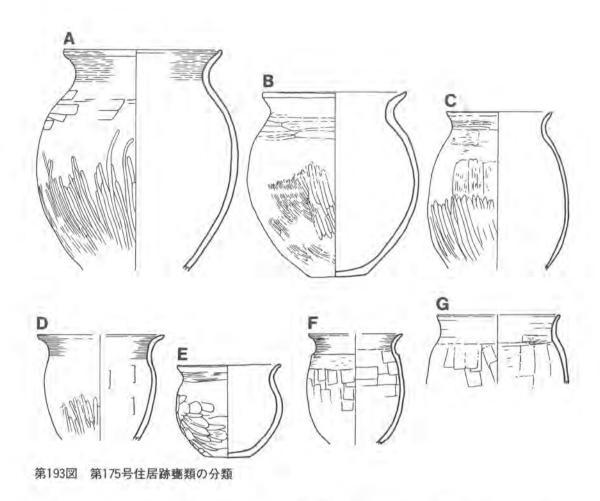
C 種は、口径15~19cm, 胴部最大径17~21cm, 器高20~28cmと、A 種を縮小した相似形を呈するものであり、5 個体出土している。

D種は、口径が18cm前後で胴部の張りと頸部のくびれが少なく、口縁部が外反するので広口になるものであり、2個体出土している。

E種は、口径が15cm前後と小さく、器高も低い小形の甕であり、3個体出土している。

F種は、E種の小形甕の形態と肩部から口縁部にかけてが類似し、胴部を長くした形態ものであり、1個体出土している。

G種は、口径18cmで、胴部の張りが弱く、頸部から口縁部の外反が弱いものであり、1個体出土している。



製作時の調整技法から見ると、口唇部をつまみ上げ、胴部外面にヘラ磨きを行なう、いわゆる常総形甕の特徴を示す甕が半数を占める。A種、B種とD種においては、すべてが常総形甕であり、口縁部において、端部外面に面取りを行ない、口唇部をわずかにつまみ上げている。C種では、5個体の内2個体が常総形甕、2個体が胴部外面縦方向のヘラ削り、1個体が横方向のヘラ削りであり、口縁部の形態も各々違っており、バラエティーに富む。E・F・G種とも胴部外面調整はヘラ削り調整を行なっている。

ほぼ同時期と考えられる231号住居跡からは、竈に掛けられた状態の甕が2個体ほぼ完形のまま 出土している。大きい方は甕A種に、小さい方はやや短胴だが甕C種に属するものと考えられる。 共に胴部に磨きが入り、大きい方は、口縁部外面に面取りが行なわれ、端部は上方に尖っている。 つまみ上げは行なわれていない。

175号住居跡出土の甕においては、主体となるものが、A・B・C・D・E種である。F・G種については甕口縁部の形状や胴部の調整技法の違い等から見て、他の地域からの移入品の可能性も考えられる。

土師器は甕, 坏以外に甑も出土しているが, 高坏が欠ける点に特色がある。坏や甕の器種構成から見て時期的には, 千葉の村山編年のN期の時期に当たると考えられる⁽⁵⁾。須恵器では, 1点だけ, 堤瓶の胴部片(第19図-58)が出土しているが, 器厚が最大12mmと厚く膨らみのある大形品であり, 焼成がやや甘く, 在地産と推定される。関東地方の酒井編年のN期に類似例⁽⁶⁾がある。以上の点を総合すると、175号住居跡は6世紀後半でも7世紀に近い時期の住居跡と考えられる。

3段階

13軒が該当すると考えられる。出土遺物では、2段階と基本的な器種構成は変わらないものの、190号住居跡出土遺物の中の坏において前段階と比べて法量の縮小化の傾向が見られ、小形で短足の高坏(第22図-7)や須恵器の平瓶(第22図-10)等も出現している。190号住居跡は7世紀前半代のものと思われる。

2 Ⅱ期

II 期は、7世紀末から8世紀末までの時期にあたり、土師器の甕、坏以外に須恵器の坏、蓋、高坏、甕、甑、壷、硯などによる器種構成である。Ⅱ期の中頃の時期のものに良好な資料が多数残っており、特に詳しく述べることとする。

1段階

9軒が該当するものと考えられる。出土遺物は少ないが、199号住居跡からは、廃絶後の埋没途上の一括遺物として、土師器の坏、境、須恵器の坏が出土している。土師器の坏は、弱い稜をもつ鬼高式土器の形態を弱干残しているものや平底化の傾向を持つもの、東北南部の栗囲式土器の新段階に類似(7)したもの(第194・199図-2)などである。須恵器の坏は、7世紀の末頃の形態のものであるが、土師器が主体となっており須恵器の数は少ない。198号住居跡からは、次の2段階のものとほぼ同様の形態をした須恵器の坏が出土しており、199号住居跡より新しく、II期2段階に非常に近い時期の住居跡と思われる。

2段階

21軒が該当すると考えられる。153・226号住居跡のように大形で出土遺物が須恵器を主体としている住居跡と、171~193号住居跡のように、小規模で土師器を主体とする住居跡に分かれる。土師器の甕、坏、須恵器の坏、蓋、甕、壷等から成る。須恵器の坏蓋は、かえりをまだ残している段階のものである。

153号住居跡の出土遺物はほとんどすべてが、住居埋没過程で覆土とともに堆積したものであるが、形式的にほぼ同時期の遺物と考えられる。226号住居跡も、153号住居跡とほぼ同形態のかえりのついた須恵器の蓋を持つことと、226号住居跡の竈内出土遺物と、153号住居跡覆土中の出土遺物(第156図-4)が接合したことから、ほぼ同時期の住居跡と考えられる。

153号住居跡出土須恵器の甕の底部の破片であるが、丸底で内面に同心円文のあて具痕を持って

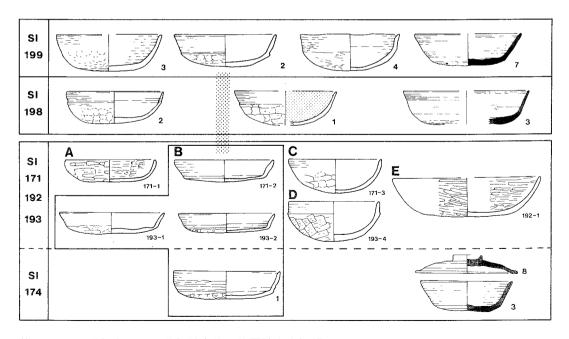
いる。丸底の底部には高台部の剝がれた痕跡が残り、斜下方にかなりふんばった形の高台部が予想されるような独特の器形をしたものである。

153号住居跡からは、小形で 7 窓か 8 窓の透かしが開く圏足硯(第43図-13)が、226号住居跡からは、透かし上部がアーチ形を描くような圏足硯(第156図-6)が出土しているが、北東側の I 区の120号、123号住居跡からは、須恵器甕底部を転用した硯が出土している。120・123号住居跡は、153・226号住居跡よりも若干時期が遅れるものと考えられる。他に、硯を出土している住居跡は検出されていない。

226号住居跡出土の須恵器と考えられる堝(第156図-9)は、口径51cm程の大形品であり、酸化 炎を受けている。ロクロを使用した須恵器の製作技法を用いており、一部還元炎焼成部が残っているので須恵器であろう。このような大形の堝は、東北地方や北陸地方で出土例があり、東北地方では平安時代頃から、北陸地方では7世紀の後半頃から生産が始められている。東北地方では8世紀代からの出土例があり、北陸地方から日本海ルートを通った搬入が考えられている⁽⁸⁾。8世紀初頭の須恵器では、北陸地方のものの可能性が考えられる。

153・226号住居跡は通常見られないようなバラエティーに富んだ器種構成や硯の出土といった 点から、 II 期 2 段階(8世紀前半代)の中で他の住居跡よりもやや抜きんでた住居跡の可能性が 考えられる。

171・172・174・192・193号住居跡は、Ⅲ区の南東部に比較的まとまっており、土器の様相もよく似ている住居跡群である。171・174号住居跡出土の須恵器の蓋のかえりが、消失寸前の形態を



第194図 7世紀末から8世紀前半代の住居跡出土坏類

示しており、153・226号住居跡と同時期かやや遅れる時期の住居跡と考えられる。出土遺物は、 須恵器よりも土師器の割合がやや多く、坏は3種に分かれる。特に、坏について見ていくことと する。

A種は、平底の底部から口縁部までが丸く内彎しながら立ち上がるもの、B種は、やや丸みを持った平底の底部から外傾する口縁部が屈曲して立ち上がるタイプのものである。D種は丸底で体部が内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に弱い稜を持って短く垂直に立ち上がるもので、古墳時代の坏の形態を残すものである。E種は大形の坏である。ここで注目されるのはB種の坏である。底部はヘラ削り、口縁部内・外面に横ナデ調整を施した盤状を呈したものである。この形態のものは、柴崎遺跡全体ではⅢ区の40号住居跡と、Ⅲ区の171・174・193号住居跡から出土している。相模地域や南武蔵の8世紀前半代の盤状を呈する坏と類似するが、当遺跡内の土器の変遷の中でも、7世紀末(Ⅲ期1段階)の坏(198・199号住居跡出土遺物)からの形態変化として考えられる。

3段階

Ⅲ区の4・73・114・141号住居跡が該当する。114号住居跡からは、盤状を呈する土師器の坏等が見られ、須恵器の坏も器高が低く、口径に対する底径の比の大きな形態のものである。

3 Ⅲ期

Ⅲ期は、平安時代前半(9世紀から10世紀前半)にあたり、土師器の甕、坏、須恵器の坏、高台付坏、高坏、甕、甑、壷などによる器種構成である。

1段階

20軒の住居跡が該当する。出土遺物は、須恵器が主体で、須恵器の坏、高台付坏、甕や口唇部をつまみ上げる土師器の甕が見られる。土師器の甕は、胴部に見られたヘラ磨きが行なわれないものが目立ってくる。

2段階

60軒の住居跡が該当する。出土遺物は、須恵器の坏、甕、土師器の甕、坏等であるが、須恵器の高台付皿が出現する。須恵器が主体であるが、少しづつ土師器の坏も目立ってくる。須恵器の坏は、体部下端手持ちへラ削りで底部径が小さくなりつつある須恵器の坏と口唇部をつまみ上げる常総形の甕に特徴がある。須恵器の坏の中に「大垣郷」と墨書されたものが含まれている。Ⅱ区の調査においても22 B 号住居跡から「□垣郷」という墨書が出土しているが、文献資料には、「大垣郷」の郷名は見られないものの、今後郷名考証の参考資料になると思われる。おそらく9世紀の後半代の時期にあたると思われる。

3段階

10軒が該当する。出土遺物では、底部が小さく、大きく外傾する須恵器の坏や体部が内彎しな

表3 各期各段階の住居跡

	期	段階	柴 崎 遺 跡 竪 穴 住 居 跡 番 号	床面積	備考
550 -		1	I (33,68),2,95,212A	19.4 m²	[[区の]期
	I	2	I (1,6,13,14,15,18,21,31,41,46),10,31,43,49,82,92,134, 135,166,168,175,194,196,231	28.5 m²	I区のI期 II区のII期
600 -		3	I (38,63,65,74,90,108),71,80,127,137,160,190,222	29.1 m²	Ⅱ区のⅢ期
700		1	I (104),1,12,100,116,148,198,199,200	17.6 m²	
700	П	2	I (9,44,53,78),9A,39,40,42,52,54,64,67,93,125,153,171, 172,174,192,193,226	24.2 m²	Ⅰ区のⅡ期
		3	4,24,38,47,72,73,114,141	17.7 m²	Ⅱ区のⅣ期
800 –		1	I (8,25,34,39,42,59),11A,32,155,161,162,165,169, 195,205,228	15.1 m²	I区のⅢ期 Ⅲ区のⅤ期
000	Ш	2	I (2,3,4,5,7,10,11,12,16,19,24,28,40,43,45,47,48,50,54,61,67,71,72,73,77,79,82,84,91,99,102) 11B,18B,22B,30A,45,50,56,61,65,74,75,83,88,97,98,101,105,107,108,113,117B,118,145,154,167,170,197,206,212B	14.8 m²	Ⅰ区のⅣ期
900 —		3	I (30,35,49,52,55,66),5,18C,57,110,232	11.7 m²	Ⅱ区の៕期

1100		I(26,27,29,36,37,60,62,64,80,81,83,85~89,92,97,98,103,		
以降		106,107,111) 14A·B,15~18A,23,27~29,37,41,59,85,90,106,		I区のV期
	IV	119,121,123,128,144,157~159,163,164,176~189A·B,191,	8.7 m²	Ⅱ区のⅧ期
		201~204,207~211,213,214A·B,215,216,217A·B,218~221,		·
		223~225,227,230		

※ I ()内の数字は I 区の竪穴住居跡の番号を示す

がら立ち上がる須恵器・土師器の坏、赤焼きの須恵器等が見られる。

4 Ⅳ期 (柴崎 I 区の V 期, 柴崎 II 区の WI 期)

IV期は平安時代末期(12世紀)にあたり、竈を持たない規模の小さな竪穴住居跡の時期である。 遺物が極端に少なく、土師質土器片、銅銭、鉄鎌が出土している。これらの出土遺物から12世紀 以降の時期と推定される。

第2節 竪穴住居跡について

1 I 期

Ⅰ期の竪穴住居跡の床面積は1段階が平均約20㎡に対し、2~3段階が平均約30㎡と大形で方形を呈する住居跡を主体としている。柱穴は、Ⅰ期全般を通じて主柱穴4カ所で、竈と対面する南壁際に出入り口ピットを持つものが大半を占める。主軸方向は、新しい段階ほど北西から真北方向に近づく傾向が窺える。

1段階

住居の平面形は、主柱穴4か所に出入り口ピット1カ所を持ち、中規模なものである。良好に 残った竈は見られず、竈の特徴はつかめない。

2段階

住居の平面形は、1段階と基本的に変わらず、規模は大きくなる。竈は、175号住居跡の竈のように袖と袖の間も芯々間で80cm、袖の基底部幅も中央部で40cmと広く、煙道部の住居跡外への張り出しが60cmを越えるものが多い。231号住居跡のものが最も良く遺存しており、具体的な使用形態がわかる。やや胴長で大形の甕A種と小形のC種を横に並べてかけられており、横2個掛けの竈といえる。天井部内壁面までの高さは、30cm程度と推測される。

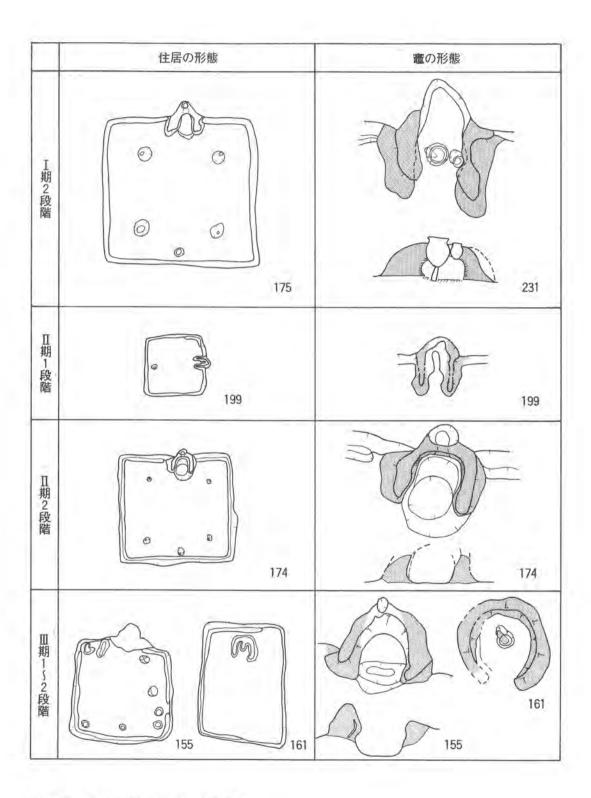
3段階

住居の平面形は、方形を呈し床面積が平均約30㎡、規模が最大となる。竈は、190号住居跡で見られるように、袖部の幅は前段階とほとんど同じだが、煙道部の張り出しが、40cm弱となってきている。

2 II 期

Ⅱ期の竪穴住居跡の床面積は1段階が平均約18㎡,2段階が平均約24㎡,3段階が平均約18㎡ と中形のものから大形化し、再び縮小する傾向がある。柱穴は、Ⅲ期全般を通じて主柱穴が4本 で、竈と対面する南壁際に出入り口ピットをもつものが多い。主軸方向は、Ⅲ期1段階の少数の 住居跡を除いてほぼ真北方向を向いているものが多い。

1段階



第195図 竪穴住居跡と竈の形態変遷図

床面積 $7 \sim 11 \text{ m}^2$ 程の規模の小さな住居跡が見られる。竈は、袖の幅で比較すると、200号が80 cm、199号が60 cm、198号が45 cmと幅を減少させており、袖の基底部幅も20 cm程度と狭いものである。

2段階

153・226号住居跡のように大形のものと171・172号住居跡のようにやや規模の小さいものとがある。平均の床面積は、24㎡とⅡ期の中では最大規模となる。竈は、172・174号住居跡で見られるように、袖部は90㎝と幅を広げるが、袖の基底部幅が30㎝程となっている。174号住居跡の竈は、底部から天井部内壁面までの高さが50㎝程と推定される。煙道部の張り出しは30㎝前後と少なくなってきている。

3段階

この段階からⅢ期の1段階にかけての住居跡は、数が少なく遺存状態も悪いのではっきりとした傾向をつかみにくい。床面積は小さくなってきているが、依然として主柱穴を4本持ったものが多い。

3 Ⅲ期

Ⅲ期の竪穴住居跡の床面積は1段階が平均約15㎡, 2段階が平均約15㎡, 3段階が平均約12㎡と小形のものがさらに小形化する傾向がある。柱穴は、Ⅲ期の初め頃に主柱穴が4本のものから床面に柱穴を設けないものが現れてくるようである。主軸方向は、ほぼ真北方向を向いているものが多い。

1段階

さらに床面積を縮小させる。Ⅲ区においては、次の2段階と明確な特徴がつかみにくいが、この段階の中で、床面に柱穴を残さないタイプの住居跡が現れてくる。

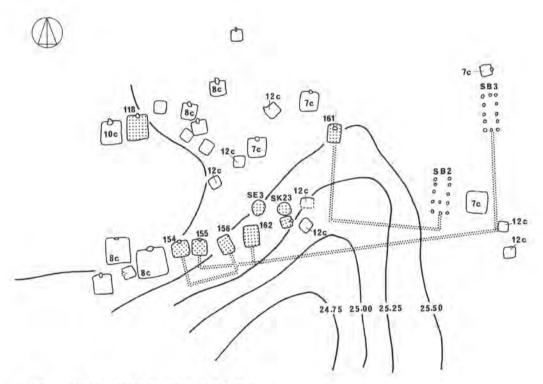
2段階

これまで主柱穴は4本で、出入り口ピット1か所の住居跡が基本であったものが、規模の縮小に伴い、床面に主柱を設けず、出入り口ピットだけとなる住居跡が基本となってくる。竈は、袖部幅80cm前後のものが多く、燃焼部の床面を掘り窪めている。煙道部の張り出しは30cm前後となっている。

Ⅲ区の北部から、3 軒の長方形の住居跡(156・161・162号住居跡)が検出されている。周辺の遺構との関わり合いから、Ⅲ期に属すると考えられるので、この点について述べておく(第196図)。まず、この住居跡の特徴であるが、長軸が南北方向に向いており、遺跡の北寄りにまとまって位置している。竈が通常の竪穴住居跡と異なり、北壁に造り付けられるのでなく、壁から離れた住居の中の北寄りの位置に独立して構築され、南向きに開口している。残念ながら、3 軒とも床が浅く竈の上部構造ははっきりしないが、燃焼部には支脚がつかわれていたらしい⁽⁹⁾。

次に、長方形の住居跡と周辺の9世紀後半代もしくは9世紀前半代の時期の住居跡との関連に

ついて見ると、長方形の156号住居跡と約10m西側にある154号住居跡、長方形の162号住居跡と西約10mにある155号住居跡が、主軸方向で各々ほぼ一致しており、154号住居跡と155号住居跡は非常に近接関係にあるので、上記のような組合せで、時期差を持って存在していたと考えることができる。さらに、この区域は奈良時代前半代において、比較的早い段階から多くの須恵器や硯を持つなど、集落内で中心となる住居跡があった地区であり、この時期においても、155号住居跡の覆土中ではあるが、金銅製の鈴が出土するなど、特異な面を持っている。さらに、この地区の東方約80mの地点には、2×4間の規模を持つ第2・3号掘立柱建物跡がある。2棟とも南北棟であり、3号掘立柱建物跡の北東コーナーの柱穴出土の須恵器の坏の年代観から、9世紀中葉から後半にかけての時期の掘立柱建物跡と考えられる。南北に長い長方形の竪穴住居跡と、遺構配置状況に関連が窺われる。これらの施設についての性格的な位置付けについては、今後の課題である。



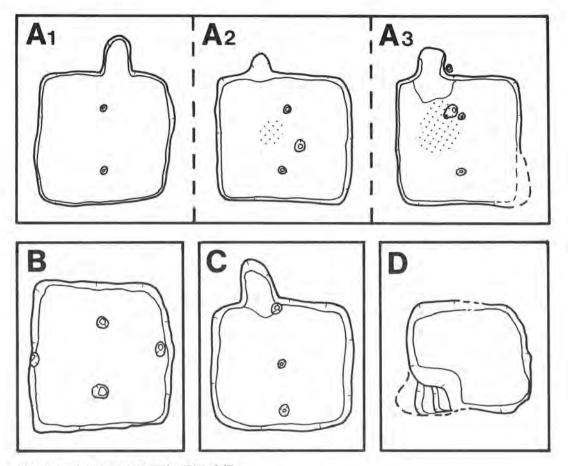
第196図 Ⅲ区北部の9世紀代の遺構配置図

3段階

住居跡の規模は、さらに小さくなる。232号住居跡の例では、竈の煙道部の住居跡外への張り出しは1.2mにも及んでいる。

4 IV期

Ⅳ期に属する規模の小さな方形の竪穴住居跡は、遺跡全体の中で総数90軒を数える。これまで



第197図 IV期の竪穴住居跡の形態分類

の調査結果から、時期については12世紀以降、遺構の配置の状況等から短期間の内に形成された ものと考えられる。性格については、明確な床、ピット、火の使用が窺える炭化物の検出、竈を 付設した例があること等から住居跡と判断される。

Ⅲ区の調査では、これらの竪穴住居跡から、出入り口が検出され、切り合い関係が認められた。 さらに若干構造を異にする住居跡も確認されており、簡単にこれらの竪穴住居跡の分類を試みたい。 (1) A1は、主柱穴が2本のタイプである。他に副柱等がなく、40軒の内10軒から、出入り口部が 確認されている。

A2は、2 本主柱穴以外に副柱らしきものが1 本加わってくるタイプで、9 軒検出されている。 A3は、2 本主柱穴に、副柱1 本が主軸方向にあるタイプで、5 軒検出されている。

- (2) Bは、2本主柱穴の対角に2本の柱穴がくるタイプで、3軒検出されている。
 - (3) Cは、3本の柱穴が等間隔にならぶ3本主柱穴のタイプで、4軒検出されている。
 - (4) Dは、柱穴が無く階段状の出入り口を持つタイプで、1軒検出されている。

(5) Eは、柱穴が確認されないタイプである。

次に、AからEの各タイプ間の差異が、何を表すのか考えてみたい。まず、竪穴住居跡どうしで、切り合い関係のある住居跡を挙げる。C群の中の217 A 号住居跡(A3タイプ)と217 B 号住居跡(Eタイプ)では、217 A 号住居跡の方が新しい。D群の中の189 A 号住居跡(Cタイプ)と189B号住居跡(Dタイプ)では、189 A 号住居跡の方が新しい。C群の中の214 A 号住居跡(Aタイプ)と214 B 号住居跡(Aタイプ)では、214 B 号住居跡の方が新しい。214号住居跡の場合どちらも Aタイプであるが、主軸方向が90度ずれており、同じ Aタイプの中での時期的な差が予想される。

また、62号住居跡は、I区の中で竈を持つ住居跡から、竈が無くなる住居跡への過渡的な性格を有すると判断されている 2 本柱の住居跡であるが、この62号住居跡の 1 辺の長さと 2 本柱間距離の 2 つの条件で、他に類似例をさがしたところ、 $179 \cdot 220$ 号住居跡が最も近似した数値を示している。この 2 軒は両方とも B タイプである。

以上の点をまとめてみると、Aタイプの中で竈を持ったものが最も古く、それに並行してBタイプ、Eタイプもこの古い段階に属する可能性が考えられる。それに対してより新しいものは、東西方向に主軸を向けるAタイプである。また、構造的にAタイプとは異質なCタイプのものは、Dタイプとの切り合い関係からDタイプよりも新しいということは言えるが、AタイプとCタイプに先後関係があるかどうかは不明である。

第3節 柴崎遺跡の集落の変遷 (第198~200図)

遺跡の立地する台地は、北東部から南西部に下る自然の谷地形(谷津田)をはさんで、谷の南東側、北西側、谷の奥の北東部から東部にかけてと大きく3地区に分けることができる。この区分は、調査 I 区、II 区、II 区という呼称とほぼ対応するので、この地区名で呼ぶこととする。集落は、谷津田を囲むように、I 区~III 区の標高24~26 m の台地上に分布している。以下に各期の様相について記述していく。

1 I 期

Ⅰ期は6世紀前半から7世紀前半の時期と推定される。出土遺物から3つの段階に細分ができ、2段階に当たる6世紀後半の時期がⅠ期の集落の中心となる時期である。

1段階

集落は、谷津田を挟んだ I・ II 区の中心部の最も高燥で環境条件の良い地域に、小規模に営まれ始まる。

2段階

2段階になると,Ⅰ区では台地の縁辺地域いっぱいまで広がりを見せる。Ⅱ区の場合も同じよ

うに数を増やしながら広がり, 西と南の小尾 根上にまで拡散していく。

3段階

3段階には、【区では、北に偏って数を減らしながら縮小する。 II・Ⅲ区では、それまで分布が見られなかった地域に規模を縮小しながら分布している。

2 Ⅱ期

Ⅱ期は7世紀末葉から8世紀後半の時期と推定される。出土遺物から3つの段階に分けることができる。Ⅱ期2段階が集落の中心となる時期である。

1 段階

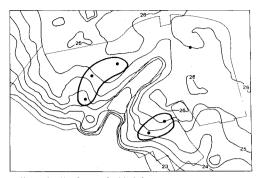
集落は、Ⅲ区の中心部とⅢ区北部に小規模に営まれている。Ⅲ区の中心部の集落は、Ⅱ期の3段階の時期の集落と隣接して分布しているので、Ⅰ期とⅢ期の間では、細々とは集落が継続していたものと思われる。

2段階

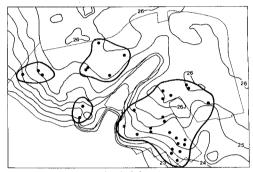
8世紀前半にあたるこの段階には、Ⅲ区の 北部において、規模が大きく、圏足硯や多く の須恵器を持つ住居跡(153・226号)が現わ れる。その他の住居跡は花室川に面するよう に、北西から南東方向に長く分布している。

3 段階

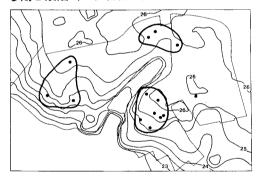
I・Ⅲ区では8世紀後半の住居跡は検出されていない。Ⅲ区においても検出された住居跡の数が少なく、集落は再び、規模を縮小している。Ⅱ区とⅢ区南部からⅢ期3段階とⅢ期1段階の、竪穴住居跡が1軒も検出されていないことは、Ⅲ区南部にある1棟の大形の掘立柱建物跡が存在していることに、その要



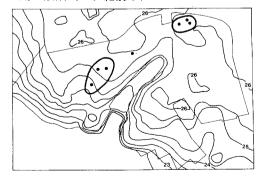
I期1段階(6世紀前半)



丁期2段階(6世紀後半)



I期3段階(7世紀前半)



Ⅱ期1段階(7世紀後半)

第198図 各段階ごとの集落の変遷(1)

因があるものと考えられる。

1号掘立柱建物跡は、規模が3×5間、柱間が芯々間で2.48m、柱穴の掘り方が約1.0×1.5mもある大きなものである。この掘立柱建物跡のP7・P8の近くから大形の銅製の浅鉢の破片が見つかっており、この遺物が唯一この掘立柱建物跡の性格を語るものとなっている。この銅製の浅鉢は、直径21cm、器高4.2cmで外面を叩き出しによって成形しており、7世紀以降の寺院関係の遺跡で出土例があるといわれている。この掘立柱建物跡がⅡ期1段階もしくは、3段階に建っていた蓋然性は高いと考えられる。

また、この時期の溝では、12・15・38号溝があげられる。12号溝は、Ⅲ区中央部から東南東に向かって緩やかにカーブを描きながら120m以上延びて調査区外に至っている。

3 Ⅲ期

Ⅲ期は、9世紀前半から10世紀前半の時期と推定される。出土遺物から、3つの段階に分けることができる。Ⅲ期1段階から2段階が集落の中心となる時期であり、全期間を通じて最も住居跡の総数が多くなる時期である。

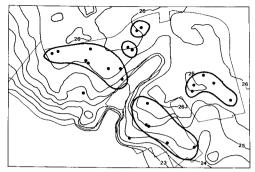
1~2段階

1段階・2段階ともほぼ同じ範囲に,3群から4群に分れてⅠ・Ⅱ区いっぱいに分布している。

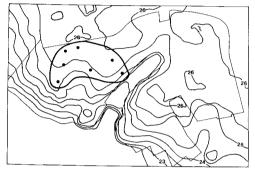
3段階

2群に分れ規模を縮小しながら分布している。その後,12世紀まで集落は,断絶してしまう。

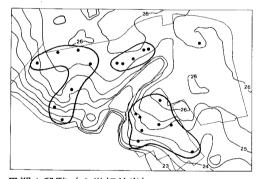
4 IV期



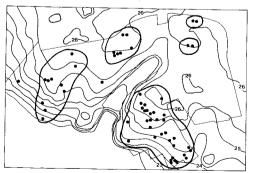
Ⅱ期2段階(8世紀前半)



Ⅱ期3段階(8世紀後半)



Ⅲ期1段階(9世紀前半)



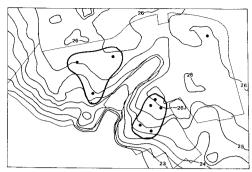
Ⅲ期2段階(9世紀後半)

第199図 各段階ごとの集落の変遷(2)

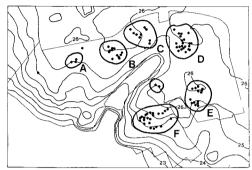
Ⅳ期は、全体に谷津田の奥方向に移動して、7群に分れて谷津田を囲むように分布し、これまで以上に群としてよくまとまりを示している。Ⅳ期の時期は、出土遺物から、12世紀以降と考えられる。第197図のB・D・E群中には切り合い関係の認められる住居跡があることから、ある一定期間継続して集落が形成されていたことが窺われる。

これまで、出土遺物や竪穴住居跡の構造の変化を盛り込みながら、柴崎遺跡について集落の変遷を概観してきたが、これによると古墳時代後期から平安時代末という600年の間に、集落が4度隆盛し、また衰微してきたようすが窺えた。最後に4回の盛衰の意味するところについて、一応の解釈を添えてみたい。

まず、I期の終わりについてであるが、I期 3段階に属する 3区の 190号住居跡は出土



Ⅲ期3段階(10世紀前半)



Ⅳ期(12世紀~)

第200図 各段階ごとの集落の変遷(3)

遺物から、7世紀第2四半世紀には廃絶していると考えられるが、この住居跡がおそらく I 期の特徴である大形で、鬼高的な土器を持つ住居跡の最後の段階と思われる。律令的な中央集権制度導入前段階の地方社会の動揺を反映するものと考えられる。この影響は、Ⅱ期の1段階(7世紀後半)を頂点として、次のⅡ期2段階に至る律令的な集落景観出現につながっていくと思われる。

Ⅲ期2段階の中でも8世紀第1四半世紀に属すると考えられる153号住居跡等からは,硯や供膳 形態の須恵器等が出土し、律令的な官吏機構の一端が集落内の出土遺物からも窺われる。しかし、 この時期も長くは続かず、Ⅲ期3段階には、再び集落が衰微してしまう。おそらく鹿子遺跡に見 られる東北地方経営に関連する常陸国内における軍事的な徴用や律令機構の動揺といったこ とに連動する現象かと推察する。

Ⅲ期に属する9世紀は、比較的安定していた時期であろうが、10世紀に入り再び集落は、衰微してくる。これは、平将門の乱に代表されるように、国衙機構の弱体化と武士化していく地方豪族の台頭といった現象に関連するものかと考えられる。

最後にIV期に属する12世紀以降と考えられる小規模な竪穴住居跡によって構成される集落であるが、これについてはこのタイプの集落が、この時期の一般的なスタイルとして認められてから、その時代背景の中で再度考えていく必要があると思われる。

表 4 竪穴住居跡一覧表

住居跡				規	模		T				
番号	位 置	主軸方向	平面形	長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)	床面	ピット数	竈·炉	覆土	出土遺物	備考
127	B9g2	N- 0°	方形	5.37×5.32	60	平坦	5	竜	自然	土師器(甕)片6点	
128	B9d3	N — 52°—₩	方形	2.90×2.86	24	平坦	2	炉	人為	須恵器(蓋)片2点	
153	C8es	N-13°-₩	方形	8.13×7.65	60	平坦	15	藿	自然	土師器(甕,坏)片3034点,須恵器(坏,蓋)片 612点,紡錘車,鉄鎌	
154	C8d7	N-15°-₩	方形	4.45×4.04	60	平坦	5	笣	人為	土師器(甕,坏)片867点,須恵器(坏,蓋)片 297点,刀子,鉄鎌	
155	C8d9	N- 0°	方形	4.38×4.20	42	平坦	8	奄	人為	土師器(甕,坏)片682点,須恵器(坏,蓋)片 262点,銅鈴,鉄鎌	
156	C8co	N-23°-W	長方形	5.00×3.36	8	平坦	5		人為	土師器(甕,坏)片72点	
157	B8 i 9	N-25°-₩	方形	2.90×2.82	54	平坦	3	炉	自,人	土師器(甕,坏)片248点,須恵器(甕,坏)片89 点,土師質土器片5点	
158	B9h1	N− 2°−E	方形	2.94×2.82	26	平坦	2		人為	土師器(甕,坏)片82点,須恵器(甕,坏,甑)片 71点,土師質土器片4点	
159	B9e4	N 75°-₩	方形	(3.40)×(2.60)	6	平坦	2		不明	土師器(甕,坏)片26点,須恵器(甕,坏,蓋)片4点	
160	B9c6	N- 0°	方形	5.30×5.14	30	平坦	6	竜	自然	土師器(甕,坏)片204点,石製小玉	
161	B9es	N- 5°-E	長方形	5.10×3.63	18	平坦	0	齑	自然	土師器(甕,坏)片466点,支脚,刀子	
162	C9c2	N- 6°-W	長方形	5.59×3.75	10	平坦	1	碹	自然	土師器(甕,坏)片434点,灰釉陶器片1点	
163	С9св	N-61°-W	方形	2.90×2.89	28	平坦	2	炉	人為	土師器(甕,坏)片38点,須恵器(甕,坏)片29点, 土師質土器片4点	
164	B9g6	N-88°-E	方形	2.70×2.69	18	平坦	2		人為	土師器(甕,坏)片23点,須惠器(高台付坏,蓋) 片7点,土師質土器片3点,	SD-4と重複
165	C9bs	N-10°-₩	方形	3.05×2.86	50	平坦	1	鼄	人為	土師器(坏,蓋)片2点,須恵器(甕,托)片5点	
166	F10j2	N-40°−E	方形	5.64×5.60	20	平坦	5	籬	自然	土師器(甕,坏)片156点,須恵器(坏)片12点	SI-229と重複
167	G10a3	N− 1°−₩	方形	3.70×3.69	15	平坦	5	竈	自然	土師器(甕,坏)片200点,須恵器(坏,蓋)片70点,布目瓦片	SI-168と重複
168	G10b2	N-29°-₩	方形	6.07×6.06	32	平坦	9	竈	人,自	土師器(甕,坏)片517点,須惠器(坏,蓋)片33 点,鉄製品	SI-167と重複
169	G10c4	N— 7°—₩	方形	4.23×4.07	14	平坦	11	竜	自然	土師器(甕,坏)片318点,須惠器(坏,蓋)片83 点,鉄製品	
170	A12hı	N — 4°—₩	方形	4.19×3.86	40	平坦	1	藿	自然	土師器(甕,坏)片218点,須恵器(坏,蓋)片54点	SD-6と重複
171	D12i2	N− 5°−₩	方形	4.22×4.02	60	平坦	5	竈	人為	土師器(甕,坏)片596点,須恵器(坏,蓋)片24 点,布目瓦片	
172	E12b7	N-23°-₩	方形	4.20×4.18	58	平坦	1	竈	自然	土師器(甕,坏)片194点,須恵器(甕,坏)片11点	
174	F13a7	N- 4-E	方形	4.90×4.70	48	平坦	5	篚	自然	土師器(甕,坏)片86点,須惠器(甕,坏)片53 点,紡錘車	
175	F12cs	N — 19°— ₩	方形	6.40×6.32	42	平坦	5	徹	自然	土師器(甕,坏,甑)片810点,須恵器(提瓶)片1点	
176	E12e4	N − 20° W	方形	2.84×2,82	32	平坦	2	炉	人為	青磁(碗)1点	
177	E12f3	N-15°-₩	長方形	3.11×2.63	32	平坦	2		自然		
178	E12g3	N-46°−E	方形	2.72×2.70	30	平坦	3	炉	自,人	土師器(甕,坏)片24点,須恵器(坏)片2点,土 師質土器片3点	_
179	F12b2	N − 2°−₩	方形	2.96×2.90	22	平坦	2		人為	土師器(甕)片9点,土師質土器片2点	
180	F12cz	N- 0°	方形	2.72×2.60	22	平坦	2		自然	土師器(甕)片11点,土師質土器(坏)片1点	
181	F12d2	N-88°-E	方形	2.72×2.70	16	平坦	2	炉	人為	土師器(甕,坏)片21点,須恵器(坏)片1点	9-1
182	F12cı	N- 1°-E	方形	2.72×2.62	24	平坦	2	炉	人為		
183	F11co	N− 1°−E	方形	2.90×2.80	15	平坦	4		人為	土師器(甕)片3点	
184	F11c9	N-89°-E	方形	2.80×2.78	17	平坦	2	炉	人為	土師器(甕,坏)片8点	
185	B10es	N- 9°-₩	方形	3.75×3.74	10	平坦	2		不明	土師器(甕,坏)片5点,內耳土器1点	SD-10と重複
186	E12dı	N-10°-W	方形	2.90×2.82	26	平坦	3	炉	人為	土師器(甕)片2点	

住居跡				規	模		ا معاد در	ethe Lu-	W 1	II. I No. II.	備考
番号	位. 置	主軸方向	平面形	長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)	床囬	ピット数	龍·炉	覆土	出 土 遺 物	備考
187	E12g2	N-16°-₩	方形	2.74×2.66	12	平坦	3	炉	不明		
188	Elle:	N-20°-W	方形	2.80×2.60	34	平坦	3		人為	土師器(甕,坏)片26点,布目瓦片1点	
189A	Elles	N−118°— W	方形	3.18×2.92	33	平坦	0		人為	土師器(甕,坏)片20点、須恵器(坏)片1点	SI-189Bと重複
189B	Elles	N−62°−E	方形	2.53×2.40	43	平坦	3		人為	土師器(甕,坏)片10点,須恵器(坏)片1点	SI-189Aと重複
190	Ellg9	N — 24°—₩	方形	6.00×5.89	43	平坦	6	Æ	自然	土師器(甕,坏)片574点	
191	Fllas	N-85°-₩	方形	2.70×2.67	24	平坦	2	炉	人為	土師器(甕,坏)片20点,須恵器(甕)片2点,土 師質土器片7点,鉄鎌	
192	E11c7	N− 4°−E		3.76× -	100	平坦	3		自,人	土師器(蹇,坏)片125点,須惠器(甕)片7点, 布目瓦3片	
193	Ellg7	N-10°-E	方形	5.33×5.02	58	平坦	5	籠	自,人	土師器(甕,坏)片402点,須惠器(坏)片16点	
194	E11f6	N — 37°—₩	方形	6.28×6.19	58	平坦	5	癥	人,自	土師器(要,坏)片468点、鉄鎌	
195	F12d3	N- 7°-₩	方形	2.41×2.38	14	平坦	1	竜	自然	土師器(甕)片112点,須恵器(甕,坏)片32点	
196	E11cs	N-27°-₩		5.50× -	60	平坦	3		自然	土師器(甕,坏)片101点	焼失家屋
197	Alli9	N-12°-W		2.82× -	30	平坦	1		自然	土師器(甕,坏)片178点,須惠器(甕,坏)片31点	SD-6と重複
198	A11h3	N-71°-E	方形	2.64×2.60	35	平坦	1	奤	自然	土魳器(甕,坏)片41点,須惠器(甕,坏)片6点	
199	A11 j4	N-75°-E	方形	3.53×3.36	26	平坦	1	毺	自,人	土師器(甕,坏)片118点,須惠器(甕,坏)片36点	
200	B10as	N-83°-E	長方形	3.46×2.93	48	平坦	0	鼄	人為		
201	B11es	N- 0°	方形	2.23×2.22	10	平坦	0		_		
202	Bllgs	N − 72° W	方形	2.64×2.50	6	平坦	4		不明		
203	Bllfı	N-12°−E	方形	2.58×2.51	16	平坦	3		不明	土師器(甕)片1点,須恵器(甕)片1点,土師質 土器片1点	
204	B11f7	N- 0°	方形	2.36×2.33	12	平坦	***		不明	土師器(甕,坏,蓋,高台付皿)片8点,須惠器 (甕)片1点	
205	Bllje	N-15°-₩	方形	3.53×3.50	35	平坦	3	確	自,人	土師器(甕,坏)片125点,須恵器(坏,甑)片49点	
206	C11a9	N- 7°-₩	方形	3.79×3.61	44	平坦	2	鼄	自,人	土師器(甕,坏)片443点,須惠器(甕,坏,盤) 片248点	
207	C11bs	N- 0°	方形	2.51×2.45	67	平坦	3		不明	上師聖/雍/世22古 海甫聖/雍 打/臣0古 土	SI-208と重複
208	Cllbs	N- 0°	方形	2.88×2.87	16	平坦	0	炉	不明	土師器(甕)片12点、須恵器(甕,坏)片2点	SI-207と重複
209	B11b2	N- 0°	方形	2.99×2.90	26	平坦	2		人為	土師器(甕)片1点,須恵器(坏)片1点	
210	В11 јз	N-22°-E	方形	2.64×2.42	5	平坦	2		不明	土師器(甕,坏)片14点	
211	B11j4	N- 0°	方形	2.90×2.80	24	平坦	3		自然	土師器(甕,坏)片57点,須恵器(甕)片2点,土 師質土器片1点	
212A	C11b5	N-34°-W	長方形	5.20×3.50	22	平坦	4	鼀	人為	土師器(甕,坏)片112点,刀子,鉄鎌,管玉,小玉	SI-212Bと重複
2128	C11bs	N-34°-E	方形	3.05×3.00	49	平坦	1	鼀	人為	土師器(甕,坏)片114点,須恵器(甕,坏)片16点	SI-212Aと重複
213	C11c7	N- 3°-E	方形	2.94×2.80	36	平坦	3	炉	人為	土師器(甕,坏)片9点,須恵器(甕,坏)片5点,石	
214A	C11es	N- 0°	方形	3.05×2.93	24	平坦	2	炉	人為		SI-214Bと重複
214B	C11e7	N- 4°-E	方形	2.60×2.56	40	平坦	2	炉	人為	土師質土器片2点,陶器1点	SI-214Aと重複
215	C11c5	N-74°-W	方形	2.90×2.70	20	平坦	7		自然	土師器(甕,坏)片7点,土師質土器片1点,銅銭1点	
216	C11d4	N-17°-E	方形	2.64×2.60	22	平坦	4	炉	人為	土師器(甕)片3点	
217A	C11c3	N- 0°	方形	2.86×2.72	27	平坦	4		人為	土師器(甕,坏)片14点	SI-217Bと重複
217B	C11c3	N- 8°-₩	方形	2.66×2.58	16	平坦	0		不明	土師器(甕)片1点,土師質土器(坏)片2点	SI-217Aと重複
218	C11b4	N-90°-W	方形	2.95×2.88	26	平坦	4	炉	人為	土師器(蹇,坏)片8点,土師質土器(坏)片2点	

住居跡				規	模					0	
番号	位 置	主軸方向	平面形	長軸(m)×短軸(m)	壁高(cm)	床面	ピット数	竈·炉	覆土	出土造物	備考
219	Cllcz	N-90°-W	方形	2.81×2.75	52	平坦	5	炉	人為	土師器(甕,坏)片6点,土師質土器片2点	
220	Cllc1	N-90°-₩	方形	3.17×2.95	28	平坦	4		自然	土師器(甕,坏)片14点	
221	С10ьо	N- 2°-E	方形	2.85×2.83	6	平坦	3		不明	土師器(甕)片4点	
222	B10 js	N- 4°-E	方形	5.96×5.89	40	平坦	6	竜	自然	土師器(甕,坏)片316点	
223	Cllei	N-17°-W	方形	3.10×3.05	22	平坦	2		人為	土師器(甕)片6点,土師質土器(坏)片1点	SD-10と重複
224	C11e3	N-15-W	方形	2.80×2.75	26	平坦	3	炉	自然	須恵器(甕)片2点	
225	Cllfs	N- 0°	方形	3.00×2.56	14	平坦	2		不明	土師器(甕)片4点,須恵器(甕)片1点	SD-12と重複
226	C8d 3	N 5°-₩	方形	6.63×6.50	32	平坦	10	ñ	人為	土師器(甕,坏)片97点,須恵器(甕,坏)片25 点,圈足硯	
227	C11e4	N-69°-E	方形	2.70×2.61	40	平坦	4		不明	土師器(甕)片5点,須恵器(坏)片1点,内耳土 器2点	SD-10と重複
228	G10d4	N − 57° – W		不明	10	平坦	-		人為	土師器(甕,坏)片6点	
229	F10 јз	N- 0°	方形	3.30×(3.20)	40	平坦	1		自然	土師器(甕,坏)片19点,須恵器(甕,坏)片4点	SI-166と重複
230	G10as	N-61°-E	方形	3.10×2.82	34	平坦	3		不明	土師器(甕,坏)片14点,須惠器(甕)片16点, 土師質土器片1点	SD-5と重複
231	F10a7	N-35°-₩		6.00×5.89	64	平坦	2	竉	自然	土師器(甕,坏)片75点	
232	B12d4	N- 0°	長方形	3.09×2.65	42	平坦	1	竜	自然	土師器(甕,坏)片206点,須恵器(甕)片11点	

註・参考文献

- (1) 茨城県教育財団「柴崎遺跡 I 区・柴崎遺跡 II 区 − 1 」 茨城県教育財団文化財調査報告第54集 1989年
- (2) 茨城県教育財団「柴崎遺跡Ⅱ区·中塚遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告第63集 1990年
- (3)土器の一括性については、本来遺構に確実に伴う一群の遺物を一括遺物として認定するのであ ろうがここでは、住居埋没過程で一括で投棄、廃棄されている遺物群についても同時廃棄を重 視して、一括遺物という言葉を使っている。
- (4) A 種は、古い段階(中村編年2形式2段階)の須恵器の坏蓋を祖形として、東海地方では7世 紀前半まで生産が行なわれている伝統的な器形を模倣しているタイプと考える。
- (5)村山好文「平賀遺跡群における古墳時代後期土器の再検討」日本考古学研究所 集報 X 1988 年
- (6)酒井清治「須恵器の編年 関東」『古墳時代の研究6』1991年
- (7)柳沼健治「福島県中通り地方の土師器について」『福島県における古代土器の諸問題』1989年
- (8)松本建速「東北北部の平安時代のなべ」『紀要XI』1991年
- (9)この特異な竈との関連で、3号井戸下層から出土した土師器の羽釜について触れて置きたい。 羽釜は、鍔部がまだしっかりしており、口唇部のつまみ上げの特徴から、9世紀後半代に位置 付けることが可能と思われる遺物である。この羽釜の出土した3号井戸は、162号住居跡のすぐ 北に位置しており、羽釜は、この住居跡と関連があったものと推測することが可能である。
- (10)梁木誠・田熊清彦「栃木県の彩色土器について」東国土器研究第2号 東国土器研究会 1989 年



茨城県つくば市柴崎遺跡 第155号住居跡出土

金銅製鈴の保存処理について

東京国立文化財研究所 修復技術部 犬 竹 和

1 はじめに

金銅製鈴は, 茨城教育財団調査課の依頼により, 保存修復処置を施した。保存処置期間は, 1991年11月~12月である。

2 処置前の状態

金銅製鈴は、触ると崩れるほど錆化し、肉薄であることもあって金属部は残っていない。 7 片に折損し、細かく破砕している破片もあり、全片そろっていない。鈴の内部に入っているはずの玉は、失われている。表面には、土が付着している。金鍍金は全面に施されていたと思われるが、地の青銅部が錆化し、鍍金が剝落しやすい状態になってしまっているので、一部分しか残っていない。

3 クリーニングおよび強化処理

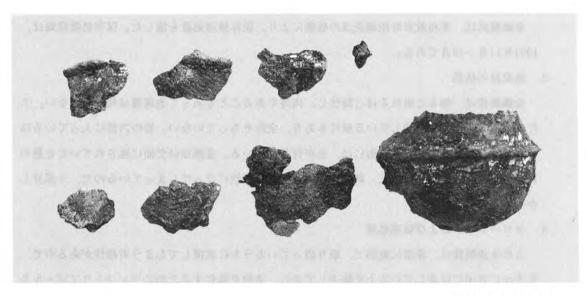
この金銅製鈴は、非常に脆弱で、取り扱っているうちに破損してしまう可能性があるので、 大まかに表面に付着している土を除去してから、遺物を強化するためにベンゾトリアゾールを 含むアクリル樹脂(インクララック)を減圧含浸した。それから、メスや超音波メスなどを使 用して、強固に付着している土を除去した。クリーニング後、再び、ベンゾトリアゾールを含 むアクリル樹脂(インクララック)を減圧含浸した。

4 復元

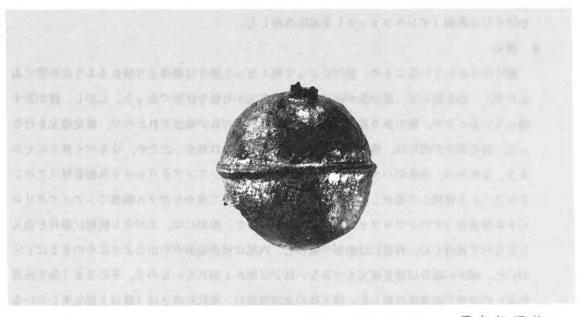
破片が不足していることや、錆化によって弱くなった破片は端部より崩れるような状態であるので、一部を除いて、接合面が確認されず、復元不可能な状態であった。しかし、鈕が若干残っていることや、胴の張り具合、両端が円形の線状の孔が確認されたので、推定復元を行なった。鈕の部分の破片は、他の破片との接合点が確認され無かったため、なるべく真上にくるよう、なおかつ、全体のバランスを考慮して接合した。シアノアクリレート系接着材(アロンアルファ)を使用して接合し、破片自体が非常に弱いので裏からガラス繊維でシアノアクリレート系接着材(アロンアルファ)を使用して裏打した。隙間には、エポキシ樹脂に顔料を混入したもので補填した。外部には顔彩で補彩し、内部は補填箇所がわかるようにそのままにしておいた。細かい破片は推定復元もできないほどに細かく割れているので、そのまま(強化処理済み)の状態で別途保存賭した。復元後の金銅製鈴の、現状の高さは(鈕は上部欠失している)2.8cm、胴幅(一番太い部位)は2.7cmである。

5 おわりに

以上のように保存修復処置を行なったが、今後の保管環境の如何によっては現状維持しかねるので、相対湿度40%以下の環境化での保存管理が望ましい。推定復元ではあるが、全体像が把握できるようになったことを考慮していただきたいと思う。



保存処理前の状況



保存処理後

結 語

柴崎遺跡の発掘調査は、昭和62年4月から平成元年3月まで柴崎遺跡のⅠ区とⅡ区の調査を実施している。本報告書は平成元年4月から平成2年3月までに調査を実施した柴崎遺跡Ⅲ区の調査結果をまとめたもので、Ⅲ区からは竪穴住居跡84軒、掘立柱建物跡3棟、地下式壙2基、土坑18基、井戸6基、溝29条が検出されている。

当遺跡全体からは、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての竪穴住居跡約350軒が検出されている。出土遺物から、竪穴住居跡を時期区分した結果、柴崎遺跡の集落は、古墳時代から大きく4回の消長があることがわかった。最初の集落は、6世紀後半を中心として、7世紀中ごろに衰微していると考えられる。2度目の隆盛は、7世紀末から8世紀前半代である。その後再び8世紀の後半からは集落が形成され、9世紀の初頭には集落が衰退している。3度目は、9世紀後半代を中心として、最も多くの竪穴住居跡が見られるが、10世紀の中頃には、竪穴住居跡が見られなくなってしまう。その後、12世紀以降の時期と推定される、竈を持たない規模の非常に小さな竪穴住居跡が数多く出現するが、1世紀を越えない短期間の内に再び竪穴住居跡は見られなくなっている。その後は、近世に至るまでこの地に集落は形成されることはなかった。

以上が、柴崎遺跡の概要であるが、今後これらの調査成果が地域の歴史究明の一助となれば幸いである。

最後に、本報告書を作成するに当たり、関係各位からご指導、御協力をいただきましたことに 対して、心から感謝の意を表す次第である。

写 真 図 版



遺跡全景



遺跡全景

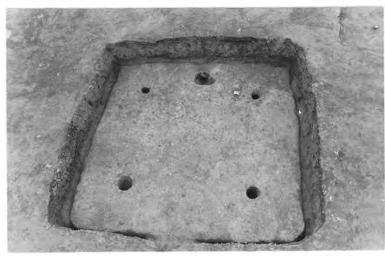


遺跡全景

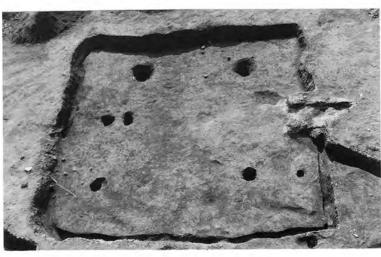
PL2



遺跡全景



第127号住居跡



第168号住居跡



第167·168号住居跡 遺物出土状況



第168号住居跡竈



第175号住居跡



第175号住居跡 遺物出土状況



第175号住居跡 遺物出土状況



第175号住居跡 遺物出土状況



第175号住居跡 遺物出土状況



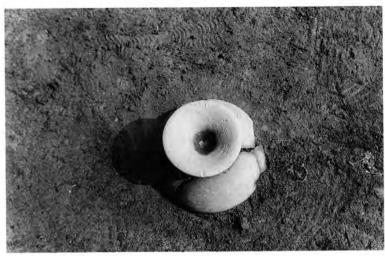
第175号住居跡竈



第190号住居跡



第190号住居跡 遺物出土状況



第190号住居跡 遺物出土状況



第194号住居跡



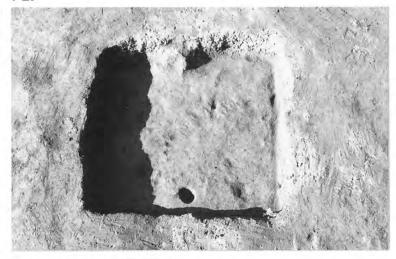
第194号住居跡 遺物出土状況



第194号住居跡竈



第196号住居跡



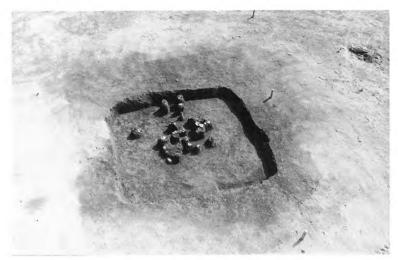
第198号住居跡



第198号住居跡竈



第199号住居跡



第199号住居跡 遺物出土状況



第199号住居跡 遺物出土状況

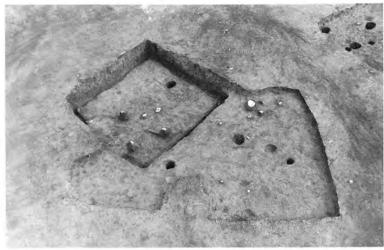


第200号住居跡

PL10



第200号住居跡竈



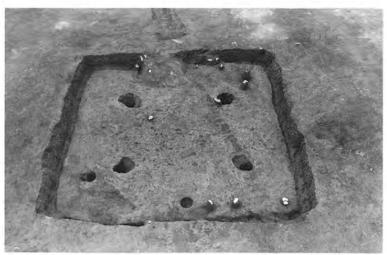
第212A号住居跡 遺物出土状況



第212A号住居跡竈



第212A号住居跡 遺物出土状況



第222号住居跡 遺物出土状況



第231号住居跡

PL12



第231号住居跡竈



第231号住居跡 遺物出土状況



第231号住居跡 遺物出土状況



第128号住居跡



第153号住居跡



第153号住居跡 遺物出土状況

PL14



第153号住居跡 遺物出土状況



第153号住居跡竈



第154号住居跡 遺物出土状況



第154号住居跡竈

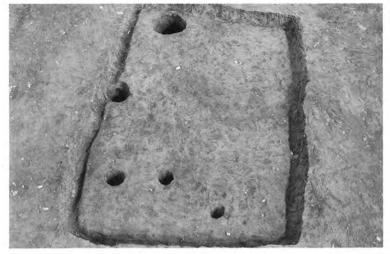


第155号住居跡 遺物出土状況



第155号住居跡竈

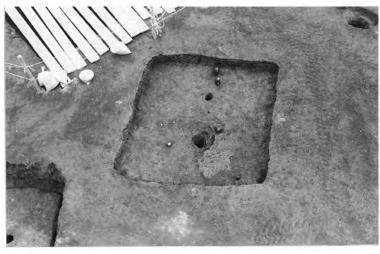
PL16



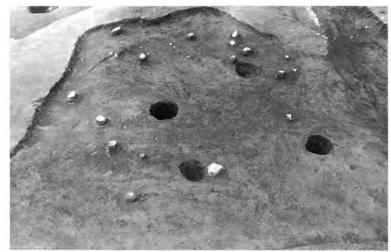
第156号住居跡



第157号住居跡 遺物出土状況



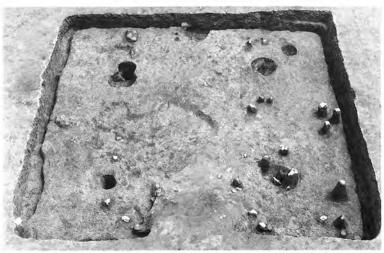
第158号住居跡 遺物出土状況



第159号住居跡 遺物出土状況



第160号住居跡



第160号住居跡 遺物出土状況

PL18



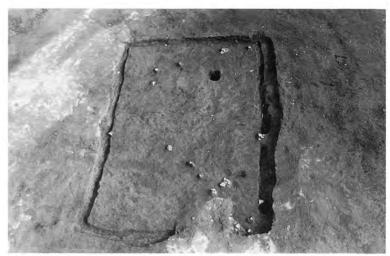
第160号住居跡竈



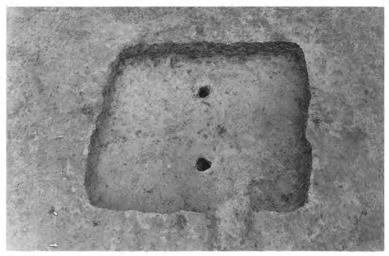
第161号住居跡



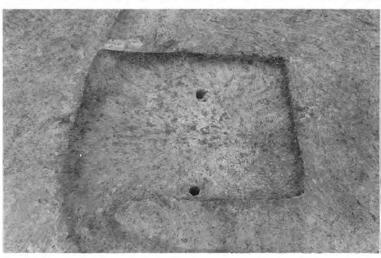
第161号住居跡竈



第162号住居跡 遺物出土状況



第163号住居跡



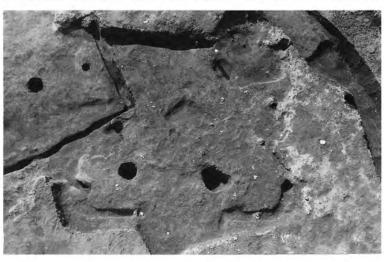
第164号住居跡



第165号住居跡竈



第166号住居跡 遺物出土状況



第167·168号住居跡 遺物出土状況



第167号住居跡 遺物出土状況



第169·228号住居跡 遺物出土状況



第170号住居跡 遺物出土状況

PL22



第170号住居跡竈 遺物出土状況



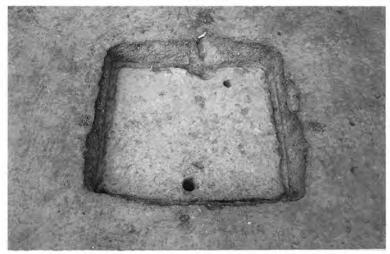
第171号住居跡



第171号住居跡竈 遺物出土状況



第171号住居跡竈 遺物出土状況

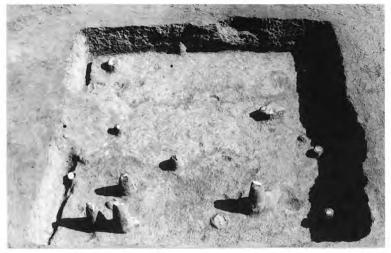


第172号住居跡



第172号住居跡竈 遺物出土状況

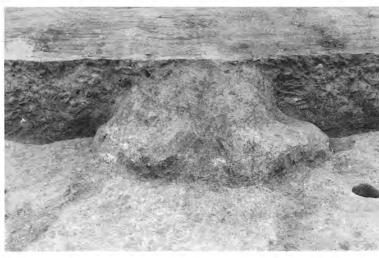
PL24



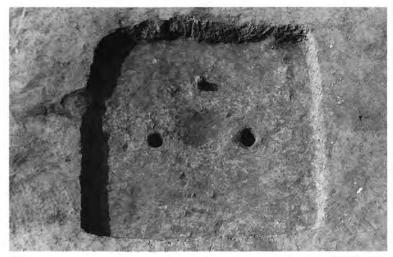
第174号住居跡 遺物出土状況



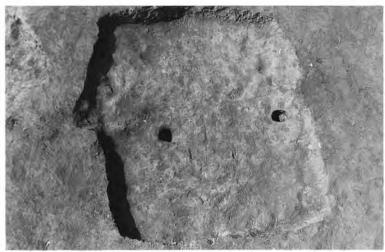
第174号住居跡 遺物出土状況



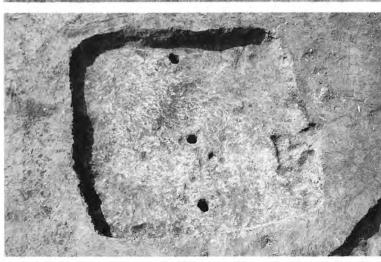
第174号住居跡竈



第176号住居跡



第177号住居跡

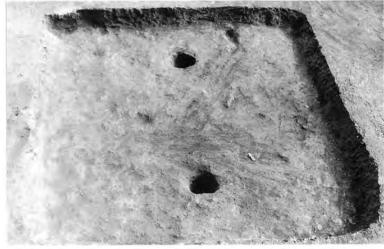


第178号住居跡

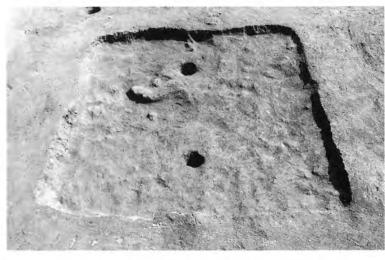
PL26



第179号住居跡



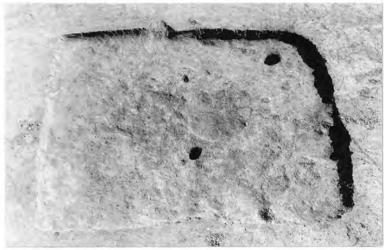
第180号住居跡



第182号住居跡



第183号住居跡



第184号住居跡

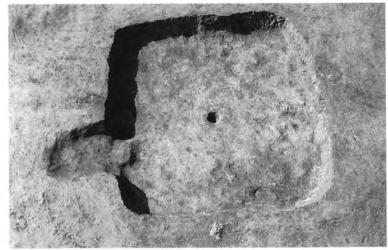


第186号住居跡

PL28



第187号住居跡



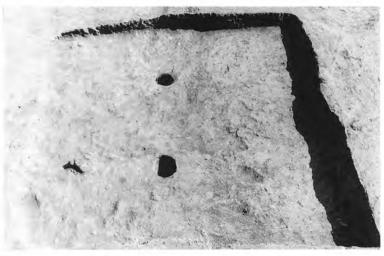
第188号住居跡



第189A・B号住居跡



第189A・B号住居跡 遺物出土状況



第191号住居跡

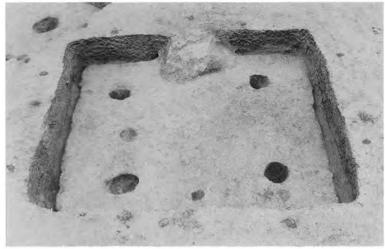


第191号住居跡 遺物出土状況

PL30



第192号住居跡



第193号住居跡



第193号住居跡竈



第197号住居跡

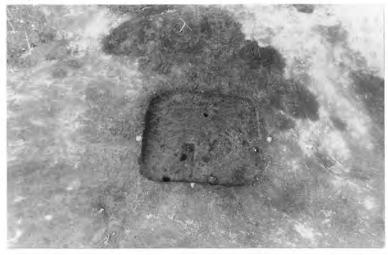


第201号住居跡



第202号住居跡

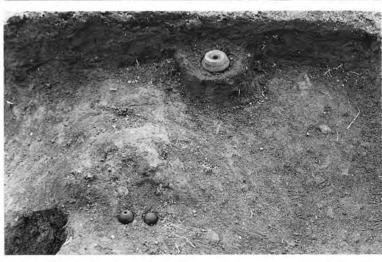
PL32



第203号住居跡



第204号住居跡 遺物出土状況



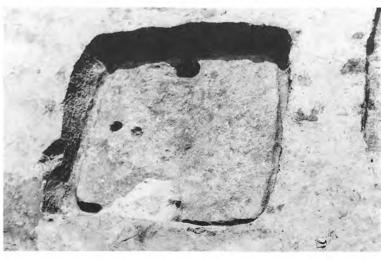
第204号住居跡 遺物出土状況



第205号住居跡



第205号住居跡 遺物出土状況



第206号住居跡

PL34



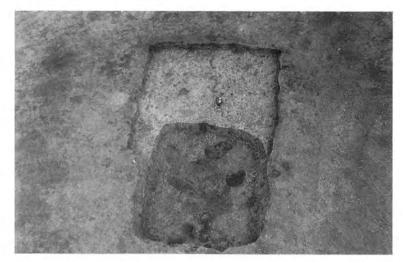
第206号住居跡 遺物出土状況



第206号住居跡竈



第206号住居跡竈 遺物出土状況



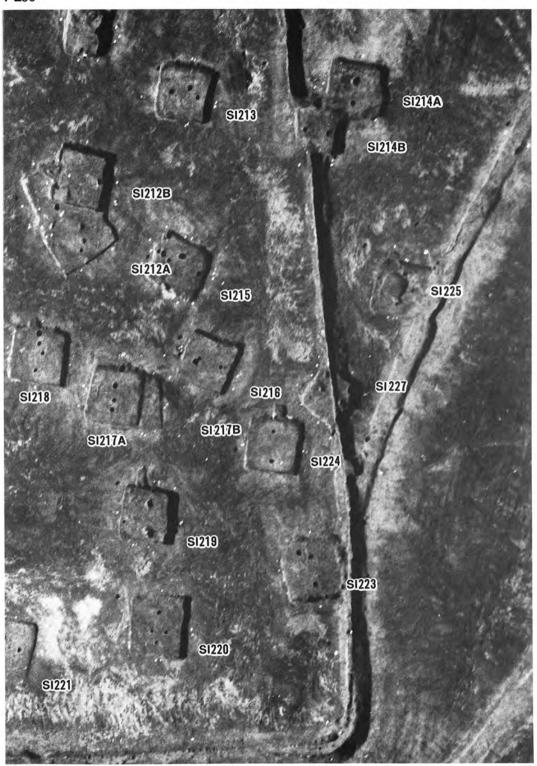
第207·208号住居跡



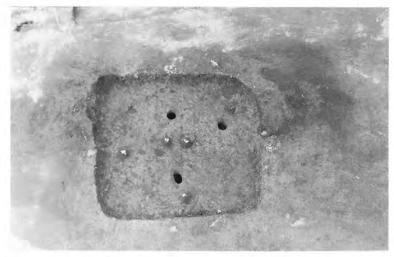
第209号住居跡



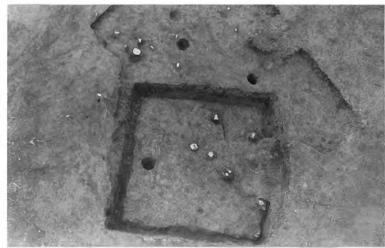
第210号住居跡



第212~221・223~225・227号住居跡



第211号住居跡 遺物出土状況

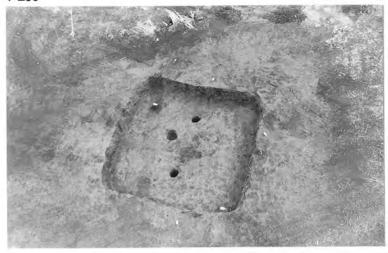


第212B号住居跡 遺物出土状況



第212B号住居跡 遺物出土状況

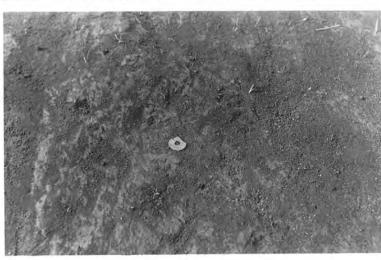
PL38



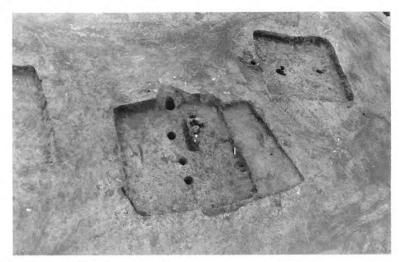
第213号住居跡 遺物出土状況



第214A・B号住居跡



第215号住居跡 遺物出土状況



第217A・B号住居跡

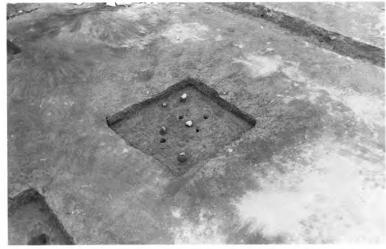


第218号住居跡

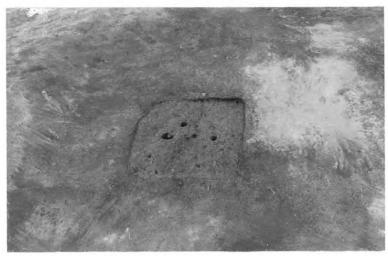


第219号住居跡

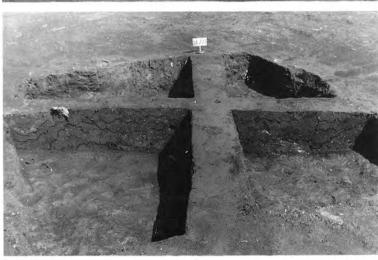
PL40



第220号住居跡 遺物出土状況



第221号住居跡



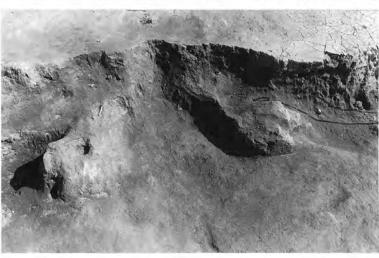
第223号住居跡



第226号住居跡



第226号住居跡 遺物出土状況



第226号住居跡竈

PL42



第230号住居跡



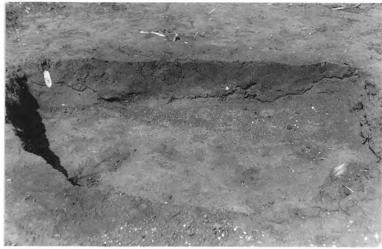
第232号住居跡 遺物出土状況



第232号住居跡 遺物出土状況



第3号土坑

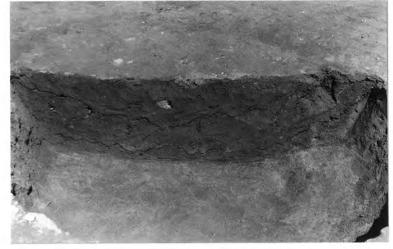


第6号土坑

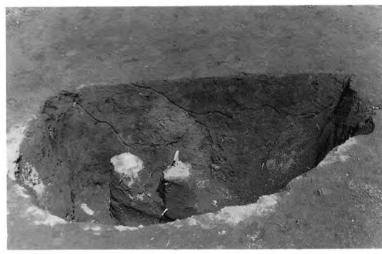


第7号土坑

PL44



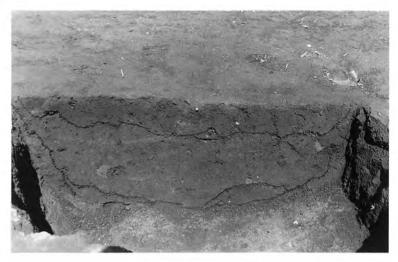
第8号土坑



第11号土坑



第12·13号土坑



第14号土坑



第15号土坑 遺物出土状況



第17号土坑

PL46



第23号土坑 遺物出土状況



第1号堀立柱建物跡



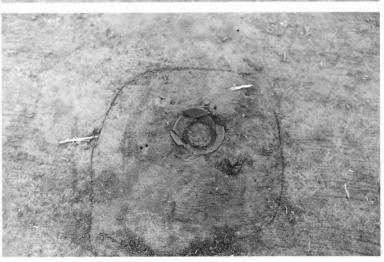
第1号堀立柱建物跡



第2号堀立柱建物跡



第3号堀立柱建物跡



第3号堀立柱建物跡 遺物出土状況

PL48



第2号地下式壙



第2号井戸



第3号井戸



第4号井戸



第5号井戸



第6号井戸

PL50



第7号井戸



第8号井戸



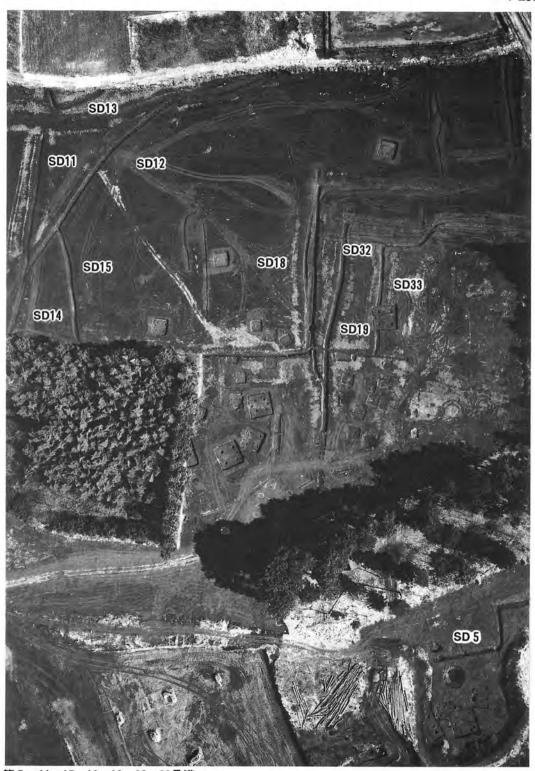
第6・8・12号溝



第1・2・3・4号溝



第6・8・10・12号溝



第5・11~15・18・19・32・33号溝

PL54





第6号溝 遺物出土状況

第11・12・14号溝

第18・19・32・33号溝



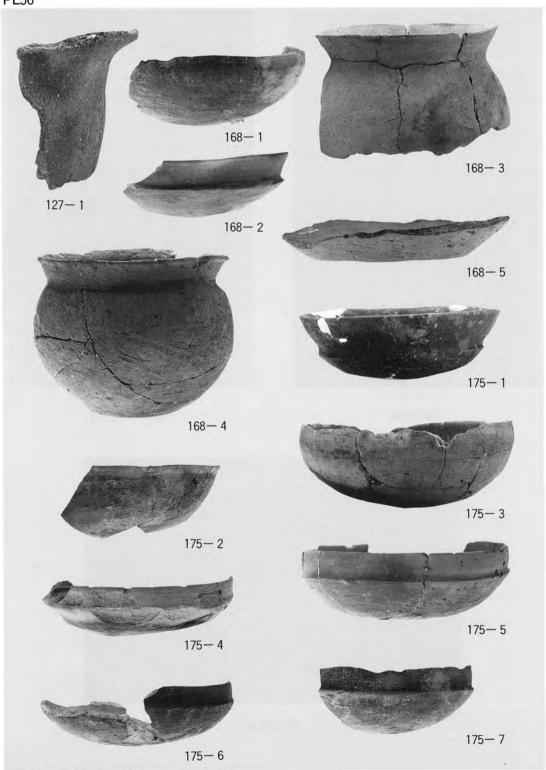


第10号溝

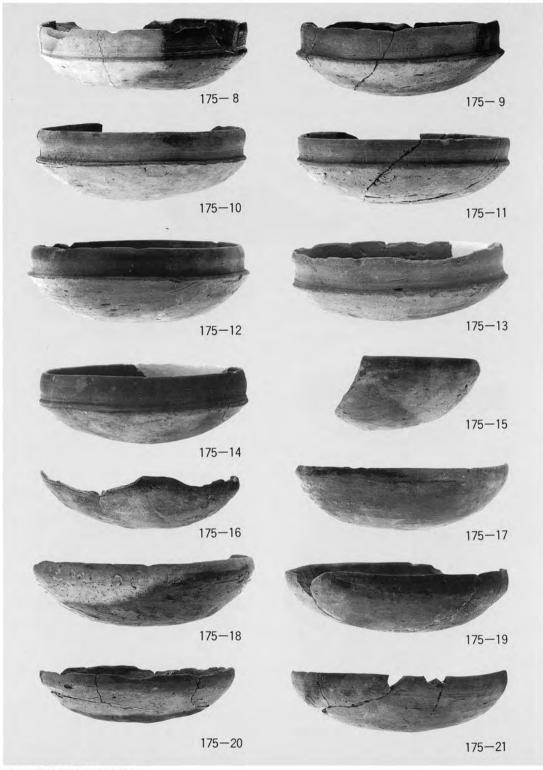
第28·29号溝



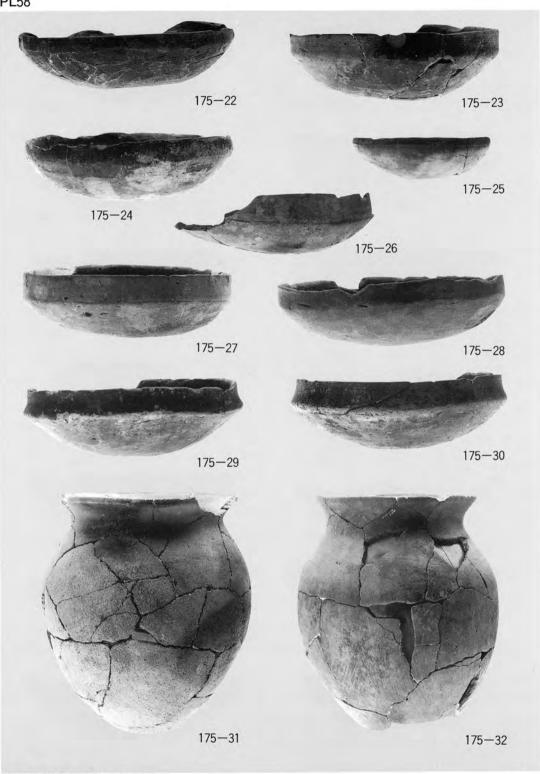
第38号溝



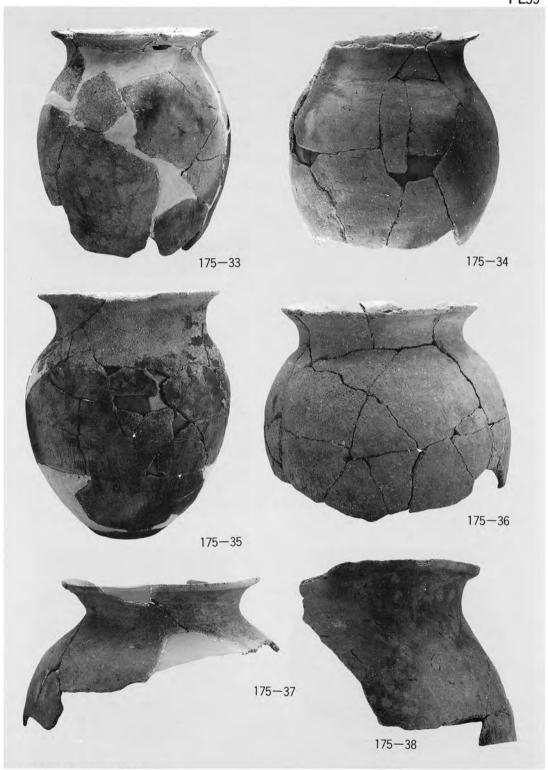
第127・168・175(1)号住居跡出土遺物



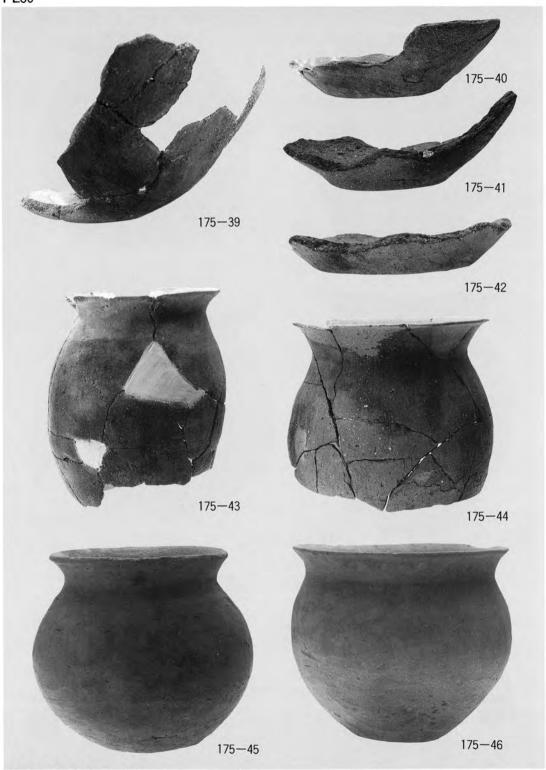
第175号住居跡出土遺物(2)



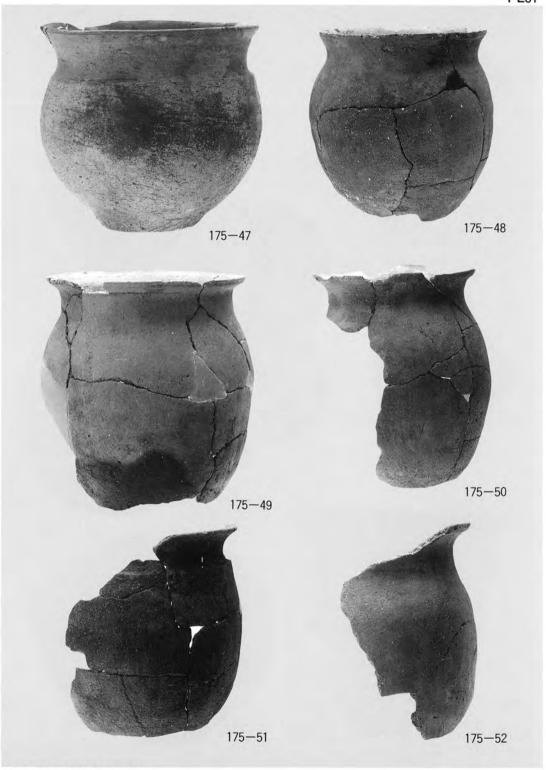
第175号住居跡出土遺物(3)



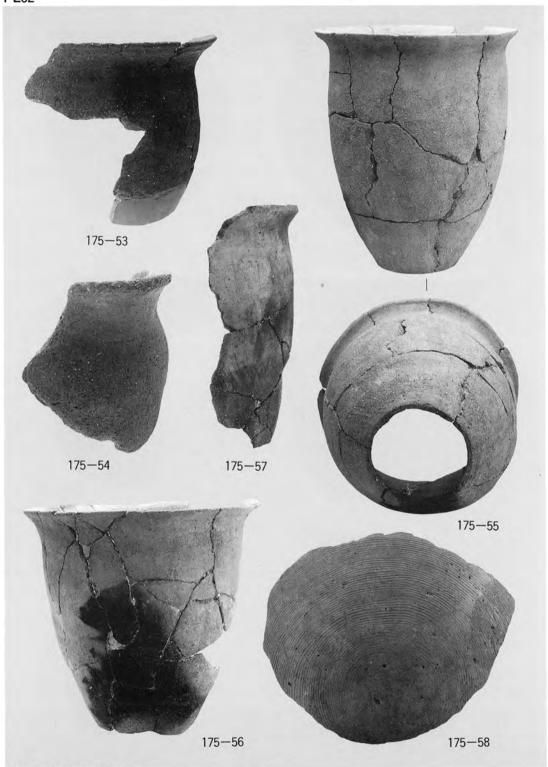
第175号住居跡出土遺物(4)



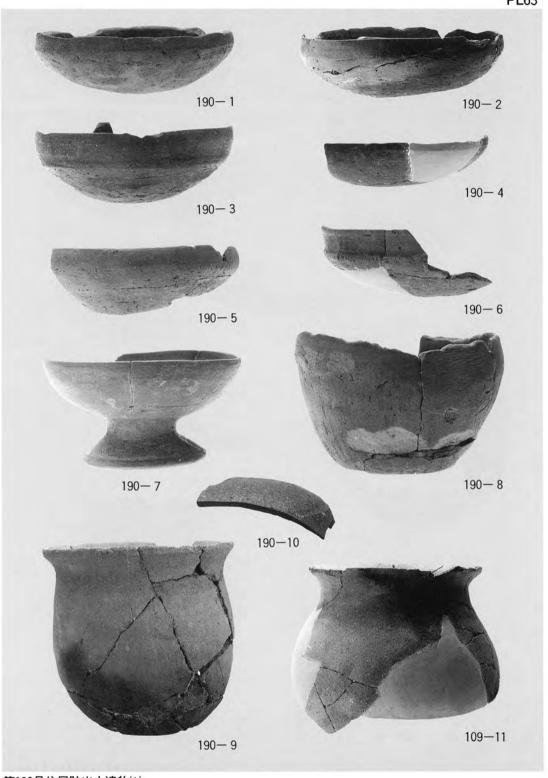
第175号住居跡出土遺物(5)



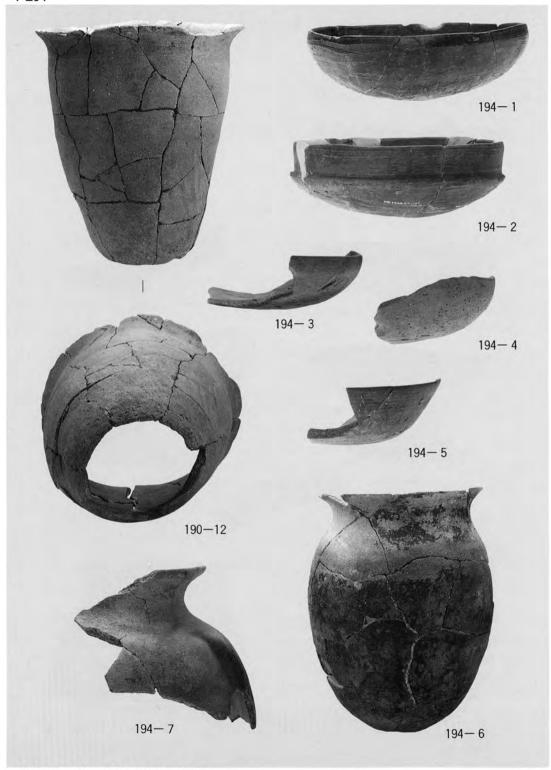
第175号住居跡出土遺物(6)



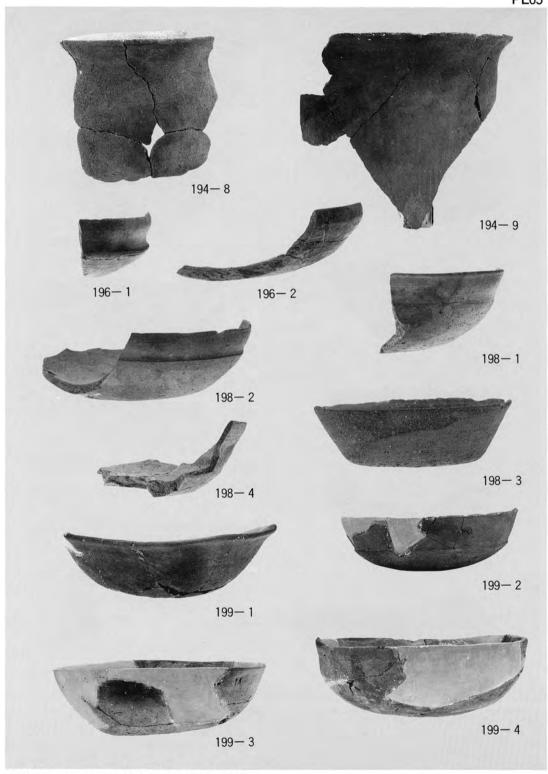
第175号住居跡出土遺物(7)



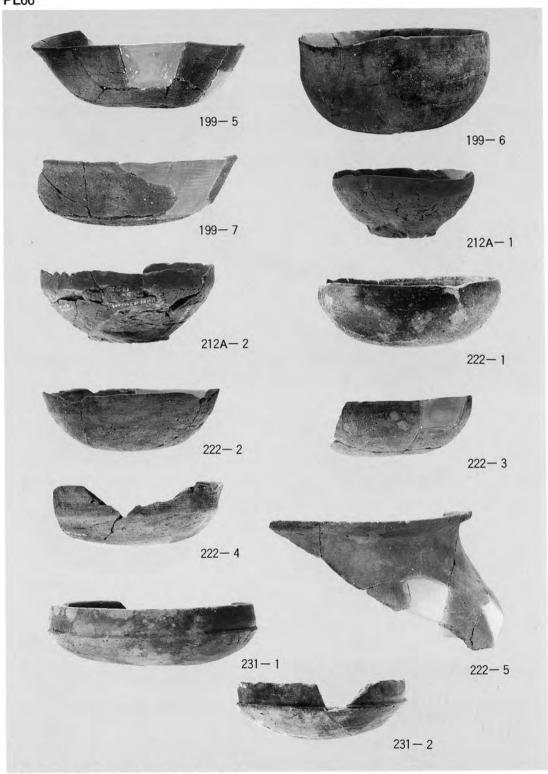
第190号住居跡出土遺物(1)



第190(2)・194(1)号住居跡出土遺物



第194(2)・196・198・199(1)号住居跡出土遺物

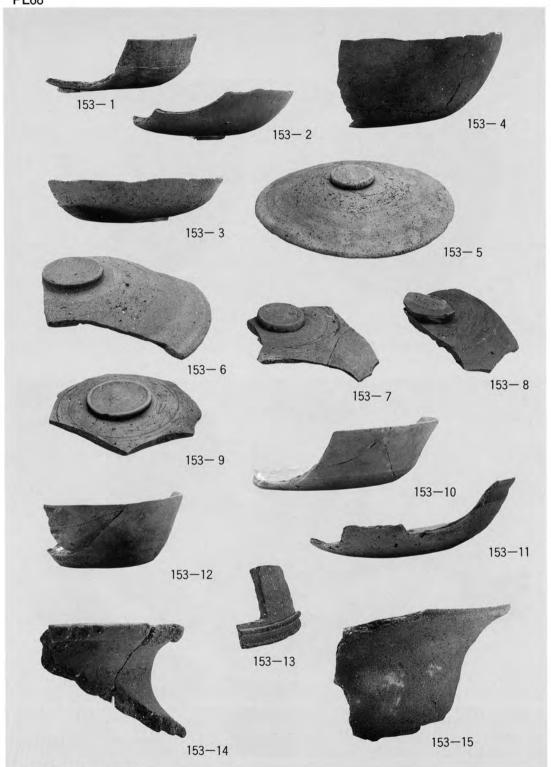


第199(2)・212A・222・231号住居跡出土遺物

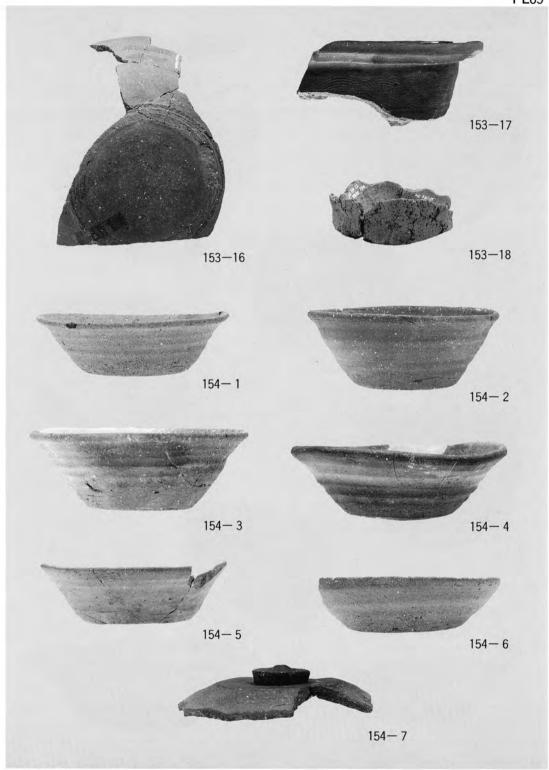




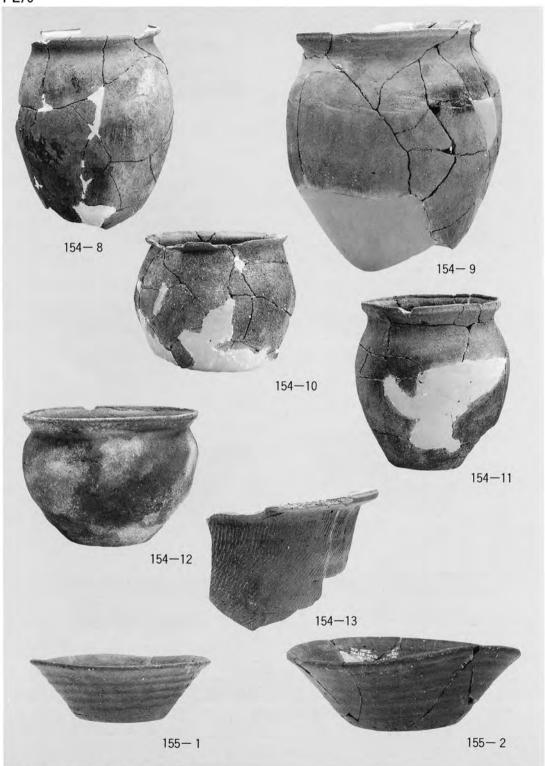
第231号住居跡・古墳時代後期の出土土器群



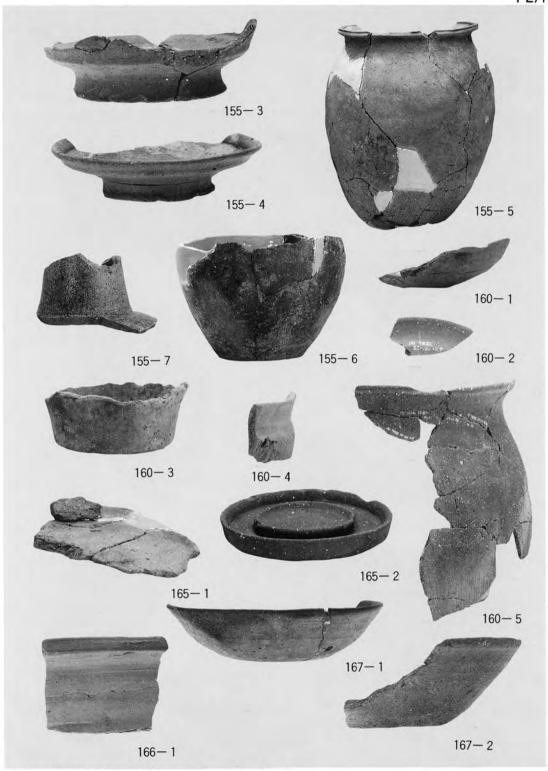
第153号住居跡出土遺物(1)



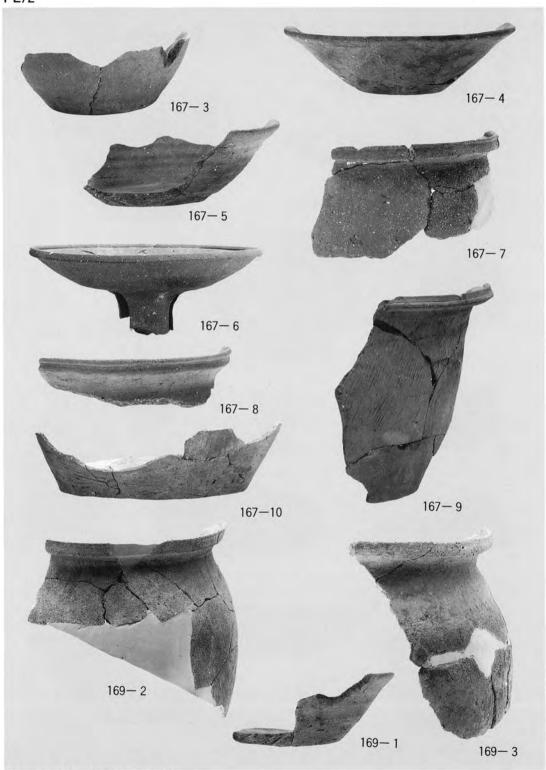
第153(2)・154(1)号住居跡出土遺物



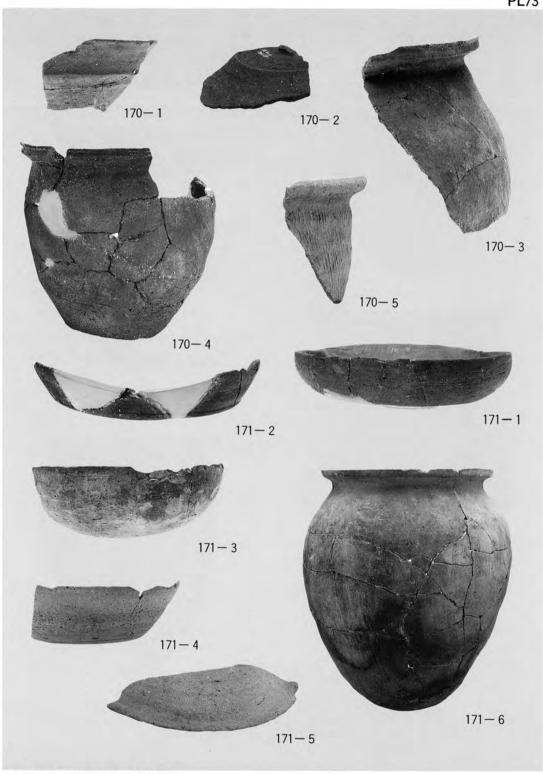
第154(2)・155(1)号住居跡出土遺物



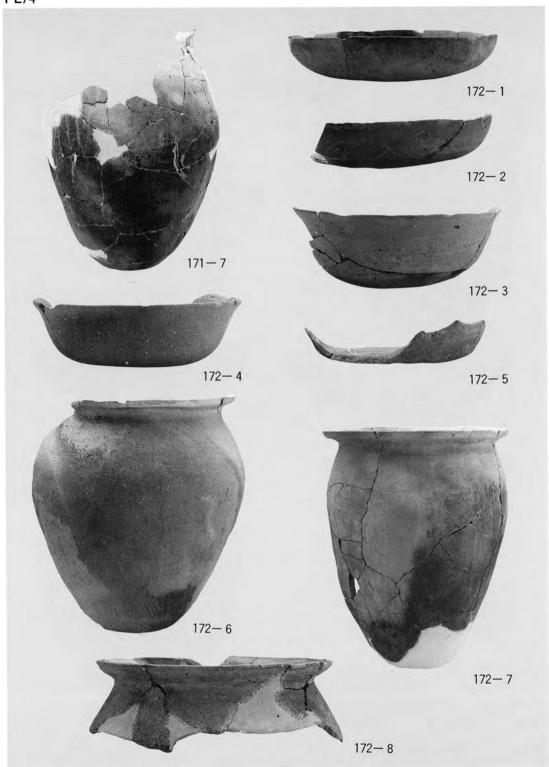
第155(2)・160・165・166・167(1)号住居跡出土遺物



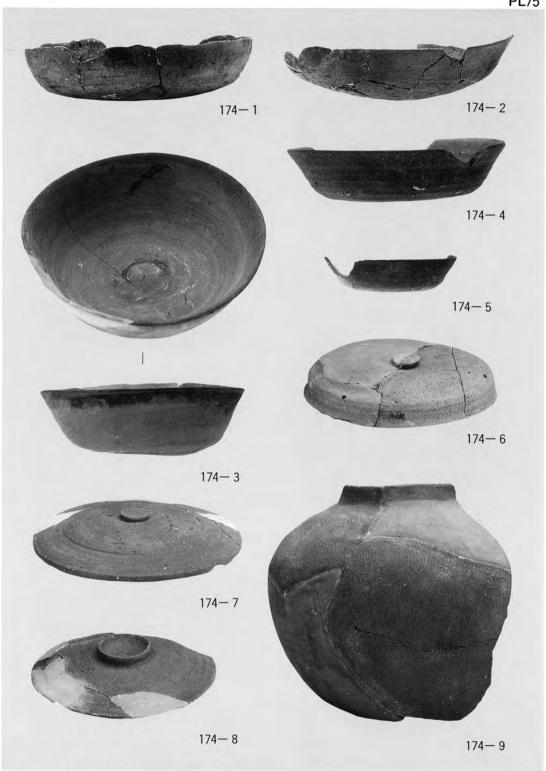
第167(2) • 169号住居跡出土遺物



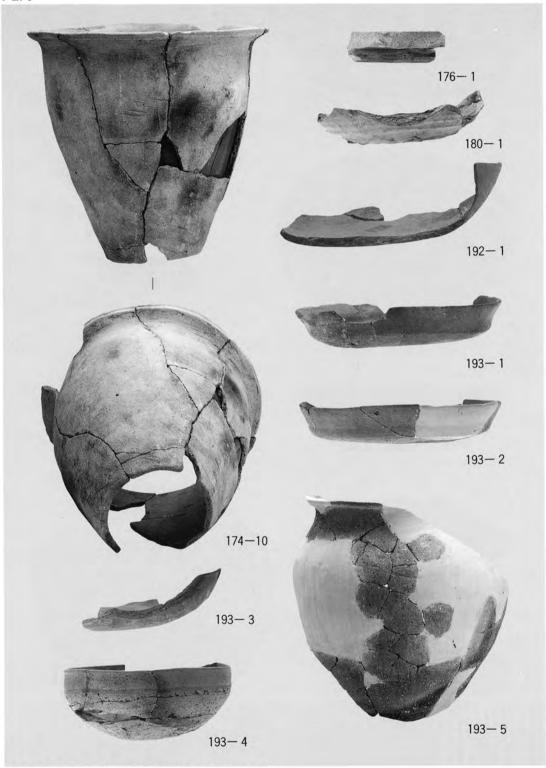
第170·171(1)号住居跡出土遺物



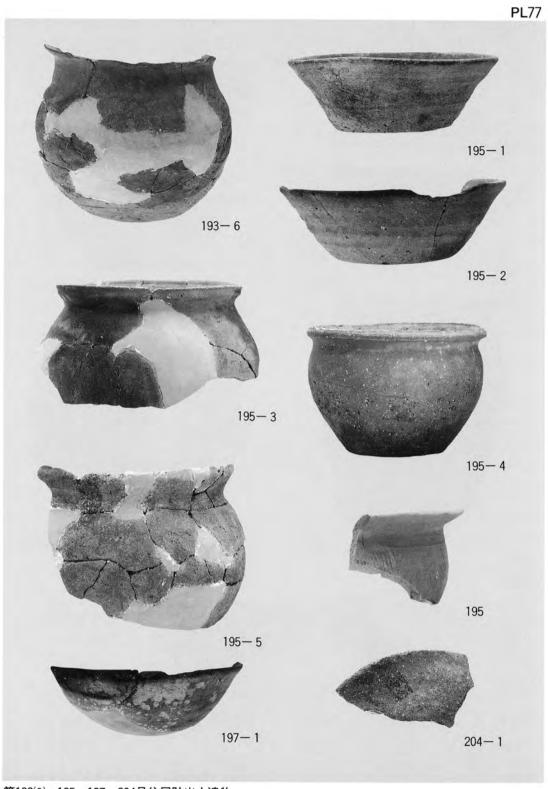
第171(2)·172号住居跡出土遺物



第174号住居跡出土遺物(1)



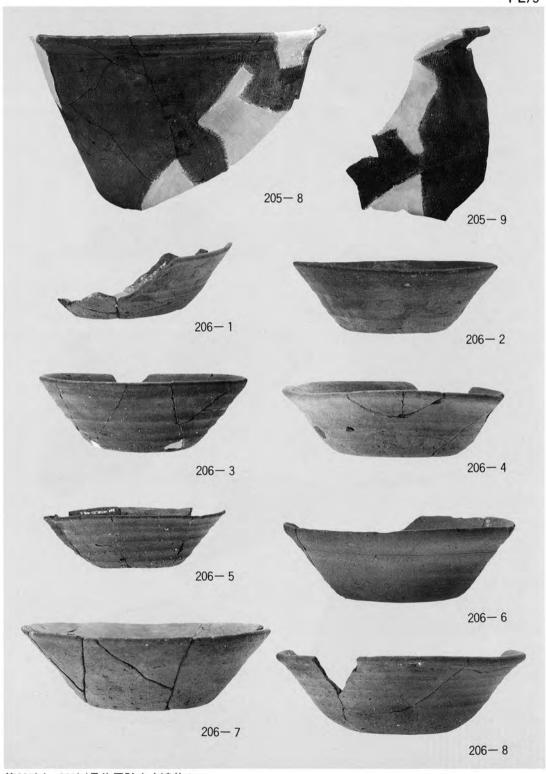
第174(2)・176・180・192・193(1)号住居跡出土遺物



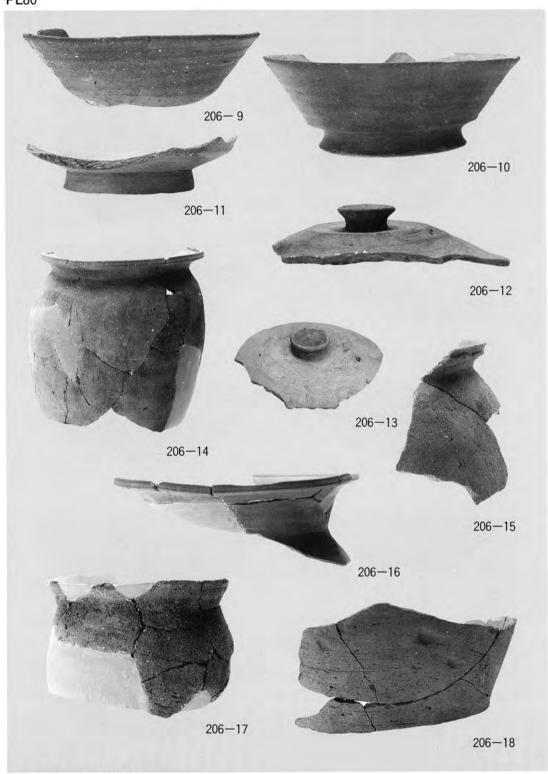
第193(2)・195・197・204号住居跡出土遺物



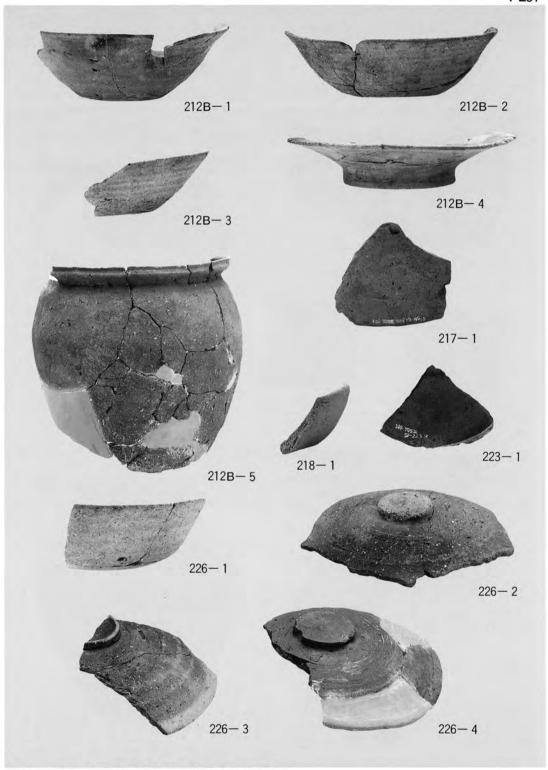
第205号住居跡出土遺物(1)



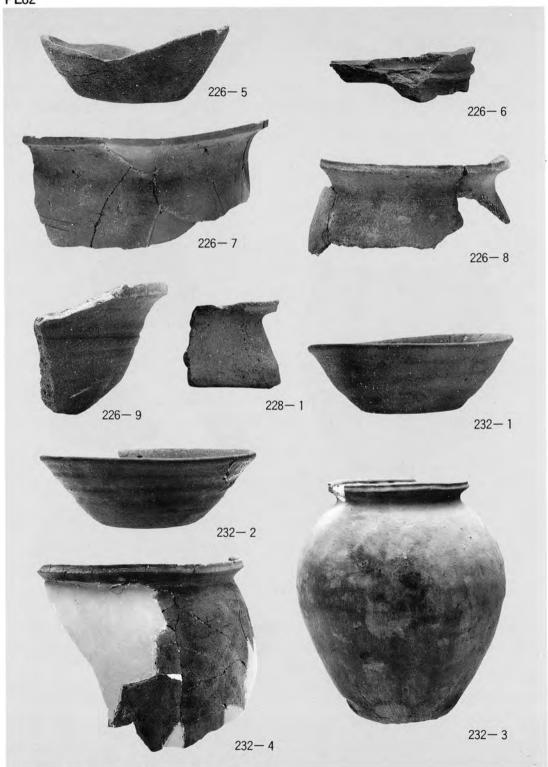
第205(2) • 206(1)号住居跡出土遺物



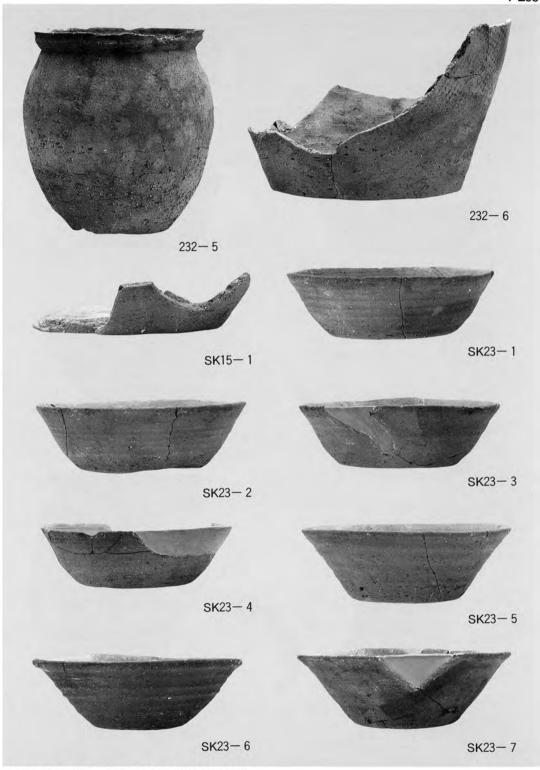
第206号住居跡出土遺物(2)



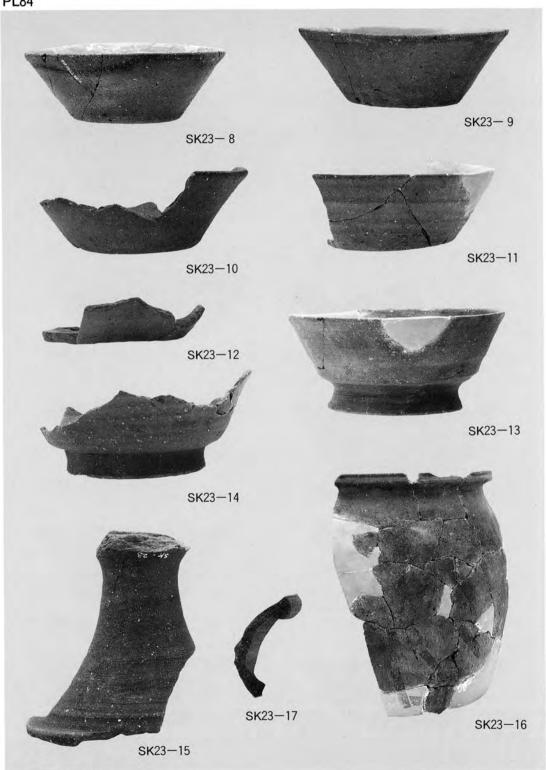
第212B・217・218・223・226(1)号住居跡出土遺物



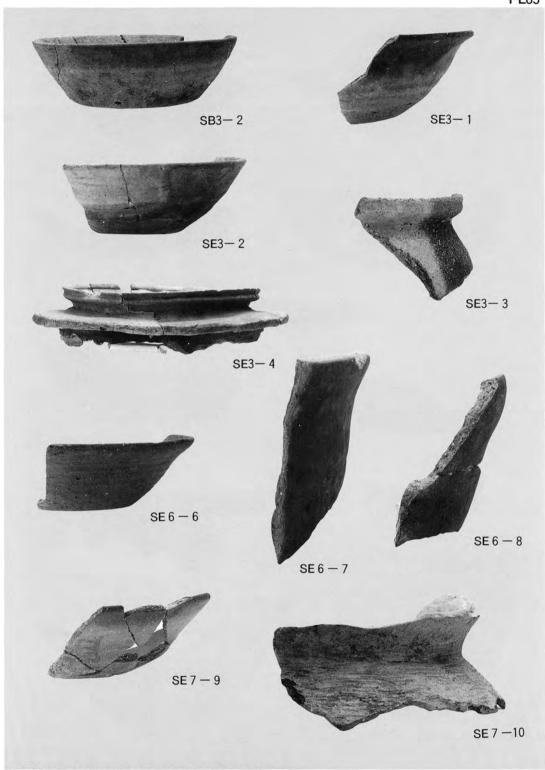
第226(2)·228·232(1)号住居跡出土遺物



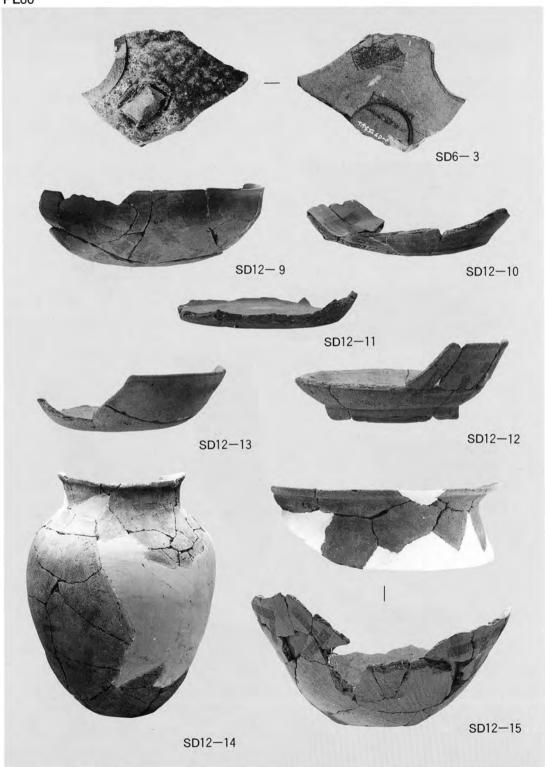
第232(2)号住居跡, 第15・23(1)号土坑出土遺物



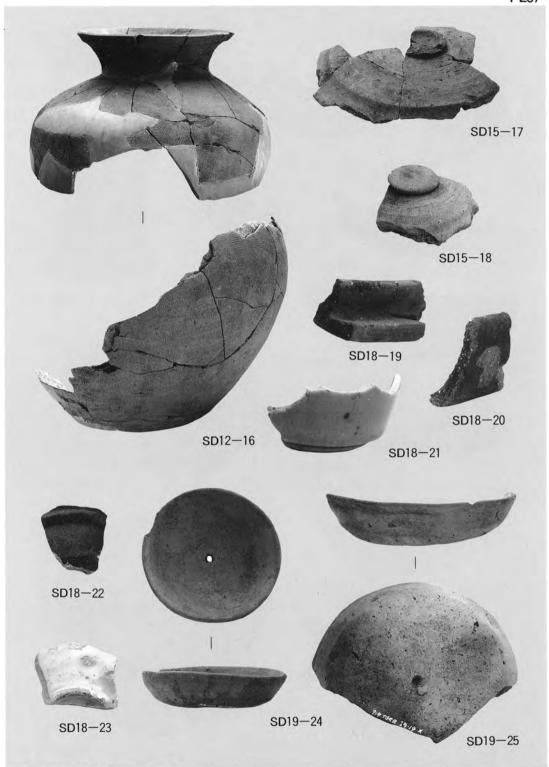
第23号土坑出土遺物(2)



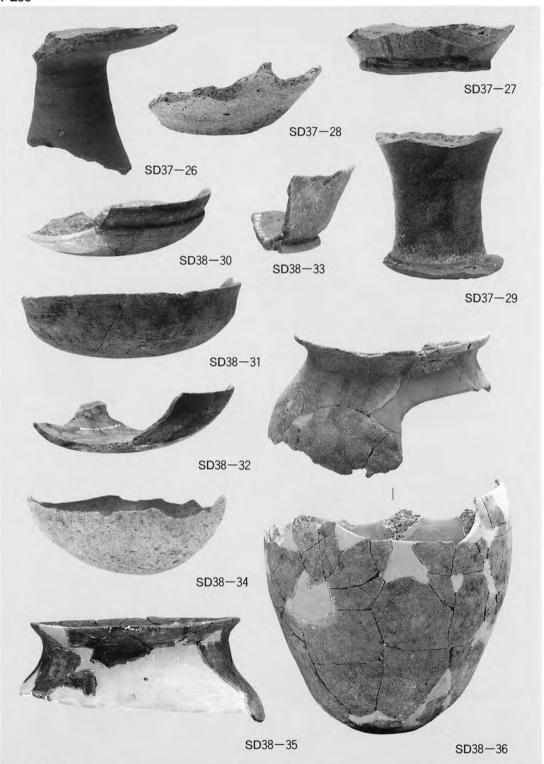
第3号堀立柱建物跡,第3・6・7号井戸出土遺物



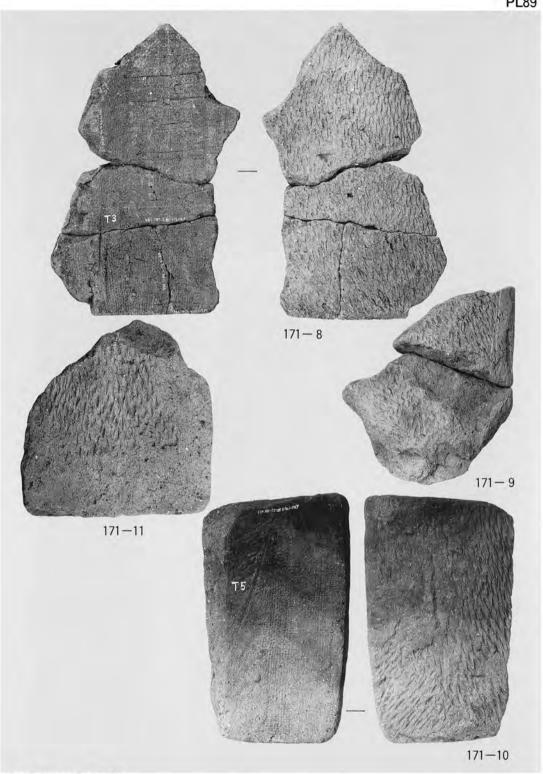
第6・12(1)号溝出土遺物



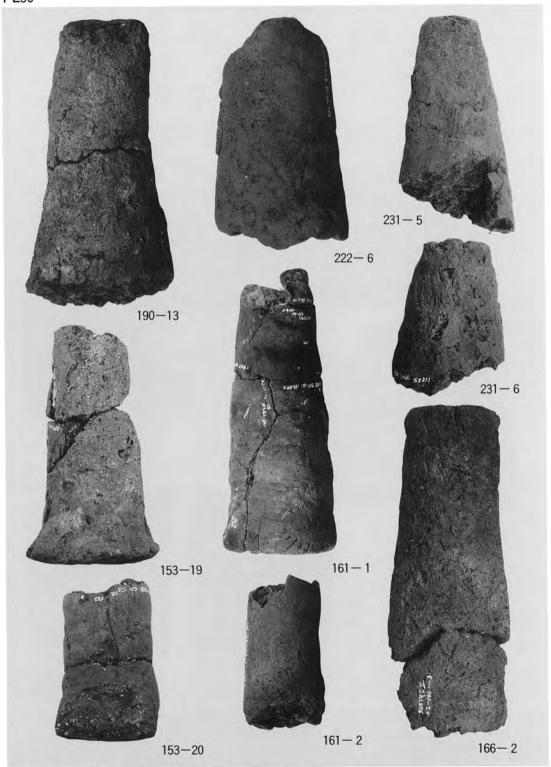
第12(2)・15・18・19号溝出土遺物



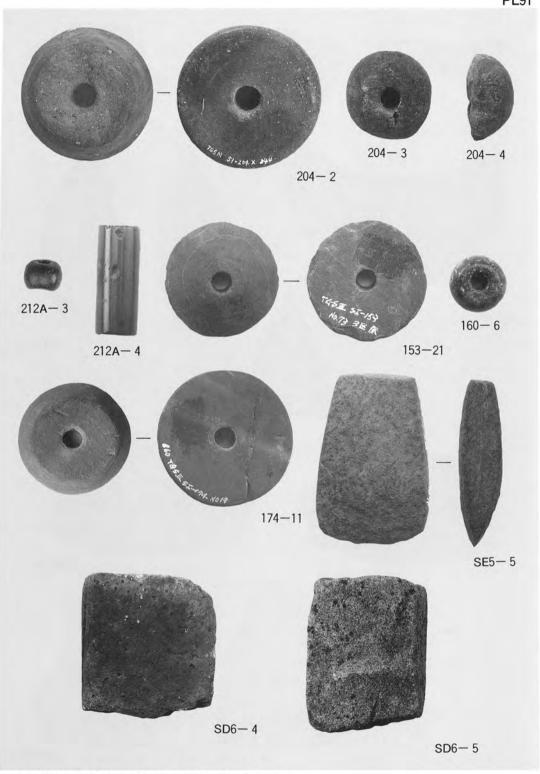
第37・38号溝出土遺物



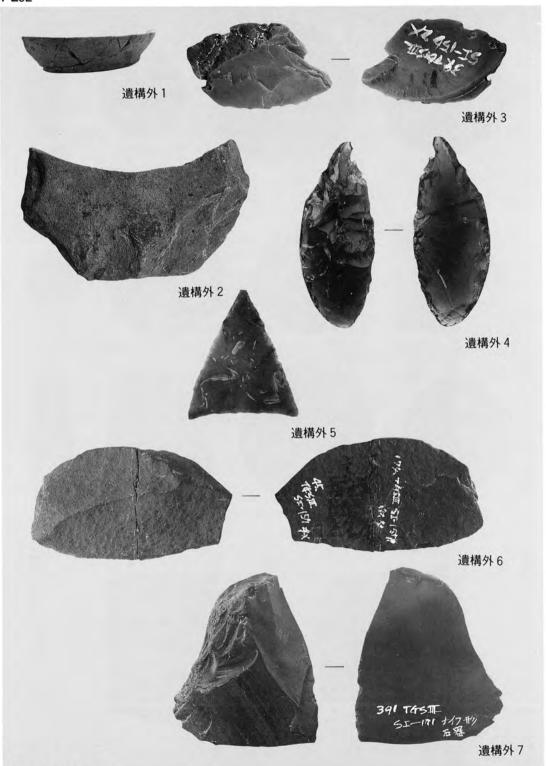
第171号住居跡出土遺物



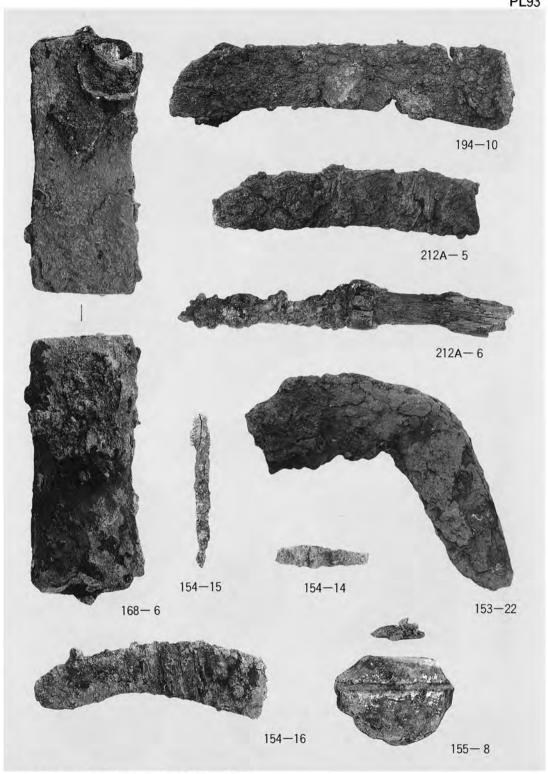
第190・222・231・153・161・166号住居跡出土遺物



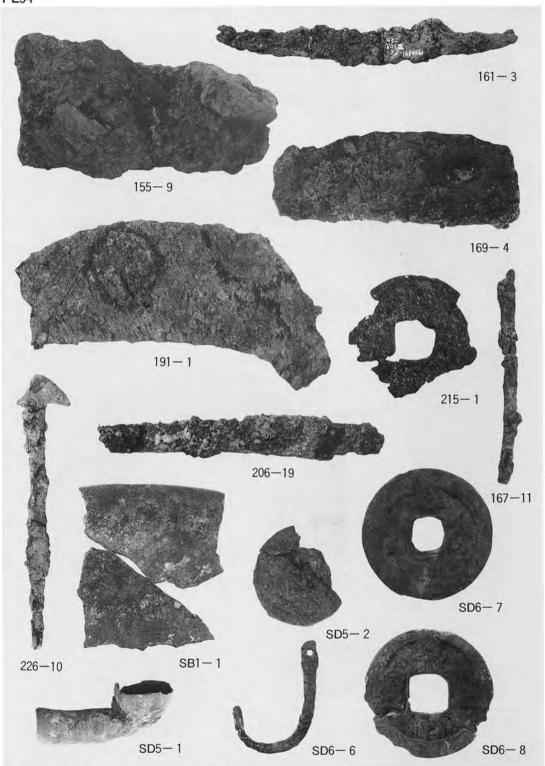
第204・212A・153・160・174号住居跡, 第5号井戸, 第6号溝出土遺物



遺構外出土遺物



第168・194・212A・153~155号住居跡出土遺物



第155・161・167・169・191・206・215・226号住居跡, 第1号堀立柱建物跡,第5・6号溝出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第72集

研究学園都市計画桜柴崎土地区画整理 事業地内埋蔵文化財調査報告書(II)

柴崎遺跡Ⅲ区

平成 4 年 3 月25日印刷 平成 4 年 3 月31日発行 発 行 財団法人 茨城県教育財団

水戸市南町3丁目4番57号

TEL 0292-25-6587

印刷 株式会社 高野高速印刷 水戸市東原2-8-1

TEL 0292-31-0989



